

祝谷六丁場遺跡

—調査報告 1—

本文編

1991

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター

祝谷六丁場遺跡

——調査報告 1 ——



1 祝谷六丁場遺跡周辺の航空写真



2 祝谷六丁場遺跡出土の平形銅剣



3 祝谷六丁場遺跡平形銅剣埋納場

序

祝谷六丁場遺跡は、道後城北遺跡の中の祝谷丘陵地に所在する遺跡であります。現地は埋蔵文化財包蔵地隣接地でありましたが試掘確認により本格調査を実施の結果、昭和63年2月、平形銅剣の画期的発見のニュースが流れました。

平形銅剣は、我が国において弥生時代の瀬戸内海地域を代表する産物であり、独自の文化圏が形成される中で、圧倒的に愛媛、香川の両県から出土しているのも特徴です。これら出土の中でこの度のものは、丘陵緩斜面地から銅剣が埋納された状態で発見され、出土状況を示す唯一のものと言えます。

また、今回の発見により松山平野の中で、道後城北地域には銅剣を持つ有力集団の存在性を直接的に示すと共に、発見の当地域については、祭祀の場所として選ばれた重要地域であると理解できます。

その他、今回の住居跡発見からは、弥生中期頃、当地域に生活域が展開されたことや、石器工房をなす特殊な住居跡も解りました。

出土銅剣の分析からは、他の銅剣に比較し、高純度の銅成分で赤銅色をなす祭器であることなどが判明したことや、その平形銅剣の実験的製作に成功するなど、今回の調査からはその他多くの成果を得ました。このような貴重な成果が得られたのも愛媛住宅建設株式会社、古茂田芳朗社長の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力の賜であります。また銅剣分析いただいた三宝伸銅工業株式会社、久野雄一郎社長並びに権原考古学研究所、調査指導いただいた愛媛大学下條信行教授の外、ご協力いただいた関係各位の皆様に厚くお礼申し上げる次第であります。本書が学術、教育文化の向上、文化財保護、さらに今後の調査研究の一助となれば幸いに存じます。

平成3年3月31日

松山市教育長

池田尚郷

例　　言

1. 本報告書は、愛媛県松山市祝谷六丁場遺跡調査報告書1である。
2. 発掘調査経費及び整理、報告書印刷費は、グリーンサービス株式会社（愛媛住宅建設株式会社）が負担した。
3. 発掘調査及び整理作業は、グリーンサービス株式会社（現愛媛住宅建設株式会社）の依託を受け松山教育委員会が実施した。現地調査は試掘調査を含め昭和62年11月14日から昭和63年7月31日まで行い、引き続き整理作業を昭和63年11月30日まで実施した。又、平成2年度に於ては松山市埋文センターが編集等の作業を実施した。
4. 原則として、土器の実測図は1/4、石器の実測図は1/3の縮尺を用いている。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
5. 本書で用いた絶対高は標高を表す。方位は磁北である。
6. 現地調査の作図は、宮崎泰好・河野知史・相原浩二・石丸直樹の他、愛媛大学考古学研究室並びに一般学生、松山商科大学（現松山大学）学生、京都大学学生が行った。
7. 遺物実測図作成は、丹生谷道代・山本〈旧姓綿〉尚美・倉員伸明・後藤智博・丸山美和他が行った。
8. 製図は、主に玉井〈旧姓丹生谷〉康恵が行った。
9. 写真撮影は、現地調査を宮崎が、遺物撮影を大西朋子が行った。
10. 本書の編集は宮崎があたり、執筆は第4章の2を下條信行先生、第6章を久野雄一郎先生、清水欣吾先生があたり、他を宮崎が行った。
11. 科学分析にあたり、青銅器は奈良県立橿原考古学研究所久野邦雄先生・三宝伸銅株式会社久野雄一郎社長、鉄器は日立金属株式会社安来工場冶金研究所清水欣吾所長に多大な協力を得た。
12. 調査及び本報告書作成に当たり、原稿を書いていただいた愛媛大学法文学部下條信行先生を始め下記の方々に御協力頂いた。記して感謝いたします。（以下、敬称略）。
　愛媛大学法文学部宮本一夫、日本考古学協会会員相田則美、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター岡田敏彦・谷若倫郎。
13. 卷頭の原色航空写真については、株式会社バスコの提供を受けた。
14. 最後に、現地調査及び整理作業に於ては、格段の御理解、御協力、御助言を頂いた株式会社グリーンサービス古茂田芳郎社長を初め社員の方々に感謝いたします。

本文目次

第1章 はじめに	
1 調査に至る経緯と経過	1
2 位 置	3
3 地理的環境	3
4 歴史的環境	3
第2章 調査の概要と整理状況	
1 調査の概要	8
2 整理状況	11
第3章 遺構と遺物	
1 第1調査区	12
2 第2調査区	19
3 第3調査区	55
4 第4調査区	82
5 第5調査区	111
第4章 祝谷六丁場遺跡出土の平形銅剣	
1 出土状況	117
2 平形銅剣	118
第5章 祝谷六丁場遺跡出土の遺物	122
第6章 科学的分析	
1 平形銅剣	142
2 鉄 斧	148
第7章 成果と意義と課題	158

挿図目次

図-1	祝谷六丁場遺跡の位置図	3
図-2	祝谷六丁場遺跡周辺の地質図	4
図-3	祝谷六丁場遺跡周辺の遺跡分布図	6
図-4	調査区の位置図	9
図-5	祝谷六丁場遺跡全体図	10
図-6	第1調査区西端上層断面図	12
図-7	第1調査区遺構配置図	13
図-8	第1調査区出土土器	14
図-9	第1調査区出土石器(1)	15
図-10	" (2)	16
図-11	" (3)	18
図-12	第2調査区土層断面図	19
図-13	第2調査区遺構配置図	20
図-14	第2調査区出土土器(1)	21
図-15	" (2)	22
図-16	" (3)	24
図-17	" (4)	25
図-18	" (5)	26
図-19	" (6)	28
図-20	" (7)	29
図-21	" (8)	30
図-22	" (9)	31
図-23	" (10)	32
図-24	" (11)	33
図-25	" (12)	34
図-26	" (13)	35
図-27	" (14)	36
図-28	" (15)	37
図-29	" (16)	38
図-30	" (17)	40
図-31	" (18)	41

図-32	第2調査区出土土器(9)	42
図-33	" (20)	43
図-34	" (21)	44
図-35	" (22)	46
図-36	" (23)	47
図-37	" (24)	48
図-38	" (25)	49
図-39	" (26)	50
図-40	" (27)	51
図-41	" (28)	52
図-42	" (29)	53
図-43	第2調査区出土石器	54
図-44	第3調査区土層断面図	55
図-45	第3調査区遺構配置図	56
図-46	第3調査区出土土器(1)	58
図-47	" (2)	59
図-48	" (3)	60
図-49	" (4)	61
図-50	" (5)	62
図-51	" (6)	63
図-52	" (7)	64
図-53	" (8)	66
図-54	" (9)	67
図-55	" (10)	68
図-56	" (11)	70
図-57	" (12)	71
図-58	" (13)	72
図-59	" (14)	74
図-60	" (15)	75
図-61	" (16)	76
図-62	第3調査区出土石器(1)	77
図-63	" (2)	78
図-64	" (3)	79
図-65	" (4)	80

図-66	第3調査区出土石器(5)	81
図-67	" (6)	82
図-68	第4調査区遺構配置図及び土層断面図	84
図-69	第4調査区遺構図	86
図-70	第4調査区遺構内出土遺物	87
図-71	第4調査区土器滴まり出土状況図	88
図-72	第4調査区上器滴まり出土土器	89
図-73	第4調査区出土土器(1)	91
図-74	" (2)	92
図-75	" (3)	93
図-76	" (4)	94
図-77	" (5)	95
図-78	" (6)	96
図-79	" (7)	97
図-80	" (8)	98
図-81	" (9)	99
図-82	" (10)	100
図-83	" (11)	101
図-84	" (12)	102
図-85	" (13)	103
図-86	" (14)	104
図-87	" (15)	105
図-88	" (16)	106
図-89	" (17)	108
図-90	第4調査区出土石器	109
図-91	第5調査区土層断面図	111
図-92	第5調査区土層断面図及びドット図	112
図-93	第5調査区出土上器(1)	113
図-94	" (2)	114
図-95	" (3)	115
図-96	平形銅剣埋納填平断面図	117
図-97	平形銅剣実測図(1)	119
図-98	平形銅剣実測図(2)	120
図-99	祝谷六丁場壺式分類(1)	124

図-100 祝谷六丁場型式分類(2)	125
図-101 " (3)	126
図-102 祝谷六丁場出土壺	127
図-103 祝谷六丁場出土上壺	129
図-104 祝谷六丁場出土高杯	131
図-105 祝谷六丁場出土石包丁・石斧	133
図-106 祝谷六丁場出土上ジョッキ形土器	135
図-107 祝谷六丁場出土分銅形土製品	138
図-108 祝谷六丁場出土石戈・磨製石鐵・鉄斧	139
図-109 銅劍破片外觀	142
図-110 断面組成像 1	143
図-111 断面組成像 2	143
図-112 銅	144
図-113 スズ	144
図-114 鉛	144
図-115 酸素	144
図-116 硫黄	145
図-117 アンモニア	145
図-118 銀	145
図-119 資料の外観写真	149
図-120 資料のX線透過像	150
図-121 調査資料の採取	150
図-122 資料1の光学顕微鏡組織	152
図-123 資料2の光学顕微鏡組織	152
図-124 資料断面の脱炭層分布	153
図-125 資料1の断面組織分布	155
図-126 図-125の脱炭層に接するレーデブライト組織	156
図-127 図-125の脱炭層部組織	156
図-128 資料1の断面組織分布	157
図-129 図-128の脱炭層部組織	157

表 目 次

表 1 定量分析結果	146
表 2 鉛同位体比	146
表 3 資料の明細	148
表 4 試料の化学組成	151
表 5 表 1 併記資料の明細	151
表 6 土器・石器觀察表	161

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯と経過

本遺跡は、道後城北遺跡群中に該当する祝谷西丘陵部、東緩斜面地から発見された遺跡である。現都市的環境は、調査地から祝谷層状地が見渡される絶景の場所であると共に中心市街地に近接する地域としての道路建設や住宅建設などによる再開発が著しく、変貌を遂げている一地域である。

昭和62年7月、株式会社グリーンサービス（現愛媛住宅建設株式会社）より松山市祝谷6丁目11-22番、外3筆の開発行為（マンション建設）について事前合議が松山市教育委員会文化教育課へなされた。これにより文化教育課は開発地が包蔵地外になっていたがそれに近接する場所であることと合わせ、周辺地の調査例に昭和50年度調査の祝谷古墳（現ペテル病院）があり、横穴式石室と共にその下層より弥生中期の壺棺墓や住居跡などが発見され、それらの広がりが同一丘陵上で考えられることを含めて開発者と協議を行った。

これらの結果、昭和62年8月3日、同株式会社より埋蔵文化財確認願いの提出があり、同年11月14日から同年11月30日にかけて対象地9,123m²の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、上記対象地のうち約6,200m²範囲にある大きな谷間2ヶ所、小谷間1ヶ所から弥生中期中葉～後葉の上器層属十層、後葉の土器層属十層が確認されると共に同層からの掘り込みをなす遺構の存在が合わせて確認された。

市教委は、この結果内容に基づき調査期間や調査内容、経費、工事着手時期の延期問題など申請者と協議を重ね、同場所における埋蔵文化財の対応処置について申請者の格段の理解、合意を得、調査面積6,200m²を昭和62年12月1日から昭和63年5月31日にかけて実施することになった。

発掘調査は、調査地内の生活道路と廃土処理の関係から5区に分区して調査区を設定し、2・3・4区を共に着手し、1・5区をその完了後に実施した。

調査区3区谷間から前述の試掘時の包含層、幅約20mを検出し、さらに第1層（表土）、第2層（暗茶褐色土）、第3層（黒色シルト層）弥生中期中葉～後葉、第4層（黄褐色土）中期中葉、第5層（砂層）中期前半の土層分層と共にその帰属土器が確認された。また同区からは中期中葉の円形堅穴住居址、溝、土壤などと共に各種土器類や分銅形土製品が出土した。昭和63年2月には、同区谷間掘部より第2層を掘り込んだ楕円形土壇の中から平形銅劍一口が出土した。これにより急速、中間調査結果を含め平形銅劍の重要発見についての記者発表を行うことになった。その後、1区から弥生中期中葉の石器工房をなす住居址や4区からも同時期に該当する住居址が検出され、それより各種の土器と共に石器等が出土した。この他本調査からは多量の出土物と共に多くの成果を得た。

昭和63年4月には、これらの内容により調査期間をさらに2ヶ月間延長を行い、同年6月に調査を完了した。また、整理作業は同年8月から4ヶ月間行った。

（西尾・宮崎）

調査組織

調査地 松山市祝谷6丁目1122外3筆

遺跡名 祝谷六丁場遺跡

調査期間 発掘調査 1987年12月1日～1988年7月31日

整理作業 1988年8月1日～1988年11月30日

調査面積 6,200m²

調査委託 株式会社グリーンサービス（現愛媛住宅建設株式会社）

社長 古茂田芳郎

部長 榎原 定一

部長 上田 岩男

調査主体（組織）松山市教育委員会

教育長（前任） 西原多喜男

教育長 平井 亀雄

参事（前任） 松原 重勝

次長 井手 治巳

次長 古本 克

文化教育課

課長（前任） 伊賀 俊輔

課長 渡部 忠平

課長補佐 人野 衡治

第二係長（前任） 戸田 浩

第二係長 菅野 治之

〃主任 西尾 幸則

〃主事 重松 佳久

〃調査員 宮崎 泰好

調査補助員 相原 浩二・河野 知史・石丸 直樹

刊行主体 松山教育委員会前教育長 平井 亀雄

教育長 池田 尚郷

参事 古本 克

次長 井上 量公

次長 一色 正士

総括 松山市教育委員会文化教育課課長 渡部 忠平

松山市立埋蔵文化財センター所長 森脇 将

〃 調査係長 西尾 幸則

〃主任 田城 武志

〃主事 萩田 正芳

担当 〃 調査員 宮崎 泰好

2 位 置

今回、発掘調査を実施した祝谷六丁場遺跡は、松山平野北西部の山間部の丘陵地の斜面部に位置し、絶対位置は、北緯 $33^{\circ} 51' 31''$ 、東経 $132^{\circ} 46' 39''$ の交差する付近であり、標高48.5~63.3m前後を測る。

行政上の位置は、愛媛県松山市祝谷六丁目1122番地他である。

調査前は、調査地全体は斜面を段状に造成し鶏舎であった。



図-1 祝谷六丁場遺跡の位置

3 地理的環境

松山平野は、西部瀬戸内海の伊予灘と中部瀬戸内海の灘とを二分するように、北に突き出た高縄半島のつけねに広がっている。高縄半島の中央部には、最高峰の三ヶ森(1237m)をはじめ、北西に連なる伊之子山(872m)・北三ヶ森(977m)・高縄山(986m)からなる高縄山系が形成されている。この高縄山系から流れ出る石手川・重信川・小野川等に形成された扇状地が松山平野である。

祝谷六丁場遺跡が所在する松山市祝谷地区は、石手川の谷口付近から石手川の支流伊台川をさかのぼる流域及び丸山川、大川、吉藤川、永谷川などの流域の丘陵地と小規模な河岸段丘からなる。

本遺跡は、永谷川と丸山川が合流するあたりに位置する丘陵斜面に立地する。

地質的に言うと、高縄山系は、中世代の領家帶貫入岩類の松山型花崗閃綠岩が大部分を構成する独立丘陵である。しかしながら、松山城及び湯築城の丘陵と石手寺裏山の南側に白亜紀の和泉層のレキ岩が露出しており、一部瀬戸内火山岩類が貫入している。

本遺跡は、和泉層群のレキ岩と領家変成岩の松山型花崗閃綠岩が接するあたりに位置しており、主に花崗岩質の砂レキが堆積しており、地山を形成している。

4 歴史的環境

本遺跡の所在する祝谷地区は、松山平野内をまとまりのある遺跡群を分けて捉えるとすれば松山平野北西部に広がる道後城北遺跡群の北部に位置する。以下、道後城北遺跡群を中心に述べる。

旧石器時代

従来、愛媛県下の旧石器時代の遺跡で本格調査を実施されたのは、皆無であった。表採資料もし

凡例

大起伏山地 (起伏量400m以上)	小起伏丘陵 (起伏量100m以下)	扇状地
中起伏山地 (起伏量400~200m)	上位砂砾台地	河原
小起伏山地 (起伏量200m以下)	中位砂砾台地	崖
山麓緩斜面 (土石流・ 崩壊地形などを含む)	下位砂砾台地	自然堤防または移堆例
大起伏丘陵 (起伏量200~100m)	谷底平野および氾濫原	人口平坦地(埋立地)

(土地分類基本調査図)

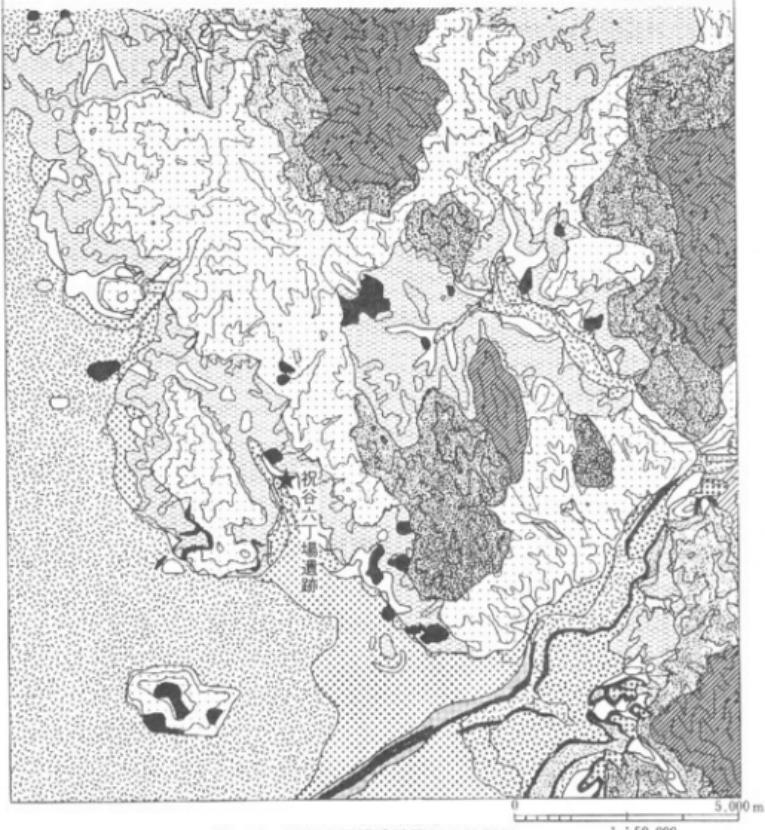


図-2 祝谷六丁場遺跡周辺の地質図

1 : 50,000

くは、縄文時代以降の包含層出土資料により、旧石器時代の遺跡と周知されていた。近年は、愛媛県埋蔵文化財調査センターが銳意調査を実施している。

この道後城北遺跡群では、周谷丸山遺跡から細石核や細石刃が表採された報告があるが、断定はできない。何れにしても、この祝谷地区の地形が丘陵に挟まれた事から、旧石器時代の遺跡が発見される可能性がある地域である。

縄文時代

松山平野の縄文時代の遺跡調査例は少ない。

松山平野南の丘陵上に、早期の土壇原Ⅱ遺跡、後期の上野遺跡、晩期の長田遺跡から堅穴住居跡、土壙等が検出されている。

松山平野南の平坦部では、久米塚田Ⅰ遺跡から後期の堅穴住居跡1棟、久米塚田森木遺跡から後期後半の土壙が検出している。

松山平野北の海岸近くでは、晩期中葉の船ヶ谷遺跡、後期及び晩期後半の大瀬遺跡が上げられる。大瀬遺跡からは、晩期後半の刻目突骨文の深鉢や黒色研磨の浅鉢と共に共し、黒斑朱塗りの壺、磨製石包丁、石鎌が出土している。これにより縄文晩期農耕の存在が知られる様になった。

道後城北遺跡群では、文京遺跡8・9・11次調査、道後城北RN B遺跡の調査が知られている。文京8次が後期、文京9次が後期及び晩期前葉、文京11次が後期前葉、RN Bが後期及び晩期後葉である。又、文京11次からは、屋外炉が検出され集落遺跡の存在が知られる。

他に、後期の十居窪遺跡、土居ノ段遺跡、道後冠山遺跡が上げられる。

弥生時代

弥生時代になると松山平野に遺跡が盛行する段階である。特に道後城北遺跡群に集落遺跡が多くなる。愛媛大学構内の文京遺跡で、中期から後期にかけての大規模集落が報告されている。

前期では、木葉文の持田遺跡、道後今市遺跡、道後冠山遺跡、道後姫塚遺跡、堅穴住居跡が検出された文京遺跡4次、平銀出士の山越遺跡2次が上げられる。

中期では、祝谷アイリ遺跡、土居窪遺跡、吉藤宮ノ谷遺跡、祝谷古墳群遺跡（現ベテル病院）、祝谷大地ヶ田遺跡、道後鶯谷遺跡、東雲神社遺跡、堅穴住居跡検出の文京遺跡が上げられる。

後期では、堅穴住居跡検出の松山北高遺跡と道後船塚遺跡、重圓文日光鏡が出土し壺棺を内部主体とする埴丘墓が多数検出した若草町遺跡が上げられる。

弥生時代中期前半は、遺跡がやや丘陵側に集中し、中期後半段階から後期にかけては、平野部に集落を構成する様である。

弥生時代の本格調査による銅鏡片の出土は、文京遺跡9次、若草町遺跡が知られている。

又、平形銅劍の出土は、今回の祝谷六丁場遺跡から1振、道後公園遺跡から3振、道後今市遺跡から10振、道後樋又遺跡から8振が出土している。この道後城北遺跡群は、県下でも、平形銅劍の

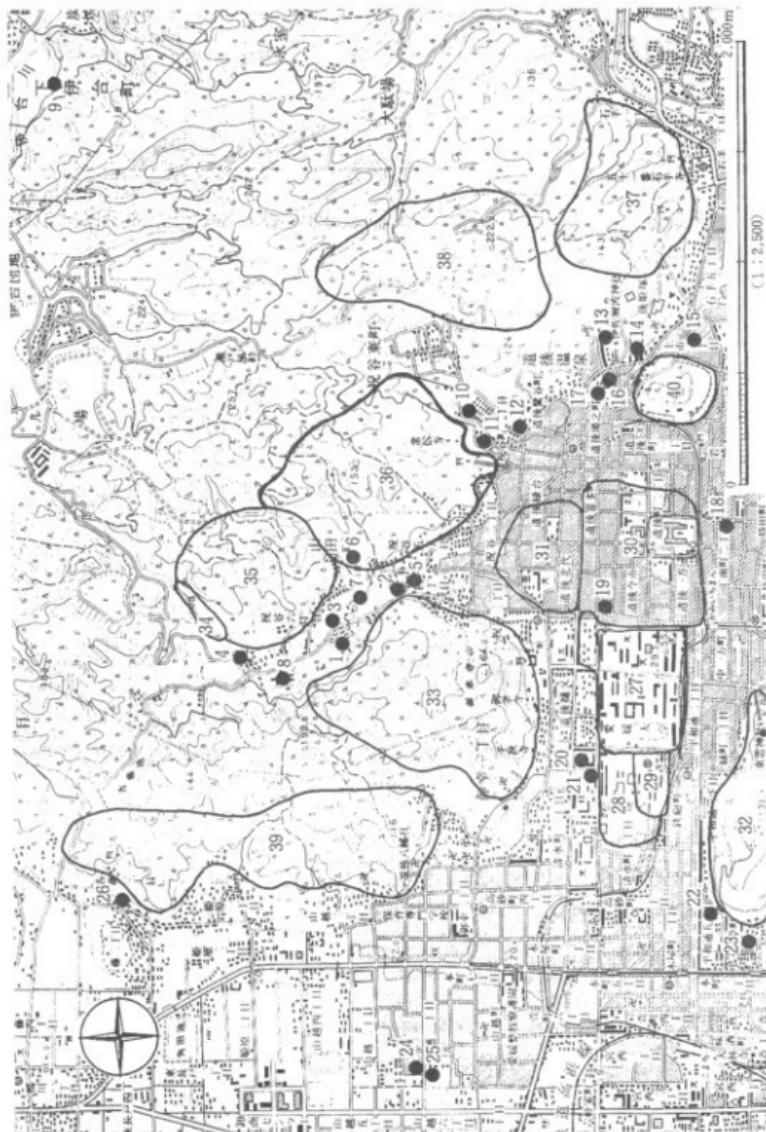


図-3 周辺の選択分布図

出土が多い地域である。

古墳時代

松山平野周辺の丘陵上には、多くの古墳群の存在が知られている。

この道後城北遺跡群周辺では、祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常信寺古墳群、桜谷古墳群、石手守古墳群、伊佐爾波古墳群が知られている。

集落遺跡では、前期の若草町遺跡、松山北高遺跡、伊台惣部遺跡。中期の道後今市遺跡から堅穴住居跡が検出している。

古代以降

古代の庵寺では、道後城北遺跡群において、湯之町庵寺、内代庵寺が知られている。

中世においては、河野氏が湯築城を築いている。この湯築城は、近年公園化に伴う本格調査を愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施している。道後において湯築城に伴う城下町を形成されたと考えられるが、詳細は不明である。

近世になると、湯築城が廃城となり平山城の松山城が築城され、この松山城を中心に城下町が形成されている。若草町遺跡からは、多量の遺物の他、屋敷割り造構や礎石、井戸等を検出しているから、松山城周辺から近世城下町遺跡の存在を示すものであり、注意が必要であろう。

参考文献

下條信行編 「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」古代学協会四国支部 1988

愛媛県 「愛媛県史 原始・古代Ⅰ」 1982

愛媛県 「愛媛県史 資料編・考古」 1986

松山市 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ」 1987

松山市 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」 1989

松山市 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」 1991

松山市 「松山市資料集 第2巻 考古2」 1987

宮本・大他 「文京遺跡第8・9・11次調査」 1990

岡田敏彦他 「道後今市遺跡」 1985

阪本 安光 「道後駒塚遺跡」 1979

阪本安光他 「松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書」 1981

森 光晴他 「文京遺跡」 1980

西尾幸則他 「古代の松山平野」 1982

阪本安光他 「松山市船ヶ谷遺跡」 1985

大山正風他 「大山1号・桜谷古墳発掘調査報告書」 1974

第2章 調査の概要と整理状況

1 調査の概要

祝谷ハ工場遺跡は、從来周知（現松山市埋蔵文化財分布地図未載）されていなかった遺跡である。確認調査の段階で遺跡の存在が確認され、本格調査を実施したものである。

調査対象区は、面積約6,200m²で、標高48.5～63.3mの丘陵谷間である。

調査前には、調査区全体が鶏舎であった。鶏舎建設造成のおり、斜面をL字カットされているとともに、鶏舎撤去時の攪乱塊が調査区内に隨所掘られていた。

調査区中央を横切る生活道路及び確認調査のデータを基に調査区を設定した。調査区を5区に分区した。第1調査区が北側。第2調査区が東側中央、1区の南。第3調査区が西側中央。第4調査区が南側、3区の南東。第5調査区が東側南より、2区の南がそれである。

調査区のグリッド設定は、第1から第4調査区ごと調査区外に任意に基点を設け、磁北を基線に6mグリッドを設けた。グリッド名称は、基点から北のグリッドをN1、東をE1と付けた。基点の北東は、N1-E1グリッドである。各調査区のグリッド名称は、整理時の混乱を避ける為、別々の名称である。1区は、基点を調査区外南西に設け、N-Eのみ。2区は、基点を調査区外北西に設け、S-Eのみ。3区は、基点を北東に設け、S-Wのみ。4区は、基点を調査区外南東に設け、N-Wのみである。5区は、グリッドを設定していない。

調査は、廃土処理の関係で、まず2区及び3区南側から着手した。順次、4区、1区北東部、5区、3区北側、1区南東及び西側の順で調査を実施した。

調査区の地形は、調査区南の丘陵と北西の丘陵に、挟まれた丘陵谷間の斜面部である。また、調査区西側中央に低丘陵が延びている。丁度、調査区内生活道路西側に当たる。調査区全体は、西から東に下がる斜面部で、南は急斜面、1区と3区の間がやや微傾斜を呈する。調査前は、調査区東の県道側が平坦面であった。

層序

調査区内、区ごとの堆積状況の違いにより、上色の違いが見受けられる。

基本堆積土は、3区の遺物包含層の堆積土を基準にすれば、上層が黒色粘質土系。中層が灰黄褐色土系。下層が青灰色粘土及び茶褐色砂などの砂質系に分けられる。

上層は、1区の第2・3層が、2区の第2から4層が、3区の第2から4層が、4区の黒色粘質土上と暗褐色土、5区の包含層上層が対応する。中層は、1区の第4・5層が、2区の第5・6層が、3区の第5・6層が、4区の小谷間の堆積土が、5区の包含層下層が対応する。下層では、1区の第6層が、2区の第7・8層が、3区の第7層が対応する。

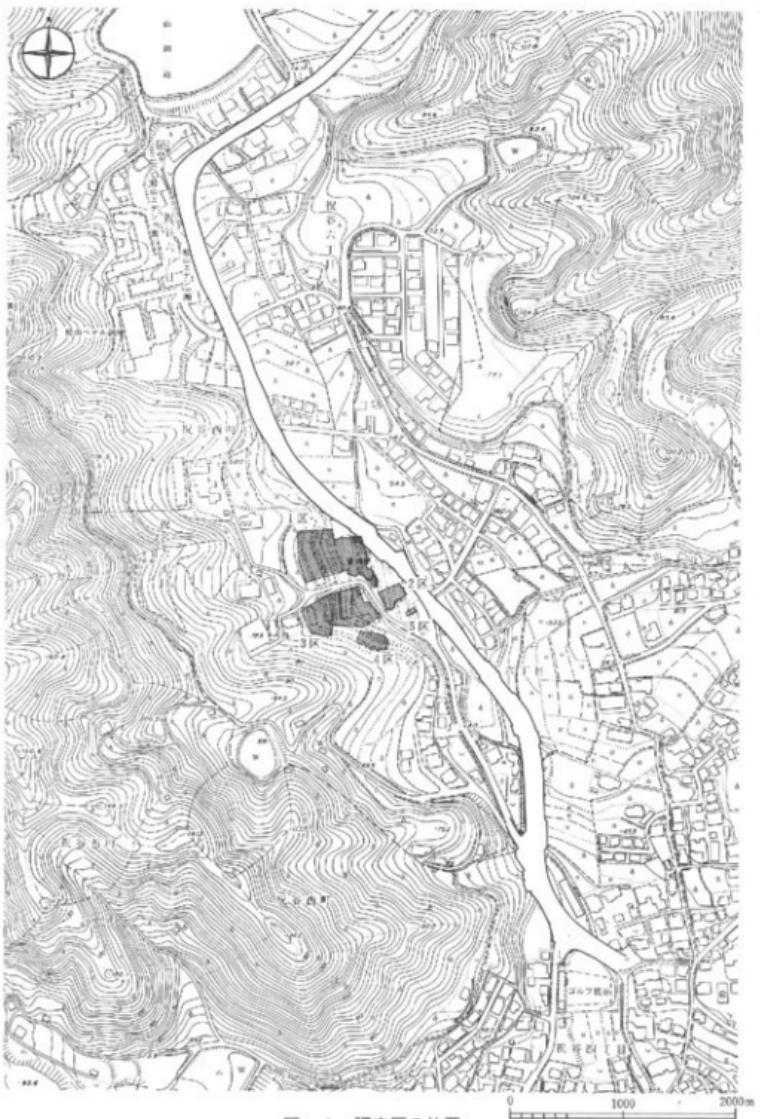


図-4 調査区の位置

(S=1/5000)

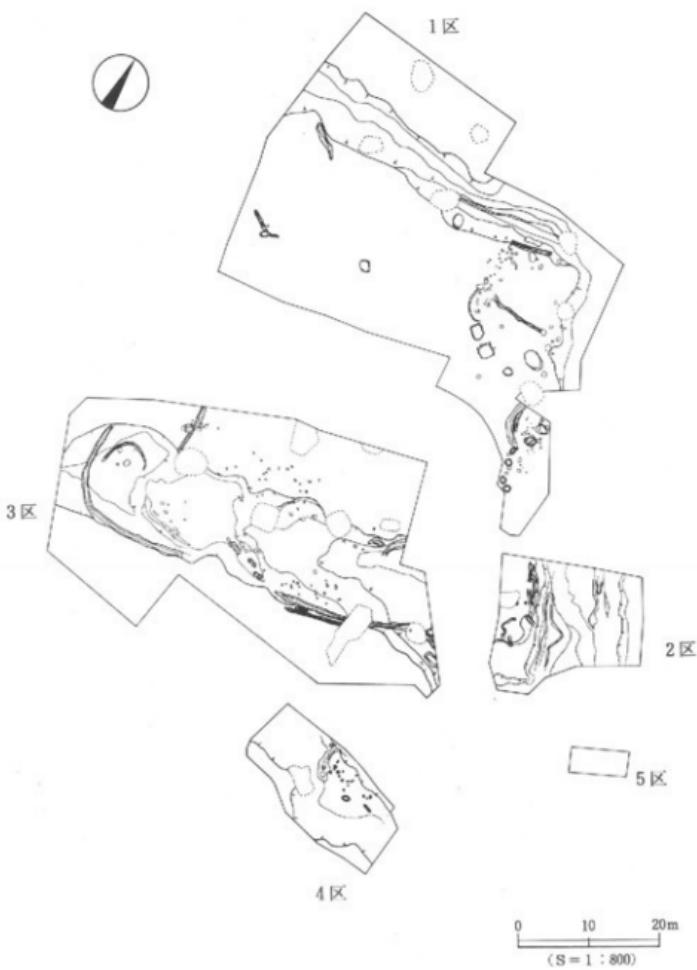


図-5 祝谷六丁場遺跡全体図

出土土器から、上層から下層にかけて弥生時代中期中葉段階が主体となっているが、上層堆積時
が、丁度、中期後葉段階への移行期にかかる。

2 整理状況

祝谷六丁場遺跡は、現地調査8ヶ月、引き続き原図者負担の整理作業を4ヶ月実施した。出土遺物は、土器片が収納箱で約753箱、石器が約330点、剝片が約13,000点、鉄器など多種多量に出土した。

出土遺物が多量であるにも関わらず、調査終了後の実質的な整理期間が設定できなかったのが、実状である。今回の報告書1収録分は、調査終了後3ヶ年にわたり、他の現地調査を実施しながらの成果である。

整理状況の項を、設定したのは、今回の報告分と未報告分、未整理分を、事情により明確にする
為であり、今後の整理作業の為である。以下区別に述べる。

* 1区

未整理分 出土土器の接合及び復原作業（約250箱）

出土遺物の実測（石包丁・石斧以外）

検出遺構の図面整理（石塙工房跡整理未着手）

未報告分 検出遺構、出土遺物の全て。

* 2区

未整理分 出土遺物の実測（木類、石包丁・石斧以外の石器、縞刻土器）

検出遺構の図面整理

未報告分 検出遺構、未実測の出土遺物

* 3区

未整理分 出土土器の接合及び復原作業（約280箱）

出土遺物の実測（今回報告の上器以外、石包丁・石斧以外の石器）

検出遺構の図面整理

未報告分 検出遺構、未実測の出土遺物

* 4区

未整理分 出土遺物の実測（石包丁・石斧以外の石器）

未報告分 未実測の出土遺物

* 5区 報告済み

以上、今回の報告は、調査内容から言えば、全体の三分の一であった。

第3章 遺構と遺物

1 第1調査区

第1調査区は、調査対称区内をほぼ中央、東西に横切る生活道路の北側に位置する。廃土処理の関係で、便宜的に3分割して調査を行った。まず北東部の調査を行い、調査終了後に、南側の拡張部と西側の調査を併行して行った。

北側には東西に走る幅6m～8m、深さ（最深部）2.5mを測る谷間を検出した。この谷間には、多量の遺物が包蔵されていた。

1区全体は、西から東に下がる斜面で、標高63.2～51.8m、比高差11.4mを測る。その内西側は、調査前の造成の為、段カットを階段状に持つ急斜面を呈する。中央や東寄りから傾斜変換点を持ち、これより東側が緩斜面となり、東端手前で急激に段落ちしている。この緩斜面から東端段落ち上端面までテラスを呈している。このテラスは2区西側のテラスにつながる。

1区では、この緩斜面からテラス上に住居跡を含め、遺構が集中している。1区では、造成の関係で北側の遺物を包蔵する谷間を除き、表上下は遺構検出面であった。

谷間西端の土層堆積は、第1層表土、第2層暗褐色土、第3層黒色粘質土、第4層暗青灰色シルト、第5層黄褐色土、第6層黄白色シルトと白色砂の混合層、第7層地山（黄色和泉砂岩）である。この内、第2層が弥生時代から中世、第3層から第6層までが弥生時代中期の遺物包含層であった。又、テラス下の段落ち部は第1層から第3層までが同一で、第4層に黒青色粘質土が厚く堆積し、第5層砂層、第6層砂レキであった。この内、第2層が弥生時代から中世、第3層から第6層が弥生時代中期の遺物包含層であった。以上、土層の堆積時は層的に同一相当層であるが、斜面部と河川部の違いにより、堆積層が第4層以下がちがう様相である。

検出遺構としては、1区全体から、堅穴住居跡2棟、土壙14基、溝4条、井戸1基、ピット53基、焼上面1カ所を検出した。

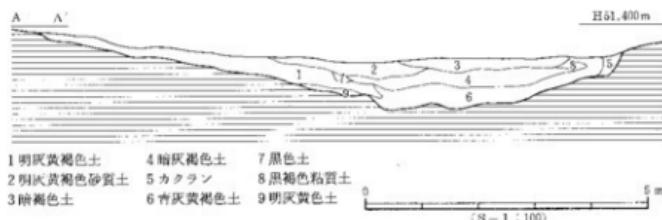


図-6 第1調査区西端土層断面図

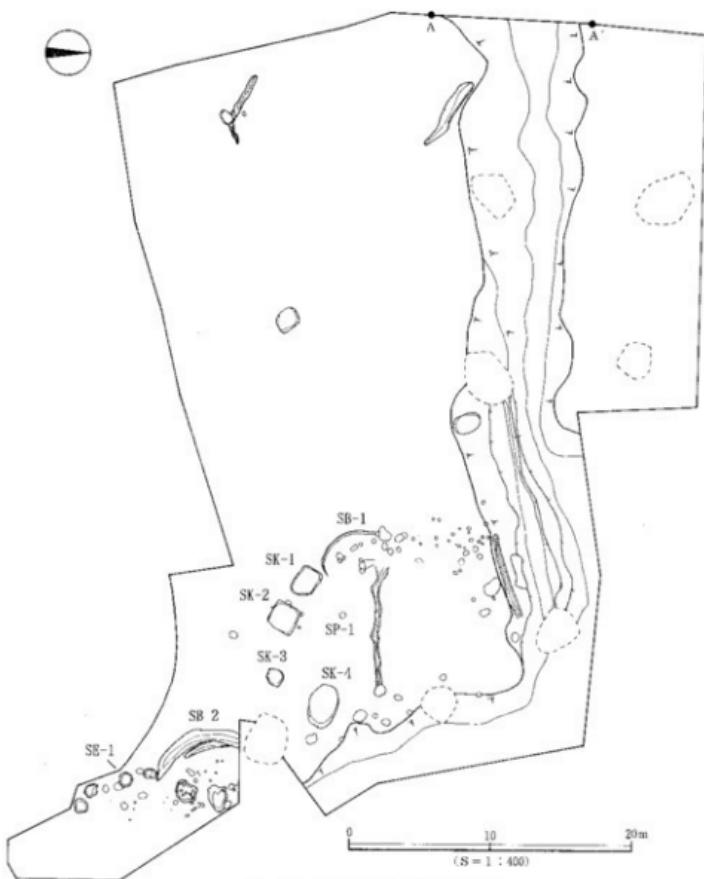


図-7 第1調査区遺構配図

1区西側の谷間より南の斜面部からは、溝2条、土壙2基、ピット1基を検出した。遺構の施用時期は、調査区西端の谷間南肩部検出の溝が古墳時代で、他は、弥生時代中期中葉であった。

1区東側の緩斜面からテラス上にかけては、視谷六丁場遺跡全調査区の中でも、最も遺構が密集しており、堅穴住居跡2棟、土壙12基、溝2条、ピット52基、井戸1基を検出した。

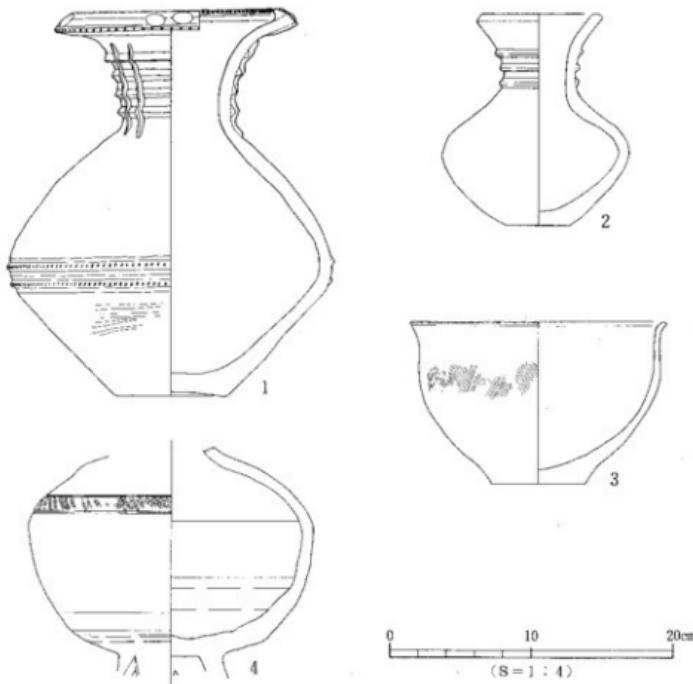


図-8 第1調査区出土土器

堅穴住居跡の内SB-1は、調査区中央東寄りに位置する。緩斜面の為、西側の山側のみ半分弱の検出であった。推定径4.8mを測る円形プランを呈している。この住居跡内の埋土及び住居跡検出面より東側の緩斜面より、石鎚未完成品を含めフレーク・チップ（石材は、サスカイト・赤色チャート・姫島産黒曜石で、95%はサスカイト）が約8,000点出土した。石鎚未完成品が出土している事から、石鎚工房跡と考えられ、廃絶時期は、出土土器から弥生時代中期中葉である。

SB-2は、調査区南東隅に位置する。テラスがやや突出した、テラス先端からの検出である。山側の西壁は、中場を持つ二段構造になっている。床面中央から土壇が2基されている。この土壇2基から、総計約60点のフレーク・チップ（石材は、サスカイト・赤色チャート）が出土している。出土量が、少ないので石鎚工房跡とは断定できない。廃絶時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉である。

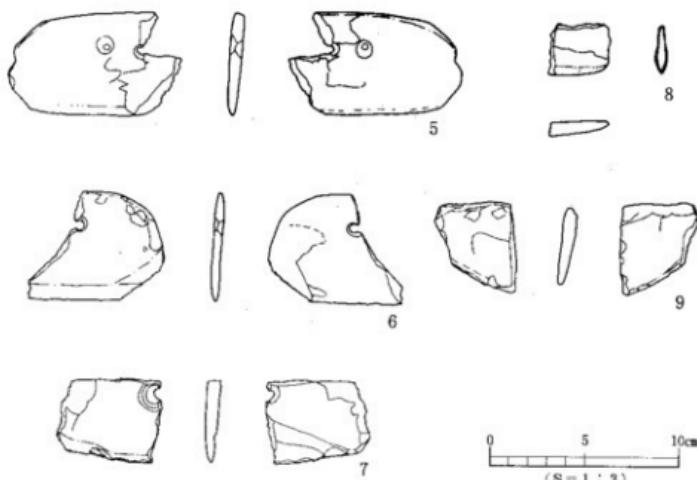


図-9 第1調査区出土石器(1)

井戸SE-1は、調査区南東隅、SB-2の南に位置する。円形プランを呈する掘りの井戸で、径0.6m、深さ0.8mを測る。廃絶時期は、埋土下層から出土した高杯から、弥生時代中期中葉である。

土壇の内、やや大型の方形プランは、SK-1・2が。楕円形プランは、SK-3・4があげられる。いずれも、基底面が平坦で、壁の立ち上がりがほぼ直立している。

この4基の土壇及び他の上擴を含めた廃絶時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉である。

ピットの内、SP-1のピット上部には、焼土ブロックの上に完形の鉢（図-8の3）が口縁部を上に向け、据えられた様な状況で出土した。

この1区東側の緩斜面からテラス上にかけて検出した堅穴住居跡や上塙などは、堅穴住居跡の内、1棟が工房跡である事、上塙が貯蔵穴と考えられる事から、このテラス上は、居住空間と捉えるよりも、作業空間と考えている。

又、調査区北西隅の、谷間の北側肩部傾斜面から、焼土面を検出した。この焼土面からは、壺が1個体分出土している。

出土遺物は、1区全体から、土・石器を含め収納箱約250箱出土している。弥生時代中期中葉から近世にかけてである。9割以上は、弥生時代中期中葉である。

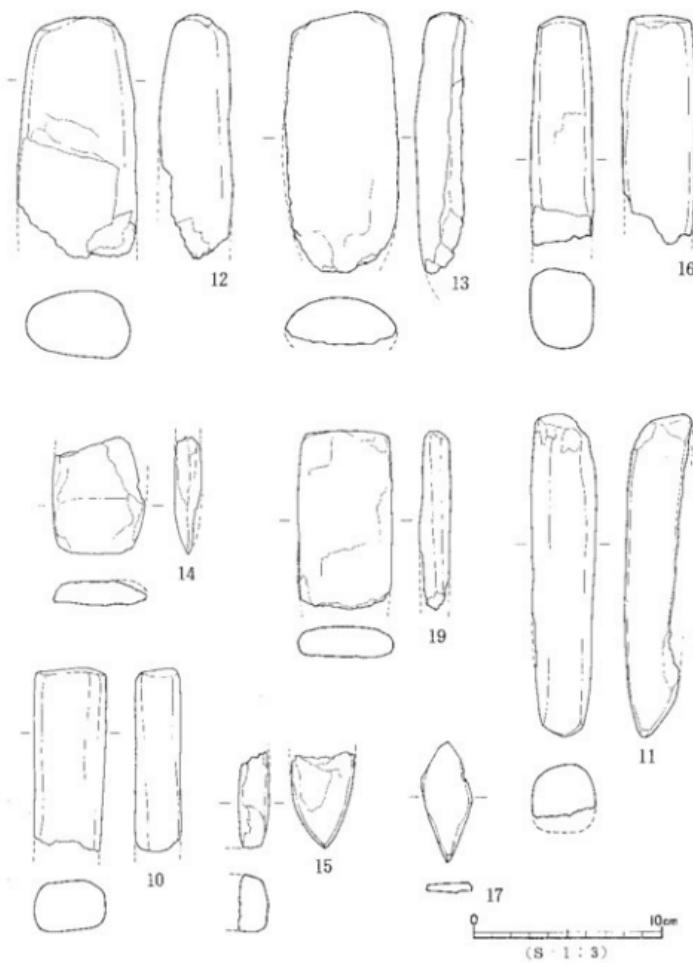


図-10 第1調査区出土石器(2)

1区西側谷間基底面直上、第6層より石戈片1点。第2層から第6層にかけて分銅形土製品が出土した。

今回の本報告書1には、土器の一部・分銅形土製品・石戈片1点・石包丁片と石斧片全部を、収録した。

報告書2には、土器の全てと、石包丁片と石斧片以外の石器類、鉄器類、土製品の遺物。遺構を収録する予定である。

遺物(図-8・11)

今回の報告書1には、任意に弥生時代中期の完形土器3点と、第1調査区西側後背地の丘陵上に構築された古墳の時期に関わると思われる須恵器1点と、実測可能な石包丁及び石斧片を収録した。

図-8の1・2は、谷間の包含層第6層からの出土である。3は、1区東側のピット内の出土である。4は、谷間の包含層第2層からの出土である。

1は、口縁が「ラッパ」状に開かる中型壺の完形である。底部は、やや上げ底で突出部を持たない。最大胴径を体部中位にとる。この体部中位には、刻み目を持つ断面三角形の突帯を二条持つ。頸部から口縁にかけて外上方にのびる。頸部外面には断面三角形の突帯を四条巡らしている。この頸部の突帯には、一対二本の粘土紐を直交させ、計三対貼り付けている。口縁端部内面には、断面三角形の突帯を張り付け拡張し、口唇部に刻み目を施している。拡張した端面には、一対二個の円形浮文を、計四対貼り付けている。

2は、口縁が「ラッパ」状に開かる小型壺の完形である。胴部最大径を体部中位やや上方に持つ。頸部には、断面三角形の突帯を三条持つ。頸部から口縁にかけては、外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。

3は、鉢の完形である。底部から体部にかけては、「椀形」を呈し、口縁部は、外方に向けて折り曲げている。手法は外面で刷毛目調整のちナデ調整である。

4は、須恵器の脚付きの壺の体部である。脚部には、「三角形透かし」を穿つ。体部上位には、二条の沈線が巡り、その間に刺突列点文が施されている。

5から9は、石包丁片である。いずれも谷間の包含層からの出土である。第3層から8が、第4層から5から7が、第6層から9が出土した。

5と6は、半身を欠いた楕円形の石包丁である。背に近い部分に穿孔が5に2箇所、6に1箇所施されている。全面が、丁寧な研磨で仕上げられている。

7は、半身以上を欠いた長方形の石包丁である。背に近い所に、穿孔が1箇所施されている。

本来は、2孔と思われる。器面は、丁寧な研磨で仕上げられている。

9は、半身以上を欠いた外湾刃半月形の石包丁である。

10から26の内、17以外は、石斧である。この内、谷間の包含層第2層から10が、第3層から11から15が、第4層から16から20と22及び25が、第5層から21と23が出土した。24は、SK-5から、

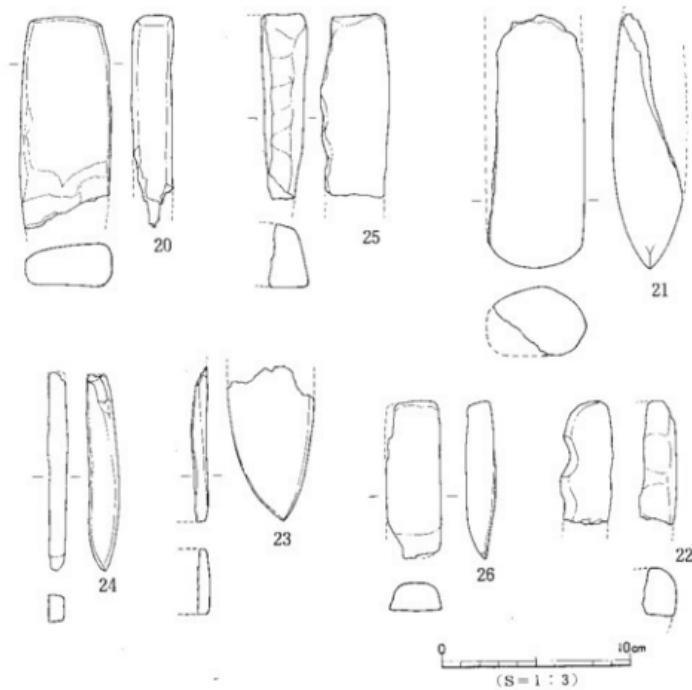


図-11 第1調査区出土石器(3)

26がピット内の出上である。

この内、大型船刃石斧は、15と21及び23である。形状をとどめているのが、21である。

扁平片刃石斧は、12、13、14、19、20である。19は、長方形を呈し、全体が丁寧な研磨で仕上げられている。柱状片刃石斧は、10、11、16、22、25、26である。22には、抉りを持つ。

柱状ノミ形石斧は、24で全体が丁寧な研磨で仕上げられている。

17は、菱形状の扁平な剝片で、三角形の一方2面に、剥離による刃部を持つ。

2 第2調査区

第2調査区は、調査対称区内の生活道路の東側、1区の南側に位置する。丁度、調査区東端中央やや南よりである。調査面積は約1320m²で、標高は52.2~48.0mである。

2区の西側は、南側にコーナーを持つテラス状を呈し1区内テラスに続く。東西7m、南北16mの範囲を検出している。このテラスは、1区に続くテラスである。2区中央部から東は、急傾斜に段落ちをしている。この段落ちは、調査区の東に流れる丸山川によって形成された河岸段丘の河岸と思われる。

段落ち部南西側の基本堆積土は、第1層表土、第2層暗茶褐色土粘質土、第3層暗褐色粘質土、第4層黒色粘質土、第5層灰色砂、第6層黒褐色粘質土及び黒灰色砂、第7層砂レキ、第8層明黄褐色砂・シルトである。この内、第2層は弥生時代から中世、第3~6層は弥生時代中期中葉、第7層は弥生時代中期前半の遺物包含層であった。第6層から木製加工材、植物遺体が調査区南東側にまとまって出土した。又、第8層はテラス直下から調査区中央まで堆積し、土器は出土せず、サスカイト片と赤色チャート片が出土した。

テラス上には、第1層から第3層が堆積し、第3層直下が遺構検出面である。

検出遺構としては、テラス上から土壙2基、溝2条、ピット3基、性格不明遺構1基。段落ち平坦西側から溝1条を検出した。

出土遺物は収納箱で約80箱出土している。弥生時代中期前半から近世にかけてである。9割以上は、弥生時代中期であった。

今回の報告書1には、実測可能な土器（古墳時代以降は、実測不可能な小片であった）、及び石包丁片、石斧片、分銅形土製品を収録した。

報告書2には、石包丁片と石斧片以外の石器類、鉄器類、上製品、木器類の遺物、遺構を収録する予定である。

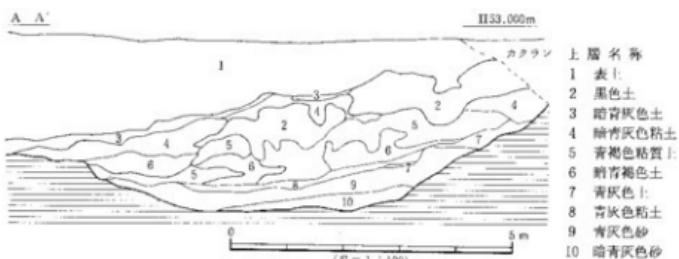


図-12 第2調査区土層断面図

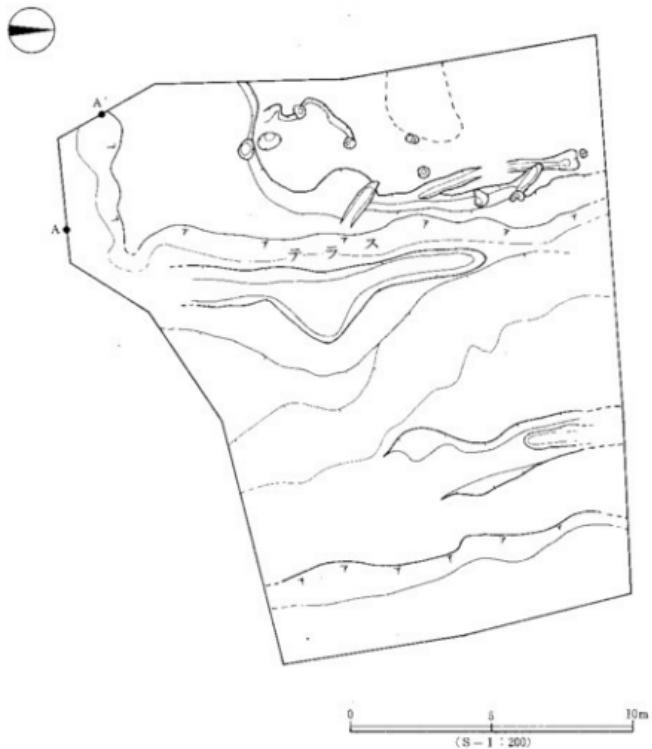


図-13 第2調査区遺構配置図

遺物

ここでは、第2調査区出土の実測可能な土器及び石包丁片、石斧片を収録している。

土器は、層ごとに分けた。2区では、堆積層が互層になっている為、東側の段落ち内で地点により堆積状況が違うとともに、2区南西のテラス南側とも堆積土の違いがある。

便宜的に第1から第15土器群を2区段落ちからの出土。テラス南側上層を第16土器群、下層を第17土器群とした。以下、相当する層を含め、第1群土器群から述べる事とする。

第1土器群(図-14)

2区東側包含層上層の暗茶褐色粘質土出土の土器を取り上げた。27から35である。

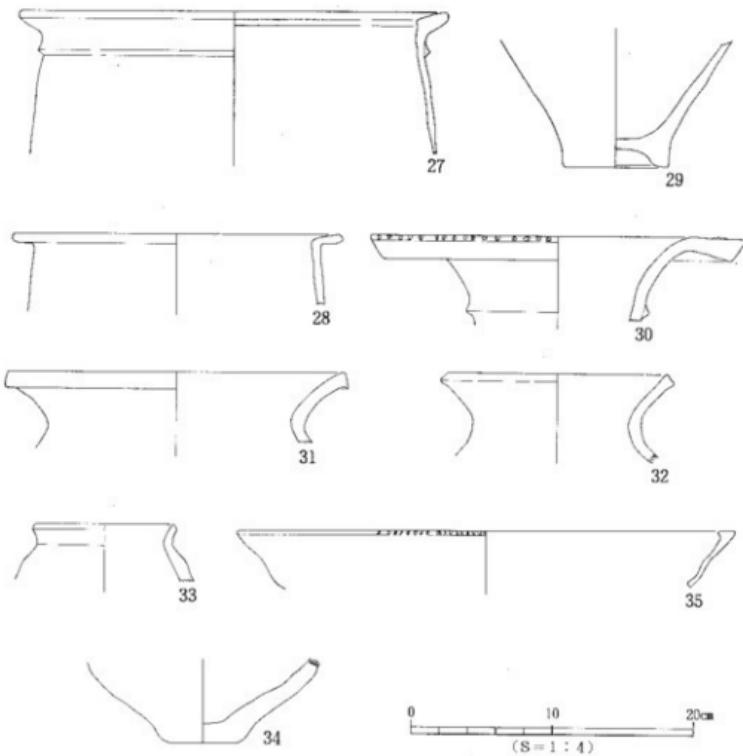


図-14 第2調査区出土土器(1)

27と28は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。27は、口縁部が肥厚され、頸部に断面三角形の突帯を1条持つ。

29は、突出部を持つ上げ底の壺の底部で、底端部が平坦面をなしている。

30は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚し、斜め下方に向け面をなす。口縁部に刻み目を施す。頸部には、断面三角形の突帯を1条持つ。

31と32は、口縁がやや短く外反し、端部が単純に終わる壺の口縁部である。

33は、頸部の屈曲が強い、胴部が張る短頸壺の口縁部である。胴部の器厚が厚い。

34は、胴部が張る小型壺の底部である。

35は、杯部が楕円形に内湾し、口縁部内方が肥厚された高杯の杯部で、口唇部に刻み目を施す。

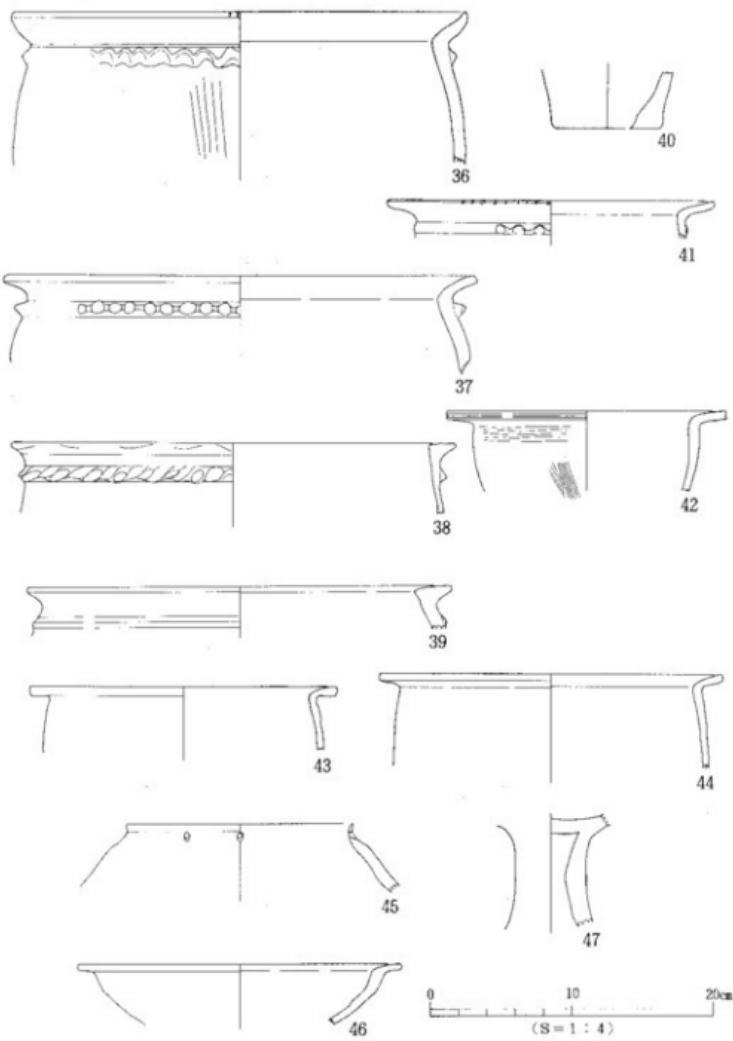


図-15 第2調査区出土土器(2)

第2土器群(図-15・16)

2区の中央北側の段落ち下層の青色粘質土出土の土器を取り上げた。36から62である。この内、上層が36から47。下層が48から62である。

36は、口縁端部がややつまみあげられ、口縁が断面「く」の字状の甕の口縁部である。頸部に、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

37、38、41は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。頸部に、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。38の口縁端面には、「ハ」字状文を持つ。

39は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。頸部に、薄い突帯を持つ。

42は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。口縁端部に凹線文を1条持つ。

43と44は、口縁が断面逆「L」字状で、突帯を持たない甕の口縁部である。

45は、口縁端部が尖った大型の短頸壺の口縁部である。頸部に穿孔が4箇所穿たれている。

46は、杯部が楕形に内湾し、口縁部が屈曲し開がる高杯の杯部である。

47は、高脚の高杯の脚部である。内面に絞り痕を残す。

48と49は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。48には、口唇部に刻み目を施す。

50から52は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。

53と54は、口縁端部がやや肥厚され平坦面の無類の鉢である。

56から57は、突出部を持つ、上げ底の甕の底部である。

58は、口縁部が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させ、口唇部に刻み目を施す。口縁内面には、円形浮文を持つ。

60は、高杯の杯部である。杯部が楕形で、口縁端部は内湾気味に直立し、稜線をもつ。口縁端部は、肥厚し平坦面をなす。61と62は、低脚で、端部が開がる高杯の脚部である。

第3土器群(図-17・18)

2区の包含層第3層暗褐色粘質土出土の土器を取り上げた。63から82である。

63から65は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。頸部に、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。64と65には、口唇部に刻み目を持つ。

66は、口縁が断面「く」の字状の甕の口縁部である。

67は、無頸の鉢の口縁部である。口縁直下に、断面三角形の突帯を1条持つ。

68は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。口縁部は上方につまみあげられている。

70は、無頸壺である。胴部上位に、浅い沈線文を3条施されている。

71は、小型壺の口縁部で口縁端部を肥厚させ上面が平坦面で、内面に稜線を持つ。

72から78は、壺の口縁部である。

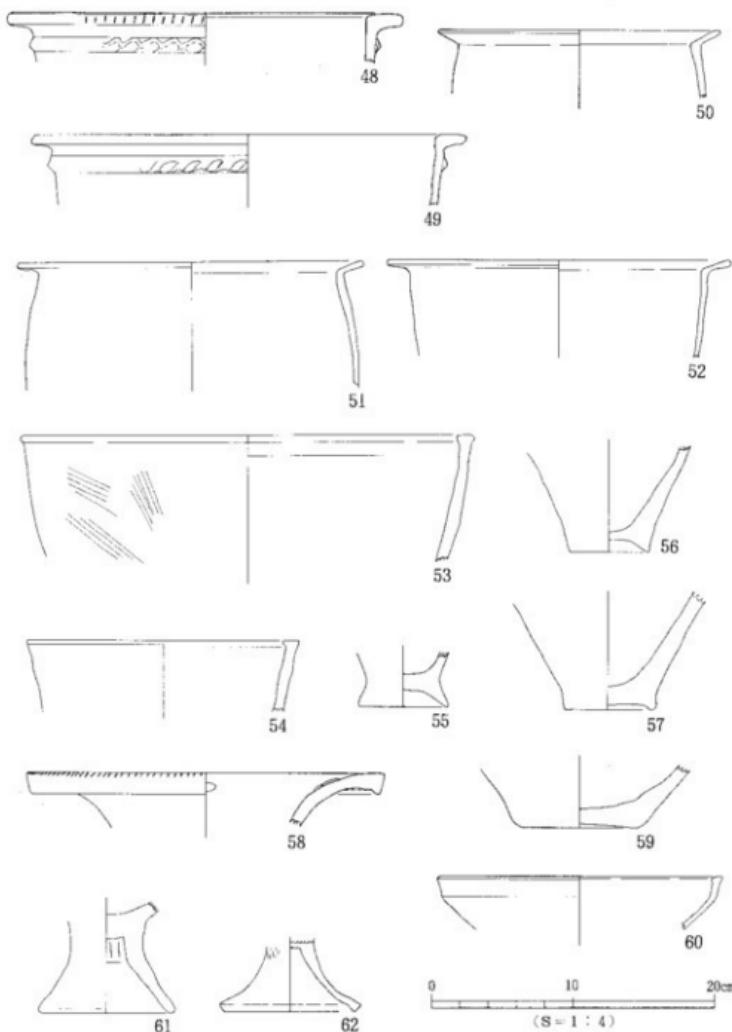


図-16 第2調査区出土土器(3)

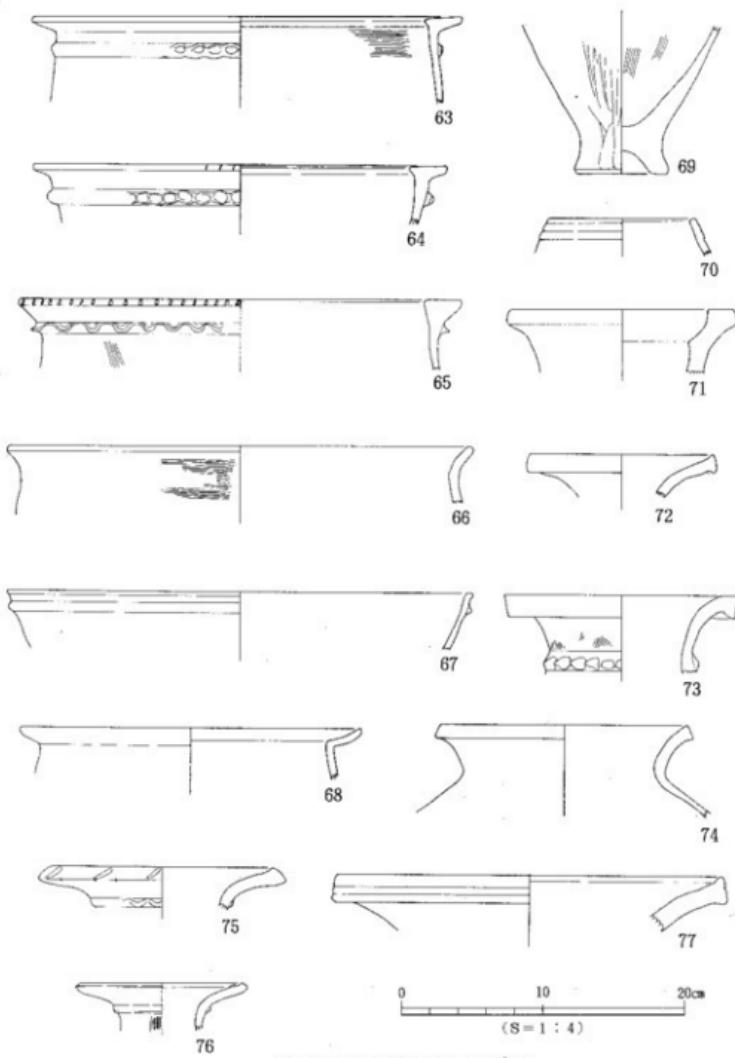


図-17 第2調査区出土土器(4)

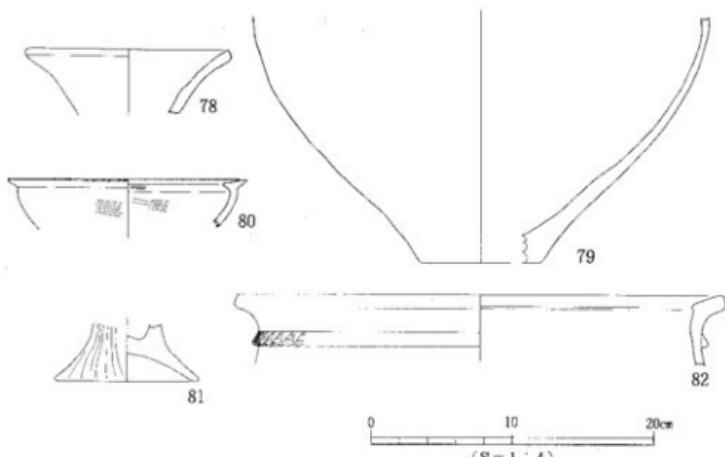


図-18 第2調査区出土土器(5)

73は、口縁部が「朝顔」状に大きく開がり、口縁端部下方を肥厚させ垂下させている。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

75から78は、「ラッパ」状に開がる口縁である。75には、口縁端部に2条一対の斜行文を持つ。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。76の頸部には、断面「かまぼこ」状の突帯を1条持つ。77の口縁端部には、凹線文を2条持つ。

79は、底径が胴径に対して小さい、大型壺の底部である。

80は、杯部が楕円形に内湾する高杯の杯部である。口縁内外方に肥厚されている。

81は、上げ底の壺の底部である。底内面は、皿状になっている。

82は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。口縁上面は、貼りつけである。頸部に、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

第4 土器群 (図-19)

2区の包含層第4層、黒色粘質土出土の土器を取り上げた。83から97である。

83と84は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。口縁端部には、刻み目を施している。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

85と86は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。85の頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。86の頸部には、断面三角形の突帯を1条持つ。

87と88は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。

89は、無類壺の口縁部である。口縁部に断面「台形」状の突帯を持つ。突帯には、指頭圧痕が施されている。

90から92は、上げ底の壺の底部である。92以外は、突出部を持つ。

93は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部片である。口縁端部下方が肥厚され面をなす、口縁端面には、浅い凹線文を1条施されている。又、口縁内面に、円形浮文を持つ。

94は、口縁が「ラッパ」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端面に、沈線3条「ハ」の字状文が施されている。

95は、口縁部が短く外傾し、頸部が「く」の字状の壺の口縁部片である。口縁端部は、肥厚し平坦面をなし、3条の凹線文を施している。

96は、高脚の高杯の脚部である。内面に絞り痕を残す。

97は、口縁部が直立気味に外傾する小型壺の口縁部である。口縁部に、穿孔が穿たれている。

第5土器群(図-20~22)

2区の包含層第5層灰色砂出土の土器を取り上げた。98から129である。

98から100は、断面逆「L」字状口縁で、頸部に突帯を持つ壺の口縁部である。99と100の突帯には、指頭圧痕が施されている。又、98と99の口縁部は、肥厚され、ぼってりしている。

101は、口縁が断面「く」の字状の小型壺の口縁部である。

102、103、106、109は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。

104、105、107、108は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。105の頸部に指頭痕を残す。

111は、胴部中位下方に最大胴径をとる大型壺の胴部である。最大胴径に、断面「かまぼこ」状の突帯を2条持つ。胴部上位に、円形浮文を貼りつけている。

112は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、頸部がやや短い壺の口縁部である。口縁端部は、上下方に肥厚され、頸部に断面三角形の突帯を2条持つ。

113は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方は肥厚され、端面に、沈線2条の「ハ」の字状文が施されている。口縁内面に円形浮文を貼りつけている。

114と115は、口縁部が大きく開がり頸部が短い壺の口縁部である。頸部に断面三角形の突帯を1条持つ。114の突帯には、浅い指頭圧痕が施されている。

116と117は、口縁がやや短く外反する壺の口縁部である。

118と119は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部は、肥厚され面をなす。端面に、118は3条、119は1条の凹線文を施している。

120は、複合口縁化する、口縁部が屈曲してから、直立する小型壺の口縁部である。口縁外面に、凹線文を3条施している。

121は、口縁が断面逆「L」字状の小型壺の口縁部である。口縁部は、屈曲し開がる。

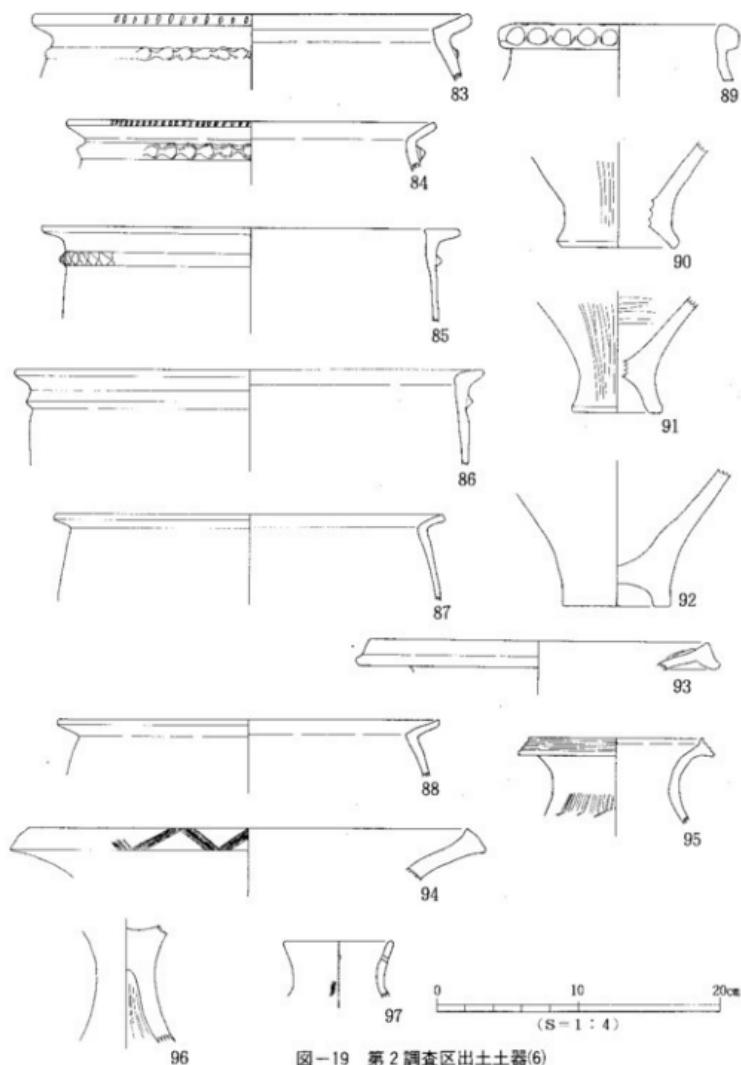


図-19 第2調査区出土土器(6)

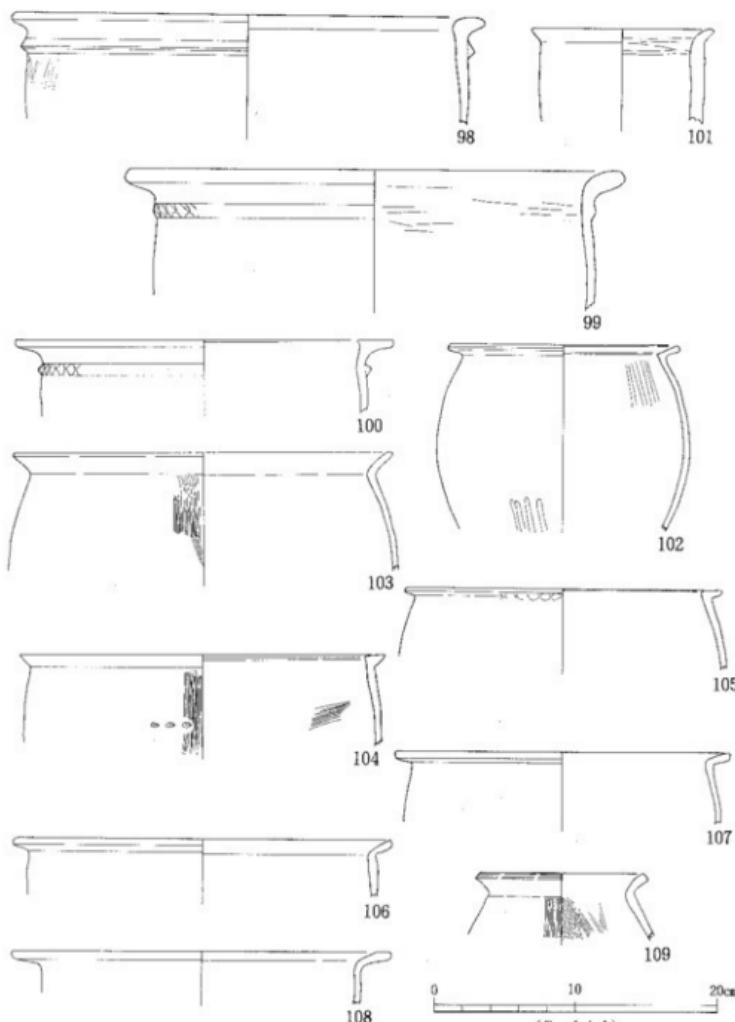


図-20 第2調査区出土土器(7)

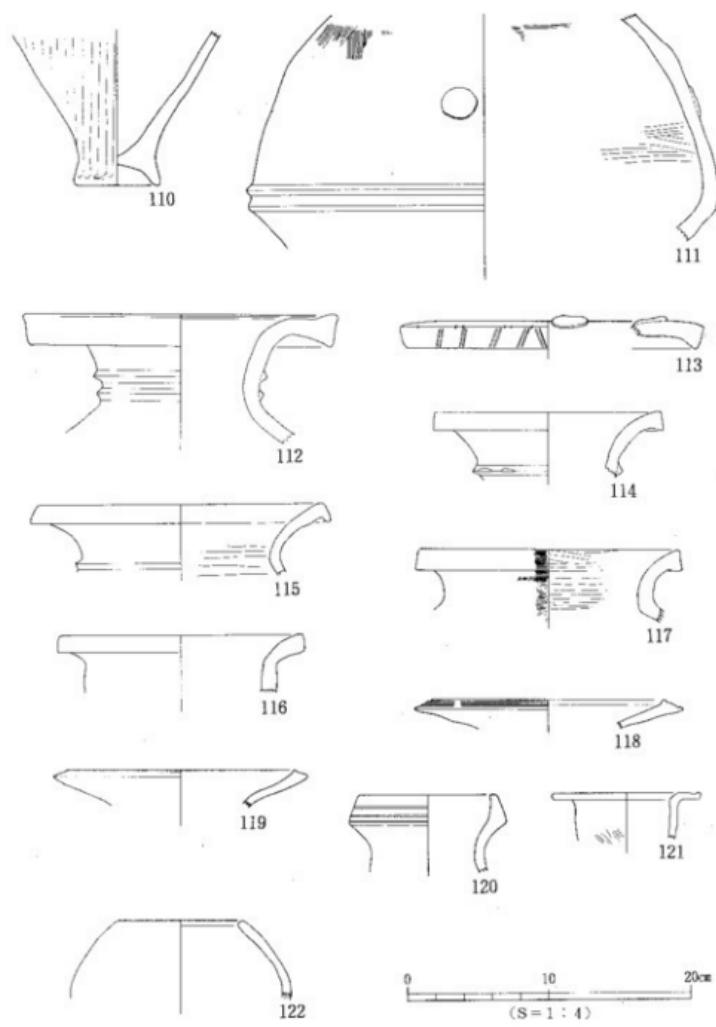


図-21 第2調査区出土土器(8)

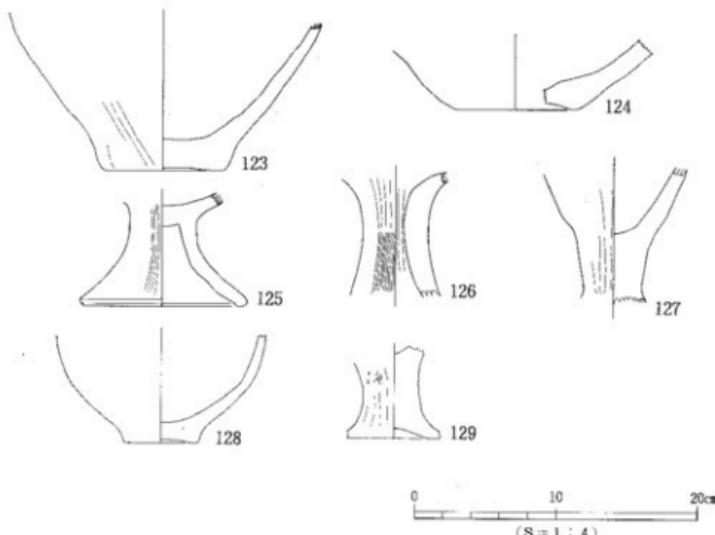


図-22 第2調査区出土土器(9)

122は、胴部が強く張り、口縁端部が丸くおさめられる無頸壺の口縁部である。

125から127は、高杯の脚部である。125は、低脚で端部が開がる脚部である。126は、高脚の脚部で、内面に絞り痕を残す。高脚の脚部であるが、他に類例を見ない。

129は、小型の鉢の脚部か、高杯の脚部である。何れにしろ、後の類例により、判断したい。

第6土器群(図-23)

2区の包含層第5層灰色砂の上層、青灰色砂出土の土器を取り上げた。130から141である。

130から132は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。頸部に突帯を1条持つ。

130の突帯には、指頭圧痕が施されている。

133から137は、口縁が断面逆「L」字状の、突帯を持たない壺の口縁部である。133の口縁端部には、羽状文が施されている。

141は、胴部に断面三角形の突帯を3条持つ壺の胴部である。

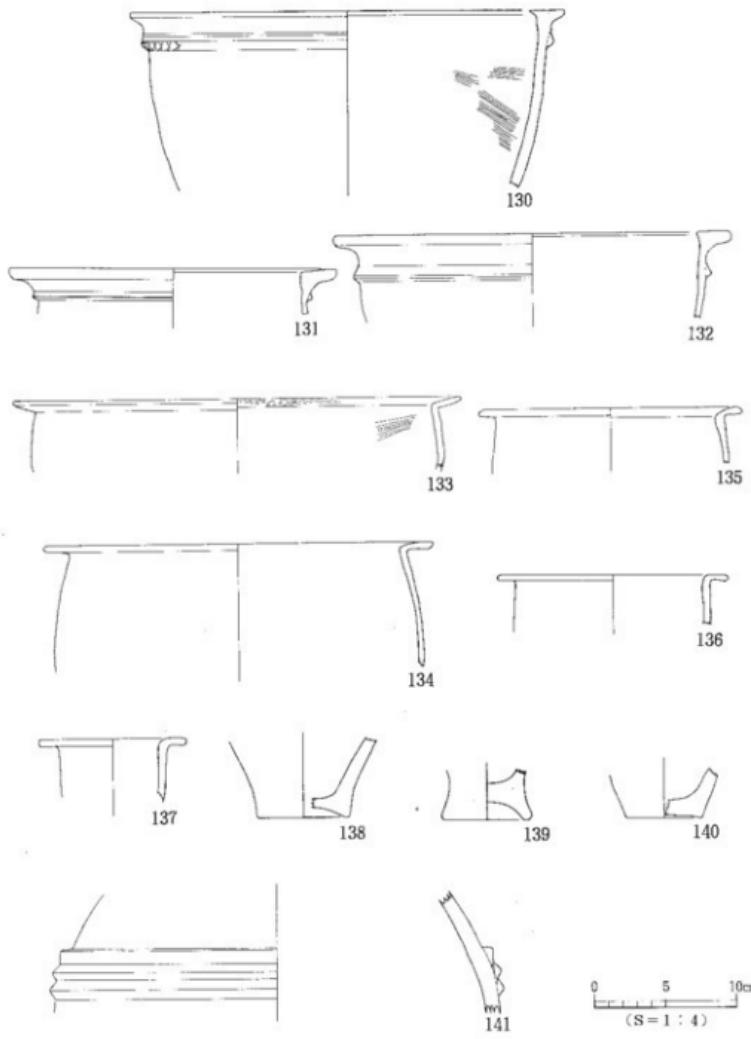


図-23 第2調査区出土土器10

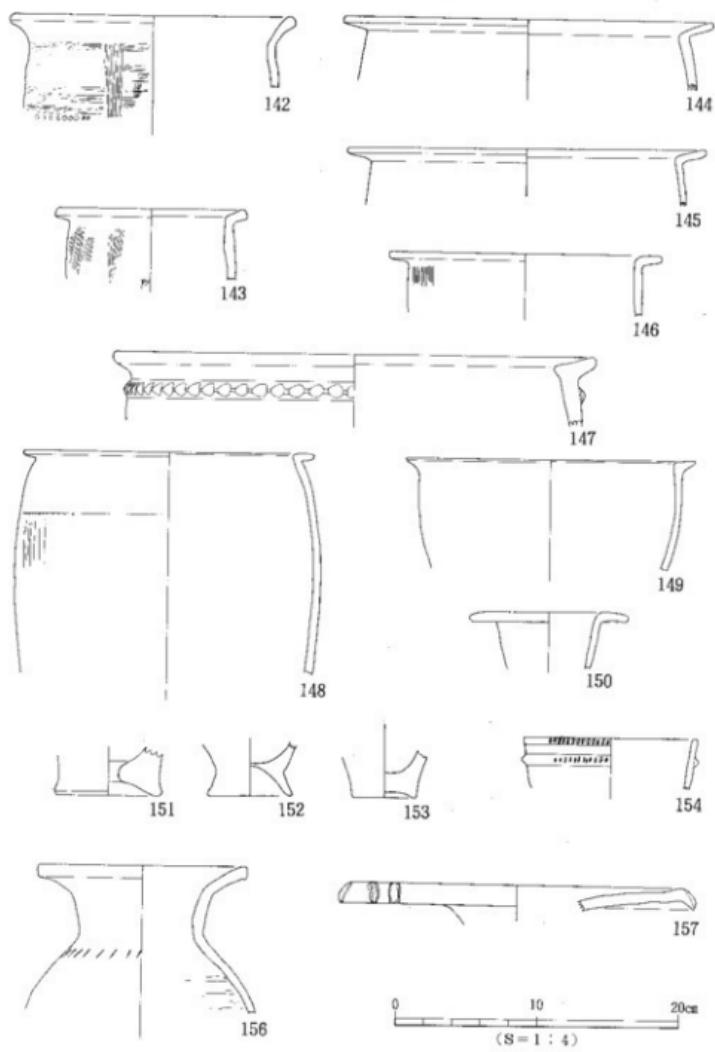


図-24 第2調査区出土土器(1)

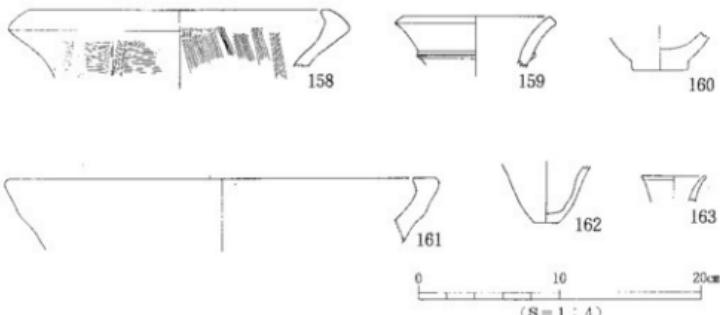


図-25 第2調査区出土土器12

第7土器群(図-24・25)

2区の包含層第5層灰色砂の上層、青灰色粘質土出上の土器を取り上げた。142から163である。142と143は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。142は、口縁端部が肥厚され丸みをもつもので、外面に横位の刷毛目調整の後、縦位の刷毛目調整を施している。143は、器厚がやや厚く、口縁端部がやや丸みをおびた面をなす。

144から146と148は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。いずれも口縁端部が丸みを持つものである。148の胴部上位には沈線文を1条持つ。

147は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部で、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。口縁内方はやや突出し丸みを持つものである。

149は、口縁が断面逆「L」字状の鉢の口縁部から頸部で、胴部が椀状にやや内湾するものである。口縁部が三角形状で端部が尖っている。

150は、口縁が断面逆「L」字状の小型鉢の口縁部で、口縁端部が大きく開がるものである。

151から153は、上げ底の壺の底部である。151は焼成後穿孔が穿たれている。

154は、無頸の小型鉢である。口縁直下に断面「かまぼこ」状の突帯を1条持つ。この突帯と口縁端部に刻み目を施している。

156は、頸部が「コ」の字状を呈し、口縁部が短く外反する唇である。頸部直下に斜行文の列点文を施している。

157は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、口縁端部下方を拡張しやや垂下させた壺の口縁部である。口縁端面に円形浮文を貼り付けている。

158は、口縁が「漏斗」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させ、口縁外面に横位の刷毛目調整の後、意識して等間隔に縦位の刷毛目調整を施している。

159は、口縁が「ラッパ」状に開がる小壺壺の口縁部で、頸部に断面三角形突帯を1条持つ。

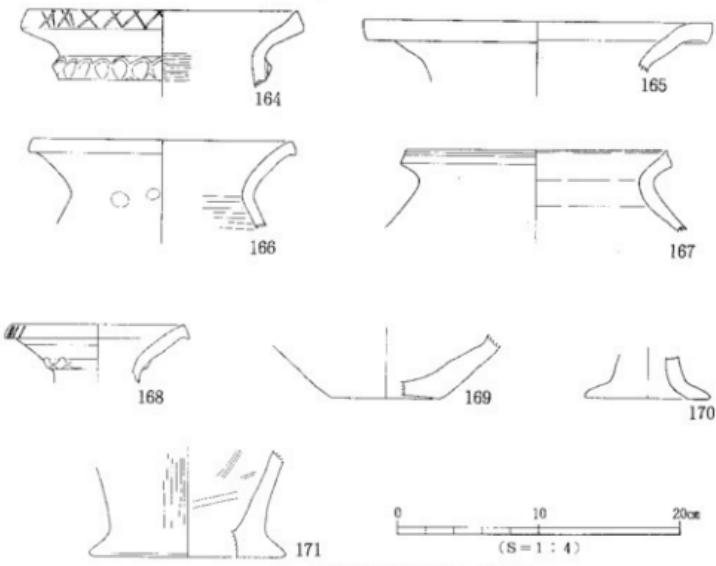


図-26 第2調査区出土土器(3)

161は、杯部が椀形に内湾し、口縁端部内方が肥厚する高杯の杯部である。

162と163は、ミニチュア土器である。162が鉢形。163が壺形である。

第8土器群(図-26)

2区の包含層第5層灰色砂の下層、青灰色砂出土の土器を取り上げた。164から171である。

164は、口縁が「朝顔」状に開がり、頸部が短い壺の口縁部である。口縁端部上方が肥厚され、端面には格子文が施されている。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

165は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚されている。口縁部上面は平坦面で、稜を持つ。

166と167は、口縁部が短く外傾し、頸部が「く」の字状を呈する壺の口縁部である。167は、口縁端部上方はつまみ上げられ、端面には、四線文が2条施されている。

168は、口縁が「漏斗」状に開がる小型壺の口縁部である。口縁端部下方は、やや肥厚され、端面に刻み目を持つ。頸部には、斜格子文を持つ断面「かまぼこ」状の突帯を1条持つ。

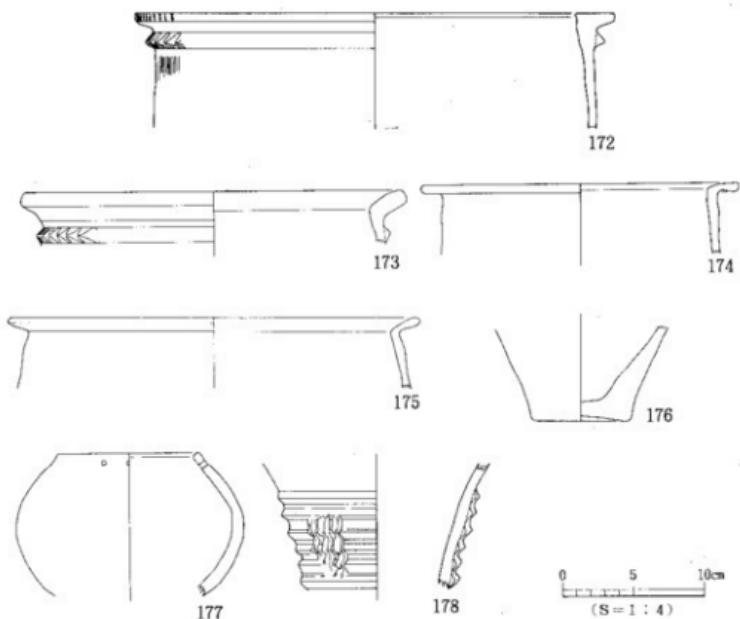


図-27 第2調査区出土土器(4)

170は、低脚の小型高杯の脚部である。端部は、屈曲をもち開がる。

171は、ジョッキ形土器の底部である。底部は平底で、大きな突出部を持つ。

第9土器群(図-27)

2区の包含層第5層灰色砂の下層、青色砂出土の土器を取り上げた。172から178である。

172は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。口唇部には、刻み目を施す。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

173は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部で、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

174は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。頸部外側は、ややくぼんでいる。

175は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。口縁部上方がやや肥厚されている。

177は、胴部が強く張り、口縁端部が丸くおさめられる無頸の壺である。口縁直下に円孔が穿たれている。

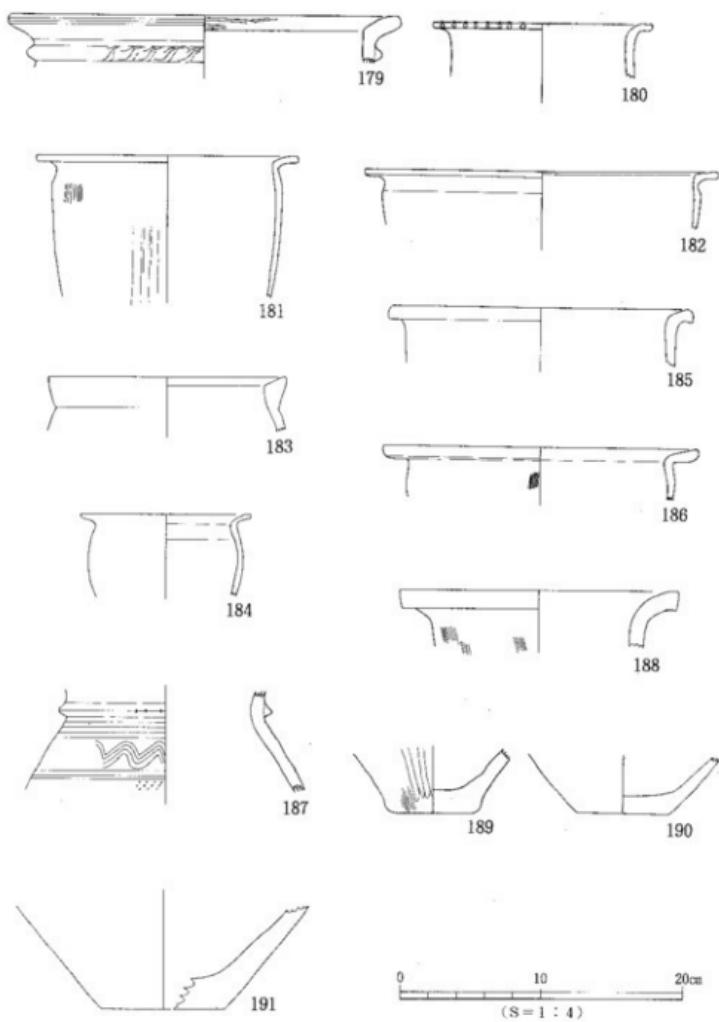


図-28 第2調査区出土土器19

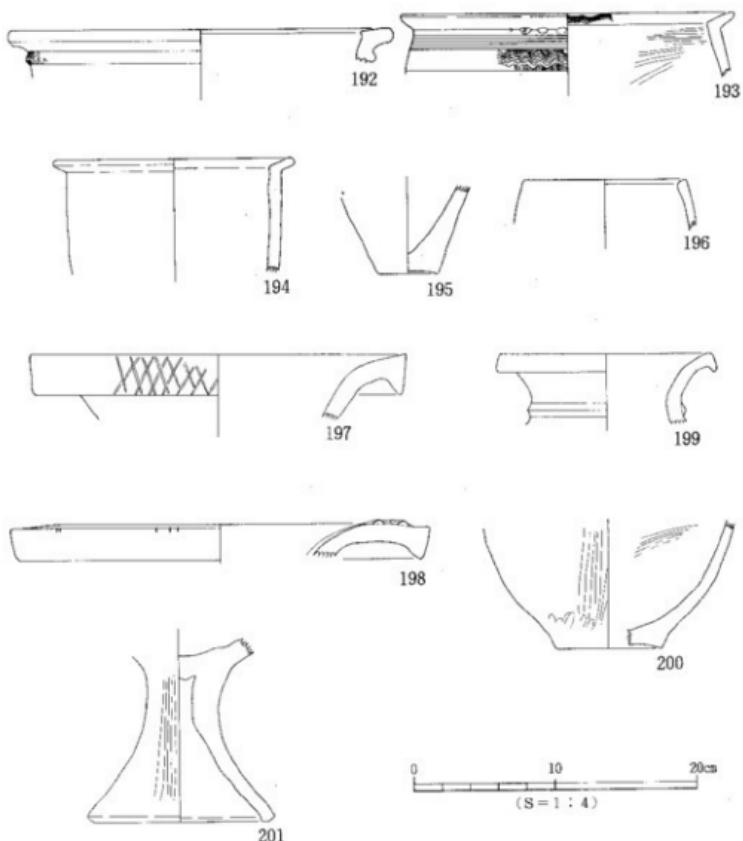


図-29 第2調査区出土土器06

178は、口縁が開かる壺の頸部である。頸部に断面三角形の突帯を6条持つ。この突帯に直交させ、粘土紐が3条貼りつけられている。

第10土器群(図-28・29)

2区の包含層第6層黒灰色砂出土の土器を取り上げた。179から201である。

179から191は、第10土器群の内、上層出土である。

179は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。口縁端面に凹線文が2条施されている。頸部には、断面「かまぼこ」状の突帯が1条つく。この突帯には、斜行の指頭圧痕が施されている。

180から182、185、186は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。180の口縁部は、刻み目が施されている。

183は、口縁端部外方が肥厚された断面三角形の壺の口縁部である。

184は、口縁が断面「く」の字状の小型壺の口縁部から胴部にかけてである。

187は、頸部に断面三角形の突帯を持つ、壺の頸部から胴部にかけてである。

胴部上位に沈線4条の波状文が、この波状文の上方に4条の沈線文、下方に3条の沈線文が施されている。

又、下方の沈線文の下には、斜行の刺突文が施されている。

188は、口縁部がやや短く外反する壺の口縁部である。口縁端部下方がやや肥厚されている。

192から201は、第10土器群の内、下層出土である。

192は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部で、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

193は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。胴部には、不規則な沈線8条の波状文が、この波状文の上方に6条の沈線文が、下方に1条の沈線文が施されている。頸部外面には、指頭圧痕が施されている。

194は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。

196は、胴部が強く張り、口縁端部が単純に終わる無頸壺の口縁部である。

197は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚し垂下している。口縁端部には、斜格子文が施されている。

198は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部上下方が肥厚され、口縁端部が下方に下がる。口縁部に刻み目を施す。口縁部上面には、円形浮文が貼付けられている。

199は、口縁部が開がり、頸部が短い壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚されている。頸部に断面三角形の突帯を1条持つ。

201は、高脚の高杯の脚部である。やや端部に向け広がっている。

第11土器群（図-30）

2区の包含層第6層の下層、青灰色粘質砂川土の土器を取り上げた。202から207である。

202から204は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。

206は、口縁部が単純な無頸の鉢の口縁部である。口縁端部は、凹線文状の沈線文を持つ。

207は、杯部が椀形に内湾し、口縁端部外方が肥厚された高杯の杯部である。口縁部には、円孔が穿たれている。

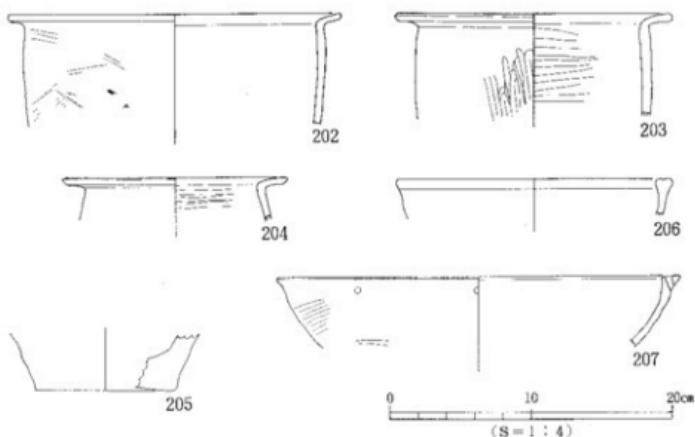


図-30 第2調査区出土土器⑦

第12上器群（図-31）

2区の包含層第7層砂レキ出土の土器を取り上げた。208から213である。

208と209は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。210は、上げ底の壺の底部である。

211は、口縁部がやや短く外反する小型壺の口縁部である。口縁端部は、肥厚している。

212は、頸部が「コ」の字状になる壺の頸部である。頸部に、断面三角形の突帯を3条持つ。

213は、やや上げ底の壺の底部である。

第13上器群（図-32～34）

2区の包含層の内、茶褐色砂レキ上層出土の上器を取り上げた。この堆積層は、2区の東側の堆積層で、丸山川の氾濫により堆積した層である。214から267である。

214から223は、突出部を持つ壺の底部である。この内、220は、鉢の底部である。

上げ底のものが、214から217である。やや上げ底のものが218、219、222である。平底が221、223である。217の胴部下方には、焼成前に貫通していない穿孔が穿たれている。

225は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させ垂下している。口縁端部には、斜格子文が施されている。

226から229は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。

226は、口縁端部下方を肥厚し、口縁端部を丸くおさめている。227は、口縁端部上方を肥厚させ、

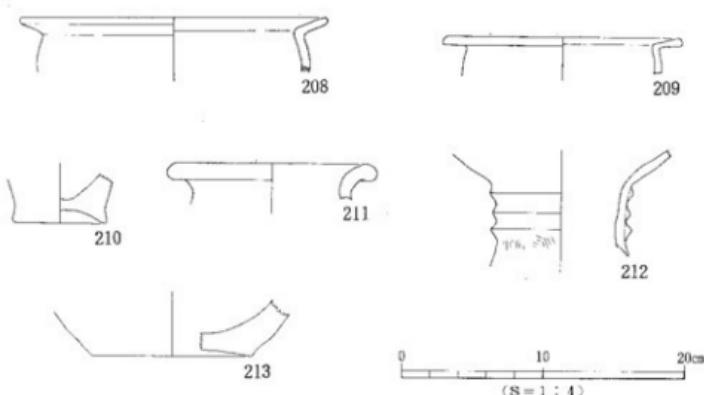


図-31 第2調査区出土土器

ややつまみ上げ状になっている。228は、口縁端部上下方を肥厚させ、特に上方を拡張している。229は、口縁端部上下方を肥厚させ、口縁端部に凹線文を1条施されている。

230は、口縁が「ラッパ」状に大きく開がる壺の口縁部で、口縁外面に斜行の沈線文を施す。

231は、口縁部が肥厚し上面が平坦面をなす無頸の鉢の口縁部である。口唇部には、刻み目を施されている。刻目突帯文を4条巡らしている。

232は、口縁部がやや短く外反する小型壺の口縁部である。頸部に穿孔が穿たれている。

233は、複合口縁の壺の内傾した口縁部である。口縁端部外方はやや肥厚し、端部は丸くおさめられている。口縁部外面に平行線文と波状文を施している。

234は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。口唇部には、刻み目が施されている。頸部直下に沈線文を1条持つ。

235は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。刻目突帯文を1条持つ。突帯直下には、斜行のヘラ描列点文が施されている。

236と237は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部で、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

238から242、244は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。242は、口縁端部上方がやや肥厚されている。

245と246は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。

247と248は、口縁が断面「く」の字状で、変形の鉢の口縁部である。

247は、口縁部が単純な無頸の鉢の口縁部である。口縁部外方がやや肥厚されている。

249は、口縁が「ラッパ」状に大きく開がり、頸部がやや短い壺の頸部片である。頸部には、断面三角形の突帯が3条つく。うち1条には、指頭圧痕が施されている。

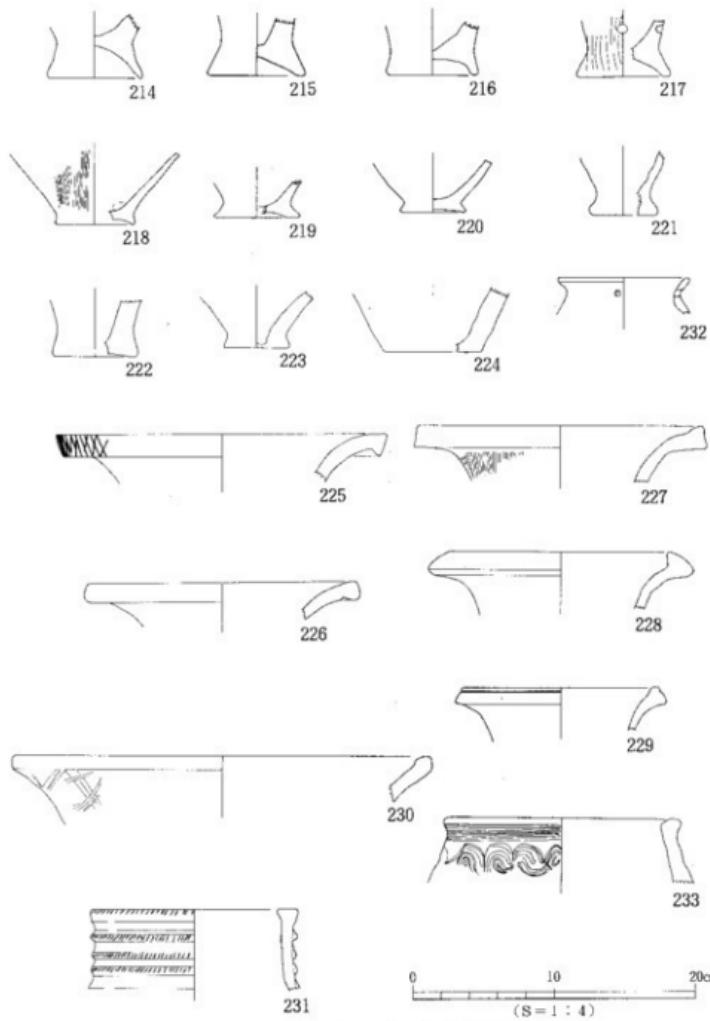


図-32 第2調査区出土土器⑨

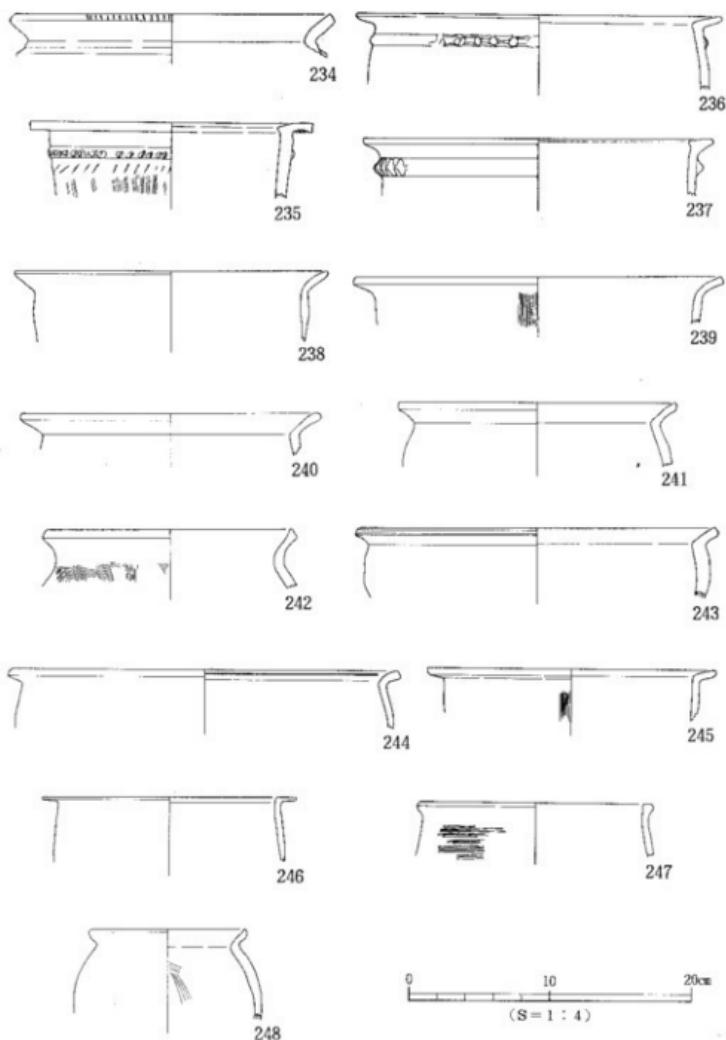


図-33 第2調査区出土土器20

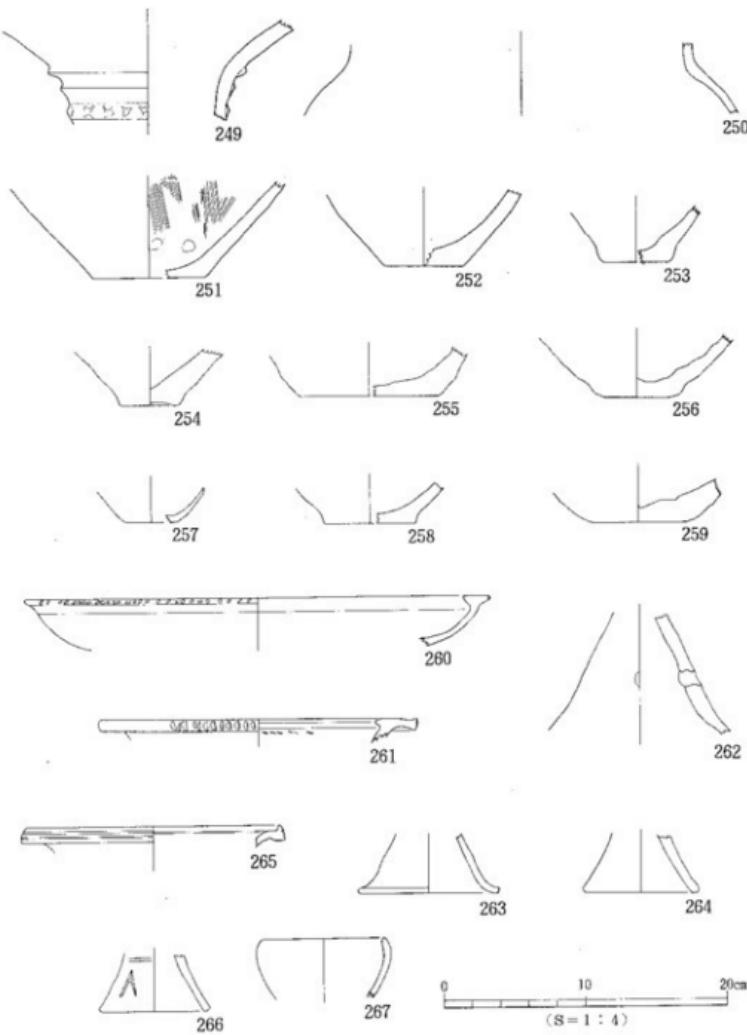


图-34 第2调查区出土土器(1)

250は、大型広口壺の頸部から胴部である。

252から259は、壺の底部である。254がやや上げ底である。

260と261及び265は、杯部が楕円形に内湾する高杯の杯部である。

260は、口縁部内外方を肥厚させ、口唇部に刻み目を施している。261は、口縁部が屈曲し開がるもので、口唇部に刻み目を施す。265は、口縁端部上方を肥厚させ面をなす、この端面には、凹線文が2条施されている。

262から264及び266は、高杯の脚部である。

262は、高脚で、端部がやや開がる。脚柱中位に円孔透かしを持つ。263、264、266は、低脚で端部がやや開がる。又、266には、脚柱に「矢羽根」形の文様を持つ。矢羽根は、器壁の中間で中止し、貫通していない。矢羽根の上方には、2条の平行沈線文が施されている。

267は、口縁部がやや内湾した無頸の小型鉢の口縁部である。

第14土器群（図-35）

2区の包含層内の、茶褐色砂下層出土の土器を取り上げた。268から285である。

268は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部で、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

269は、口縁が断面「く」の字状の楕円形の鉢の口縁部で、口縁端面に凹線文が2条施されている。

270から273は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。

277は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部に、2条の凹線文、口唇部に刻み目を施している。

278は、小型壺の頸部で、断面三角形の突帯を2条持つ。円孔が穿たれている。

279は、壺の頸部から胴部にかけてである。頸部に断面三角形の突帯を1条持つ。胴部には、平行線文と、斜格子文を施している。

280は、胴部があまり張らなく、口縁部が短く開がる壺の口縁部である。口縁端部には、沈線文が1条、頸部には、多条の沈線文が横位、縱位に施されている。

281は、複合口縁の壺の内傾した口縁部である。口縁端部直下に円孔が穿たれている。口縁部外面には、平行線文と波状文が施されている。

284は、口縁がやや外反する鉢の口縁部である。

285は、高脚で端部がやや開がる高杯の脚部である。

第15土器群（図-36）

2区の東端基底面直上層黒色粘質砂出土の土器を取り上げた。286から294である。

286は、口縁部がやや外反する鉢の口縁部である。

287から290は、壺の口縁部から胴部である。口縁断面が逆「L」字状のものが287と289、「く」の字状のものが290である。

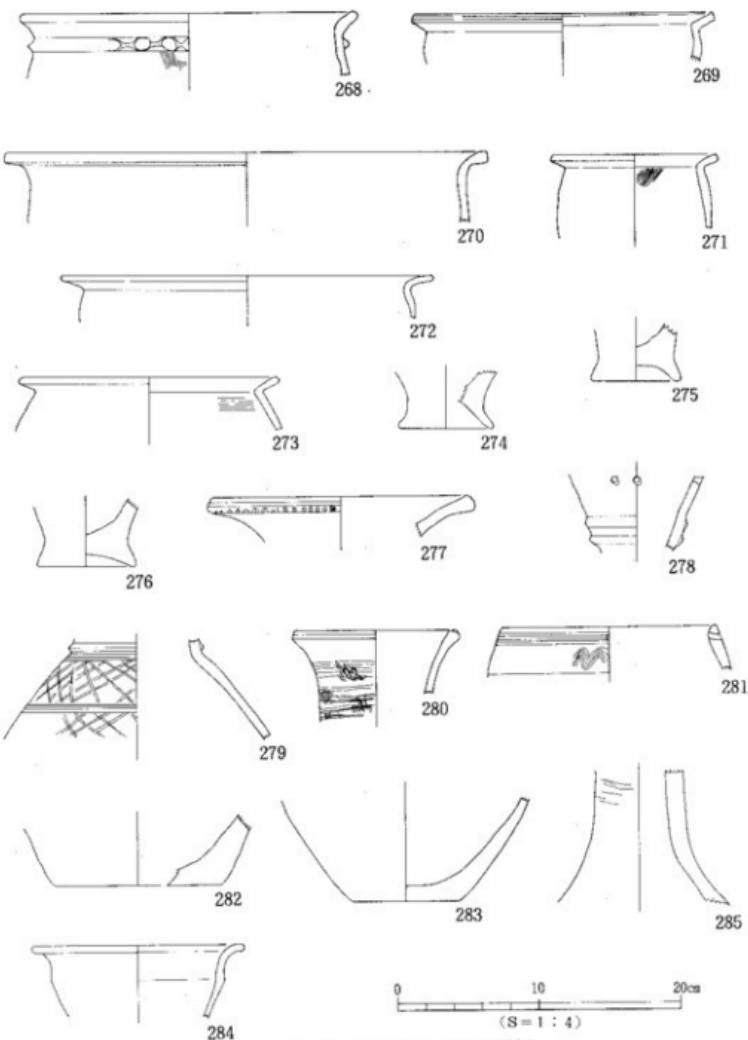


図-35 第2調査区出土土器(2)

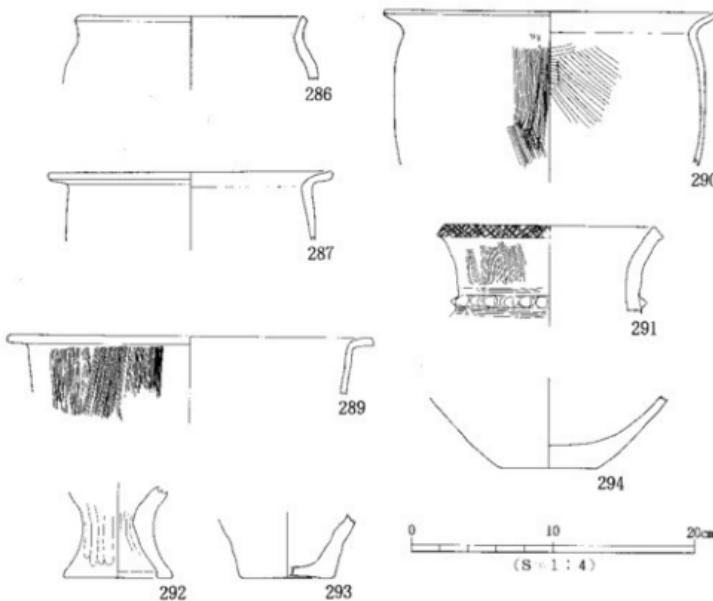


図-36 第2調査区出土土器28

291は、口縁部が短く外傾し、頸部が「く」の字状の壺の口縁部である。口縁端部は、平坦面をなす。この端面にこまかかな刺格子文を施している。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。
292は、低脚の高杯の脚部である。端部は平坦面をなしている。

第16土器群 (図-37~39)

2区南西のテラス下の上層出土の土器を取り上げた。295から340である。この内、暗青灰色・黒色粘質土が295から304。青灰色粘質土が306から340である。

295は、3条の沈線文を施した高杯の脚部である。

297は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。

298と299は、口縁部が開がり、口縁端部下方を肥厚させた壺の口縁部である。298の口唇部には、刻み目を施す。

303から305は、杯部が楕形に内湾する高杯の杯部である。

303は、口縁端部外方が肥厚し、端部に刻み目を持つ。304は、口縁端部外方が肥厚し、杯部内面に刷毛目による刻み目を施す。305は、口縁端部内方が肥厚された三角形状である。

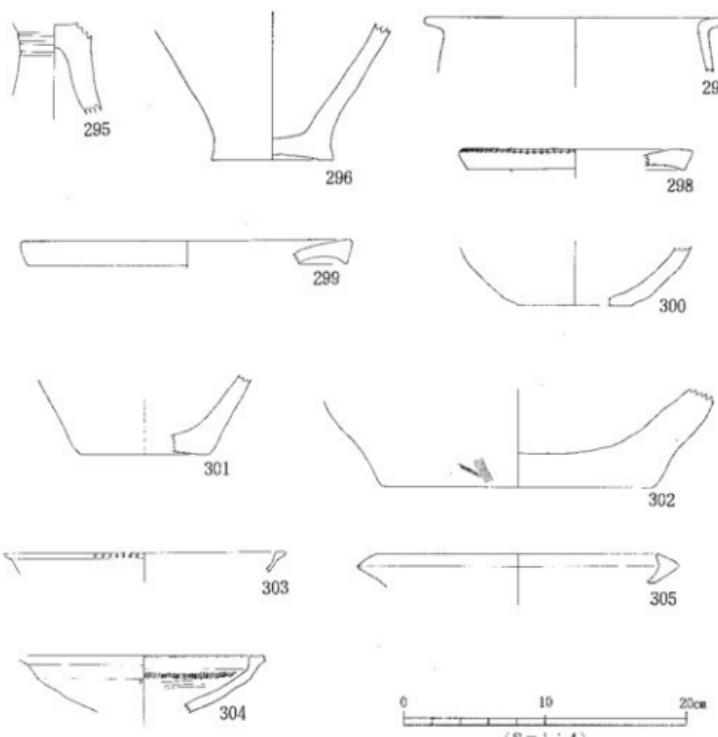


図-37 第2調査区出土土器24

306と307は、口縁が断面逆「L」字状で頸部に突帯を持つ甕の口縁部である。306には、口縁端部に刻み目、突帯に指頭圧痕が施されている。

308から313は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。310は口縁部が肥厚する。

308から313は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。310は口縁部が肥厚する。

314から321は、甕の底部である。314から319は、上げ底。320と321は、やや上げ底である。

322から331は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部から頸部である。

322から324は、口縁端部がやや記厚され、口唇部に刻み目が施す。

325と326は、口縁端部下方が肥厚され垂下している。口縁端部には斜格子文が施されている。

330は、頸部に断面三角形の突帯を5条持ち、突帯に直交させ粘土紐を3本貼ついている。

334から337は、高杯の杯部である。

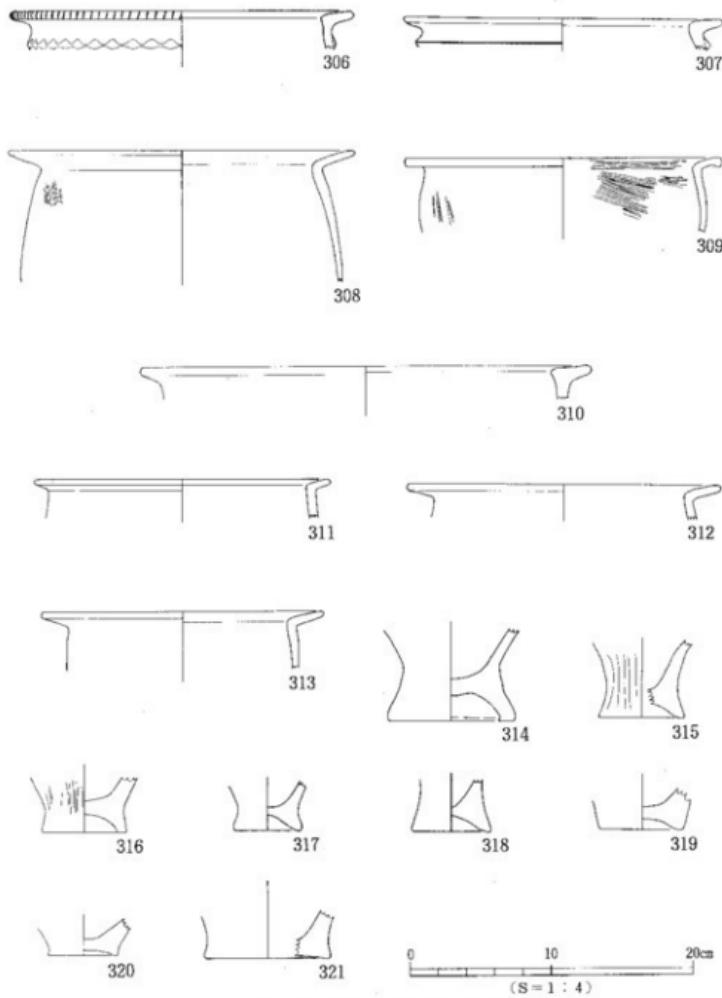


図-38 第2調査区出土土器29

334から336は、杯部が楕形に内湾するもので、口縁端部の肥厚は、334が内方、335が内外方、336が外方である。337は、杯部が直線的に外方に向かう。脚部は、柱状である。

339と340は、ジョッキ形土器の胴底部で、把手の接合は充填であり、底部に向け掘広がりである。

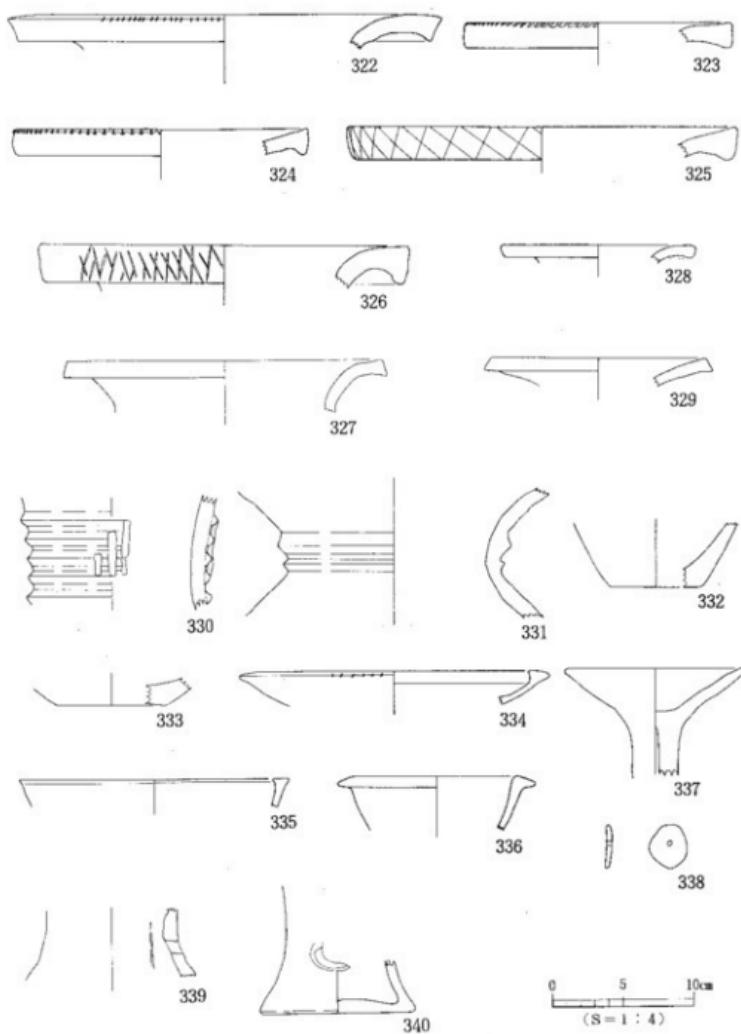


図-39 第2調査区出土土器26

第17土器群 (図-41・42)

2区南西チラス下の下層出土の土器を取り上げた。341から381である。この内、緑色灰砂が、341から345。青灰砂が346から381である。

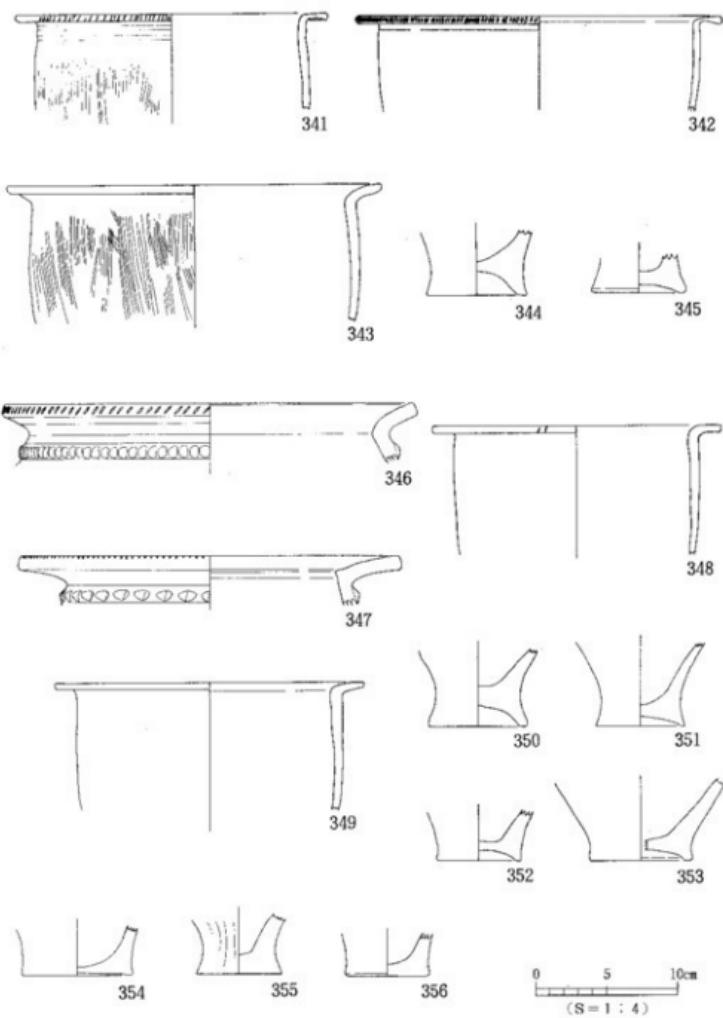


図-40 第2調査区出土土器27

341から343は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部から胴部である。341には、口縁端部に刻み目及び頸部に4条の沈線文。342には、口唇部に刻み目を施す。

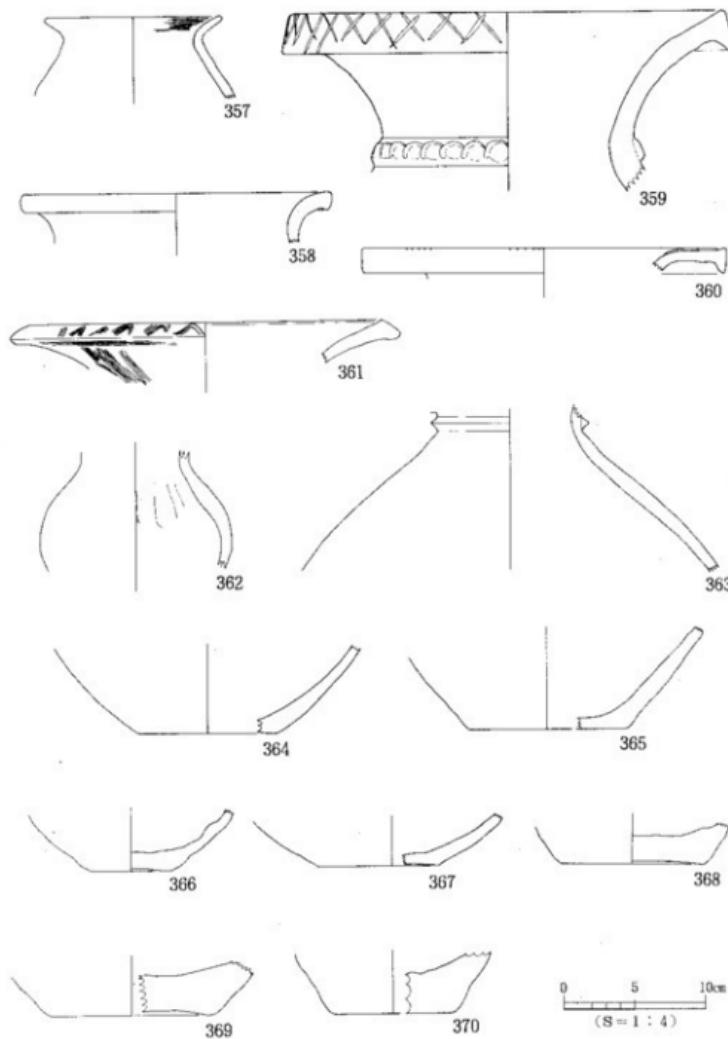


図-41 第2調査区出土土器

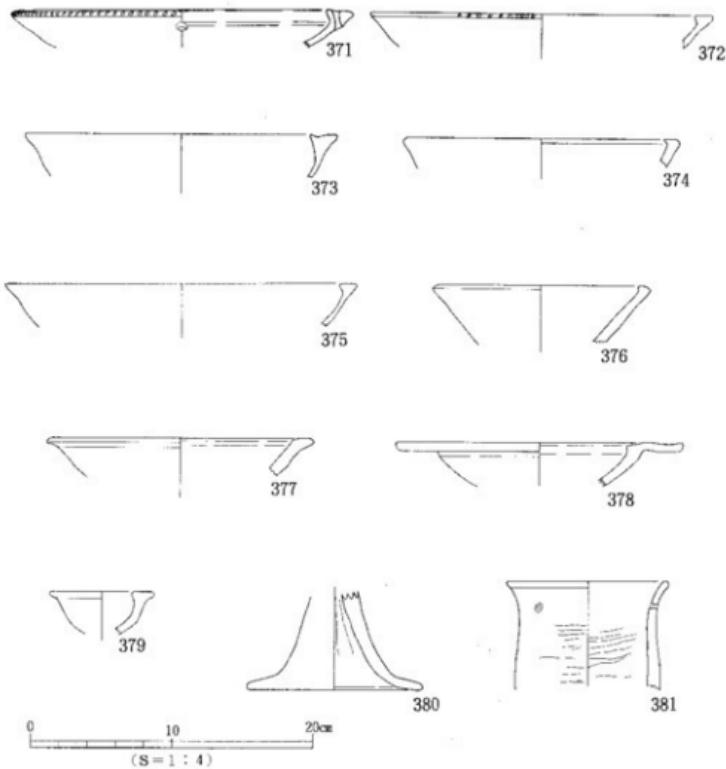


図-42 第2調査区出土土器(29)

346と347は、口縁が断面逆「L」字状で、指頭圧痕が施された突唇を持つ壺の口縁部である。

346の口縁端部には、斜行のヘラ描列点文を、347の口唇部に刻み目を施す。350から356は、突出

部を持つ壺の底部である。350から353は、上げ底。354は、やや上げ底。355と356は、平底である。

357は、口縁部が短く外反し、胴部があまり張らない壺の口縁部である。

358は、口縁部が短く外反し、やや胴部が張る壺の口縁部である。

359は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、頸部が短い壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚され垂下している。口縁端部には斜格子文を施す。頸部には、指頭圧痕が施された突唇を1条持つ。

360は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部で、口縁端部下方が肥厚され、垂下する。

361は、口縁が「ラッパ」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚され面をなす、口縁端面に沈線2条の波状文を施している。

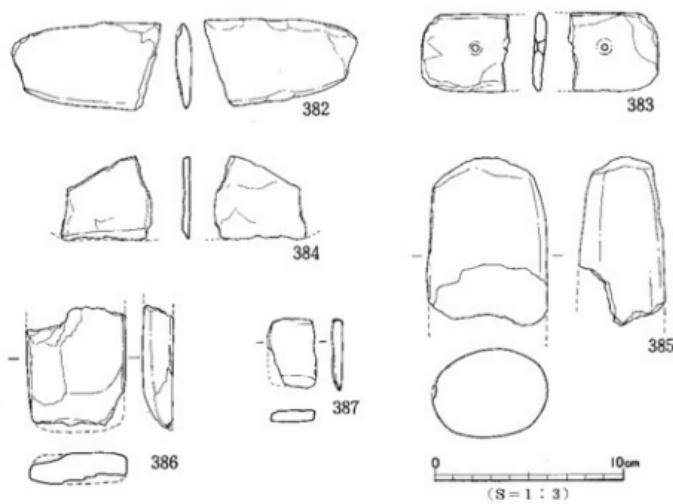


図-43 第2調査区出土石器

362と363は、肩部が張る壺の頸部から肩部である。363は、頸部に断面三角形の突帯を1条持つ。364から370は、壺の底部である。

371から379は、杯部が焼形に内溝する高杯の杯部である。

371から376は、口縁端部内方が肥厚するものである。371は、口縁端部に刻み目が施され、口縁部に円孔が穿たれている。372の口唇部に刻み目を施す。

377は、口縁端部外方が肥厚され、口縁端部が丸くおさめられている杯部である。

378は、口縁部が屈曲し開がる杯部である。

379は、口縁端部内外方が肥厚されたミニチュアの高杯である。

380は、低脚で、脚部下位に屈曲をもち開がる高杯の脚部である。

381は、口縁部がやや外反する鉢の口縁部から肩部である。口縁近くに円孔が穿たれている。

石器(図-43)

2区出土の石包丁片と石斧片を収録した。382から387である。

383は第16土器群と、384と387は第1土器群と、385は第17土器群と共に伴している。

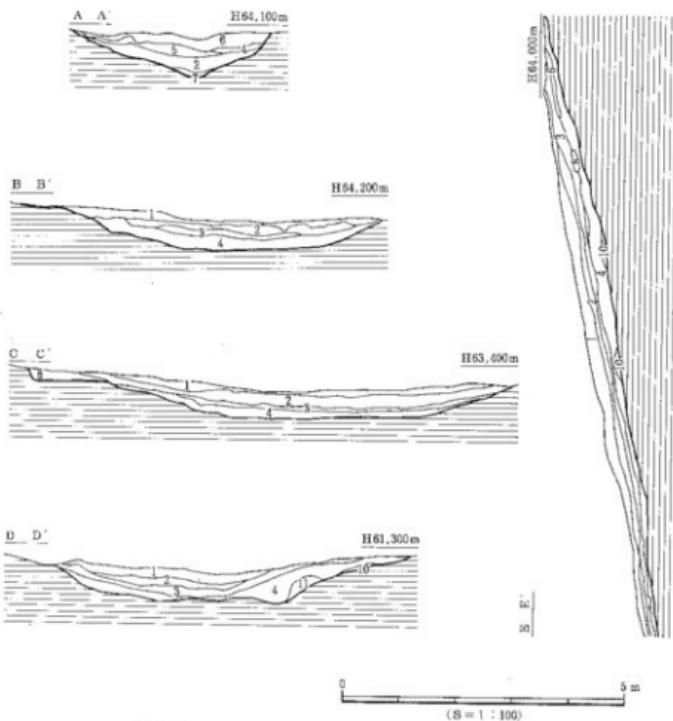
382から384は、石包丁片である。383が、直線刃長方形態。382が、直線刃半月形態。円孔が穿たれているのが、383である。385から387は、石斧片である。385は、大型始刃石斧片である。入念に研磨で仕上げられている。386と387は、扁平片刃石斧片である。

3 第3調査区

第3調査区は、調査対称区をほぼ中央、東西に横切る生活道路の南側に位置する。丁度、調査対称区の南西部である。廃土処理の関係で、ほぼ2分割して調査を行った。調査区西端部と南側の調査を行い、調査終了後に、北側の調査を行った。

3区中央東西に走る幅8~16m、深さ（最深部）1.6mを測る谷間を検出した。この谷間は、東端で広がり、やや南にふれている。この谷間には、多量の遺物が包蔵されていた。又、3区北西には、緩斜面を持つ。

3区全体は、西から東に下がる斜面で、標高61.0~53.4m、比高差7.6mを測る。3区の南側は、



層名称			
1 明褐色土	4 黄褐色上	7 茶褐色粘質土	10 鳞灰黄褐色上
2 暗褐色土	5 黄茶褐色土	8 明黄色土（レキ多し）	11 青灰褐色砂質土
3 黑色粘質土	6 青灰褐色土	9 黄褐色砂質土	

図-44 第3調査区土層断面図

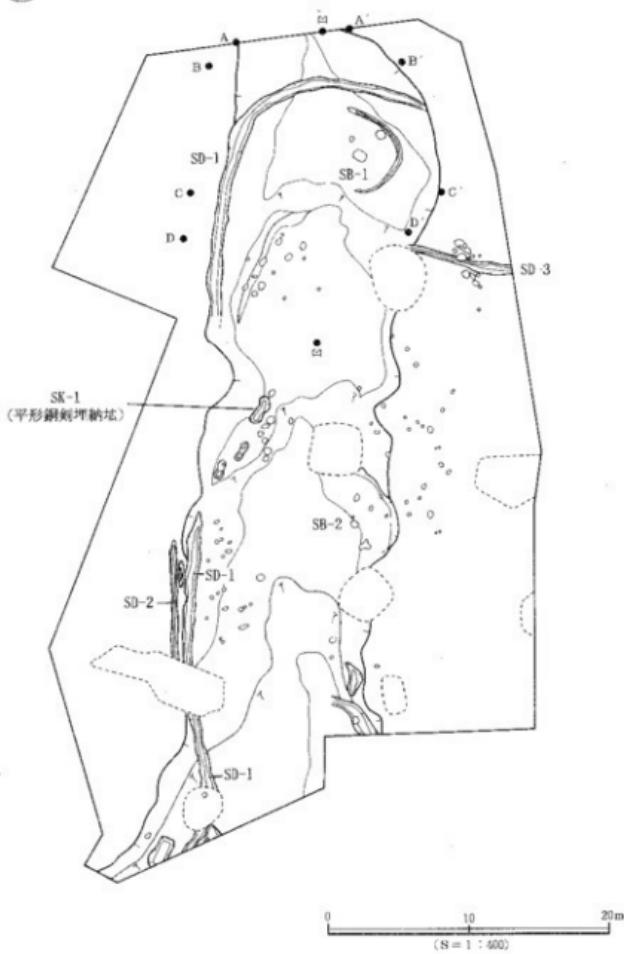


図-45 第3調査区構造配置図

調査対称区南後背地の分岐丘陵の、斜面裾部にあたる。丁度、東西に走る谷間南肩部が、傾斜変換点である。3区の谷間北から、生活道路、1区谷間南にかけては、1・3区の谷間に挟まれた低丘陵状を形成している。この低丘陵は、埋上状態から、調査前の造成及び生活道路建設等の為、旧状をとどめていない。3区を、南北に3分割すると、南が斜面部、中央が遺物が包蔵する谷間部、北の谷間がわが緩斜面、北端が造成による削平を受け、遺構及び遺物包含層が希薄であった。

3区では、造成等の関係で遺物を包蔵する谷間を除き、表土下は、遺構検出面であった。谷間の基本土層堆積は、第1層表土、第2層茶褐色土、第3層暗茶褐色土、第4層黒色粘質土、第5層暗青灰黃褐色土、第6層灰黃褐色土、第7層青灰粘土及び茶褐色砂、第8層地山（黄色和泉砂岩）であった。この内、第2層から第4層にかけては、弥生時代中期中葉から後葉、第5層から第7層にかけては、弥生時代中期中葉の遺物包含層であった。谷間の遺物包含層であったが、遺物の出土状況は、安定していた。

検出遺構としては、3区全体から、平形銅劍埋納壙1基、竪穴住居跡2棟、土壙6基、溝5条、棚状遺構2条、ピット93基、焼土面1カ所を検出した。

遺構は、谷間部南北肩部、谷間内西端テラス上、谷間北側中央の緩斜面からの検出である。

平形銅劍埋納壙は、3区南側中央やや西よりの、谷間肩部からの検出である。この埋納壙からは、平形銅劍が一振出土している。詳細は、後述する（第4章 祝谷八丁場出土の平形銅劍）。

竪穴住居跡は、2棟とも谷間内の検出である。SB-1は、谷間内西端部のテラス上平抑面北側から検出した。斜面側北西にかけて、幅30cm前後、深さ25cm前後を測る溝を巡らしている。平面プランは、この溝から、長軸を北東にとる推定5mを測る長椭円形プランと思われる。床面上北東より検出した土壤は、土壤内埋土から灰の搔き出しが認められ、炉跡と思われる。廃絶時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉である。

SB-2は、谷間内中央東よりの谷間北側肩部からの検出した。この住居跡は、谷間肩部を掘りこんでいる。谷側半分以上は検出してない。北側の壁のプランから、推定径6mのやや大きめの円形プランを呈する。廃絶時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉である。

溝の内、SD-1は、谷間南肩部と谷間西で横切り「L」字状に走る。検出は、谷間西端近くの北側肩部から、やや湾曲しつつ、丁度谷間を横切る状況で南側肩部まで延び、肩部で変換し、谷間南側肩部沿いに3区東端まで検出している。幅1m前後、深さ50cmを測る溝で、谷間包含層第4層黒色粘質土上面からの掘り込みである。埋土は、第4層より粘性が強く、黒味が強い黒色粘質土であった。廃絶時期は、出土土器及び埋土から弥生時代中期中葉から後期である。

ピットは、計4群に分けられる。3区北側の緩斜面には、西のSD-3の周辺と中央のSB-2北西の2群。谷間基底面の中央西よりと東よりの2群である。廃絶時期は、埋土と出土遺物から弥生時代中期中葉から後葉にかけてである。

棚状遺構は、谷間基底面西側から、2条ほぼ平行で検出した。

焼土面は、3区南側中央東より、谷間近くの傾斜がなだらかになった緩斜面に位置する。径30cm、

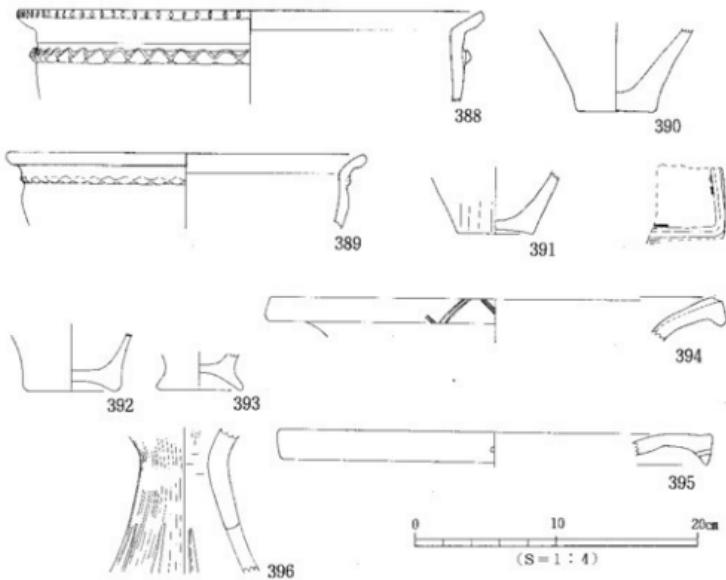


図-46 第3調査区出土土器(1)

厚さ5cmの範囲であった。

出土遺構は、3区全体から、上・石器を含め収納箱で約300箱出土した。弥生時代中期中葉から近世にかけてである。ほとんどが、弥生時代中期中葉から後葉であった。

今回の報告書1には、平形銅劍埋納壙、谷間内西側の土器の一部、分銅形土製品、石包丁片、石斧片を収録した。次回の報告書2には、遺構・土器の全て、土製品、石包丁片・石斧片以外の石器類を収録する予定である。

遺物

ここでは、第3調査区の谷間内西側、包含層出土の土器の一部を収録している。堆積層が厚く、分層が明確なグリットを選んだ。S4-W9、S4-W10グリットである。

他に、実測可能な石包丁片、石斧片を収録した。

土器は、層ごとに分けた。堆積土上層の茶褐色土出土の土器を、第1土器群として、基底面直上層を第7土器群とした。以下、上器、石器の順で述べることとする。

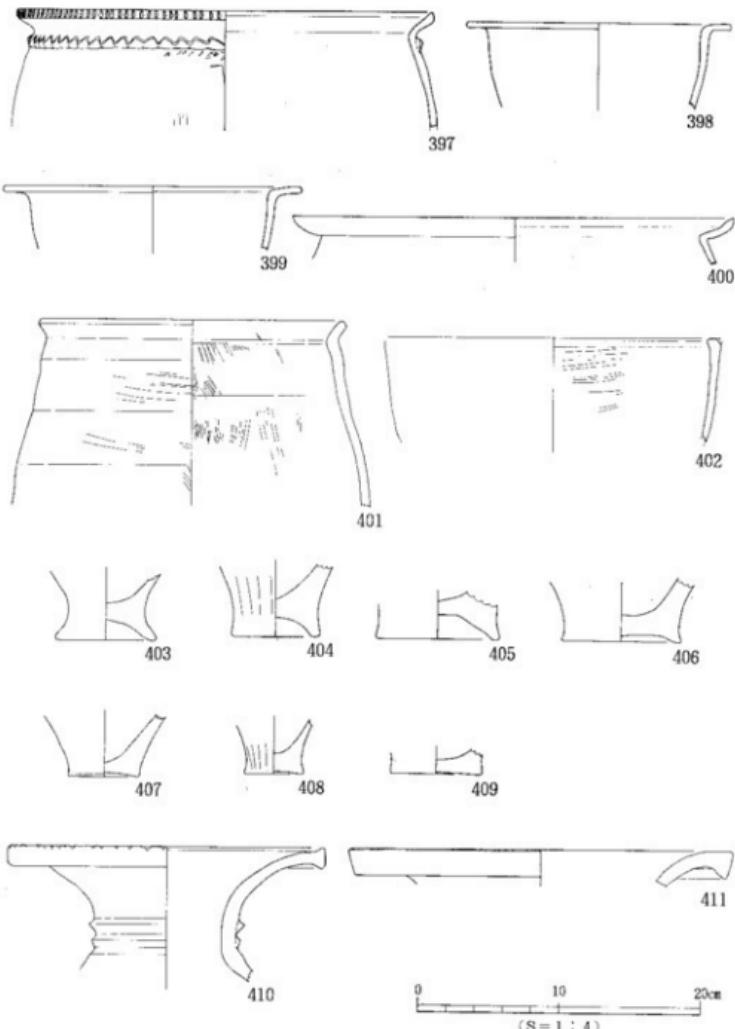


図-47 第3調査区出土土器(2)

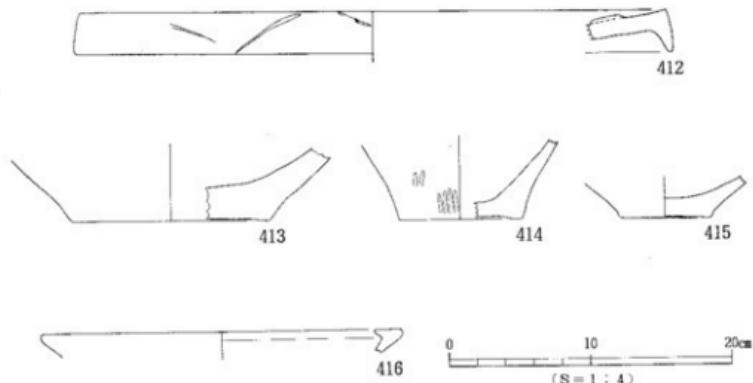


図-48 第3調査区出土土器(3)

第1土器群(図-46)

3区谷間の包含層、第2層茶褐色土出土の土器を取り上げた。388から396である。

388は、口縁が断面「く」の字状の甕の口縁部である。口唇部に刻み目が施されている。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

389は、口縁が断面「く」の字状の鉢の口縁部である。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

390から393は、甕の底部である。390が、平底。391がやや上げ底。392、393が上げ底である。

394は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させ下垂し、口縁端部には、沈線2条の「ハ」の字状文が施されている。口縁内面には、断面三角形の突帯文を持つ。

395は、口縁が大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させ下垂している。この肥厚された口縁部に、円孔が穿たれている。

396は高脚の、高杯の脚部である。脚柱に細長い透かしが穿たれている。

第2土器群(図-47・48)

3区の谷間の包含層、第3層暗茶褐色土出土の土器を取り上げた。397から416である。

397は、口縁が断面「く」の字状の甕の口縁部である。口唇部には、刻み目が施され、頸部に指頭圧痕がやや斜めに施された突帯を1条持つ。

398から400は、口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。400の口縁端部は、つまみあげられている。

401と402は大型の鉢の口縁から胴部である。401は断面「く」の字状口縁。402は口縁端部がやや

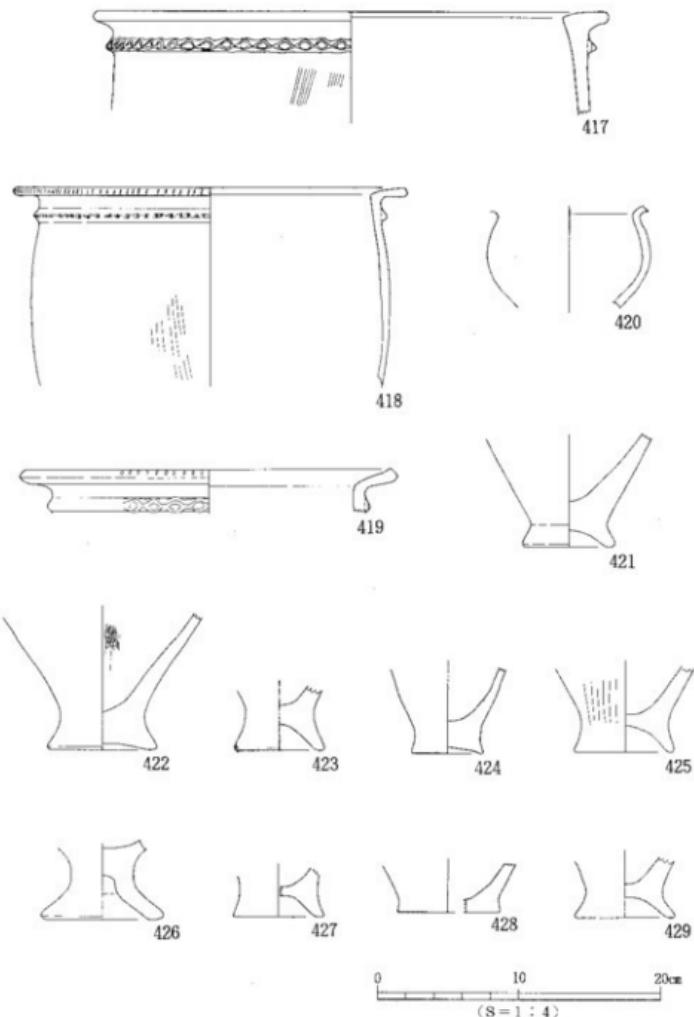


図-49 第3調査区出土土器(4)

肥厚されている。

403から409は壺の底部である。403から405が上げ底、406から408がやや上げ底、409が平底である。

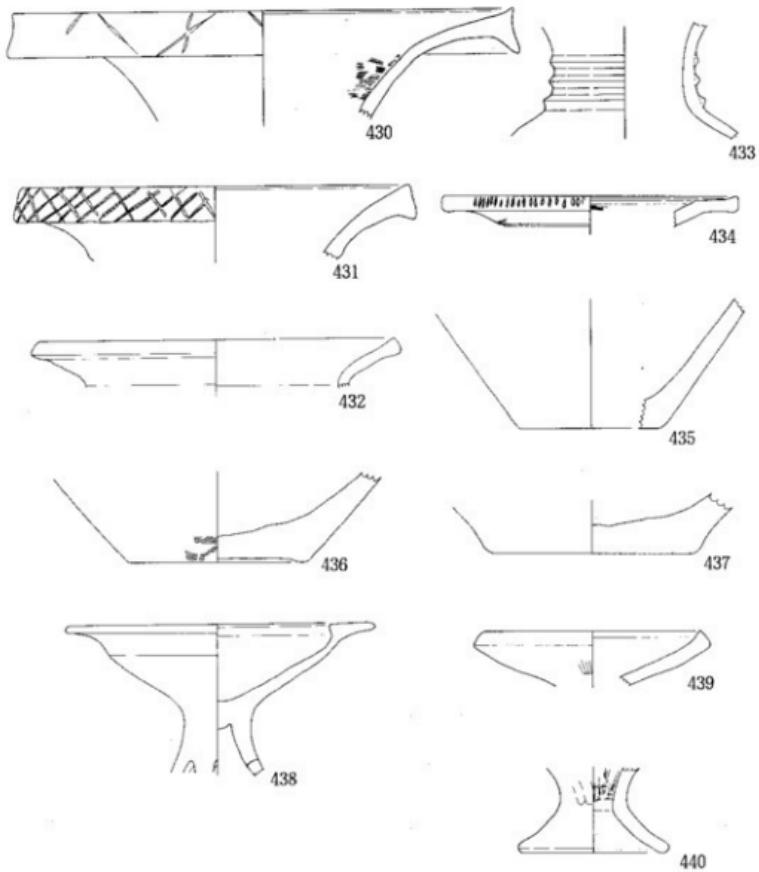


図-50 第3調査区出土土器(5)

410から412は、口縁部が大きく開がる壺の口縁部である。410は、口縁端部上下方を肥厚させ、口唇部に刻み目を施す。頸部には、断面三角形の突帯を3条持つ。411と412は、口縁端部下方を肥厚させ重下している。412は、口縁端面に「ハ」の字状文を施し、口縁部上面に円形浮文を貼付けている。

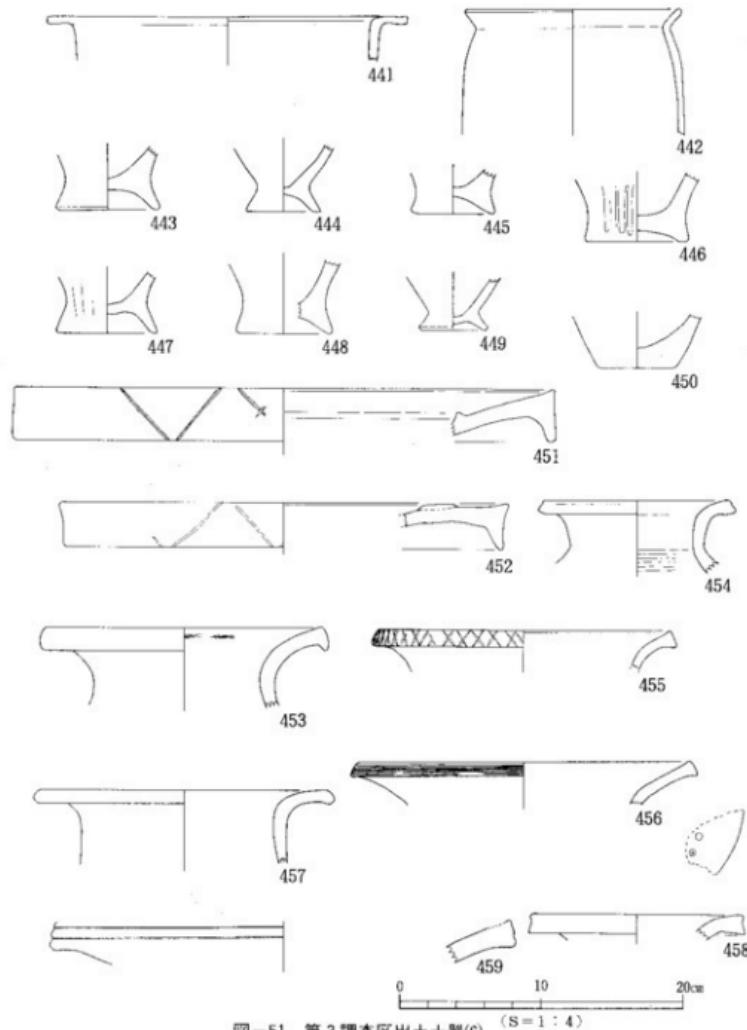


図-51 第3調査区出土土器(6)

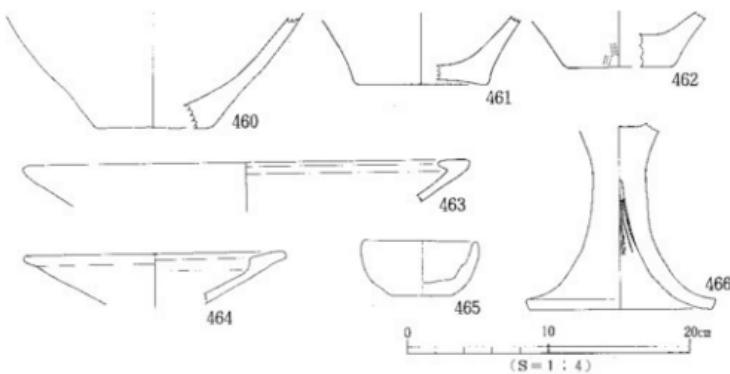


図-52 第3調査区出土土器(7)

413から415は、壺の底部である。

416は、口縁内方を肥厚させた高杯の杯部である。

第3土器群(図-49・50)

3区谷間の包含層、第4層の上層に当たる暗茶褐色黑色土出土の土器を取り上げた。417から440である。

417から419は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に突帯を持つ壺の口縁部から胴部である。

417の突帯には指頭圧痕が、418の突帯と口縁端部に刻み目が、419の突帯には指頭圧痕、口唇部に刻み目が施されている。

420は、口縁が断面「く」の字状で、やや胴部が張る鉢の頸部から胴部である。

421から425、427から429は、突出部を持つ壺の底部である。421、423、425、427、429が上げ底。422、424がやや上げ底。428が平底である。

426は、低脚の端部が開がる高杯の脚部である。

430は、口縁端部下方が肥厚され垂下している。口縁端面には、「ハ」の字状文が施されている。

431は、口縁端部下方が肥厚され、口縁端面に斜格子文を施した壺の口縁部である。

432は、口縁が「タッパ」状に開がる壺の口縁部である。頸部に断面三角形の突帯を3条持つ。

434は、口唇部に刻み目、頸部に沈線文を施した壺の口縁部である。

435から437は、壺の底である。436がやや上げ底になっている。

438は、口縁端部内方を肥厚させ、口縁部上面が平坦面をなす。脚部はやや開がり、脚柱にやや丸みがある三角形状の透しを持つ高杯である。

439は、口縁部内方がやや肥厚した高杯の杯部である。

440は、低脚の端部が開がる高杯の脚部である。

第4土器群(図-51・52)

3区谷間の包含層、第4層黒色粘質土出土の土器を取り上げた。441から466である。

441と442は、壺の口縁部である。口縁断面は、441が逆「L」字状、442が「く」の字状である。

443から450は、壺の底部である。450以外は、突出部を持つ上部底である。

451と452は、口縁部が大きく開がり、口縁端部下方を拡張し垂下させた壺の口縁部である。

口縁端部には、「ハ」の字状文が施されている。451の口縁部上面には突帯を持つ。452の口縁部上面には円形浮文を持つ。

453、454、457、458は、口縁部がやや短く外反し、口縁端部が単純に終わる壺の口縁部である。

458には、口縁部上面に円形刺突文を持つ。

455、456、459は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部に、455には、斜格子文が、456には細い沈線文が、459には、2条の凹線文が施されている。

460から462は、壺の底部である。

463と464は、口縁部内方が肥厚された高杯の杯部である。463の口縁部断面は、三角形状である。

466は、高脚の端部が開がる高杯の脚部である。

465は、口縁端部が丸くおさめられた小型鉢である。

第5土器群(図-53~55)

3区谷間の包含層、第5層暗青灰黄褐色土出土の土器を取り上げた。467から509である。

467と468は、口縁が断面「く」の字状の、頸部に突帯を1条持つ壺の口縁部である。467の突帯には、粗い指頭圧痕が施されている。468の突帯は、断面三角形である。

469と470は、口縁が断面逆「L」字状の、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ壺の口縁部である。

471から475は、口縁が断面「く」の字状で、突帯を持たない壺の口縁部である。いずれも口縁端部は、丸くおさめられている。

476と477は、口縁が断面逆「L」字状、突帯を持たない壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。

478から484は、壺の底部である。484は上部底の底部で、焼成後円孔が穿たれている。481は径が小さい平底の底部である。他は、やや上部底の底部である。

485は、口縁が「漏斗」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部上方をわずかに肥厚させ

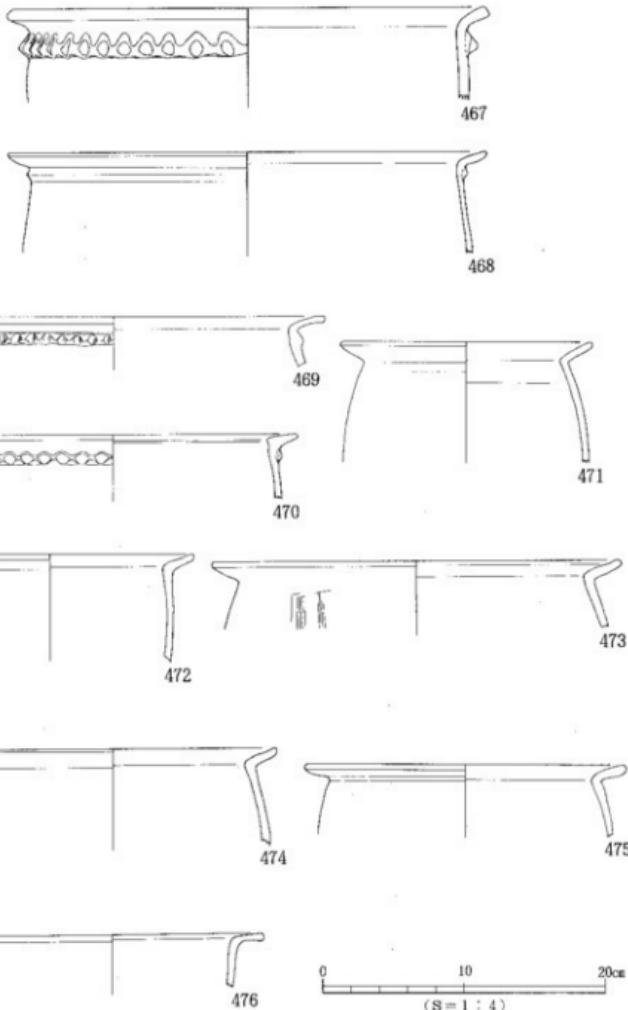


図-53 第3調査区出土土器(8)

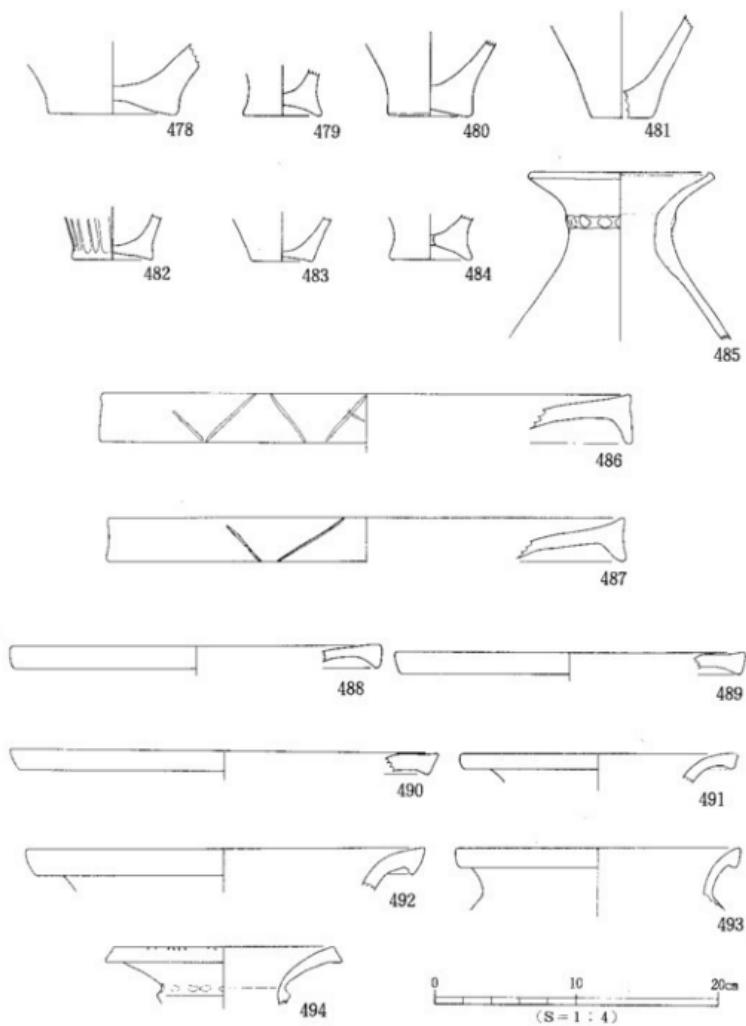


図-54 第3調査区出土土器(9)

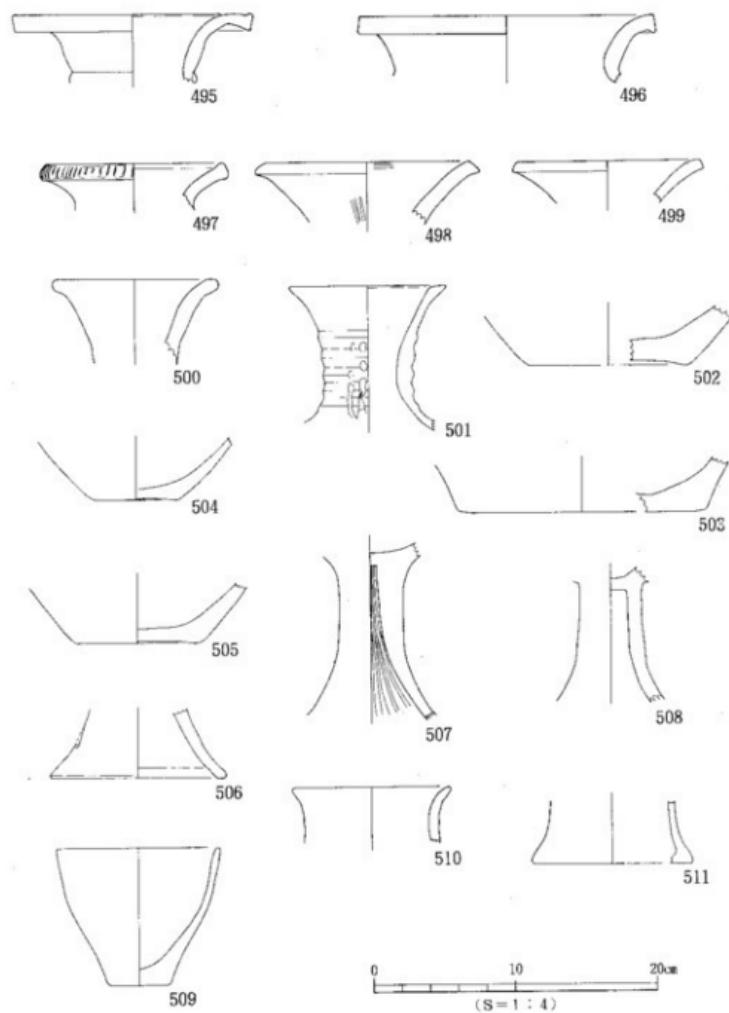


図-55 第3調査区出土土器10

る。頸部には、指頭圧痕が施された薄い突帯を1条持つ。

486と487は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、口縁端部下方を拡張し垂下させる壺の口縁部である。口縁端部に「ハ」の字状文が施されている。

488から491は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、口縁端部がやや肥厚される壺の口縁部である。

492と493は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、頸部がやや短い壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させる。

494は、口縁が「漏斗」状に大きく開がる、頸部が短い壺の口縁部である。口縁端部が肥厚され、口唇部に刻み目が施されている。頸部に断面二角形の突帯を1条持つ。この突帯上方に指頭圧痕が施されている。

495は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部上下方が肥厚されている。頸部に断面「かまぼこ」形の突帯を1条持つ。

496は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、頸部が短い壺の口縁部である。

497から499は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。497の口縁端部には、指頭圧痕が施されている。

500と501は、口縁が「朝顔」状に開がる長頸壺の口縁部である。500は、口縁端部が丸くおさめられている。501は、口縁端部がやや尖り気味である。頸部に断面「かまぼこ」形の突帯を5条持つ、この突帯に直交し粘土紐が2条貼つけられている。

502から505は、壺の底部である。

506は、低脚の端部がやや開がった高杯の脚部である。「矢羽根」透しが施されている。

507と508は、高脚の高杯の脚部である。脚部上位は筒状で、下位で開がる。

509は、口縁部が直口の小型鉢である。

510は、口縁が「く」の字状口縁の鉢の口縁部である。

511は、ショッキ形土器の底部である。底部は平底で、肥厚し突出部を持つ。

第6 土器群（図-56～60）

3区画間の包含層、第6層灰黄褐色土出土の土器を取り上げた。512から582である。

512から517は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に突帯を持つ壺の口縁部である。

512は、突帯を2条持つ。口唇部と上段の突帯に刻み目を、下段の突帯に指頭圧痕を施す。

513から515と517には、口唇部に刻み目を、突帯に指頭圧痕を施す。515の圧痕は、強めである。

516は、口縁部が肥厚され、突帯に指頭圧痕を施す。

518は、口縁が断面逆「L」字状に屈曲する壺の口縁部である。口唇部に刻み目を持つ。

519から525は、口縁が断面逆「L」字状で突帯を持たない壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。

527から540は、中型壺の底部である。527から534が上げ底。535から539がやや上げ底。540が平底

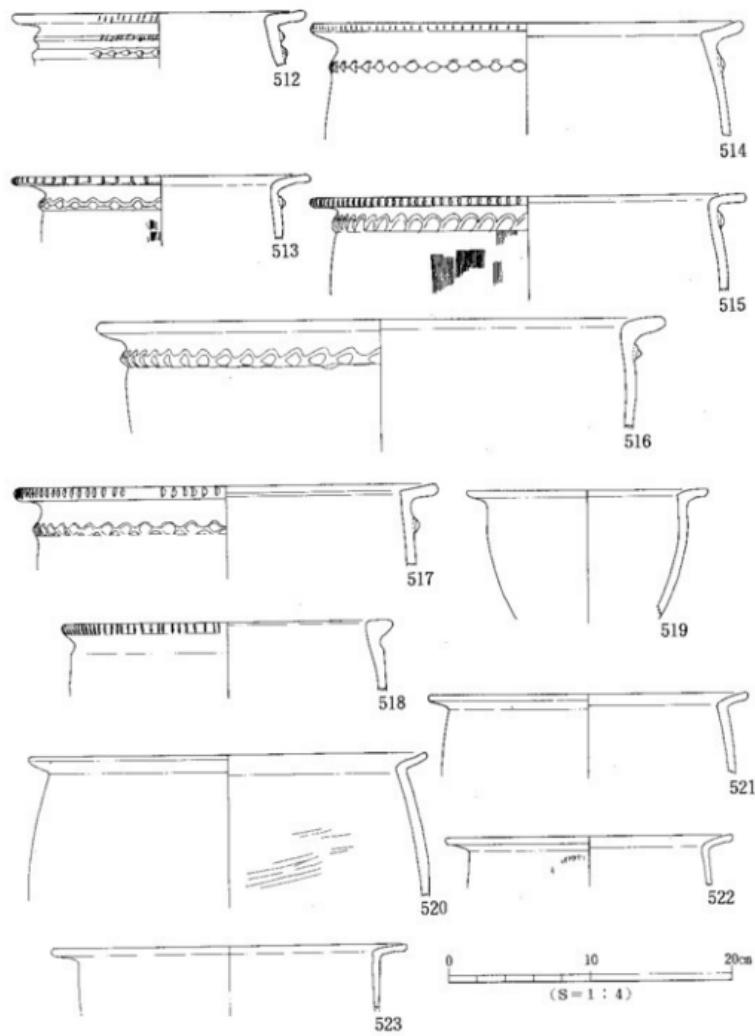


図-56 第3調査区出土土器(1)

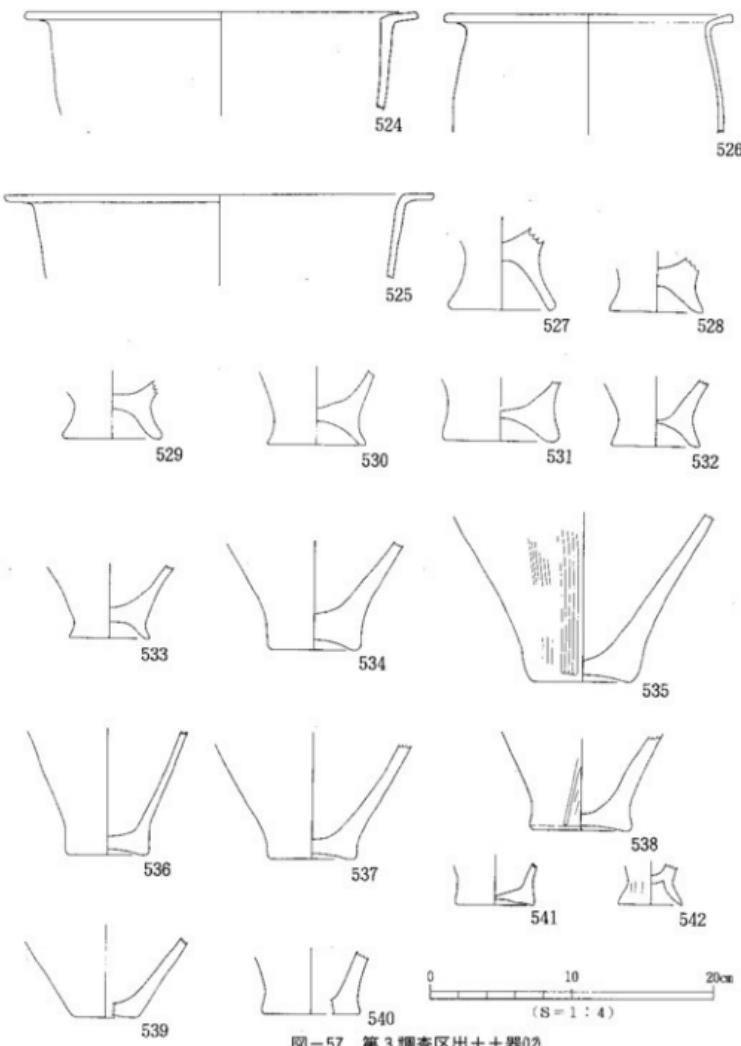


図-57 第3調査区出土土器(2)

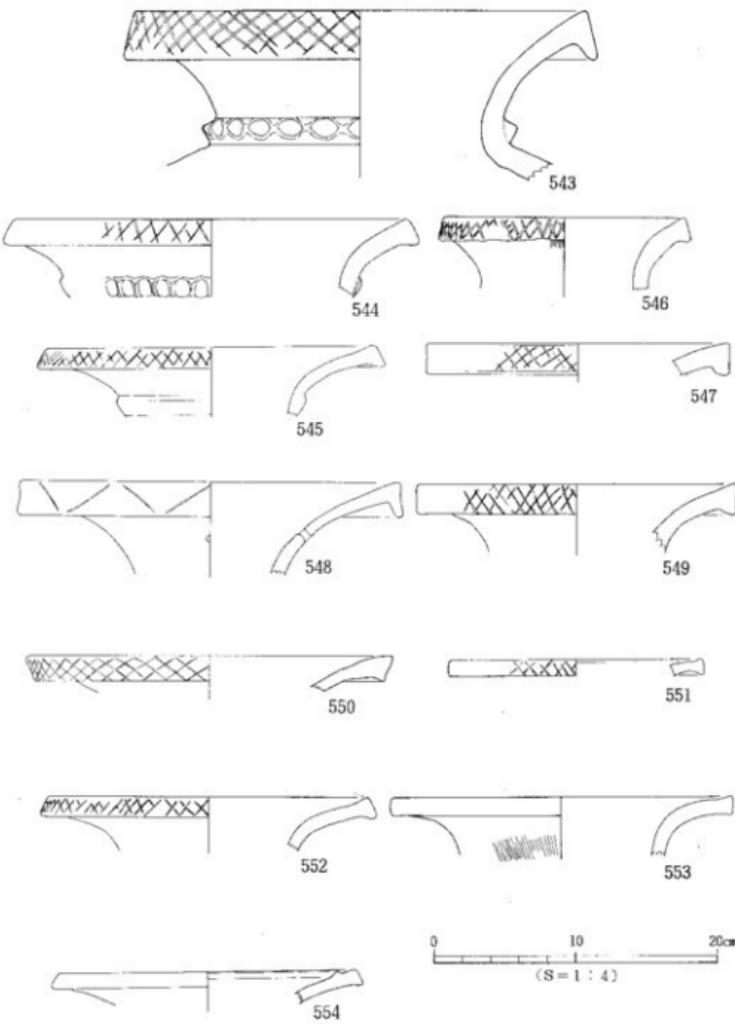


図-58 第3調査区出土土器(13)

である。

541と542は、小堀甌の底部である。541がやや上げ底。542が底端部が尖り気味で上げ底である。

543から554は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方が肥厚されるものが、543から550である。この内、垂下するものが、543、547、548、549である。

口縁端部上方が肥厚されるものが、551と552である。553は、口縁端部上方が肥厚される。

543と544は、口縁端面に斜格子文が施され、頸部には、指頭圧痕が施された突帯を持つ。

545は、口縁端面に斜格子文が施され、頸部には、断面「かまぼこ」状の突帯を1条持つ。

546、547、549から552には、口縁端面に斜格子文が施されている。

548は、口縁端面に「ハ」の字状文が施され、頸部には、円孔が穿たれている。

554は、口縁端部下方がやや肥厚され、口縁内面に断面三角形の突帯を持つ。

555は、口縁が「漏斗」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部外方が拡張されて面をなす、端面に「ハ」の字状文が施されている。

556から560は、口縁が「朝顔」状に大きく開がり、頸部が短い壺の口縁部である。556と557は、口縁端部上下方が、560は、口縁端部下方が肥厚されている。

561は、口縁が「漏斗」状に開がる壺の口縁部である。口縁内面が肥厚され、口唇部には刻み目が施されている。頸部には、刻み目が施された断面「かまぼこ」状の突帯を3条持つ。

562は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部内方が肥厚され、口縁端面に凹線文が2条施されている。頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

563は、口縁が「漏斗」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部上下方が肥厚され面をなす、端面には凹線文が3条施されている。断面「かまぼこ」状の突帯を2条垂下させている。564から568は、壺の底部である。

569から579は、高杯の杯部、脚部である。

569は、高杯の完形である。杯部が、楕形に内湾し立ち上がる。口縁端部は屈曲し開がる。

脚部は、高脚で脚部下方でやや開がり、端部で内湾する。接合は、充填である。

570から574は、楕形に内湾し立ち上がる高杯の杯部である。

570から572は、口縁部が屈曲して開がる高杯である。574は、口縁部内外方に肥厚し面をなす。

573は、口縁部内方が肥厚している。

575から579は、高杯の脚部である。575は、高脚の脚部で、内面に紋り痕を残す。576は、やや低脚で開がる脚部である。脚柱にくずれた三角形状の透かしを持つ。577は、低脚の脚部で、長方形形状の透かしを持つ。578は、低脚で小型の脚部である。579は、やや低脚で端部が開がる脚部である。

580は、胴部がやや張る、口縁部が直口する小堀壺である。

581は、わずかながら口縁端部が外反する無頭の鉢である。

582は、ジョッキ形土器の底部である。底部がわずかながら突出している。

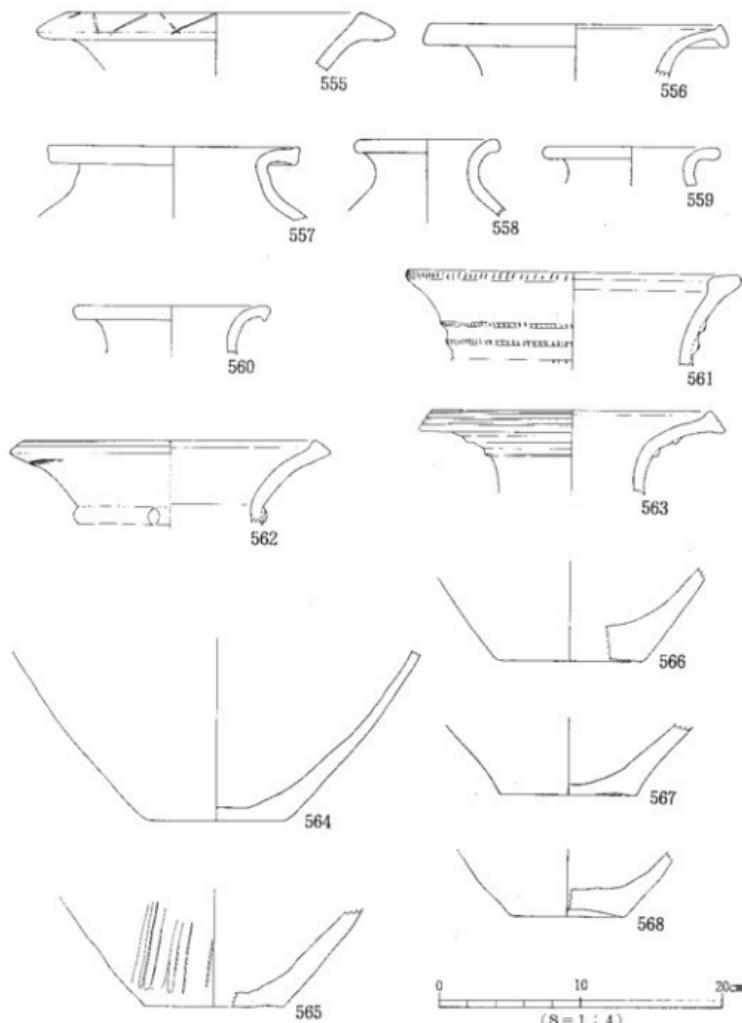


図-59 第3調査区出土土器⑭

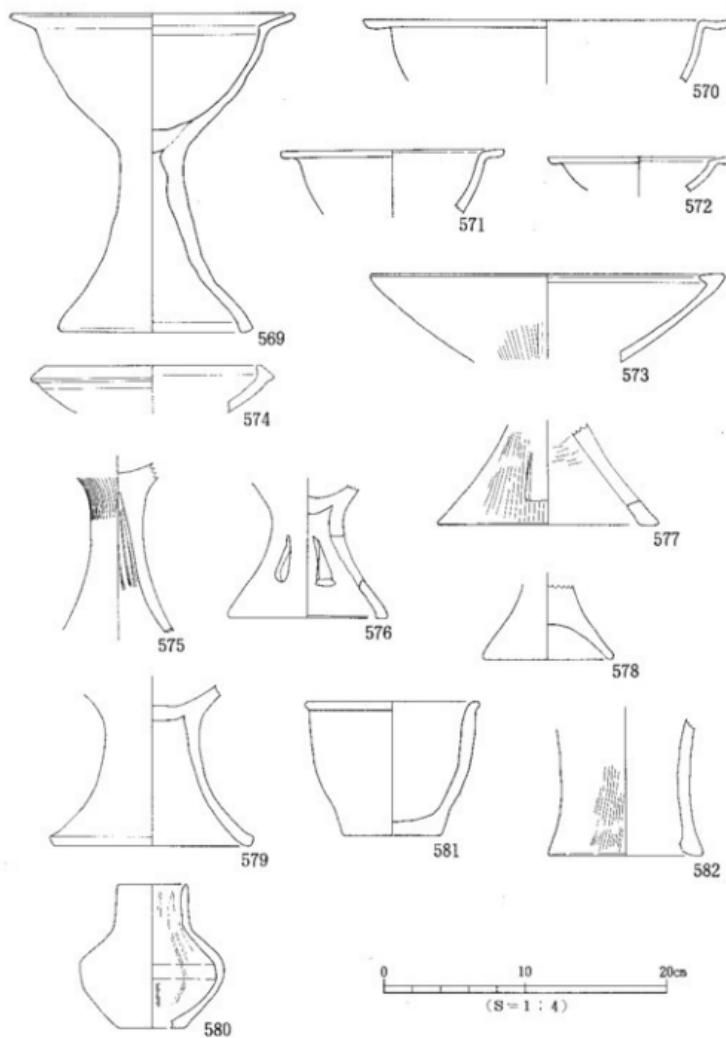


図-60 第3調査区出土土器09

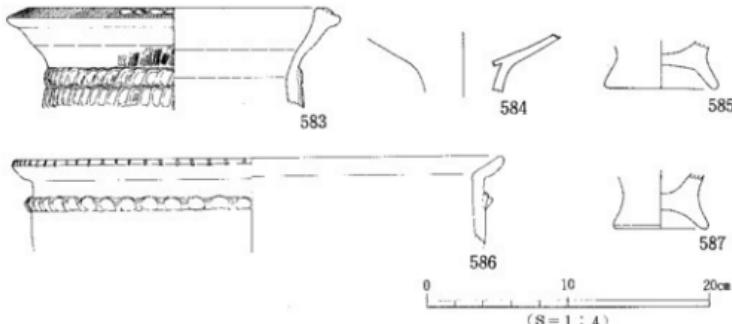


図-61 第3調査区出土土器等

第7土器群(図-61)

4区間の包含層、第7層青灰色粘土及び茶褐色砂出土の土器を取り上げた。583から587である。583は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部は、肥厚され面をなす。端面には、具模施文が施され、円形浮文が貼りつけられている。頸部には、連続に指頭圧痕が施された突帯を2条持つ。

584は、杯部が皿状に立ち上がる高杯の接合部である。

586は、口縁が断面「く」の字状の甌の口縁部である。口唇部に刻み目を施す。頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

585と587は、上げ底の壺の底部である。

石器(図-62~67)

ここでは、3区出土の石包丁片と石斧片他を取り上げた。588から633である。

588から602は、石包丁片である。

出土上器と明確に共伴するものとしては、第3十器群と588が、第4土器群と589から591が、第5土器群と592が、第6土器群と594から596である。

石包丁を形態で分けると、外湾刃杏仁形態が、593、596、600である。直線刃半月形態が590、591、592、597である。直線刃長方形態が、594、595、602である。

石包丁の内、円孔が穿たれているものは、588、591、595、597、598、601である。

長方形態で両端抉りのものは、594と602である。

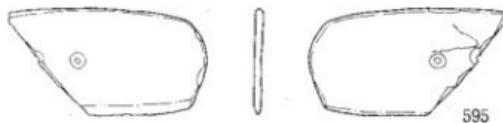
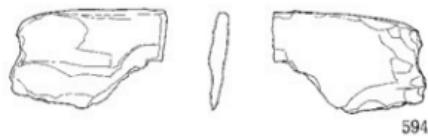
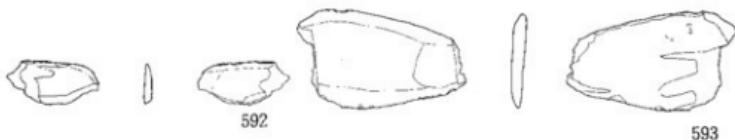
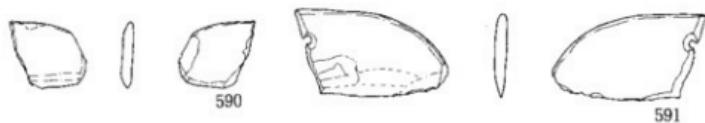
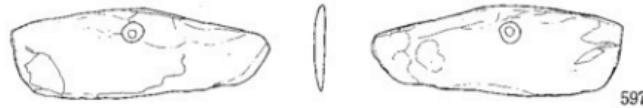
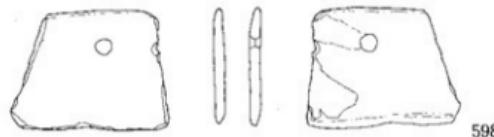


図-62 第3調査区出土石器(1)



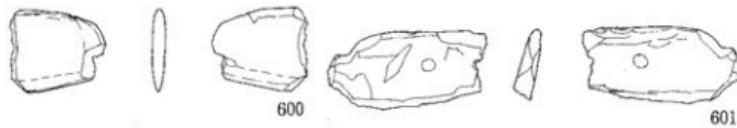
597



598



599



600

601



図-63 第3調査区出土石器(2)

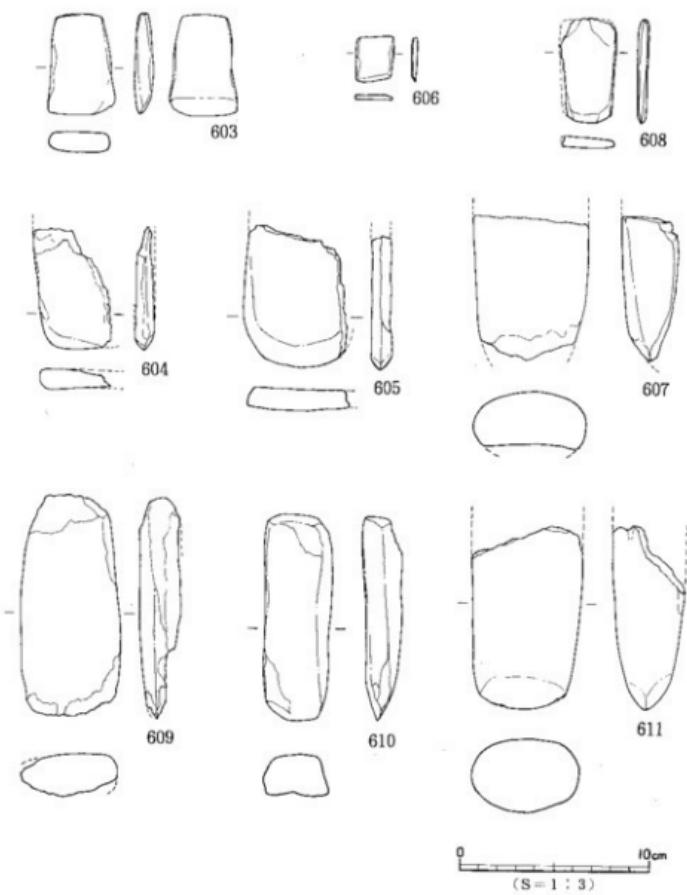


図-64 第3調査区出土石器(3)

全体的に、仕上げの研磨は丁寧である。

603から631は、石斧片である。

出土土器と明確に共伴するものとして、第1土器群と604が、第2土器群と625、626が、第4土器

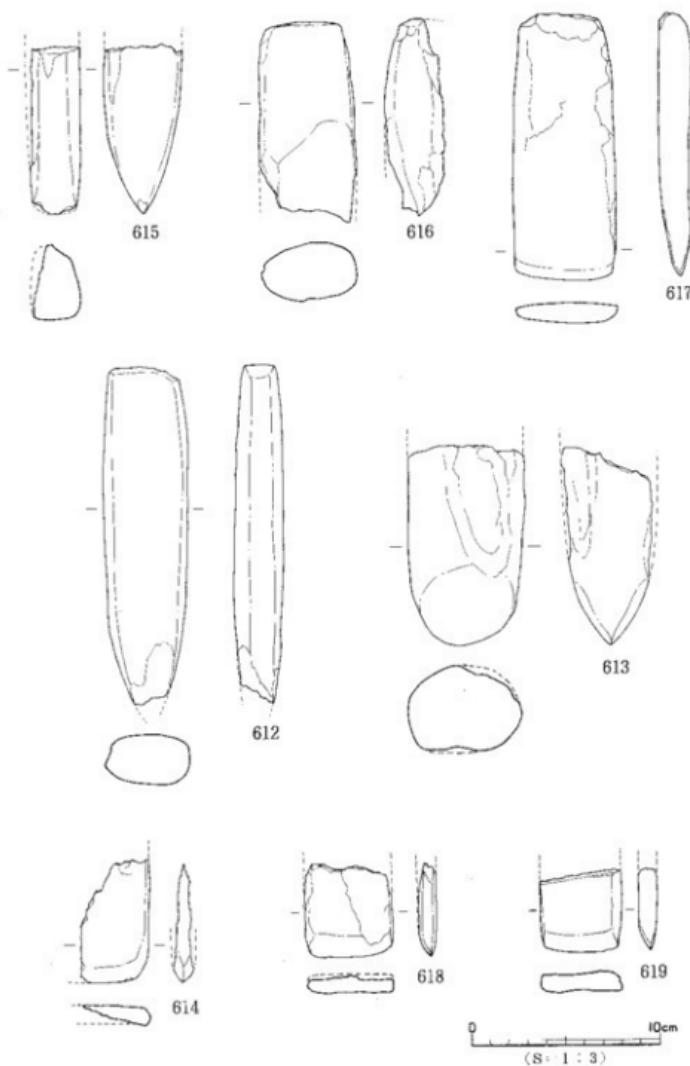


図-65 第3調査区出土石器(4)

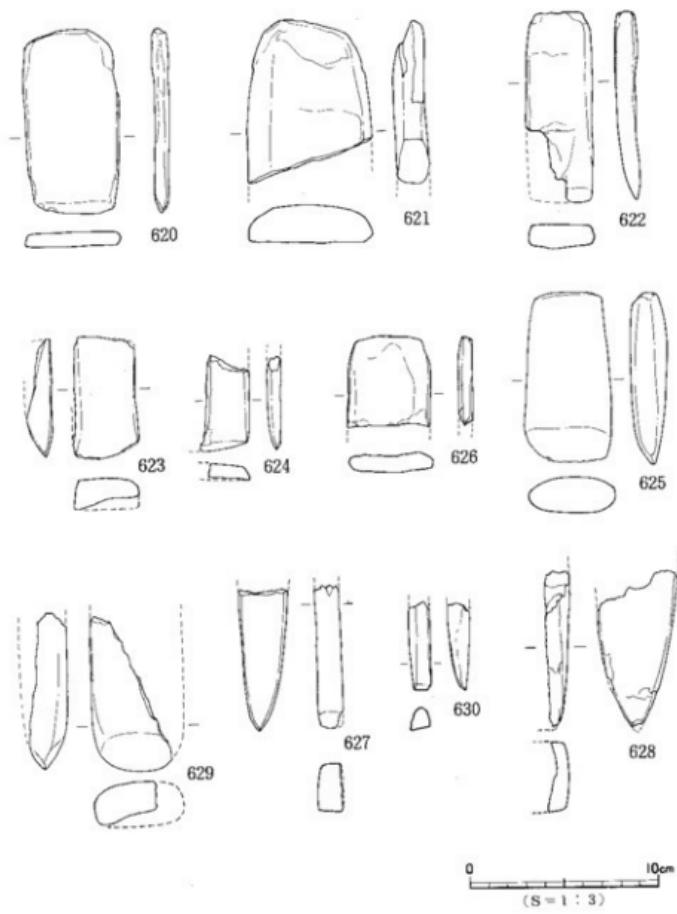


図-66 第3調査区出土石器(5)

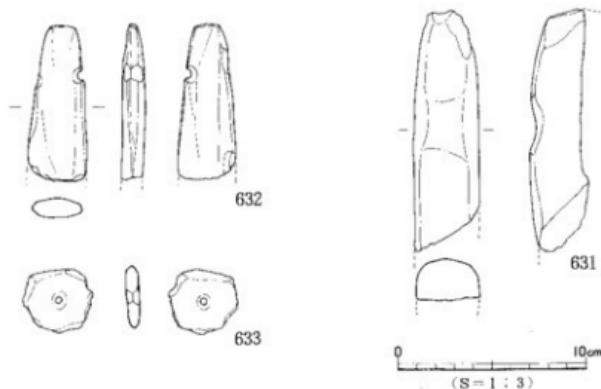


図-67 第3調査区出土石器(6)

群と605が、第5土器群と627が、第6土器群と603、607から624、629である。

器種で分けると、大型蛤刃が、607、609、611、613、621、629である。柱状片刃が610、612、615、627、628、630、631、である。抉り入りのものが631である。扁平片刃が、603、604、605、606、608、614、617、618、619、620、622、623、624、625、626である。

全体的に、仕上げの研磨は丁寧である。

632は、両側面に穿孔痕を1箇所ずつ残す、石斧状の石製品である。研磨は、丁寧である。

633は、石包丁からの転用と考えられる石製紡錘車である。

4 第4調査区

第4調査区は、調査対称区の南端部東寄り、第3調査区の南東に位置する。今回の調査対称区の南側後背地丘陵の急斜面上に立地する。試掘調査時に、包含層を検出し、調査区を設定した。標高は、64.3から61.1mである。

この4区では、幅12m、長さ11m、比高差3.1mを測る小谷間を検出した。この小谷間には、弥生時代中期中葉の遺物が包蔵されていた。又、この小谷間の北側基底面は、テラスを呈していた。このテラス上からは、遺構を検出した。このテラスの規模は、東西11m、南北6.5mの範囲である。テラス外の北側は、急斜面になっている。4区南側の平坦面は、調査前の造成による段カットによる平坦面である。

4区の土層堆積は、急斜面でありがちな、互層状態で堆積しており、かなり分層できた。他の調査区で見受けられる遺物包含層の黒色粘質土及び暗褐色土は、一部4区南側の山側斜面部で検出

た。小谷間の堆積層は、灰色土及び粘質土、黄褐色土、茶色土が主体となって堆積し、これらの層に暗褐色土が一部混入し、互層となって堆積している。出土遺物は、弥生時代中期中葉から後葉段階に限定されている。

検出遺構は、小谷間基底面のテラス上から、溝2条、土壙1基、ピット21基を検出している。

出土遺物は、4区から、土・石器を含め収納箱約120箱出土している。弥生時代中期中葉から後葉である。又、小谷間上層面南西から、焼土ブロックを併せた土器溜りを検出している。

今回の報告書1には、出土土器と石斧片、遺構の全てを収録した。報告書2には、石斧片以外の石器類を収録する予定である。

遺構

遺構は、全て小谷間基底面テラス上からの検出である。

SK-1は、小谷間基底面中央、やや南東寄りから検出している。長軸がほぼ東西で、長梢円形プランを呈する。規模は、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ（最深部）0.18mを測る。埋土は、茶褐色土であった。基底面は、やや南に傾斜を持つ。

出土遺物は、図-70の635から637で、いずれも口縁が断面逆「L」字状の甕の口縁部である。

635と636は、中型甕。637は、小型甕である。

当土壙の廃絶時期は、出土土器から弥生時代中期中葉である。

SD-1は、小谷間基底面西端から検出している。北側は、斜面部で途切れている。長軸をほぼ南北にとり、北西に向けやや湾曲している。規模は、検出長5.2m、幅1.8から0.8m、深さ（最深部）0.7mを測る。埋土は、褐色土であった。基底面は、南端部がやや深くなっているが、南端部から北にむけては下がっている。

出土遺物は、図-70の638から642である。

638は、口縁が断面逆「L」字状の中型甕の口縁部である。口縁端部は面をなしている。頸部外面は、強いナデによってややくぼんでおり、頸部直下に稜線を持つ。

639は、口縁が断面逆「L」字状のやや大型甕の口縁部である。頸部から口縁部にかけては、やや角度を持ち水平になっている。口縁端部は、やや下方にむかって面をなしている。

640は、突出部を持つ甕の上げ底の底部である。

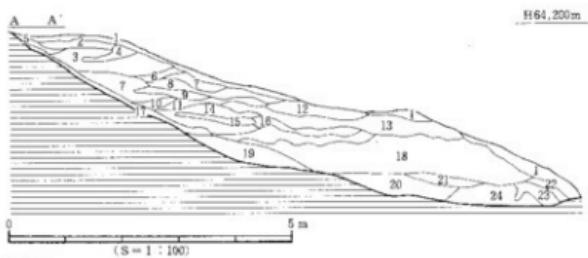
641は、口縁が断面逆「L」字状の中型甕の口縁部である。頸部が肥厚されており、口縁部は、三角形状になっている。口縁端部は、丸くおさめられている。

642は、小型甕の口縁部である。口縁がすぼんでおり、頸部から口縁部にかけては、断面三角形状である。口縁端部は、丸くおさめられている。

廃絶時期は、出土土器から弥生時代中期中葉である。

SD-2は、小谷間基底面東端から検出している。長軸はほぼ東西で、やや北にふれている。

規模は、長軸1.34m、幅0.3m前後、深さ（最深部）0.12mを測る小規模の溝である。埋土は、茶



土壤名称					
1灰色土	5茶色土	9暗黄灰色土	13黄褐色土	17灰茶色土	21灰色粘质土
2暗灰色土	6黄灰色土(洪积)	10黄灰色砂质土	14灰黄色褐色土	18乳茶褐色土	22乳茶色砂
3暗黄茶色土	7黄茶色土	11暗灰茶色土(洪积)	15暗灰色粘质土	19乳黄色土	23褐色土
4乳黄茶色土	8乳茶色土	12暗黄褐色土	16明灰茶色土	20乳黄褐色土	24茶褐色土

図-68 第4調査区遺構配置図及び土層断面図

褐色土である。基底面は、西から東に向け微傾斜を持つ。

廃絶時期は、出土土器から弥生時代中期中葉と思われる。

ピットは、小谷間基底面の検出で、西側に多く分布している。埋土は、茶褐色土であった。

以下、規模を述べる。但し、径は長軸、深さは最深部である。

S P - 1は、径48cm、深さ23cm。S P - 2は、径54cm、深さ38cm。S P - 3は、径53cm、深さ32cm。S P - 4は、径28cm、深さ8cm。S P - 5は、径53cm、深さ43cm。S P - 6は、径17cm、深さ7cm。S P - 7は、径38cm、深さ45cm。S P - 8は、径30cm、深さ25cm。S P - 9は、径36cm、深さ19cm。S P - 10は、径23cm、深さ9cm。S P - 11は、径18cm、深さ10cm。S P - 12は、径17cm、深さ8cm。S P - 13は、径40cm、深さ28cm。S P - 14は、径26cm、深さ8cm。S P - 15は、径17cm、深さ7cm。S P - 16は、径23cm、深さ7cm。S P - 17は、径21cm、深さ11cm。S P - 18は、径18cm、深さ6cm。S P - 19は、径24cm、深さ19cm。S P - 20は、径25cm、深さ12cm。S P - 21は、径21cm、深さ6cmをそれぞれ測る。

S P - 5は、基底面中央から、長さ10cm、幅7cm、厚さ7cmの偏平の石が出土している。

ピット内の出土遺物としては、S P - 3は埋土上層より中型甕の完形が出土している。図-70の634がそれである。634は、口径22.0cm、胴径20.2cm、底径6.9cm、器高24.9cmをそれぞれ測る中型甕の完形である。口縁が逆「L」字状を呈している。口縁部上面中央が肥厚しており、口縁端部は、丸くおさめられている。最大胴径は、胴部上位にとる。底部は、突出を持つ上げ底の底部で、底部中央の器厚は薄い。調整を含め、全体に丁寧な作りである。

他のピット内の出土遺物は、弥生土器の破片が少量出土しているか、無遺物であった。

ピットの廃絶時期は、出土土器と埋土から、弥生時代中期中葉と思われる。

土器溜り（図-71）

4区の南側中央で、上器溜りを検出した。丁度、小谷間の南西肩部から北西にかけてで、小谷間包含層第3層暗黄茶色上層である。標高約64.2mである。範囲は、東西1.5m、南北1.6m、で出土した。この土器溜り内からは、撲士ブロックを二カ所検出している。いずれも厚さ10cmである。

この土器溜りの出土土器は、図-72の643から652である。

643から646は、甕の口縁部及び口縁部から胴部にかけての破片である。

643は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部直下に、指頭圧痕を施した突帯を一条持つ。口縁端部近くでやや肥厚し、口縁端部は、丸くおさめられている。

644は、口縁が断面「く」の字状で、頸部内面に明確な破を持つ。

645は、口縁部が短い、断面「く」の字状口縁で、口縁端部は、丸くおさめられている。

646は、口縁が断面「く」の字状の、小型の甕である。口縁端部は、面をなす。最大胴径を胴部上位にとる。

647は、突出部を持つ、平底の甕の底部である。

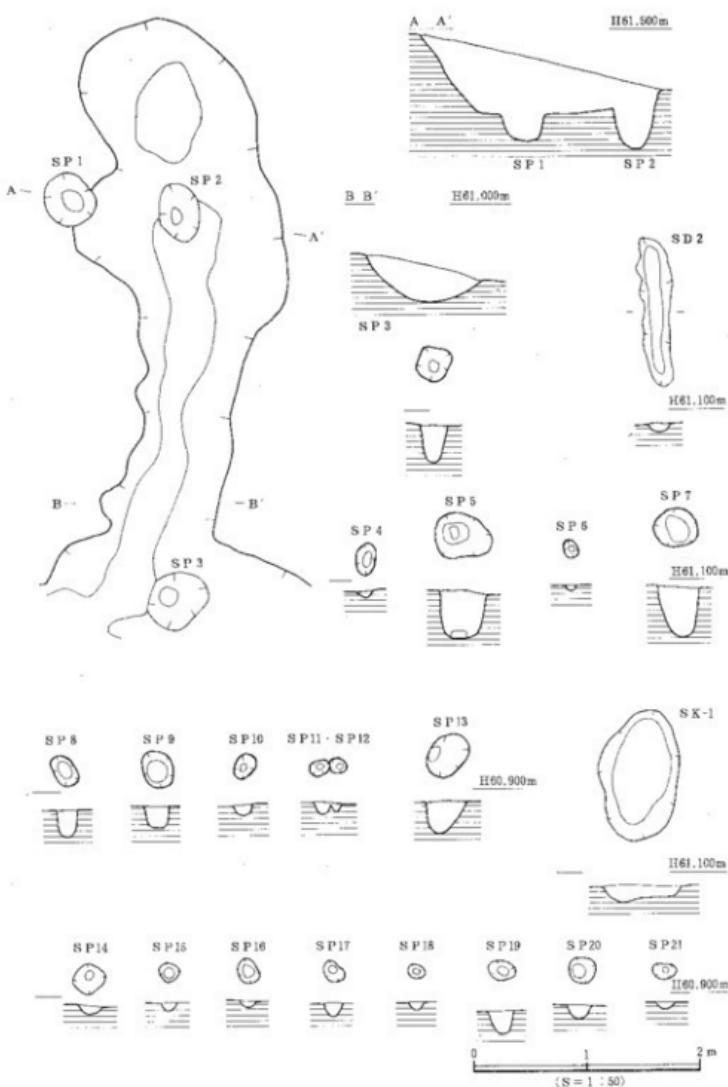


図-69 第4調査区遺構図

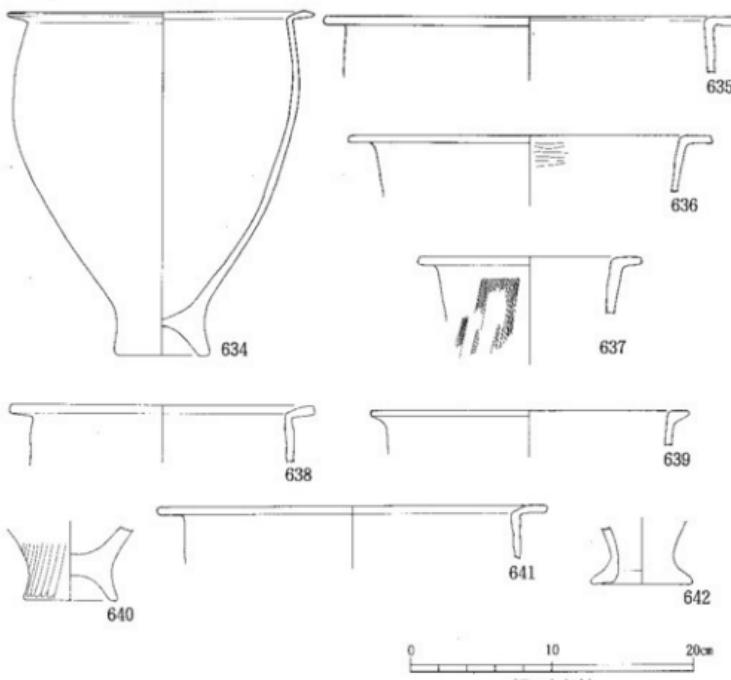


図-70 第4調査区遺構内出土遺物

648から650及び652は、壺の破片である。

648は、口縁が「ラッパ」状の壺の口縁部である。口縁端部は、面をなしている。

649は、頸部に断面三角形の突帯を二条持つ、大型壺の頸部から胴部にかけての破片である。

頸部直下内面は、指頭による調整でくぼみを有する。

650は、頸部に断面三角形の突帯を二条持つ、小型壺の頸部片である。頸部上方は、やや肥厚している。652は、やや上げ底の壺の底部である。

651は、把手付の「ジョッキ」形土器の完形である。口径14.8cm、底径7.8cm、器高22.0cm、把手部は、幅2.5cm、厚み1.6cm、長さ13.0cm、胴部と把手の最大間隔3.3cmをそれぞれ測る。

把手は、胴部やや下方に付いている。把手の胴部との接合部は、充填で、上部はやや先細り、下部はやや肥厚している。把手の内外面とも、面をなしている。



図-71 第4調査区土器溜り出土状況図

底部から胴部中位にかけては、やや外方にのび、胴部中位から口縁端部にかけては、ほぼ直立している。口縁端部は、面をなしている。底部には突出を持つが、把手接合側は、突出が少ない。

遺物

ここでは、第4調査区出土の実測可能な土器及び石斧片を収録している。
4区南側の一部、山側斜面部に遺存した黒色粘質土及び暗褐色土、小谷間内の遺物包含層からのものである。以下、土器・石器の順で述べる事とする。

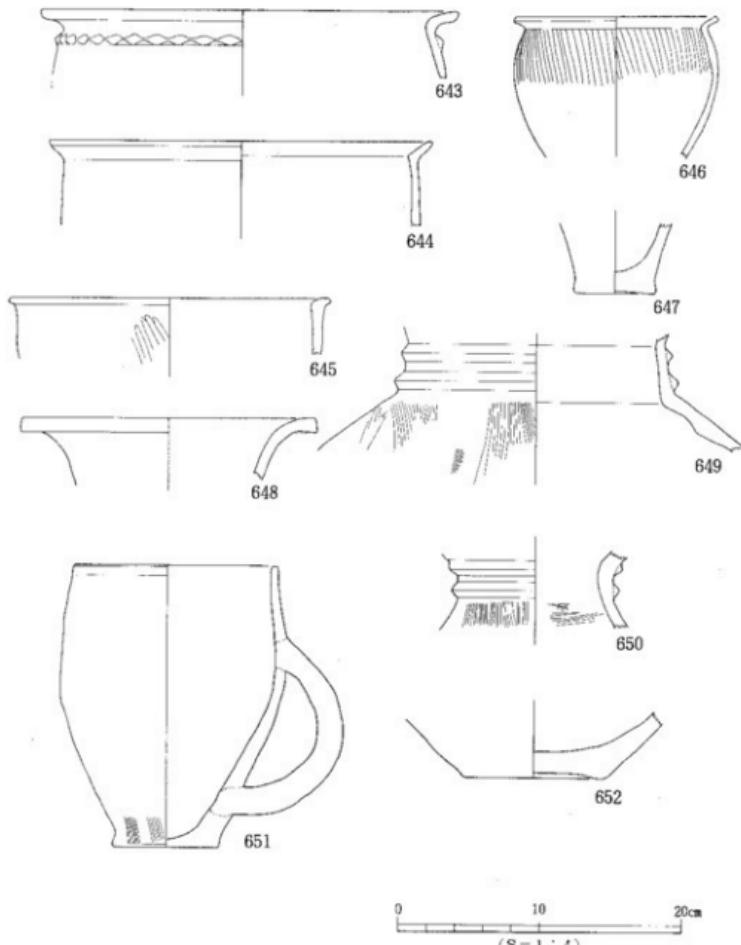


図-72 第4調査区土器溝まり出土土器

土器は、堆積土上層から、南側斜面部の黒色粘質土を1群土器として、小谷間の包含層を含め、小谷間の基底面直上層を第10群土器とした。以下、第1群土器から述べる事とする。

第1群土器(図-73)

4区南側斜面部の、黒色粘質土層出土の土器を取り上げた。653から667である。

653は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけては、やや外反し、口縁端部は、丸くおさめられている。

654は、口縁が断面「く」の字状の鉢の口縁部である。頸部外面は、強いナデによりややくぼんでいる。

655は、口縁が断面逆「L」字状の小型の壺である。体部から頸部にかけては、器厚が厚い。

口縁部は、極端に器厚が薄くなり、口縁端部にかけて、やや垂れ下がる。

656は、無頸の大型の鉢である。口縁端部外面は、肥厚し下方に平坦面を持つ。

657から660は、壺の底部である。657と658は上げ底。659と660はやや上げ底である。

661から664は、口縁が「ラッパ」状に開がり、頸部がやや短い壺の口縁部である。

661は、口縁端部下方が肥厚し、拡大する下垂口縁である。頸部には、断面三角形の浅めの突帯を一条持つ。662には、口縁上面に円形浮文を持つ。

663は、頸部に、断面三角形の突帯を三条持つ壺の頸部である。頸部は、筒状になる。

666は、口縁が「漏斗」状に大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。

667は、口縁端部上方を拡張し、口縁端部に凹線文を二条持つ高杯の杯部である。

668は、端部が開がる高杯の脚部である。低脚で、内面に絞り痕を残す。

669は、口縁が「く」の字状の壺形の小型の鉢である。

第2土器群(図-74・75)

4区南側斜面部から小谷間上面にかけての、暗褐色土層出土の土器を取り上げた。670から691である。

670から675は、頸部に突帯を持つ壺の口縁部と頸部である。いずれの突帯にも、指頭圧痕が施されている。断面「く」の字状の口縁が、670、671、673である。断面逆「L」字状の口縁が、672、674、675である。口唇部に刻み目を持つのが、670と672である。

672は、口縁部内面が拡張され、口縁端部が丸くおさめられている。口縁部と頸部の間には、断面三角形の小突帯を持つ。

676は、口縁が「く」字状の壺形の鉢である。

677から681は、突帯を持たない壺の口縁から胴部にかけてである。断面逆「L」字状の口縁が677と680である。断面「く」の字状の口縁が678、679、681である。

682は、突出部を持つ、平底の壺の底部である。

683から690は、壺の口縁部と頸部である。

683は、口縁が「ラッパ」状に開がり、頸部がやや短い壺の口縁部から胴部にかけてである。

口縁端部には、斜格子の刻み目が施されている。頸部には、指頭圧痕が施された薄い突帯を一条持つ。

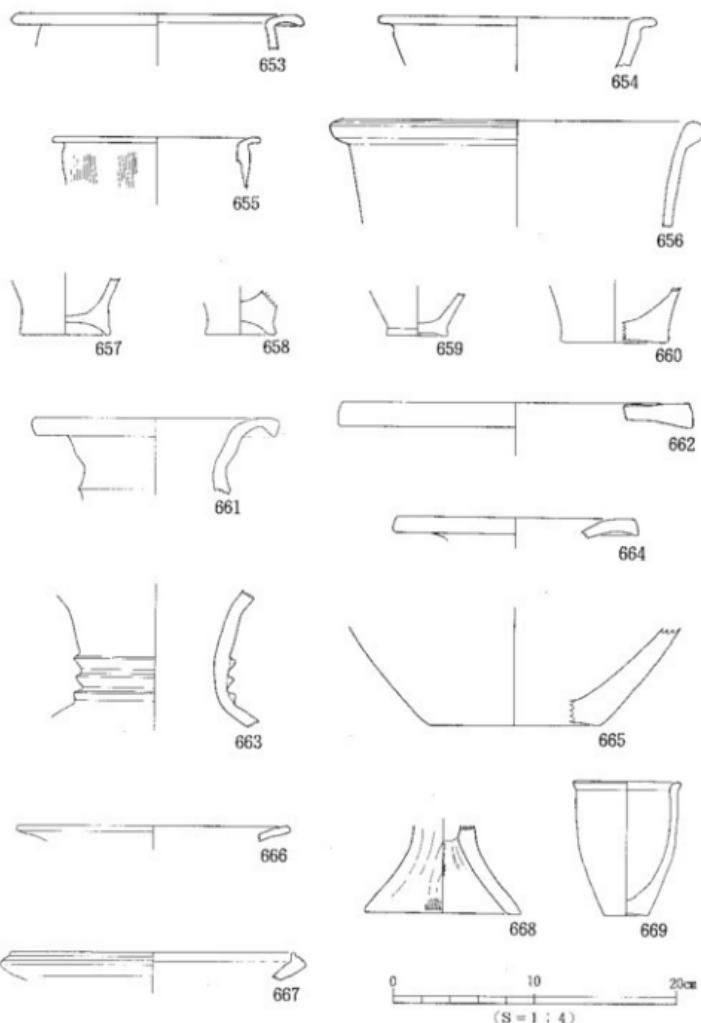


図-73 第4調査区出土土器(1)

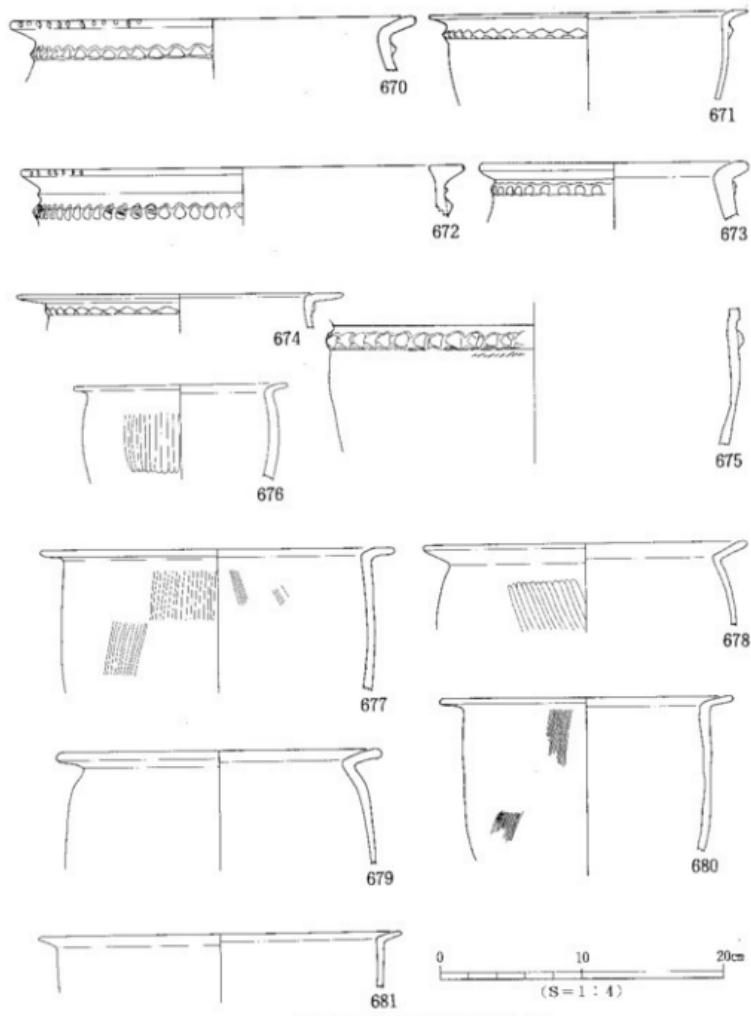


図-74 第4調査区出土土器(2)

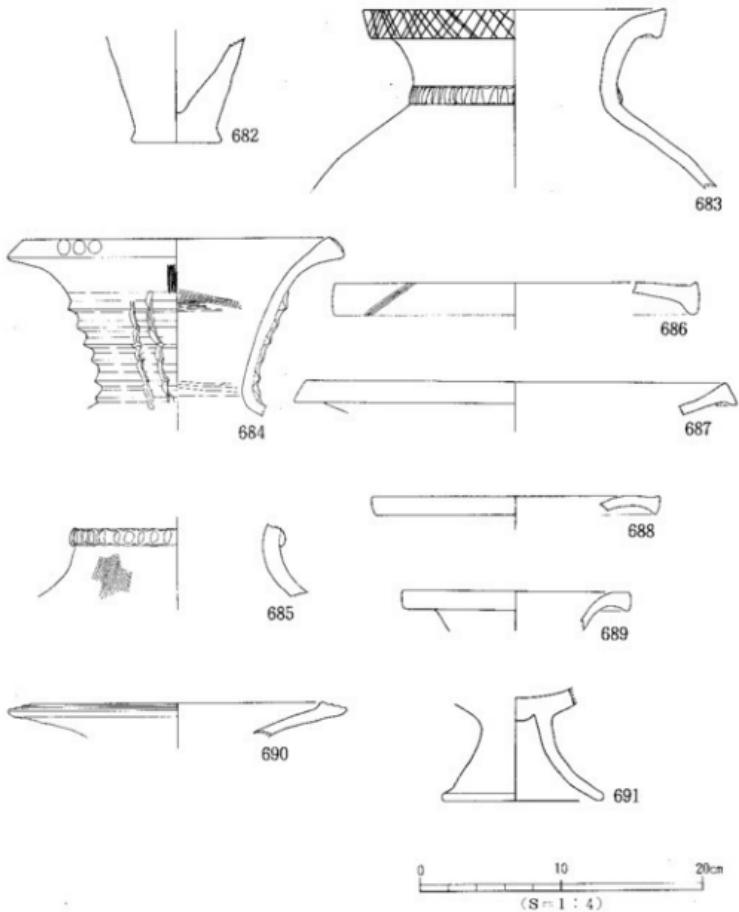


図-75 第4調査区出土土器(3)

684は、口縁が「ラッパ」状に開がり、頸部が長い壺の口縁部である。口縁端部は上下方に拡張された面をなす。端面には、円形浮文を3個一対で、計3対施されている。頸部から口縁にかけては、断面三角形の突帯を6条持つ。この突帯に直交させ、一対2本の粘土紐を、計3対貼りつけている。

686は、口縁が「ラッパ」状に開がり、口縁端部下方を拡張した垂下口縁の壺である。口縁端面には、斜行の刻み目を持つ。

687は、口縁端部下方を拡張した「ラッパ」状口縁である。689は、口縁が「ラッパ」状に開がる

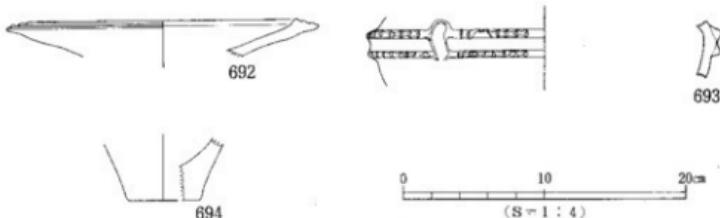


図-76 第4調査区出土土器(4)

頸部が短い小型壺の口縁部である。

690は、口縁が「ラッパ」状に開がる頸部が短い壺の口縁部である。口縁端部上方を拡張し面をなす、端面には凹線文を3条施している。

691は、高杯の脚部である。脚部は、低脚で「ハ」の字状に開がる。端部は丸くおさめられている。杯部と脚部の接合は、充填である。

第3土器群(図-76)

4区の小谷間包含層上層の茶褐色土出土の土器を取り上げた。692から694である。

692は、口縁が「ラッパ」状に開がる頸部が短い壺の口縁部である。口縁端部上方を拡張し面をなす、端面には凹線文を3条施している。

693は、壺の胴部である。丁度、胴部最大径をとる胴部中位上方である。指頭圧痕が施された突帯を二条持つ。又、この突帯は、一部指頭圧痕により、抑えつけられ突帯を消失させている。

694は、突出部を持たない壺の底部である。

第4土器群(図-77~79)

4区の小谷間包含層上層の黒灰色粘質土及び黄灰褐色土出土の土器を取り上げた。695から724である。

図-77の695から708は、黒灰色粘質土出土の土器である。

695は、口縁が断面逆「L」字状の甌である。口縁端部上下方とも拡張され、上方はつまみあげられている。口縁端面には、凹線文が1条施されている。又、頸部には、刺突文が施されている。

696から698は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

698は、口縁部が長めである。

697は、頸部から口縁にかけて肥厚されている。

700と704は、甌の底部である。704には、底部に焼成後穿孔が穿たれている。

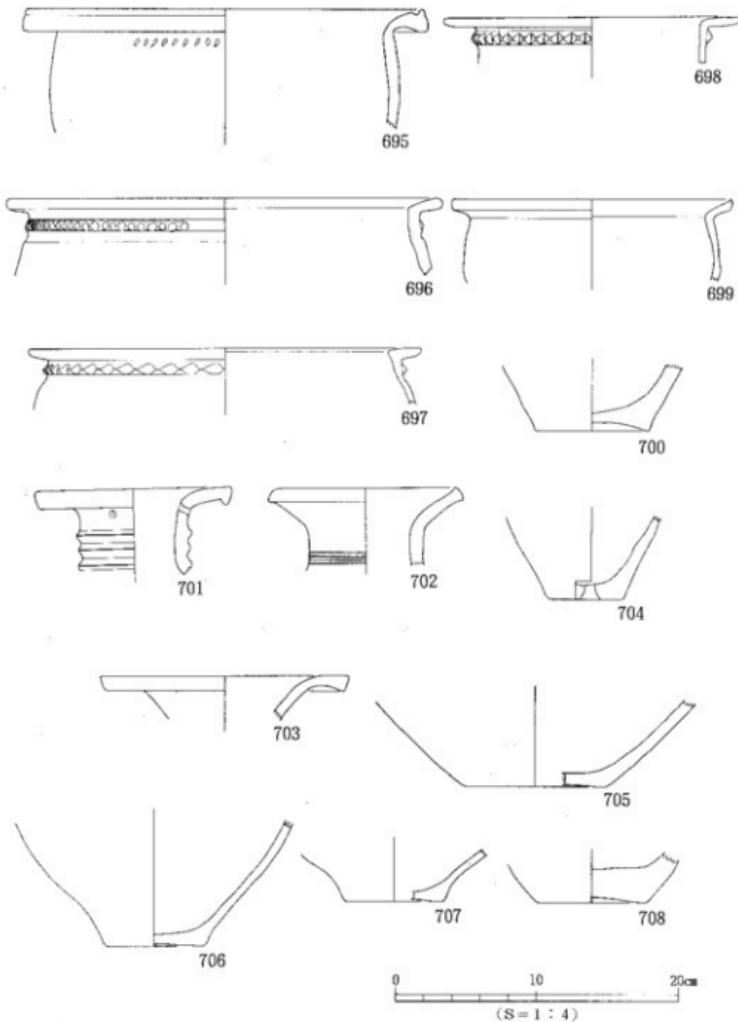


図-77 第4調査区出土土器(5)

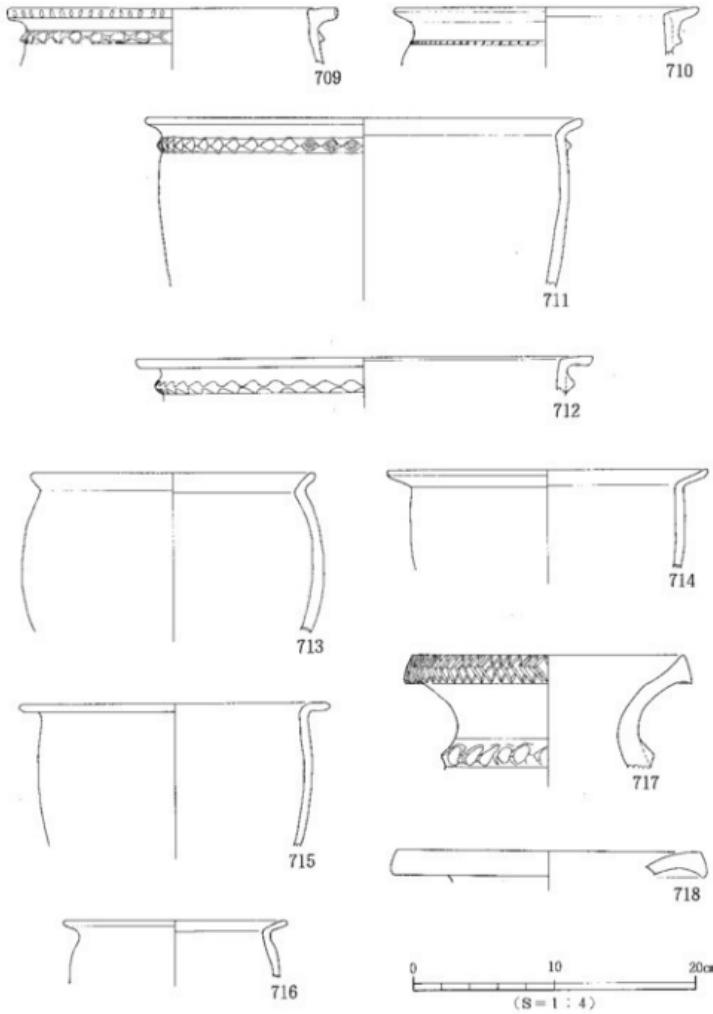


図-78 第4調査区出土土器(6)

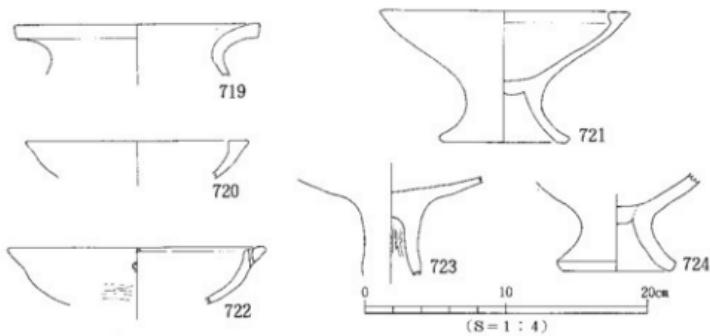


図-79 第4調査区出土土器(7)

701から703は、小型壺の口縁部である。

701は、口縁部が「コ」の字状を呈するもので、口縁端部下方が拡張されている。頸部には、断面三角形の突帯を3条持つ。頸部と口縁部接点には、穿孔が3箇所穿たれている。

702は、口縁部が短く開がるもので、頸部に、5条の沈線文を持つ。

705から708は、壺の底部である。

図-78・79の709から724は、黄灰褐色土出土の土器である。

709から712は、頸部に突帯を持つ、壺の口縁部から胴部にかけてである。

709は、断面逆「L」字状の口縁で、突帯には指頭圧痕が施され、口唇部に刻み目を持つ。

710は、頸部から口縁部は貼りつけにより、肥厚されている。突帯には、刻み目を持つ。

711は、断面「く」の字状口縁である。712は、断面逆「L」字状口縁で、いずれも突帯には、指頭圧痕が施されている。

713から716は、突帯を持たない壺の口縁部である。口縁の断面逆「L」字状のものが715。

「く」の字状のものが713・714・716である。口縁端部は、丸くおさめられて717から719は、壺の口縁部から頸部である。

717は、口縁部が「ラッバ」状に開がる壺の口縁で、頸部が短い。口縁端部は、上下方とも肥厚され面をなす。端面には、斜格子の刻み目が、上下2段施されている。頸部には、指頭圧痕が施された幅開の突帯を1条持つ。

718は、口縁端部下方が拡張され垂下している。719は、口縁端部が面をなし、頸部が短い。

720から724は、高杯である。

721は、杯部が椀状で、口縁部内方が拡張され、平坦面をなすやや小型の高杯の完形である。

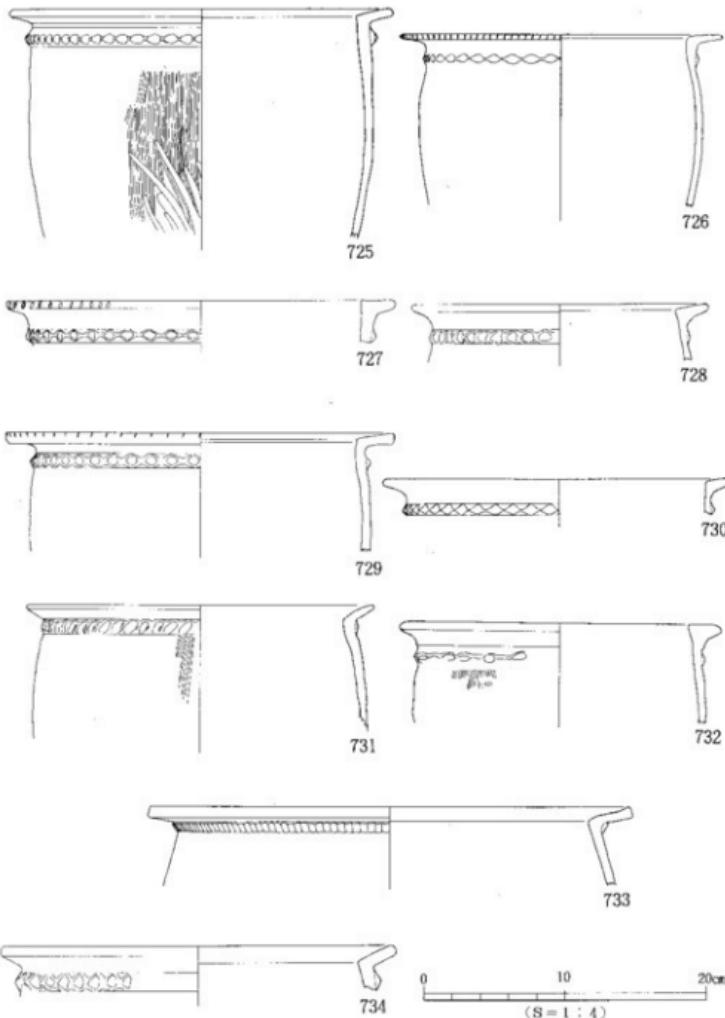


図-80 第4調査区出土土器(8)

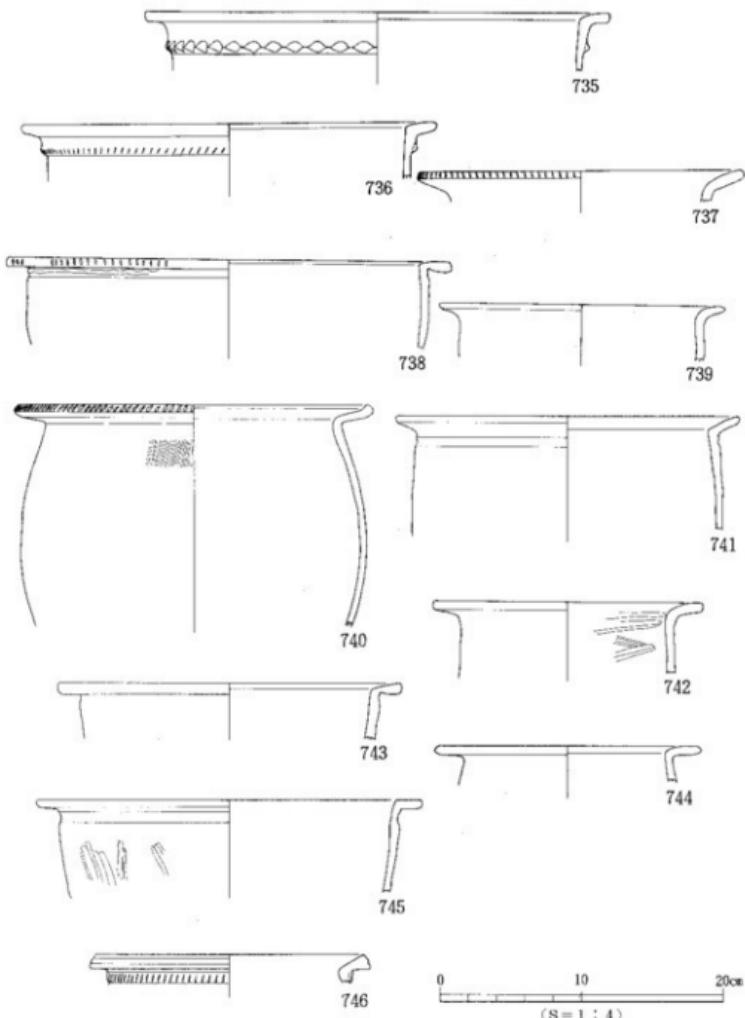


図-81 第4調査区出土土器(9)

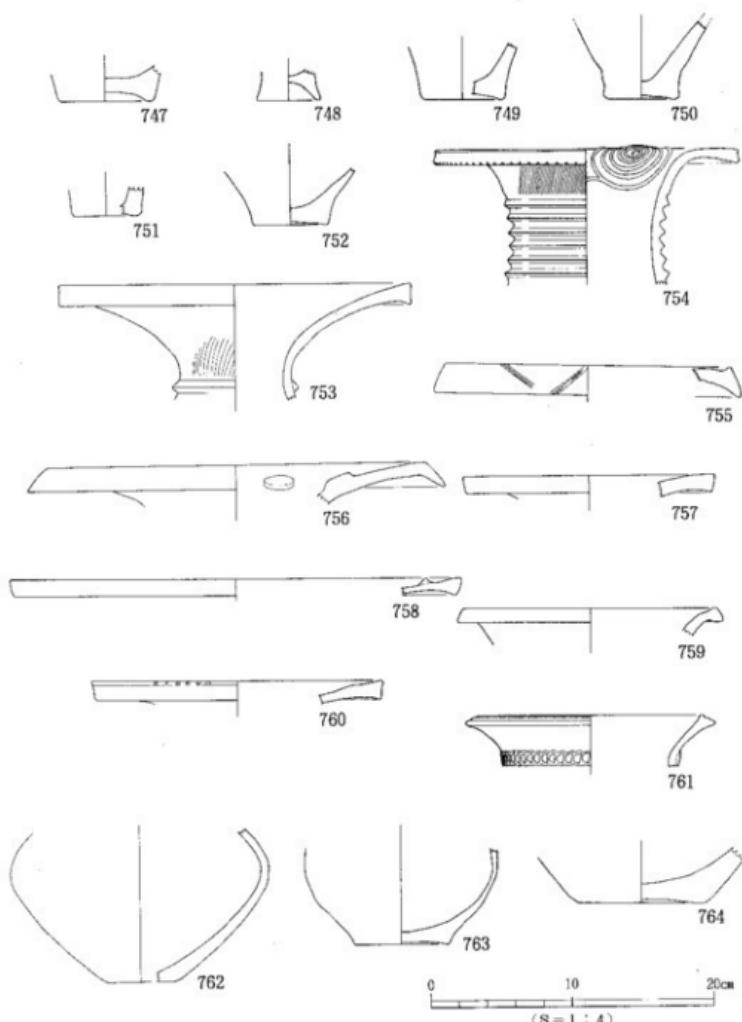


図-82 第4調査区出土土器

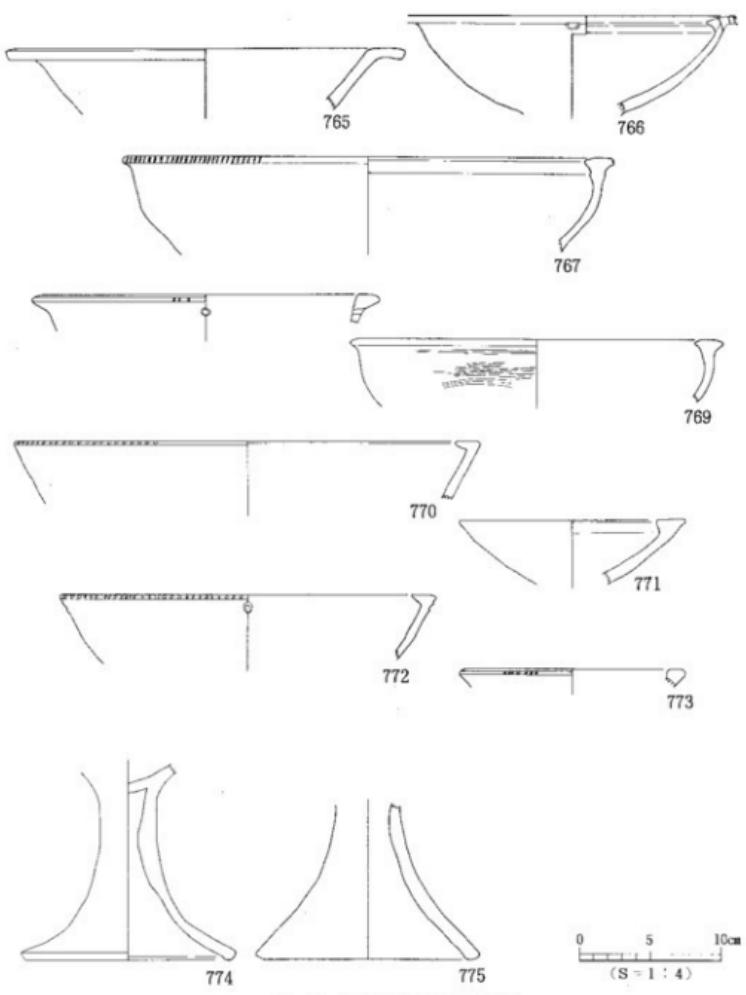


図-83 第4調査区出土土器(1)

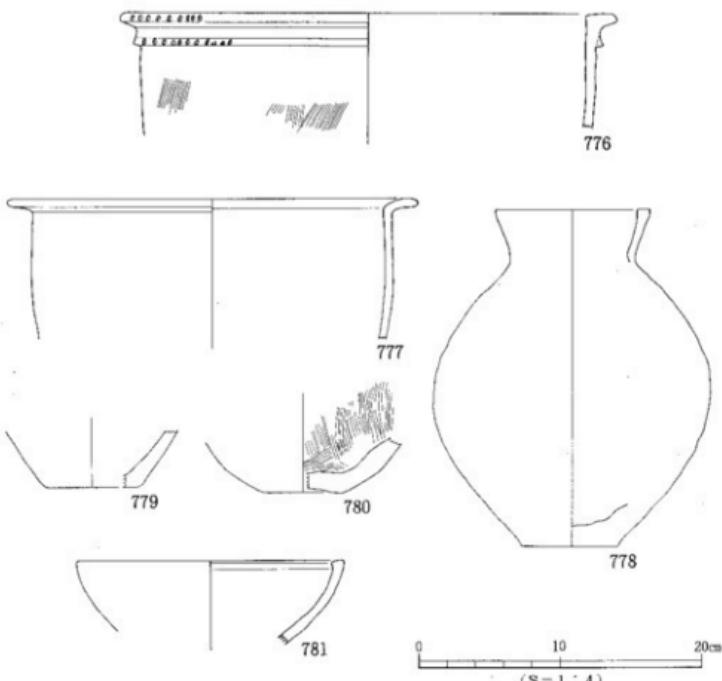


図-84 第4調査区出土土器02

脚部は、低脚で「へ」の字状に開がる。脚端部は、丸くおさめられている。

722は、口縁端部外方が拡張された高杯の杯部で、口縁から直下にかけ穿孔が穿たれている。

723は、脚が長く「筒」状脚の高杯である。

第5土器群(図-80~83)

4区の小谷間包含層中層の黄褐色土に出土した土器を取り上げた。725から775である。

725から736、738は、頸部に突帯を持つ壺の口縁部から胴部にかけてである。

頸部の突帯に指頭圧痕が施され、口唇部に刻み目を持つものが、726、727、729、738である。この内、突帯が低いものが、726と738である。いずれの口縁も、断面逆「L」字状を呈している。

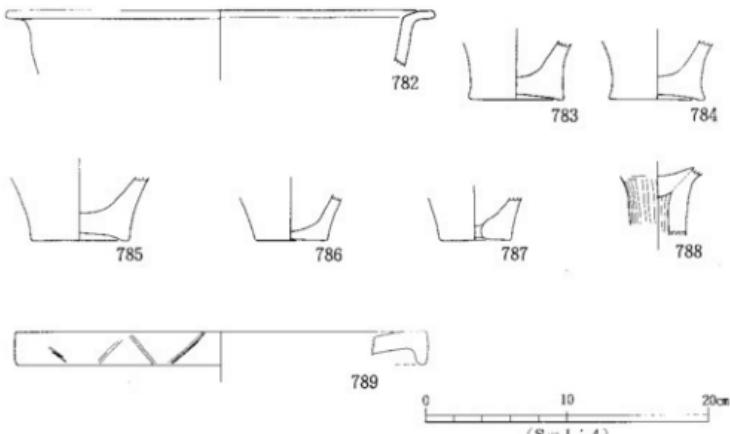


図-85 第4調査区出土土器⑬

頸部の突帯に指頭圧痕が施され、口唇部に刻み目を持たないものが、725、728、730から732、734、735である。この内、断面逆「L」字状の口縁ものが、725、728、730、732、735である。断面「く」の字状の口縁で、突帯が口縁直下に貼りつけたものが、731、734である。

733は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に刻み目が施された突帯を1条持つ大型甕の口縁部である。刻み目は、丁寧に施されている。

736は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に刻み目が施された断面三角形の突帯を1条持つ大型甕の口縁部である。

737及び739から745は、頸部に突帯を持たない甕の口縁部から肩部にかけてである。

737と739は、断面「く」の字状の口縁である。737には、口縁端部に刻み目を持つ。

740は、口縁が断面逆「L」字状で、口唇部に刻み目を持つ。口縁端部上方がやや肥厚されている。

口縁が断面逆「L」字状で、口唇部に刻み目を持たないものが、739、741から745である。

この内、743は、口縁部がやや肥厚されている。745は、頸部が強いナデにより、ややくぼみ状を呈する。

746は、口縁が断面逆「L」字状で、口縁端部下方を拡張させ面をなす、端面には、凹線文が2条施されている。頸部には、刻み目が施された低い突帯を持つ。

747から752は、甕の底部である。上げ底のものが、747と748である。やや上げ底のものが、749と750と752である。

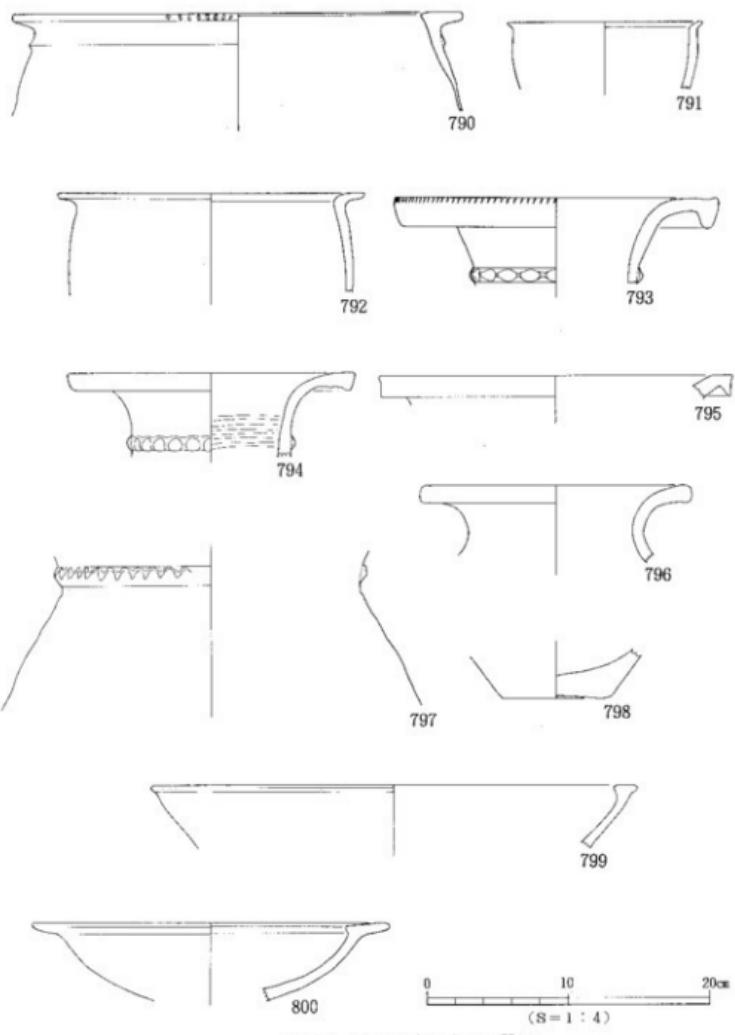


図-86 第4調査区出土土器04

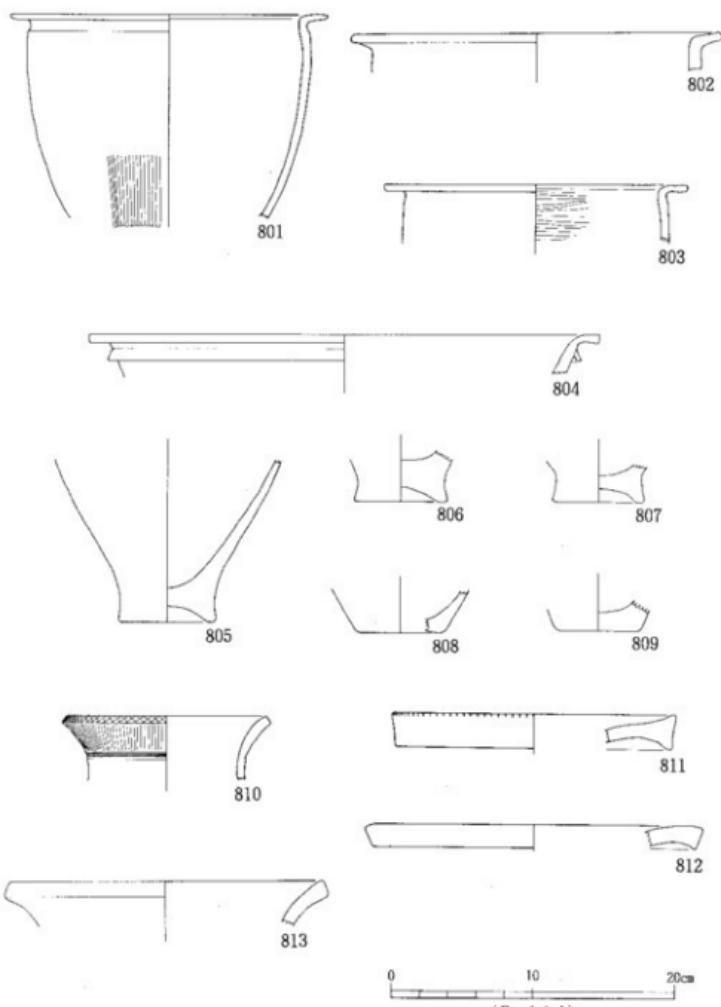


図-87 第4調査区出土土器(9)

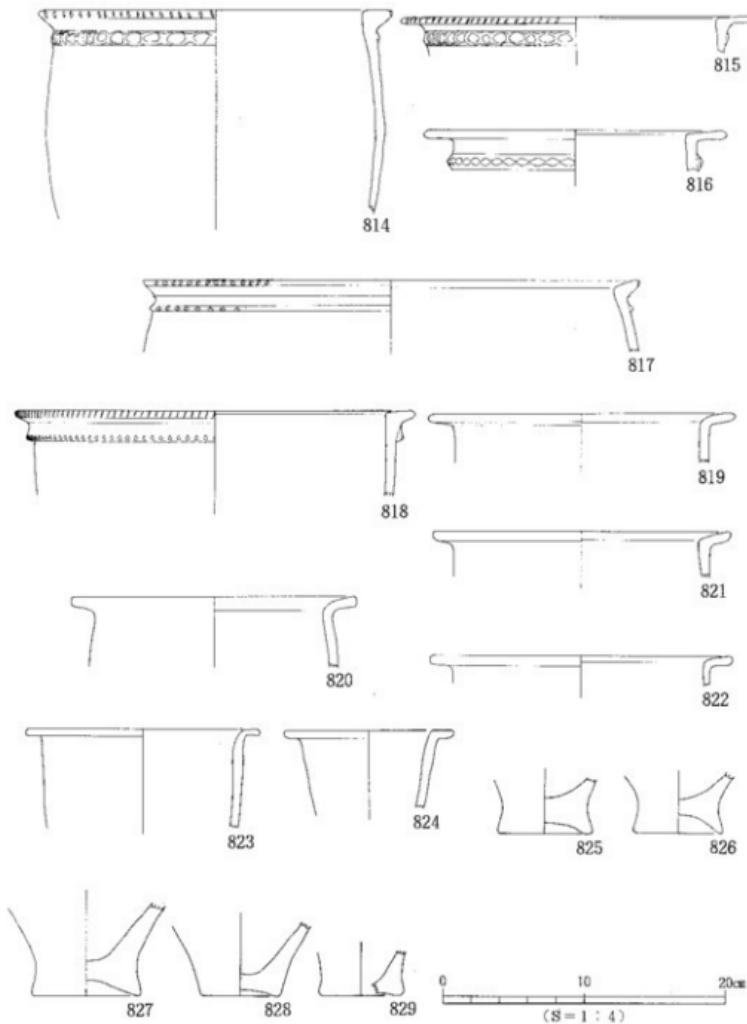


図-88 第4調査区出土土器⑩

753から761は、壺の口縁部である。

753は、口縁が「ラッパ」状に大きく開がる壺の口頸部である。口縁端部下方をやや拡張し面をなす。頸部には、断面三角形の突帯を1条持つ。

754は、頸部が「コ」の字状を呈する壺の口頸部である。口縁端部下方は、拡張され面をなし、端部下端に刻み目が施されている。口縁内面には、渦巻状の突帯文を持つ。頸部には、断面三角形の突帯を6条持つ。

755は、口縁端部上方を拡張し、口唇部に「ハ」の字状文を持つ。

口縁内面に、円形浮文を持つものが、756。断面三角形の突帯文を1条持つのが758である。

761は、口縁部が開がり、頸部が短い壺の口頸部である。口縁端部上方を拡張し面をなす。端面には、凹線文を2条施している。頸部には、指頭圧痕を施した薄い突帯を1条持つ。

762から764は、壺の底部から胴部である。762には、胴部に鋭利な工具による沈線文を持つ。

765から773は、杯部が楕形に内湾する高杯の杯部である。

765は、口縁部が屈曲し開がる高杯である。

766は、口縁部が屈曲し開がり、口縁部内方を肥厚させた高杯である。口縁部には、穿孔が穿たれている。

767と769は、口縁部が内湾気味に直立し、口縁部内外方を肥厚させた高杯である。767の口唇部には、刻み目を施している。

768は、口縁部外方を肥厚させた高杯である。口唇部には刻み目が施され、口縁直下に穿孔が穿たれている。

770から772は、口縁部内方を肥厚させた高杯である。770と772には、口唇部に刻み目が施されている。772には、口縁直下に穿孔が穿たれている。771には、杯部中位には、5条の沈線文を持つ。

773は、口唇部に刻み目を持ち、口縁部がやや肥厚させた高杯である。

774と775は、高脚の高杯の脚部である。

774は、端部がやや開がり、内面に絞り痕を残す。

第6 土器群（図-84）

4区の小谷間包含層中層の明黄褐色土出土の土器を取り上げた。776から781である。

776は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。頸部に断面三角形の突帯を持つ。刻み目が、口唇部と突帯に施されている。

777は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。

778は、口縁部が短く外傾し、頸部が「く」の字状を呈する中型壺の完形である。

781は、杯部が楕形に内湾し、口縁端部で内湾気味に直立する高杯の杯部である。

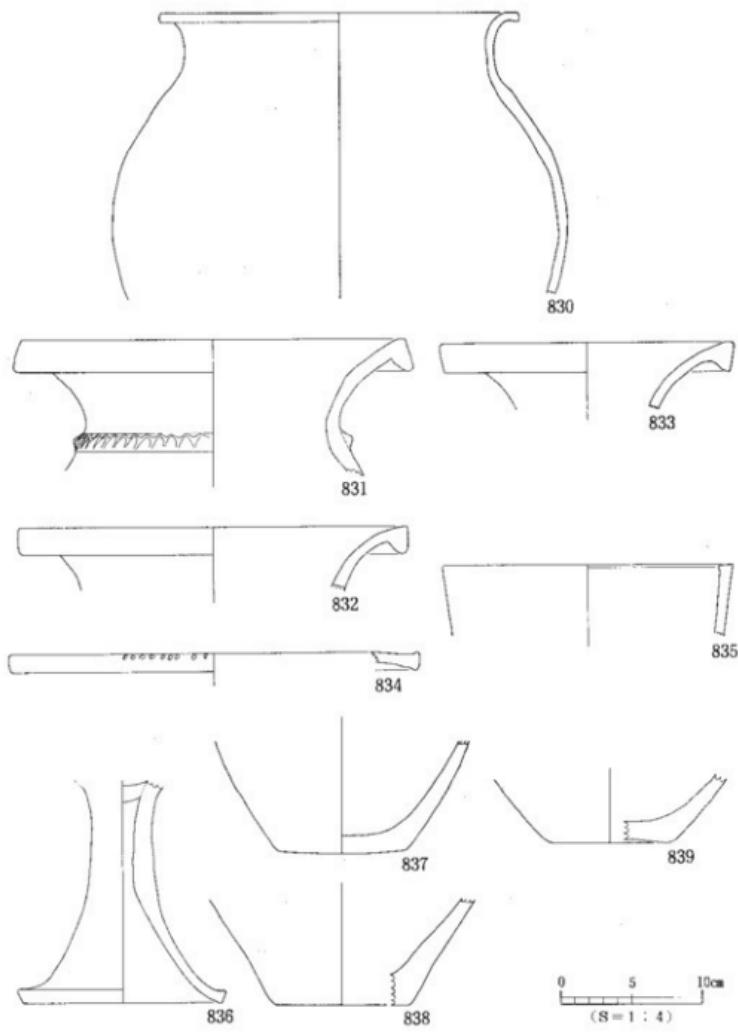


図-89 第4調査区出土土器07

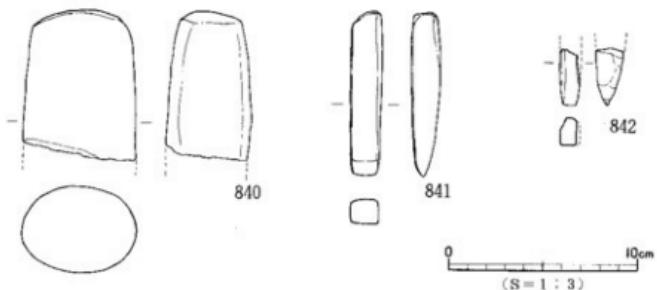


図-90 第4調査区出土石器

第7土器群(図-85)

4区の小谷間包含層中層の灰褐色土出土の上器を取り上げた。782から789である。

782は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。口縁端部は、丸くおさめられている。

783から787は、壺の底部である。787には、焼成後穿孔が穿たれている。

788は、高脚の高杯の脚部である。接合部は充填である。

789は、口縁部が大きく開がる壺の口縁部である。口縁端部下方を肥厚させ面をなす。口縁端面には「ハ」字状文が施されている。

第8土器群(図-86)

4区の小谷間包含層下層の明茶色土出土の土器を取り上げた。790から800である。

790と792は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。790は、口縁部が肥厚され、口唇部には、刻み目を施す。頸部には、薄い突帯を持つ。

791は、口縁が「く」の字状に屈曲し、胴部が張る鉢の口縁部である。

793から797は、口縁が「朝顔」状に大きく開がる壺の口頭部である。この内、793から795は、口縁端部下方が拡張された重下口縁である。793には、口唇部に刻み目を施す。又、793と794の頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。

799と800は、杯部が橢形に内湾する高杯の杯部である。口縁端部が肥厚するものが799、屈曲し開がるもののが800である。

第9土器群（図-87）

4区の小谷間包含層下層の暗黄灰土出土の土器を取り上げた。801から813である。

801から803は、口縁が断面逆「L」字状の壺の口縁部である。いずれも口縁端部は、丸くおさめられている。801の頸部は、強いナデによりややくぼみ状を呈する。

804は、口縁が断面「く」の字状の壺の口縁部である。頸部に断面三角形の突帯を1条持つ。

805から809は、壺の底部である。上げ底が805から807。平底が808と809である。

810から813は、壺の口縁部である。

810は、口縁部が短く外傾し、頸部は「く」の字状を呈する。口縁端部は肥厚し面をなす。

この口縁端面に斜格子文を施している。頸部には、沈線文を3条持つ。

811は、口縁端部下方を拡張した下垂口縁で、口唇部に刻み目を施す。

第10土器群（図-88・89）

4区の小谷間基底面直上層の乳黄褐色土、茶褐色土出土の土器を取り上げた。814から839である。

814から818は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に突帯を持つ壺の口縁部である。突帯に指頭圧痕が施され、口唇部に刻み目を持つのが814と815である。816は、突帯に指頭圧痕が施されている。817と818は、口唇部と突帯に刻み目を施す。

819から824は、口縁が断面逆「L」字状で、突帯を持たない壺の口縁部である。

825から829は、壺の底部である。

830から834は、壺の口頸部である。

830は、口縁部がやや短く外反するもので、口縁端部は単純に終わる。

831は、口縁が「ラッパ」状に開かり、頸部がやや短く、口縁端部下方が拡張されている。

頸部には、指頭圧痕が施された突帯を1条持つ。834の口唇部に刻み目を施す。

835は、無頸の鉢である。口縁部は、単純で平坦面をなす。

836は、高脚の高杯の脚部である。端部は、やや開かり単純に終わる。

837から839は、壺の底部である。

石器（図-90）

4区出土の石斧を取り上げた。840から842である。

共伴土器群は、840が第7群、841が第5群、842が第10群である。

840は、大型始刃石斧である。

841と842は、ノミ形柱状片刃石斧である。背、腹とも人念に研磨され、仕上げられている。

5 第5調査区

第5調査区は、調査対称区の南東隅近く、調査対称区の東側県道沿いに位置する。第2調査区の南側、第3調査区の東側である。第2調査区から第3調査区にかけての、南東側谷部の包含層確認の為、調査区を設定した。調査範囲は、南北5m前後、東西9m前後、調査面積約45mの小規模な調査区である。基底面の標高は、48.0m前後である。

第5調査区の上層堆積は、中層の第7層（青灰褐色土）より下層にかけて、様々な砂層や粘性土が互層になって堆積している。この堆積状況は、第3調査区の谷間からの堆積によるものと、調査対称東側に流れる丸山川の氾濫によるものと思われる。この内、遺物包含層は、第8層から第26層にかけてであった。

この遺物包含層を、土層堆積状況から2層に分層した。上層が黒色土系、下層が灰色土及び砂層系である。上層では、第8・13・17・22層が、下層では、第11・12・14・15・16・18・19・20・21・24・25・26層が相当する。

これらの遺物包含層からは、弥生時代中期中葉から後葉にかけての土器が出土している。

第3調査区との堆積層を対比すれば、第5調査区遺物包含層上層が、第3調査区の第2土器群（黒色粘質土）。第5調査区遺物包含層下層が第3調査区の3土器群（灰黄褐色土）に相当する。

遺構は、氾濫原の為、検出しなかった。

出土遺物は、収納箱約3箱で、弥生時代中期中葉から後葉の土器であった。

今回の報告書1には、実測可能な土器を全て収録した。

遺物（図-93～95）

ここでは、第5調査区遺物包含層出土の土器を収録した。

遺物包含層は、2層に分層でき、上層・下層に分けた。上層を第1群土器群、下層を第2土器群として報告する。以下、群ごとに述べる事とする。



図-91 第5調査区土層断面図

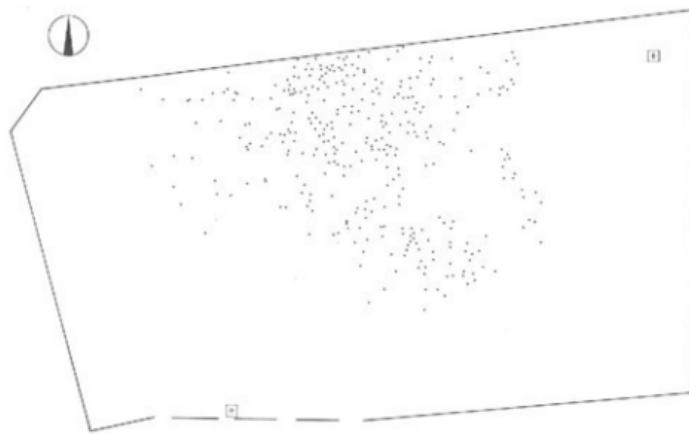
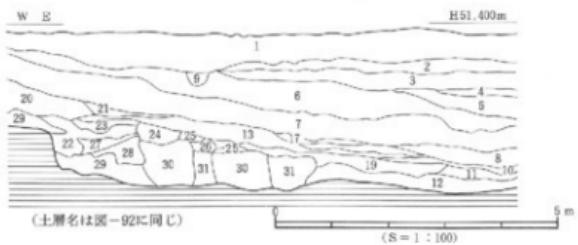


図-92 第5調査区土層断面図及びドット図

遺物出土状況

第5調査区出土の土器片の分布は、図-92に示した。土器片の平面分布は、調査区中央北側に集中している。垂直分布は、土層堆積状況と同様に、西から東に向かって下がって分布している。この分布状況から、第3調査区の谷間部の延長と考えられる。

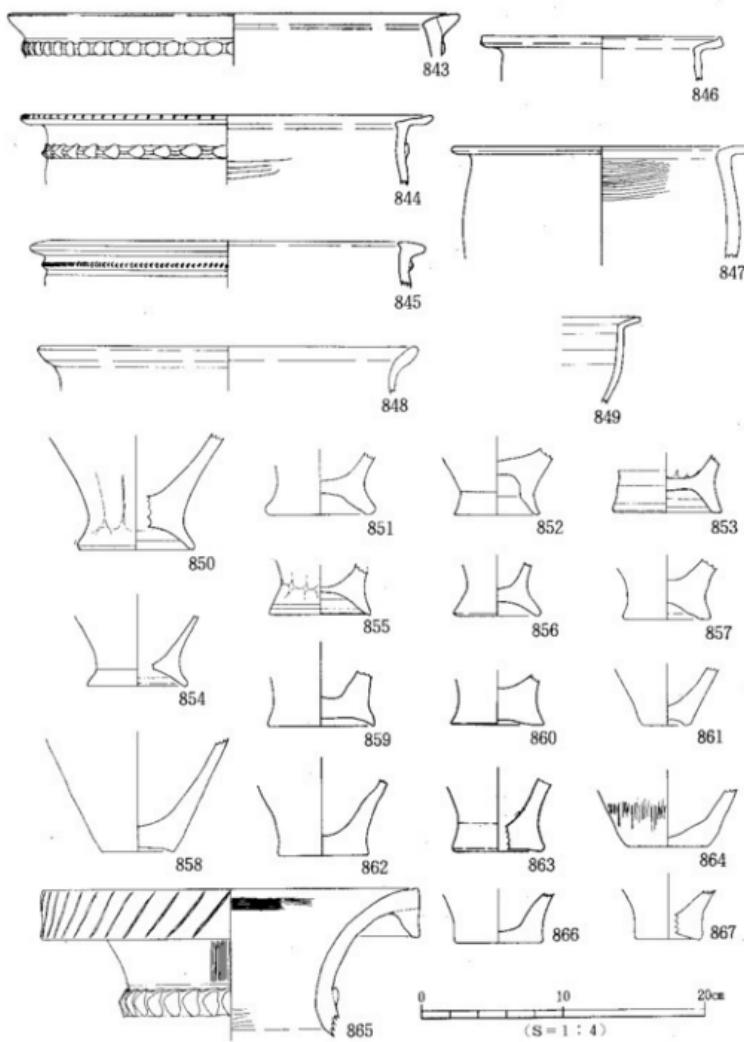


図-93 第5調査区出土土器(1)

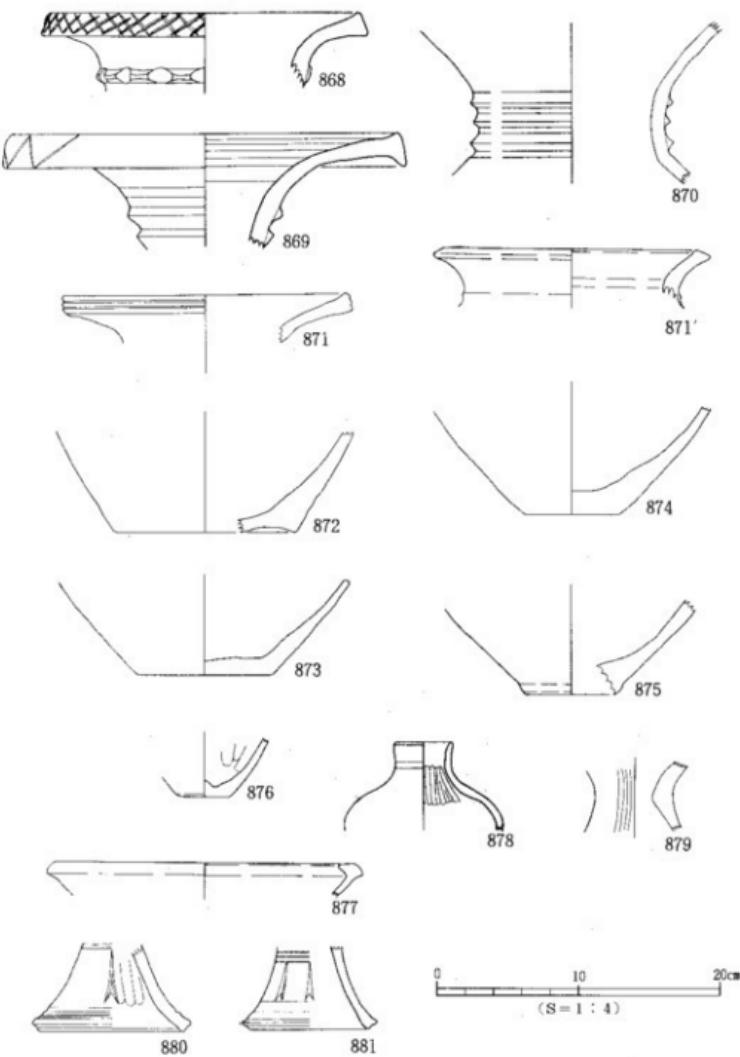


図-94 第5調査区出土土器(2)

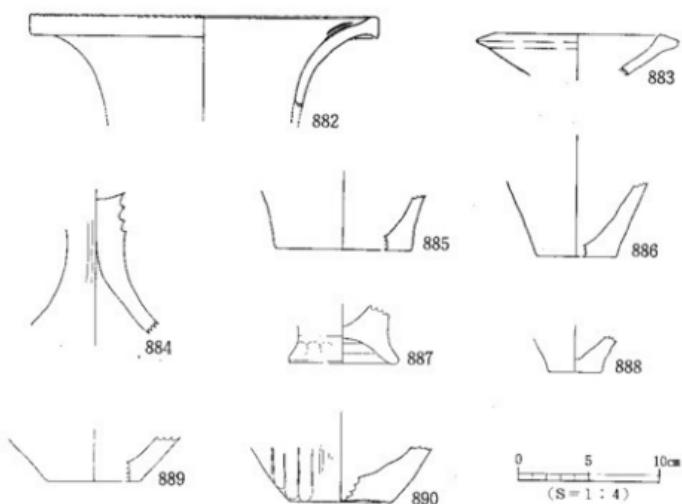


図-95 第5調査区出土土器(3)

第1群土器 (図-93・94)

第1群土器は、遺物包含層上層（黒色土系）出土の土器である。第3調査区の第2群土器群に対応する。

843から845は口縁が断面逆「L」字状で、頸部に突帯を持つ壺の口縁部である。

843は、突帯に指頭圧痕が施されている。頸部から口縁部にかけて器厚が厚く、口縁端部は、尖り気味である。

844は、突帯にやや間隔をおき指頭圧痕が施されている。頸部内面には、つまみ出しの稜を持つ。口縁端部にかけてはやや肥厚し、口唇部に刻み目を持つ。

845は、断面三角形の突帯に刻み目が施されている。頸部内面につまみ出しの稜を持つ。

846と847は、口縁が断面逆「L」字状で、頸部に突帯を持たない壺の口縁部である。

846は、口縁端部上方がつまみ上げられ、面を成す。847は、口縁端部が、尖り気味である。断面「く」の字状口縁が848と849である。

848は、口縁部はやや肥厚し、「如意」状を呈している。口縁端部は、丸くおさめられている。849は、口縁端部が面を成している。

850から867は、甕の底部である。上げ底のものは、850から857である。いずれも、突出部を持つ。852は、上げ底内面に、明確な稜を持つ。底端部は、やや尖り気味である。854は、底部に、径2.2cmを測る穿孔が、焼成後穿たれている。やや上げ底のものは、858から861。

突出部を持つものが、859と860である。

平底のものは、862から867である。この内、突出部を持つものが、862と863である。

865から871は、壺の口縁部と頸部である。

865は、口縁が「ラッパ」状に開がる口縁端部下方を拡張した垂下口縁である。口縁端部には、斜行の刻み目を施している。頸部には、指頭圧痕が施された断面「かまぼこ」状の突帯を一条持つ。

868は、口縁が「ラッパ」状に開がった口縁端部上下方をやや肥厚させた口縁である。口縁端部には、斜格子文を施している。頸部には、指頭圧痕がやや間隔をおき施された、断面「かまぼこ」状の突帯を一条持つ。

869は、口縁が「ラッパ」状に大きく開がった、口縁端部上下方をやや肥厚させた口縁である。口縁端部には、「ハ」の字状文を施している。頸部は、すぼまり逆「ハ」の字状を呈している。頸部に断面三角形の突帯を二条以上持つ。

870は、断面三角形の突帯を三条持つ頸部である。

871は、口縁が「ラッパ」状に開がった口縁端部をやや肥厚させた口縁である。口縁端部には、浅めの凹線文を二条施す。

871'は、口縁が断面「く」の字状の短頸壺の口縁である。口縁端部は、やや下方に向かっている。

872から876は、壺の底部である。872がやや上げ底。875は底部がやや突出している。

877は、杯部が椀形に内湾し、口縁部内面が断面三角形状に肥厚する杯部である。

878は、口縁が直立て、胴部が張った短頸壺である。

879は、器高が低い器台の体部である。

880と881は、脚部が開がる高杯の脚部である。脚部上位と下位に沈線を持ち、中位に「矢羽根透かし」を穿つ脚部である。

第2土器群(図-95)

第2土器群は、遺物包含層下層(灰色土及び砂質系)出土の土器群である。第3調査区の第3調査区に対応する。882~890である。

882は、口縁が「ラッパ」状に開がる壺の口縁部である。口縁端部は、やや上下方に肥厚し面をなす。

883は、口縁部が外方に肥厚する高杯の杯部である。杯部は、皿形を呈する。

884は、脚部が高脚の高杯の脚部である。内面にしづら痕を残す。

885から887は、甕の底部である。887は、上げ底である。

888と890は、壺の底部である。888は、小型品である。

第4章 祝谷六丁場遺跡出土の平形銅剣

今回実施した祝谷六丁場遺跡調査の最大の成果は、平形銅剣が一振、初めて埋納状態で出土したことである。

從来、平形銅剣は、瀬戸内地方を中心にして70本出土している。いずれも、資料性に乏しく、出土状況も伝承の域であった。

1 出土状況

祝谷六丁場遺跡は、調査区の東に流れる丸山川を望む2つの分岐丘陵に挟まれた丘陵面から丸山川左岸にかけて立地する。

平形銅剣埋納塚は、祝谷六丁場遺跡調査区南端側の中央西寄りから検出した。

調査区で言えば、第3調査区中央南寄りで、第3調査区東西にわたって検出した遺物を包蔵する谷間の南側肩部からである。谷間の南側肩部が、丁度、第3調査区南側の後背地に位置する分岐丘陵の斜面裾部である。標高は、57.6mである。

この平形銅剣埋納塚は、谷間の埋土第3層黒色粘質土上面からの掘り込みで、埋土が同じ黒色粘質土で第3層より粘質が強い事と微妙に土色の黒味が薄い以外違いがない。この為、第3層黒色粘質土上面の精査段階では、検出できずに包含層の掘り下げ調査を進めた。

この包含層掘り下げ中に、平形銅剣が出土し、出土地点周辺の精査により埋納塚を検出した。

平形銅剣埋納塚は、平形銅剣が出土してから精査を行った。精査時には、埋納塚の内半分以上が掘り下げられていた。

まず、残存の平面プランの確認を行った。残存部の面が地山黄褐色粘質土にかかっており、平面プランが確定できた。ベルトを設定し、埋納塚内の掘り下げを行った。

埋納塚の規模は、上端面で長軸推定67cm、短軸推定28cm。基底面で長軸47cm、短軸推定16cm。

深さ17cmを測る。平面プランは、長軸を北西にとる長楕円形を呈すると思われる。長軸はN-51°-Wを測る。

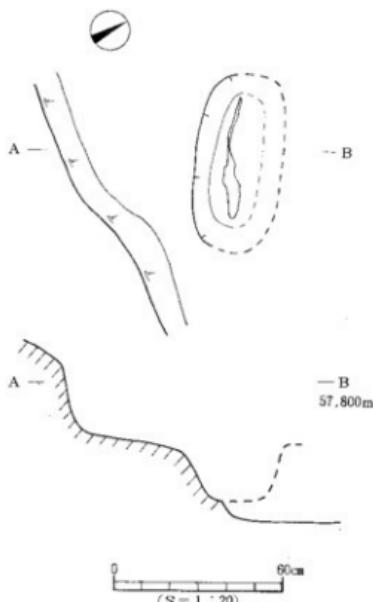


図-96 平形銅剣埋納塚平断面図

埋土は、粘性が強い黒色粘質土であった。

埋納壙内からは、平形銅剣以外出土遺物は、なかった。

平形銅剣は、掘り下げ時の破損の為に残存形態は不明瞭であった。平形銅剣の残存は図-97で示した刃部の柄の中心部分から棘状突起及び身元にかけての他、刃部の破片7点及び身や鍔の細片であった。刃部の破片を復原すると、刃部は圓化した残存長しかなく、他は、腐食していた。しかしながら、埋納壙の基底部には、平形銅剣の刃部が粘土に変質して帶状に残っていた。これを埋納壙の基底部に残っていた鍔と平形銅剣と合わせると、身元から刃部の粘土までつながる。これを元に、平形銅剣を測ると約46cmであった。

平形銅剣の埋納状況は、基底面に残存していた平形銅剣の変質した粘土が、ややねじれて斜めに残っていた事と、基底面に残存していた鍔の状況も斜めに残っていた事から、埋納時には、刃部を北に向け、垂直に埋納されていたと思われる。

又、埋納壙の基底部長軸が、平形銅剣の全長より1cmしか長くない事から、平形銅剣の規模を意識して、埋納壙を掘削したものであろう。

(宮崎)

2 平形銅剣 (第-97図)

埋納壙出土の平形銅剣は、いろいろな面で原形に変化が生じている。その主なるものは、次の3点である。①原体の損壊が著しい。棘状突起より下方は比較的残りがよいが、それより上部は、棟とその周辺を残すのみで、先端部、刃部はほとんど消失している。②圧力による変形がある。棘状突起直下と棘状突起上方10cmの二箇所で屈曲がみられる。前者が屈折気味に強く、後者がゆるやかに曲がっている(縦断面図参照)。③鋳化が著しい。全面綠青に覆われているが、鍔と泥・小砂が一体となって固着し、全面に泥が膜状に、部分的に泥・砂が斑状にこびりついている。鋳化が著しく進行し、青銅色をなす本体は、銅器の芯の部分 0.3~1ミリの厚さでわずかに残るだけである。

①の原因として埋納後の鋳化損失が考えられ、鉛相当部には、綠青が埋納壙に付着残存していた。②としては、埋納後の土圧による変形が考えられる。先記の綠青は、垂直から斜位方向に土壁に付着していたが、銅剣は水平に出土した。これは、銅剣が他の青銅祭器と同様、垂直位に埋納されていたのが、上方からの土圧によって水平位になったと考えられ、その際銅剣にも圧力がかかったものとみられる。③は、浅い谷間の斜面に埋納されたため、水分を多量に含んだ土色に覆われ、また常に水を被るため酸化が早く進行したものとみられる。

銅剣の外形は、図の葉部左縁の中央より下方に1.3cm、同右縁の突起直下に3cmの原形線を残すのみで、他は損失していて、適確な外形を復元するのは困難である。闕の直上に、この種の銅剣にしばしば見られる端部膨らみがあり、現状で下場が闕に近いことを示しているので、突起より下部はほぼ原形に近いものとみていい。これらを参考に、銅剣の型式をみると、①棟に鍔や面取りの線がない。②刃方はなく、刃部内縁が、突起右側を経て、突起下方にまで通じている。③突起茎部

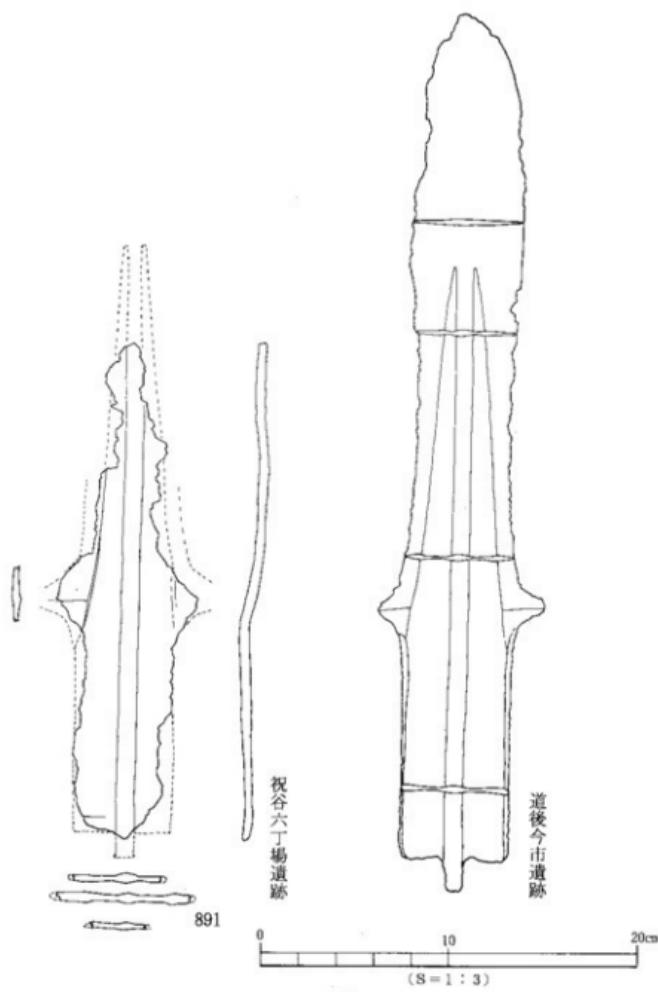


図-97 平形銅劍実測図(1)

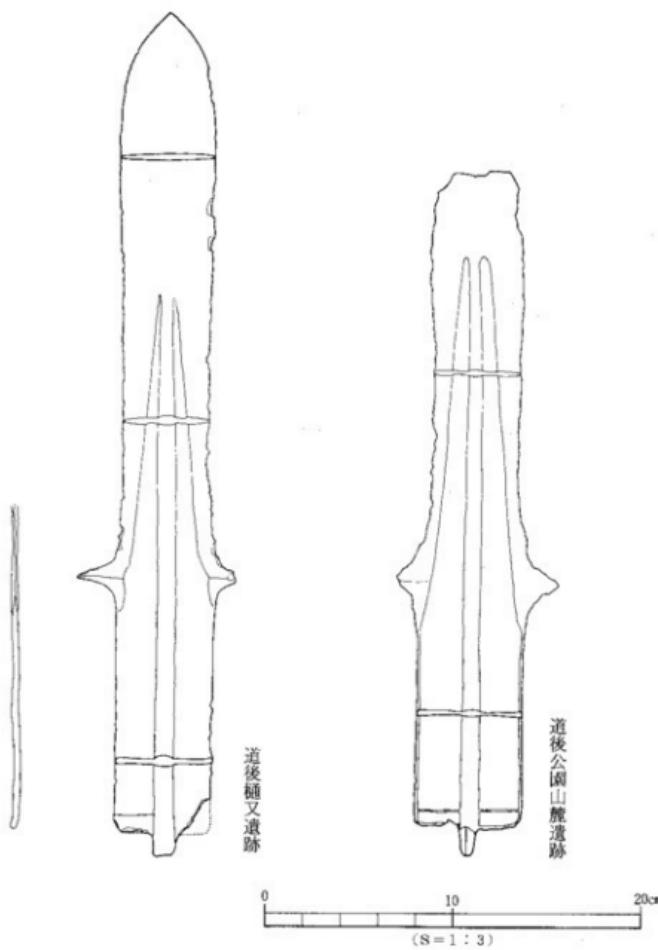


図-98 平形銅劍実測図(2)

幅が拡大している。④棟幅が狭く（1cm）、葉部幅が広く（5.2cm）となっている。等の特徴を指摘することができる。これらが示すところは、平形銅劍新式の特徴に合致するものである。新式の中における新古の位置づけは、突起の形状とそれより上部の形状によって決まるので、それが破損しているこれそのものでは決し難い。

発掘時の鉢部かと考えられる鋸の位置から長さを復元すれば、全長（鉢～関長）は46cmとなり、松山市一万出土の最終段階の平形銅劍に近くなる。関には横位隆線などの装飾は全くない。（下條）

3 小 結

この平形銅劍は、弥生時代に於て北部九州に伝播された船載の細形銅劍から派生した。日本製の中細形銅劍が退化し派生したもので、瀬戸内海を中心とする地域に分布を見ることができ、特に愛媛・香川県の出土が多い。又、今までの出土例は、詳細な調査からではなく、出土地点や出土状況が伝承の域をでなかったものである。祝谷六丁場遺跡出土が西日本における平形銅劍の初めての調査例出土と言える。

愛媛県下の平形銅劍は、従来は計40口の出土が知られていた。その分布は、宇摩・新居浜平野から3口、周桑平野から8口、今治平野から5口、宇和盆地から3口、松山平野から21口である。この祝谷六丁場遺跡出土が、県下41例目である。

この松山平野出土の六丁場出土の1口を含めた22口は、本遺跡を含む道後城北遺跡群からの出土である。丘陵山間部からは、六丁場出土のみで、他は、丘陵近くの平野部から道後今市遺跡（10口）道後越又遺跡（8口）、道後公園山麓遺跡（3口）である。何れにしろ、他の県と比べても、この遺跡群からの出土数が多い。

この事は、松山平野において、弥生時代に中期から後期及び古墳時代にかけて遺跡が集中しており、中心的な地域と言える要因になっている。

本章の2項において述べられた様に、祝谷六丁場遺跡出土の平形銅劍は、道後今市遺跡出土の平形銅劍に近似している。

平形銅劍は、従来近藤喬一氏などが型式分類を行っている。道後今市遺跡出土の平形銅劍は、近藤氏の分類に従えば、平形銅劍の内、最も出土量が多い最終型式の平形銅劍BⅡb式にあたる。このBⅡb式は、株状突起下方に剣形がなく、柄の線が直線的に走るものである。

又、今回の出土により、出土状況から埋納段階には、平形銅劍を横に置き、立てて埋納されていた可能性が高く。従来から推測されていた立てて埋納されていた事が、実証されたといえるし、平形銅劍に於ては、複数埋納と推測されてきたが、1口単独埋納の事実を示したと言える。（宮崎）

第5章 祝谷六丁場出土遺物について

祝谷六丁場遺跡からは、本報告書未載分を含め多量の遺物が出土した。ここでは、土器、石器、分銅形土製品他を取り上げる。以下、上器から述べる事とする。

土器

祝谷六丁場遺跡からは、弥生時代中期中葉から後葉にかけて、多量の上器が出土した。以下、器種ごとに分類を試みるとともに、基本遺物包含層を、上中下3層に分層し、下層六丁場I式、中層を六丁場II式、上層を六丁場III式として、ここでは、若干の検討をすることにする。

I式には、2区の第12から15、17土器群。3区の第7土器群。II式には、2区の第5から11、16土器群。3区の第5・6土器群。4区の土器群と第3から第10上器群。5区の第2土器群。III式には、2区の第1から4土器群。3区の第1から4上器群。4区の第1・2土器群。

5区の第1土器群がそれぞれ相当する。以下、形態分類後に、式別に述べる事とする。

甕

甕は、口縁部形態等で分けた。口縁部の拡張に関しては、aが肥厚しないもの。bが上下方に肥厚するもの。cが上方に肥厚するもの。dが下方に肥厚するもの。とした。

甕A I類 突帯を持ち、断面「く」の字状口縁、口唇部に刻み目

甕A II類 突帯を持ち、断面「く」の字状口縁、口唇部に刻み目無し

甕A III類 突帯を持ち、断面逆「L」字状口縁、口唇部に刻み目

甕A IV類 突帯を持ち、断面逆「L」字状口縁、口唇部に刻み目無し

甕B I類 断面「く」の字状口縁、口唇部に刻み目

甕B II類 断面「く」の字状口縁、口唇部に刻み目無し

甕B III類 断面逆「L」字状口縁、口唇部に刻み目

甕B IV類 断面逆「L」字状口縁、口唇部に刻み目無し

壺

壺は、口縁部形態等で分けた。口縁部の拡張に関しては、aが拡張せず平坦なもの。bが上下方に肥厚するも。cが上方に肥厚するもの。dが下方に肥厚するもの。eが大きく拡大し垂直するもの。fが大きく拡大し斜め下方に屈曲するものとした。

壺A I類 口縁が「ラッパ」状に大きく開がり、頸部が短いもの

壺A II類 口縁が「朝顔」状に大きく開がり、頸部がやや短いもの

壺A III類 口縁が「漏斗」状に大きく開がるが、頸部が筒状にならないもの

- 壺B I類 口縁がやや短く外反するもので、端部が単純なもの
壺B II類 口縁がやや短く外反するもので、端部が肥厚する大型品のもの
壺C I類 口縁が短く外傾し、頸部が「く」の字状のもの
壺C II類 口縁が逆「L」字状で、頸部が「ハ」の字状のもの
壺D I類 頸部の屈曲が緩く、胸部があまり張らない短頸壺
壺D II類 頸部の屈曲が強く、胸部が張る短頸壺
壺E I類 脚部が強く張り、口縁端部が肥厚し平坦面をなす無頸壺
壺E II類 脚部が強く張り、口縁端部が肥厚し丸く終わる無頸壺
壺F類 直口壺

鉢

鉢の口縁形態で分けた。

- 鉢A類 口縁が「く」の字状で彫形のもの
鉢B類 口縁が無頸のもの

高杯

高杯は、杯部（A・B・C・D）と脚部（I・II）の形態で分けた。

- 高杯A I類 杯部がやや内湾し、口縁部が屈曲し開がるもの、脚部が高脚のもの
高杯A II類 杯部がやや内湾し、口縁部が屈曲し開がるもの、脚部が低脚のもの
高杯B I類 杯部がやや内湾し、口縁部が肥厚するもの、脚部が高脚のもの
高杯B II類 杯部がやや内湾し、口縁部が肥厚するもの、脚部が低脚のもの
高杯C I類 杯部が外上方に直線状にのび、脚部が高脚のもの
高杯D類 杯部が楕形で口縁端部が内湾気味に直立し稜線を持つもの

六丁場一式

基本遺物包含層下層出土の土器を取り上げた。2・3区出土の土器である。

甕は、甕A I類（586・346）。甕A M類（347）。甕B II類（290・343）。甕B III類（341・342など）。甕B M類（287・289・349）が出土している。このうち甕B III類の341には、頸部下に沈線文を5条持つ。いずれも口縁部拡張は、aである。

壺は、壺A II類（291・359・360・583）。壺A III類（361）。壺B II類（357・362）が出土している。このうち壺B II類の357は、中期前葉段階の系統である。このうち壺A II類の583は、頸部の突唇を2条持つ。口縁部拡張は、b、d、fである。

鉢は、鉢A類（286・381）が出土している。頸部に穿孔が穿たれている。

高杯のうち、杯部A類（378・379）。杯部B類（371～377）。脚部II類（292・380）が出土している。

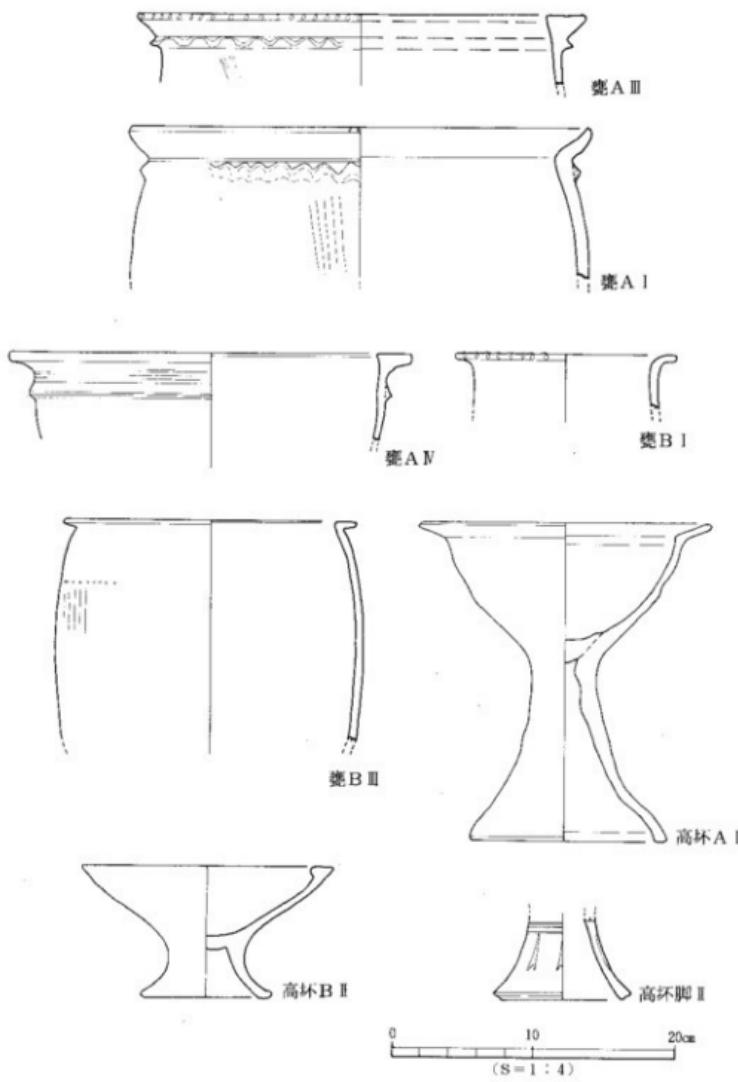


図-99 祝谷六丁場型式分類(1)

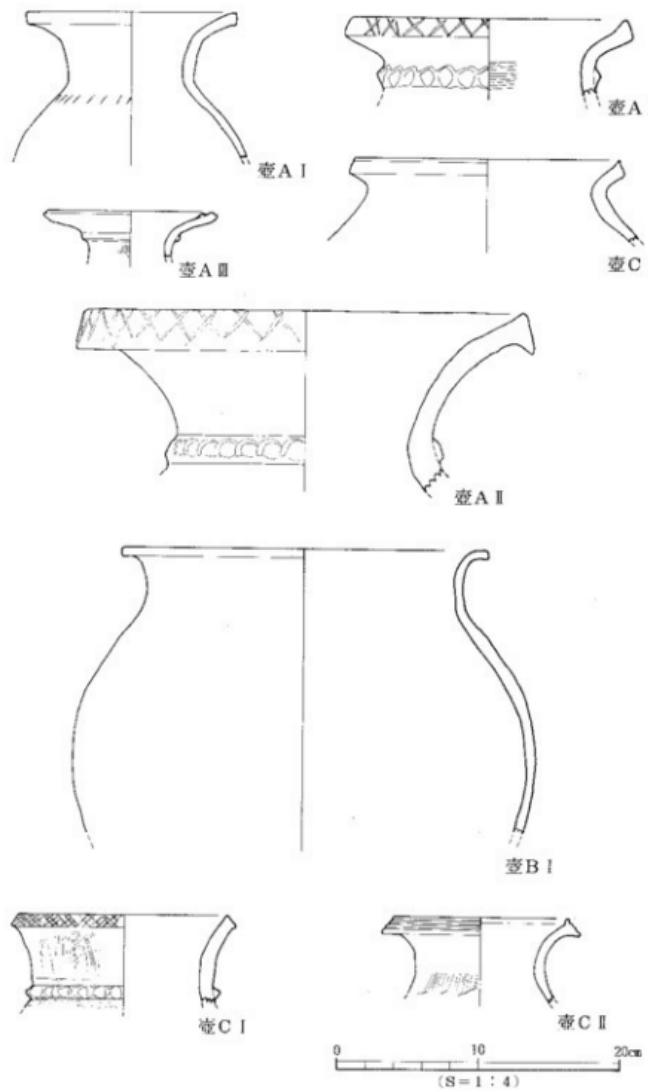
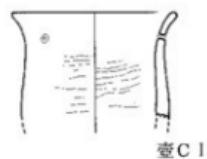


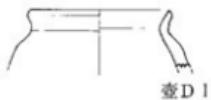
図-100 祝谷六丁場型式分類(2)



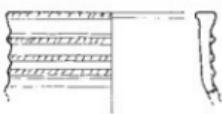
壺C I



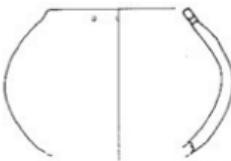
壺D II



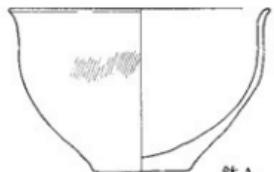
壺D I



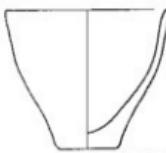
壺F



壺E II



鉢A



鉢B



鉢B



図-101 祝谷六丁場型式分類(3)

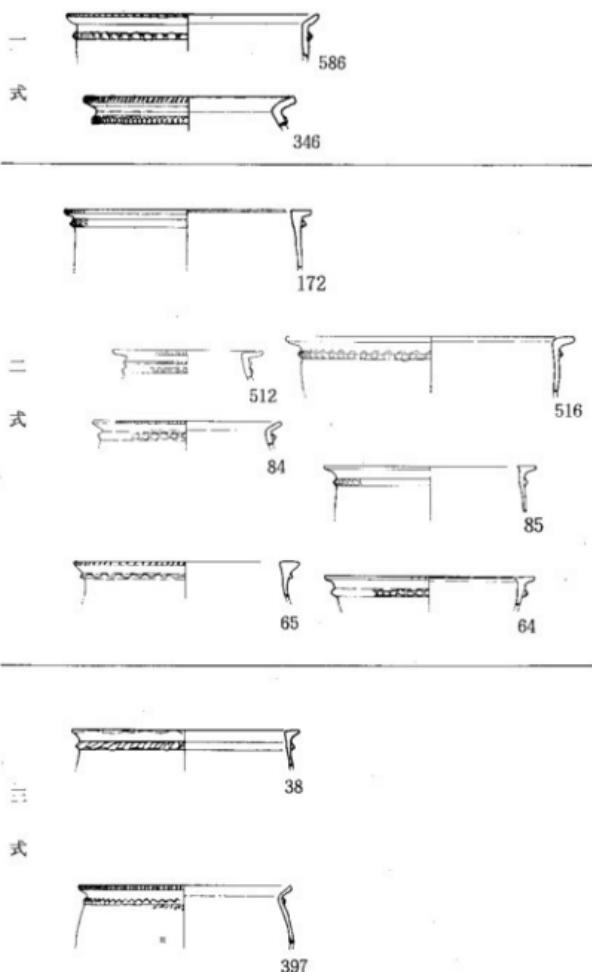


図-102 祝谷六丁場出土櫈

一
式



341



290



80

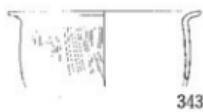


193

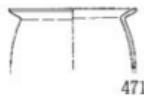


202

二
式



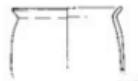
343



471



102



442

三
式



28



401

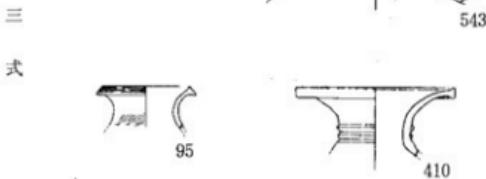
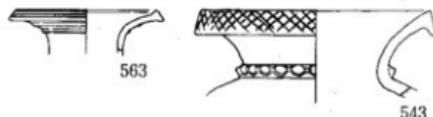
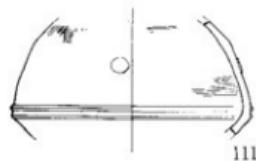
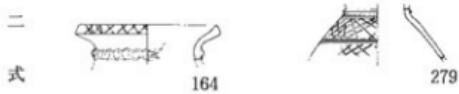
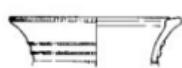


図-103 祝谷六丁場出土壺

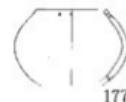
式



230

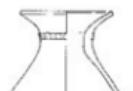


561



177

式



485



501



97



434



109



45

式



77



33

一

式



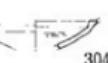
337



534

二

式



304



573



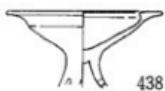
207



574

三

式



438

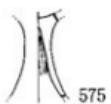


35

图-104 祝谷六丁場出土高环

一

式



575



267



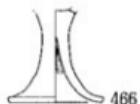
577



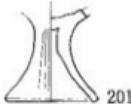
576

二

式



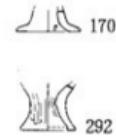
466



201



295



170



292



47



440



62

三

式



396

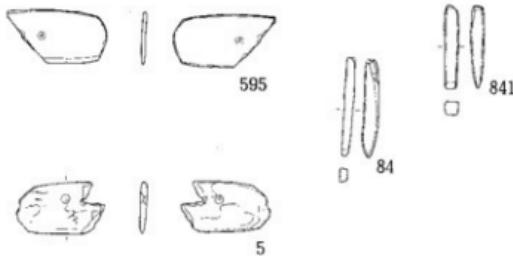
一
式



594

602

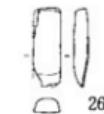
二
式



595

841

5



6

26

三
式



7



630

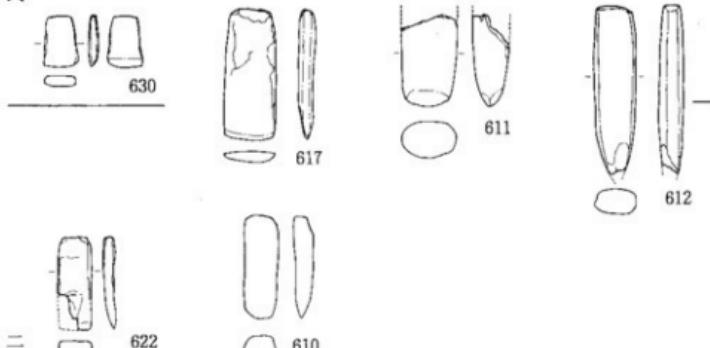


591

圖-105 祝谷六丁場出土石包丁・石斧

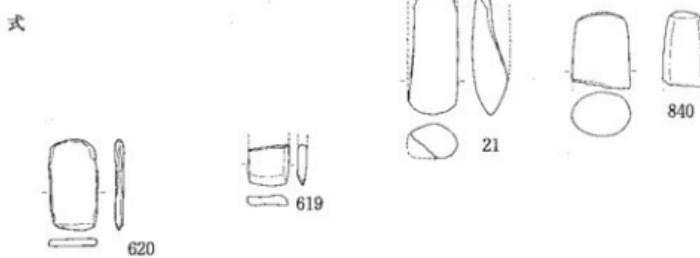
一

式



二

式



三

式



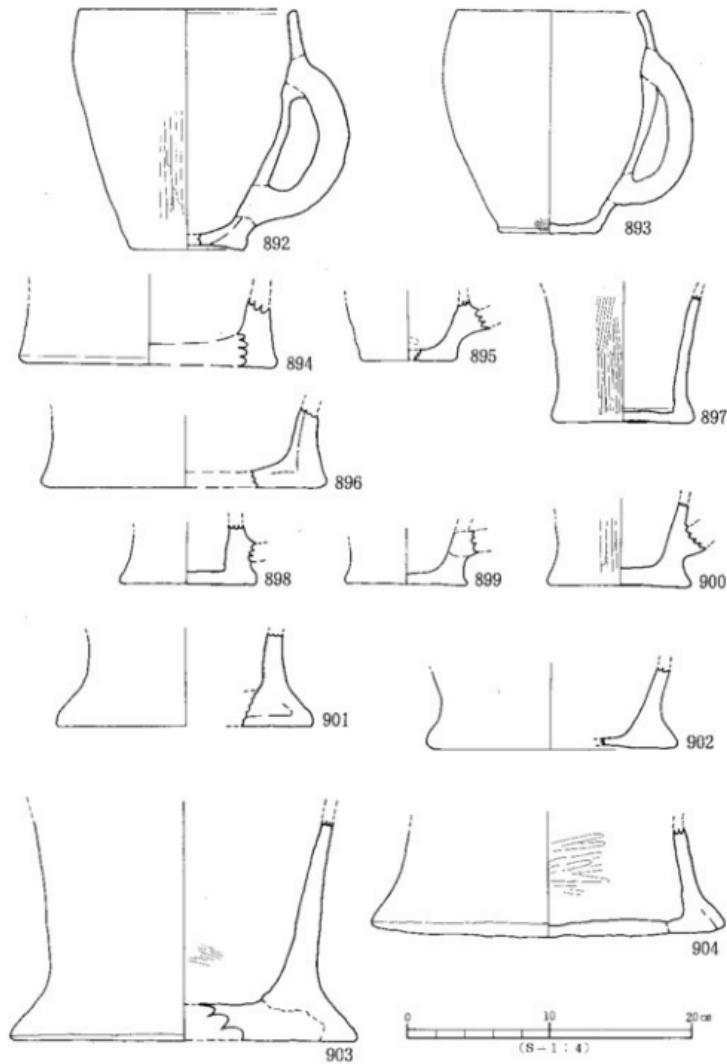


図-106 祝谷六丁場出土ジョッキ形土器

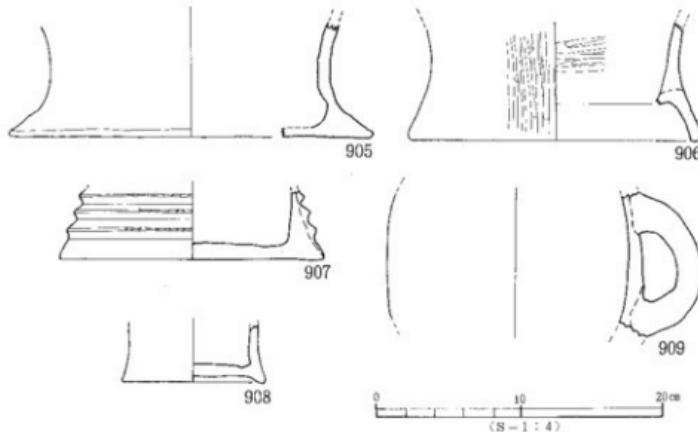


図-106 祝谷六丁場出土ジョッキ形土器

六丁場二式

基本遺物包含層中層出土の土器を取り上げた。2から5区の土器である。祝谷六丁場遺跡出土土器の主体である。

甕は、甕A I類 (670)、甕A II類 (98・99・173・179・467・673・711・731・734・746)、甕A III類 (172・306・512から515・517・709・726・727・729・738・776)、甕A IV類 (100・131・132・147・192・307・...・468・470・643・696から698・710・712・725・728・730・733・735・736)、甕B I類 (737)、甕B II類 (103・106・108・142・175・184・194・208・308・471から475・520・521・644・646・699・713・714・739)、甕B III類 (180・518・740・790)、甕B IV類 (104・105・107・133から137・144から146・148・174・182・183・185・186・193・202から204・297・309・310から313・476・477・522から525・634から639・641・645・653から656・677から681・715・716・741から745・777・782・792・801から803・819から824) が出土している。II縁部の拡張は、aが多く、b、c、dもある。

甕A類の突帯に指頭圧痕を施すのがほとんどであるが、刻み目を施すものが、III類では776、IV類では710・736、何も施さないものが、II類では98・731、IV類では131・132・468・776がある。甕A II類の179・746には、凹線文を持つ。甕A III類の512は、突帯を2条持ち、刻み目と指頭圧痕を施す。

壺は、壺A I類（156・500）。壺A II類（112から115・164・165・197から199・298・299・322から326・486から494・543から554・683・686から689・701・717・718・753から758・793から795・831から834・882）。壺A III類（118・119・168・329・485・497から499・501・555・648・690・883）。壺B I類（558から560・778・830）。壺B II類（167）。壺C I類（546・561・810）。壺C II類（562・563・761）。壺D I類（45）。壺E II類（122・177・196）。壺F類（120・580）が出土している。口縁部拡張は、eが多くなり、a、b、c、dである。

壺A I類は、胴部上位に列点文を持つ。

壺A II類は、頸部に突帯文を持つのが多い。突帯が1条のもの、164・199・494・543・683・717・753・793・794・831。突帯が2条のものが112。突帯が3条のものが701。突帯が6条のものが754である。主体は、器厚が厚い中型からやや大型の壺である。

壺A III類の内、凹線文を持つものが、118・119・690。頸部に突を持つ小型壺が、168。

頸部に突帯を持つ中型壺が、485。口縁部に刻み目を持つものが、497。口縁部に「ハ」の字状文を持つものが555。又、501は、長頸壺で、直交し粘上組が2条貼りついた突帯5条持つ。壺B II類の167には、四線文を持つ。

壺C I類は、いずれも口唇部に刻み目を持つ。291には指頭圧痕の突帯1条。561には頸部に刻み目を持つ突帯3条。810には頸部に沈線文を持つ。

壺C II類は、いずれも口縁部に凹線文を持つもので、562と761に指頭圧痕の突帯を1条。

563の頸部上位に突帯を2条持つ。

壺E II類の177には、口縁直下に穿孔が穿たれている。122も同型である。

壺F類の内、120は、口縁が複合口縁で、凹線文を2条持つ。

鉢は、鉢A類（510・581・791）。鉢B類（154・509・835）が出土している。

鉢B類の154は、突帯を1条持ち、口唇部と突帯に刻み目を持つ。

高杯は、高杯A I類（569）。高杯B II類（721）。杯部A類（570から572・765・766・800）。

杯部B類（207・304・334・335・336・573・574・720・722・767から773・781・799）。脚部I類（126・127・201・507・508・575・723・774・775・836・884）。脚部II類（125・129・295・576から579・724）。高杯C類（337）が出土している。

高杯の内、杯部に刻み目を持つものが、334・767・773。杯部に穿孔に穿されているものが、766・207・722。杯部に刻み目を持ち穿孔されているものが、768・772である。

脚部に透かしを持つものは、II類のみである。透かしの形状は、丸みを持つ「三角形」状が576、「長方形」状が577である。又、295には、脚部に3条の沈線文を持つ。

六丁場三式

基本遺物包含層上層出土の土器を取り上げた。2から3区の土器である。

甕は、甕A I類（83・84・234・388・397・670）。甕A II類（36・37・268・673）。甕A III類（27

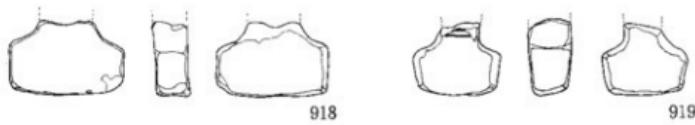
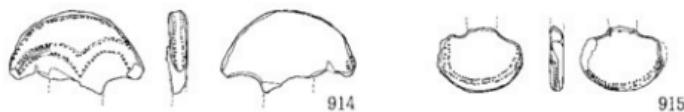
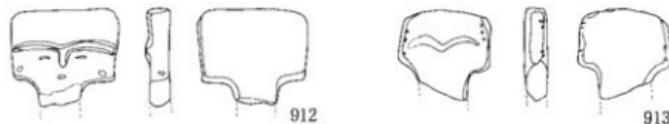
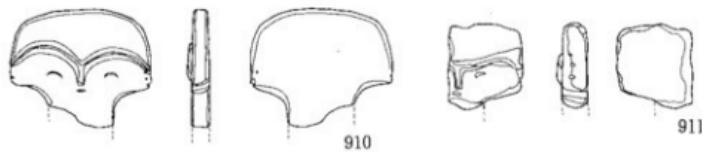


図-107 祝谷六丁場出土分銅形土製品

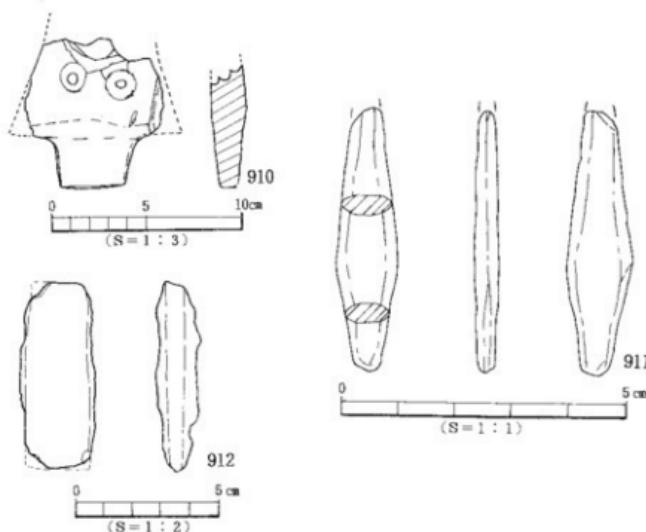


図-108 祝谷六丁場出土石戈・磨製石鎌・鉄斧

・38・48・64・65・418・419・844)。甕A N類(41・49・63・82・85・235から237・86・417・671・672・674・843・845)。甕B II類(50・51・68・87・88・238から244・271・273・400・401・442・848)。甕B III類(28・43・44・52・245・398・399・441・653から655・677から681・846・847)が出土している。口縁部拡張は、aが多く、b、c、d、fである。

甕A類の突帯に指頭圧痕を施すのがほとんどであるが、刻み目を施すもの、III類では418。N類では845である。何も施さないもの、I類では234。III類では27である。壺は、壺A II類(30・58・71から73・77・93・225から229・394・395・410から412・430から434・451から453・683から688・865・868から869)。壺A III類(75・76・78・94・230・277・432・455・456・871)。壺B I類(32・457)。壺B II類(31・74・232・248)。壺C II類(95)。壺D I類(232・420)。壺D II類(33・45)。壺E I類(231)。壺F類(878)が出土している。口縁部拡張は、aからdである。

壺A II類は、頸部に突帯を持つものが多い。突帯が1条のもの、30・73・683・865・868。突帯が2条のもの、410。突帯が3条のもの、870。突帯が6条のもの、684。

頸部に沈線文を持つもの、434である。口縁部に凹線文を持つもの、77・93・229である。

口縁内面に突帯文を持つものが394・412・451。円形浮文を持つものが452である。

壺AⅢ類の内、凹線文を持つものが277・871。頸部に突帯を持つ小型壺が75・76である。

壺CⅡ類の口縁には、凹線文を持つ。

壺EⅠ類の231は、4条の突帯を口縁直下に持ち、口唇部と突帯に刻み目を持つ。

鉢は、鉢A類（284・389）。鉢B類（53・67・267・669）質が出土している。

鉢A類の389の頸部に、指頭圧痕を施す突帯を1条持つ。鉢B類の67には、突帯を1条持つ。

高杯は、高杯AⅡ類（438）。高杯D類（60）。杯部A類（46・261）。杯部B類（35・260・265・416・439・464・667・690・877）。脚部A類（47・96・262・285・396・466）。脚部B類（61・62・81・263・264・266・440・668・691・879・880・881）が出土している。

高杯の内、杯部に刻み目を持つものが、261・35・260。杯部口縁部に凹線文を持つものが265・67・690である。

脚部に透かしを持つものの内、透かしの形状が、丸みを持つ「三角形」状が438・396。「円孔」が262である。又、沈線文を持ち、「矢羽根」透かしのものが266・880・881である。

六丁場一～三式については、第7章で述べることにする。

ジョッキ形土器（把手付鉢）

ここでは、祝谷六丁場遺跡出土のジョッキ形土器を取り上げた。図-105・106の892から909である。このうち、本章の六丁場二式出土が892から904。六丁場一式出土が905から909である。

892と893は、底部から胴部中位にかけてはやや外方にび、口縁端部にかけては、やや内湾気味に直立している。把手の接合は充填である。892の底部はやや上げ底で突出部を持つ。

894と896から900は、突出部を持つ平底の底部である。把手の接合は、貼り付けが898と900。

充填が899である。895は、突出部を持たないやや小型の底部である。把手の接合は、貼り付けである。901から905は、突出部が大きく断面「L」字状を呈するやや大型の底部である。

904の底部から胴部にかけては、やや内方に向い立ち上がっている。905の突出は大きい。

906は、やや大型の高台付き底部である。丁寧なヘラ磨きが施されている。

907は、突出部を持つ底部で、刻み目が施された断面三角形の突帯を3条持つ。908は、突出部を持つ、やや上げ底の底部である。909は、把手付きの胴部である。やや脛が張っている。把手の接合は、貼り付けである。

以下、形態分類を試みた。

ジョッキ形土器A類 底部に突出部を持たないもの（892・893・895・909）

ジョッキ形土器B類 凸部を持ち、中型のもの。（894・896～900、906・908）

ジョッキ形土器C類 凸部が大きく断面「L」字状を呈する大型のもの。（901から905）

六丁場一式出土をジョッキ形土器の「古」段階。六丁場二式出土を「新」段階とする。

A類では、「古」段階で把手部が直立気味であるが、「新」段階で下方が内向し、口縁端部が内湾する傾向になる。B類では、「古」段階でやや上げ底もしくは高台付の底部が、「新」段階には、平

底化する。C類では、「新」段階になると、「古」段階の強調した突出部や突帯による装飾がなくなり、簡略化される。

このジョッキ形土器は、從来、把手付き鉢と呼ばれ、松山平野や瀬戸内地方からも出土例が知られていたが、出土例は少なかった。時期は、弥生時代中期に限定されていた。

ここで言うジョッキ形「古」段階は、六丁場一式出土で弥生時代中期中葉の古段階と考えられ、ジョッキ形土器の出現期と考えられる。これが、ジョッキ形土器の「新」段階の中葉の新段階六丁場二式に続き、出土量が多くなる。しかしながら、中期中葉から後葉段階にかかる六丁場三式段階には、出土が皆無であった。

又、未整理の土器があることから、このジョッキ形土器の資料が多くなると思われる。

分銅形土製品

分銅形土製品は、近畿から瀬戸内地方にかけて出土する人面を表現した土製品である。

祝谷六丁場遺跡から10点出土している。1点を除き包含層出土である。(図-107の910から919)

この内、六丁場二式出土で弥生時代中期中葉の新段階のものが910から912・915・917。六丁場三式出土で中期中葉新段階から後葉段階のものが、913・914・916・918・919である。

910は、闊丸方形をくりこんだ形状で、眉を突帯文で表し、顔面を具象的に表現している。

穿孔を持つ。911と912は、方形をくりこんだ形状で、眉を突帯文で表し、顔面を具象的に表現するもの。穿孔を持つ。913は、方形をくりこんだ形状で、眉を突帯文で表し、顔面を抽象的に表現するもの。穿孔を持つ。914は、分銅形で、眉を突帯文で表し、顔面を抽象的に表現するもの。刺突文を施す。915は、分銅形で、刺突文を施すもの。916は、分銅形で、刺突文と沈線文を施すもの。917から919は、表現のないもの。分銅形が917。方形をくりこんだ形状が918と919である。

祝谷六丁場遺跡出土の分銅形土製品の内、顔面を具象的に表現するものは、弥生時代中期中葉新段階の六丁場二式出土であった。

石戈 (図-108の910)

石戈は、1点出土した。第1調査区の谷間内西端近く、包含層の下層第6層からの出土である。基本遺物包含層の下層の弥生時代中期中葉の古段階の六丁場一式の施棄であろう。

この石戈は、関が直線的で、平面台形の茎を持ち、関から茎への転換がややなで肩であり、九州型石戈のB b型式の特徴である。材質は、軟質な緑泥片岩である。

磨製石鎌 (図-108の911)

磨製石鎌は、第2調査区の包含層下層からの出土である。基本包含層下層の弥生時代中期中葉古段階の六丁場一式にあたる。形状は、葉部及び茎部が細長く、葉部の一部を欠いたもので残存長4.65cm、厚さ0.3cmを測る。材質は、緑色片岩である。

第6章 科学的分析

1. 祝谷六丁場遺跡出土の平形銅剣の分析

三宝伸銅工業株式会社

久野 雄一郎

1はじめに

松山市道後温泉北西山間部、祝谷六丁場遺跡より出土した平形銅剣の結果について報告する。

昭和63年5月9日、松山市教育委員会による松山市祝谷六丁場遺跡調査において出土した平形銅剣破片の送付を受け、金属学的に調査するよう依頼された。

2 試料の外観

試料は図-109が示すとおり、板状、粉状の破片である。片面は緑白色の緑青で覆われており、他の面は褐色の土壤物質が付着しており、金属質の存在は外観からは認められない。

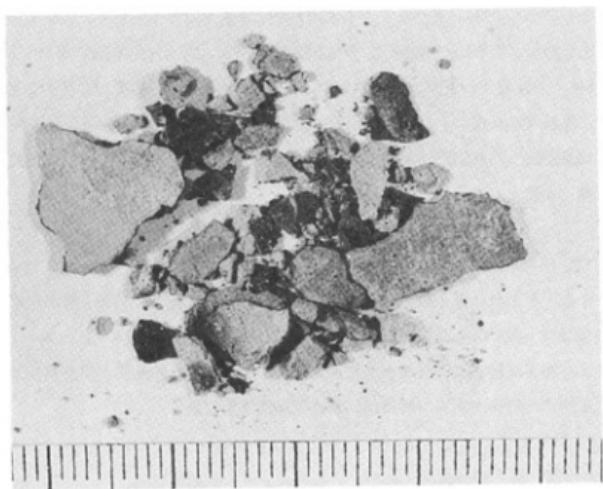


図-109 銅剣破片外観

3 X線マイクロアナライザー（EPMA）による観察

試料を樹脂の中に埋め込み断面を研磨した後、EPMAによって観察した。

図-110は断面の倍率60の組成像である。この図から試料の断面は明るさの異なる4層の組織になっていることがわかる。この4層のうち、左側の最も明るい組織は金属質の層であり、右側3層は腐食された層である。

| 金 属 質 | 腐 蝕 層 |

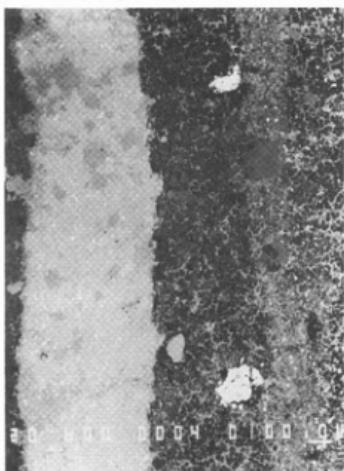


図-110 断面組成像1 (×60)

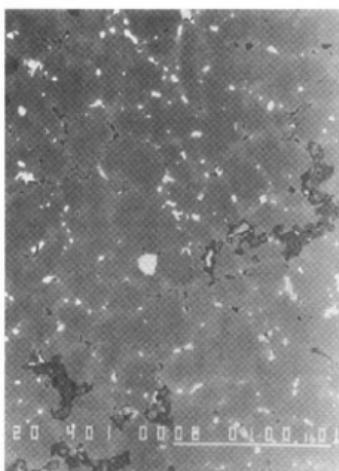


図-111 断面組成像2 (×400)

図-111は、図-110中の金属質層のはば中央部を拡大した図である。

これらの図から組織のマトリックスは、スズ濃度の低い青銅の鋳造組織であり、結晶粒界に存在する白色の微粒子は鉛粒子であることがわかる。結晶粒界の一部は 腐食によって変質しているものと考えられ、色調が濃くなっている。

図-112～-118は、図-111が示す領域の銅、スズ、鉛、酸素、硫黄、アンチモン及び銀のX線像である。

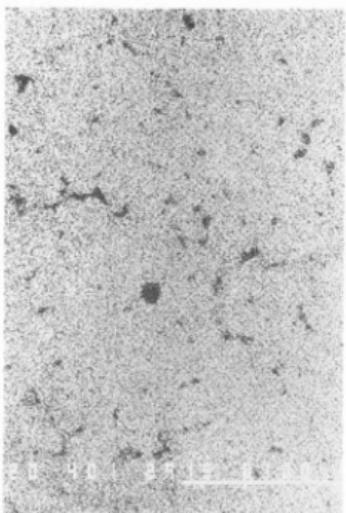


図-112 銅 ($\times 400$)

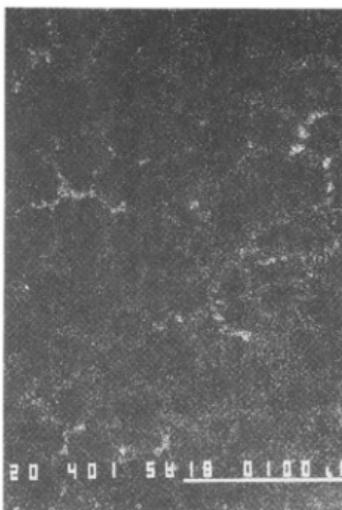


図-113 スズ ($\times 400$)



図-114 鉛 ($\times 400$)



図-115 酸素 ($\times 400$)

これらのX線像をまとめると、マトリックスは、スズ濃度の低い青銅であり、スズは結晶粒内より粒界の方に多く含まれている。また、アンチモンはスズに含まれている。鉛は硫化鉛として存在しており全体に酸化が進行している。

銀の微粒子も認められるが、酸化した領域に多く分布している。

4 成分の定量分析

試料の定量分析結果は第1表のとおりである。

5 鉛同位体比

鉛同位体比の測定を三菱原子燃料株式会社において行い、第2表の結果を得た。

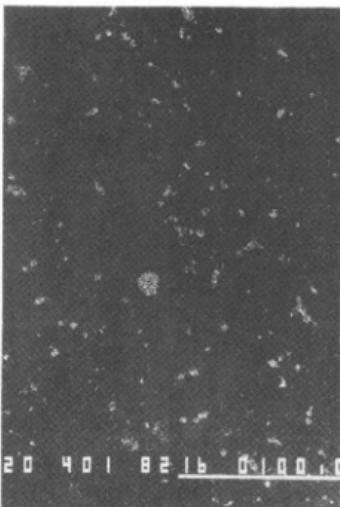


図-116 硫黄 (×400)



図-117 アンモニア (×400)



図-118 銀 (×400)

表1 定量分析結果 (%)

元素	濃度	分析方法	
銅	95.32	ICP	(1)試料重量: 0.0438g
鉛	2.34	"	(2) ICP: 誘導プラズマ
スズ	2.26	"	発光分析法
ヒ素	0.62	"	
アンチモン	0.82	"	
鉄	0.02	"	
ニッケル	0.16	"	
マンガン	< 0.01	"	
ビスマス	0.06	"	
亜鉛	0.02	"	
カドミウム	0.01	"	
マグネシウム	0.01	"	
銀	0.11	原子吸光法	
金	< 0.01	"	

表2 鉛同位体比

$\frac{206\text{鉛}}{204\text{鉛}}$	$\frac{207\text{鉛}}{204\text{鉛}}$	$\frac{208\text{鉛}}{204\text{鉛}}$	$\frac{207\text{鉛}}{206\text{鉛}}$	$\frac{208\text{鉛}}{206\text{鉛}}$
17.72	15.558	38.169	0.878	2.154

6 まとめ

外観観察においては、金属質は存在しないと考えられたが、断面組織を観察することによって試料の厚さの約1/4の金属質が存在することが認められた。

この銅剣の金属組織はスズ含有量の少ない青銅の鉄造組織であり、青銅結晶粒界には鉛微粒子が存在するが、腐食のため硫化鉛に変化していることがEPMAによる観察の結果わかった。

ヒ素は組織中で均一に分布しているが、アンチモンはスズと共に存している。また銀粒子は酸化された領域に偏在していることが観察された。腐食を受けた結果、全面にわたって強く酸化している。

成分分析の結果は、銅：95.32%・鉛：2.34%・スズ：2.26%を示し、意識的に添加されたと考えられる元素として、ヒ素・アンチモン及び銀が挙げられる。

過去の銅剣の分析例から、本銅剣もスズ10数パーセント含んだ銀白色の銅剣であったのであろうと考えていたが、予想に反し、スズ含有量が少なく青銅というよりは銅に近い。

このような組成の銅合金は軟らかく、その色調は銀白色でなく、赤銅色であるので武器としての機能に乏しい非実用剣ではなかったかと想像される。

鉛同位体比は国产鉛鉱石が占める領域外にあり、近い値を示す測定例として中国の遼寧省青城子産鉛・亜鉛があり、鉛は輸入されたものであろう。第1表に示すとおり不純物が少ないとこは、この銅剣鉄造には自然銅のような良質の銅鉱石を原料とした銅が用いられたものと考えられるが、銅及びスズの産地を示す情報は何も得られない。

2. 祝谷六丁場遺跡出土の鉄斧の分析

日立金属株式会社安来工場冶金研究所

清 永 欣 吾

1 緒 言

松山市道後温泉北西部の山間部、祝谷六丁場遺跡より出土した板状鉄斧2点についてその結果を報告する。

本遺跡は弥生中期のものとされ、板状鉄斧のほか平形銅劍も出土している。本調査資料は、出土後水洗いによる土、錆落しを行っているが、保存剤による処理は行われていないものである。

2 資料の外観

資料の明細及び外観を表3並びに写真1~2に示す。

表3 資料の明細

No	名 称	推定年代	出 土 地	記 号	重 量
1	板状鉄斧 (大)	弥生中期 中 業	祝谷6丁場 3W区	S 4 W 8 灰黄褐色土 880512 NaF-1	48.69g
2	板状鉄斧 (小)	弥生中期 後 業	祝谷6丁場 3 区	S 4 W 5 Fe-1 880210	66.10g

3 X線透過試験

鉄斧が鋳造品である場合、鋳造欠陥としての鉄巣の発生があることも考えられるので、X線透過試験により鉄巣の存在有無を確認したが、写真3~4に示すように、その存在は認められなかった。なお、X線透過条件は次の通りである。

装置名 X線透過装置(フィリップス社製 MG225型)

電 壓 150KV

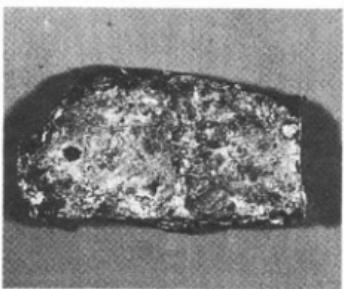
電 流 5 mA

時 間 1 分

〔資料 1〕



表側

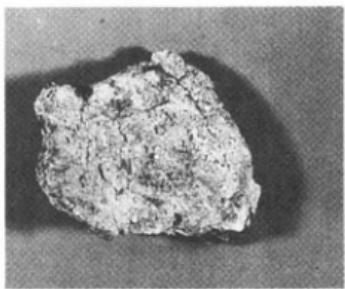


裏側

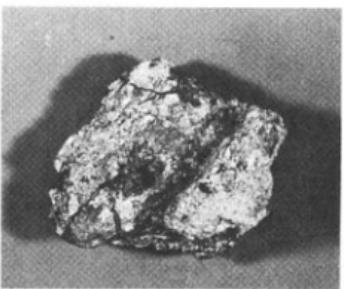


厚さ方向

〔資料 2〕

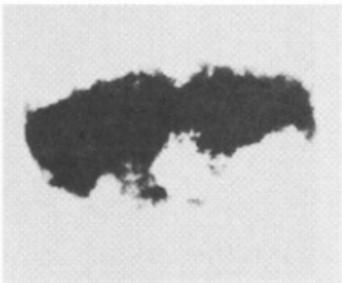


表側

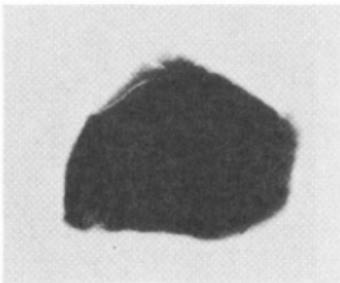


裏側

図-119 資料の外観写真



資料 1



資料 2

図-120 資料のX線透過像

4 化学組成

図1に示す部分よりマイクロカッターで試料を採取し、顕微鏡観察及び化学分析用に供した。

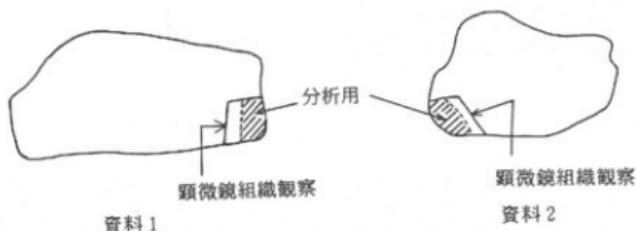


図-121 調査試料の採取

化学分析用試料は乳鉢にて粉碎後、C及びSは炭素硫黄同時定量装置（赤外吸収法、堀場製作所製エミヤ1200型）により、他の元素は塩酸・硝酸・沸騰水溶液中で、130℃ 2時間加圧溶解し、1 C P 溶液発光分光分析装置（島津製作所製1 C P V-1012型）で定量した。分析結果を表2に示す。なお、比較のために筆者らが調査した鉄鋤及び和銛の化学組成を表2に併記した。

併記した資料の明細を表3に示す。

表4 試料の化学組成(重量%)

試 料	C	Si	Mn	P	S	Ni	Cr	V	Cu	Al	Ti	Ca	Mg	Zr
	炭素 %	マング ン	磷 ム	硫 ル	ニッケ ル	クロム ム	バナジ ウム	鋼 ム	アルミ ニウム	チタン ム	カルシ ウム	マグネ シウム	ジルコニ ウム	
I	3.92	0.42	0.05	0.19	0.035	0.010	0.013	0.029	0.050	0.009	0.025	<0.01	<0.01	<0.01
2	4.17	0.31	0.02	0.16	0.040	0.010	0.012	0.024	0.041	0.015	0.021	<0.01	<0.01	<0.01
A	3.02	1.16	0.04	0.45	0.157	<0.01	<0.01	0.024	<0.01	—	0.032	—	—	Fe 53.01
B	1.46	—	0.01	—	0.038	<0.01	<0.01	0.004	0.03	—	0.018	—	—	Fe 60.55
C	3.27	0.35	—	0.092	—	0.06	<0.01	0.004	0.04	0.057	0.012	—	—	Fe 52.00
D	3.75 4.05	0.32	0.0154	0.079	0.069	—	—	—	0.0254	—	0.12	—	—	T.Fe 95.50
E	3.96	1.36	0.06	0.095	0.019	—	—	—	—	—	Ti	—	—	—
F	4.28	0.05	0.03	0.21	0.15	—	—	—	—	<0.001	—	—	—	—
G	5.68	0.02	0.03	0.21	0.11	0.03	0.01	0.036	0.02	0.002	0.013	—	—	Fe 77.34
H	3.93	0.11	<0.01	0.11	0.10	0.03	0.02	<0.002	0.01	0.078	0.049	—	—	Fe 80.20
I	3.44	0.11	Tr	0.043	0.022	Ni 1	Tr	0.02	Tr	—	Ni 1	—	—	—

表5 表1併記資料の明細

資 料	分 類	出土遺跡	所 在 地	時 代	文 獻
A	鋳造鉄斧	扇谷遺跡	京都府峰山町	弥生前期後半、中期初頭	(1)
B	"	途中ヶ丘遺跡	"	弥生中期～後期	(2)
C	鉄斧	甲田南遺跡	大阪府富田林市	弥生中期後半	(3)
D	鋳造鉄斧	会下山遺跡	兵庫県	弥生後期	(4)
E	"	金蔵山古墳	岡山県	古墳中期	(4)
F	"	わき塚1号墳	三重県	—	(4)
G	鋳造骨蔵器蓋	小久白遺跡	島根県安来市	奈良時代末	(5)
H	和銛	泉原たら	島根県頸原町	江戸中期	(6)
I	和銛	布部たら	島根県能義郡	昭和	(7)

(注) Cは炭素量が3.27%と高いが、鋳造品としての確証は得られていない。

5 顕微鏡組織

資料の代表的な光学顕微鏡組織を写真4～5に示す。
いずれもレーデブライト共晶組織で白鉄の代表的組織である。写真中白い部分がセメンタイト、
黒くみえる部分がパーライト相である。外周部から内部へ向かって直線的な柱状晶の発達が認めら
れる。

図-122 資料1の光学顕微鏡組成

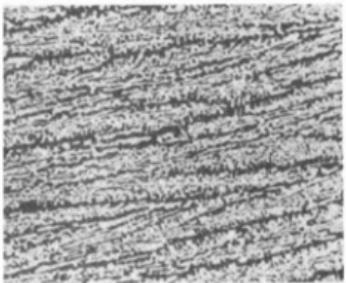


図-123 資料2の光学顕微鏡組成



(×400)

れるが、資料2の方が柱状晶の乱れが大きい。

資料1の場合、断面の内部には図2に模写したように空洞が形成されている。この空洞が、有袋
鉄斧のためなのか、遺存中に内部が腐食して空洞を生じたものか不明である。資料2の場合、切断
面には空洞がなかったが、研磨すると空洞を生じた。この点については、あとで考察を加える。

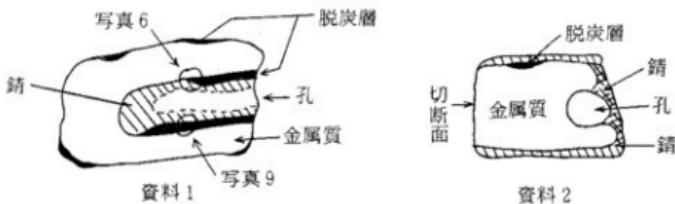


図-124 資料断面の脱炭層分布

6 考 察

6-1 化学組成について

- ① 化学組成及び顕微鏡組織からみて、資料1・2とも白鉄製の鉄鋤である。次に本資料の鉄原料が砂鉄系か、鉱石系かを検討してみることとする。
- ② 資料1・2の化学組成は極めてよく一致しており、同一原料を用いて製造されたと推定される。
- 表4に示したA～Fは従来分析された鉄鋤の化学組成を示すものであるが、本資料とぴったり一致するものはない。
- ③ 原料の同一性を判断する目安はMn・P・Ni・Cr・V・Cu・Tiなどであるが、このうちとくにMn・Cu・V・Tiが重要である。一般に鉱石系原料を用いるとMn・Cuが高めでV・Tiは低く、砂鉄系原料を用いるとその逆となる。
- ④ 本資料と他の鉄鋤の化学組成を比較すると、資料A(扇谷遺跡)はCu・P、資料B(途中ヶ丘遺跡)はV、資料C(甲田南遺跡)はNi・Vにおいてそれぞれ異なる。資料D・E・Fについては分析元素が少ないので明確ではないが、Ti量において異なる。すなわち、従来調査されている鉄鋤とは産地を異にする鉄原料を用いていると判断される。
- 表2の資料G・H・Iは国産で、かつ砂鉄を原料とした、たたら製鉄品であることが明瞭なものである。Ti・Vは製錬時の還元条件により影響を受けるが、本資料のTi・V量は砂鉄系の領域に十分入るものである。しかし、Mn・Cuは砂鉄系としては高めである。それ故、原料としては砂鉄ではなく磁鐵鉱系の原料を用いたものではなかろうか。

6-2 金属組織について

- ① 両資料ともパーライト組織をもつことから、鋳造後焼入等の熱処理は施されていない。
- ② 金属組織はレーデブライト共晶組織を示し、とくに資料1はよく発達した柱状晶を示す。鋳造温度が高めで、かつ薄肉であるためであろう。
- 図-124に資料断面の組織分布を示したが、資料1の場合、鉄斧の外層及び中心孔部に沿う内層に脱炭層が認められる。
- ③ 図-125に資料1の脱炭層を含む金属組織分布を示す。下部が中央孔部に相当し、この部分の白くみえる所が脱炭層である。外側の脱炭は少ないが局部的にパーライト組織が認められる。写真中、黒い斑点は片状黒鉛である。図-126は脱炭層部分に接するレーデブライト組織で、片状黒鉛の析出状況を示している。図-127は脱炭層部分で完全なフェライト組織となっている。
- ④ 図-128は図-125の反対側の断面組織を示すが、写真10のように脱炭層とレーデブライト層の境界で、パーライト組織が生じており、脱炭層へ向かって逐次炭素量が減少しているのがわかる。
- ⑤ 資料2についても同様の観察をしたが、図-121に示したように外層の一部に網目状の初析セメンタイトをもつパーライト組織（炭素量約1.1%程度）が認められた。しかし、孔部分に脱炭層は認められなかった。
- ⑥ 以上の観察結果より、資料1の内部空孔は腐食によって生じたものではなく、鋳造時に人為的につくられたものであり、それ故、資料1は有袋鋳造鉄斧であると判定できる。
- 何故なら、脱炭層は鋳造時に铸型と反応して生じたものであり、内層は鋳造後の冷却が遅いために反応が起こりやすく、外層は鋳造後、冷却速度が大きいため反応が少ないと考えられる。鋳造後大気中に加热して脱炭させることも考えられるが、その場合は外層部の脱炭がより大となると考えられる。
- ⑦ 資料2の孔部分には脱炭層が認められるため腐食による孔と考えられ、有袋鋳造鉄斧の確証を得られなかった。

7 結 言

以上、祝谷六丁場遺跡出土の板状鉄斧2点について、金属学的調査を行った結果をまとめると次の通りである。

- (1) 資料1（祝谷六丁場3区出土、弥生中期中葉のもの）は、炭素量3.92%を含む白鉄組織をもつ鋳造鉄斧で、内部に空洞をもち、空洞部及び外層部に脱炭層をもつことから有袋鉄斧である。
- (2) 資料2（祝谷六丁場3区川土、弥生中期後葉のもの）も炭素量4.17%を含む白鉄組織をもつ鋳造鉄斧であるが、内部に孔をもつものの、孔周辺の脱炭層が認められず、有袋鉄斧である

確証は得られなかった。

- (3) 資料1・2とも化学組成は極めてよく一致しており、同一原料を用いて製造されたものと推定する。
- (4) V及びTi量から砂鉄系原料を用いた可能性も考えられるが、Mn及びCu量がやや多いことから、磁鉄鉱系原料を用いたものと考えられる。
- (5) 従来調査されている鍛造鉄斧とは異なった組成の特徴をもっており、舶載品としても從来とは異なった产地から舶載されたものと推定する。
- (6) 調査した部分に関する限り、鋳造後、焼入等の熱処理は施されていない。

8 参考文献

- (1) 清永 欣吾 扇谷遺跡発掘調査報告書 139 (1988年3月 京都府峰山町教育委員会)
- (2) 清永 欣吾 途中ヶ丘遺跡出土鉄斧の調査(昭和59年2月 京都府峰山町教育委員会提出)
- (3) 清永 欣吾 甲田南遺跡Ⅲ区4号住居群出土鉄斧の化学分析(昭和59年 大阪府教育委員会提出)
- (4) 佐々木 稔 古代日本における製鉄の起源と発展・季刊考古学 第8号(1984、雄山閣)
- (5) 清永 欣吾 安来市小久保遺跡火葬墓の骨礎器鉄胸(蓋)の調査(昭和58年10月 島根県安来市教育委員会提出)
- (6) 清永 欣吾・佐藤 豊 発掘調査報告書“泉原たたら”40(昭和60年2月 島根県頃原町教育委員会)
- (7) 矢野 武彦 たたら製品の品質(1) 金属材料第9巻9号 88(昭和44年)

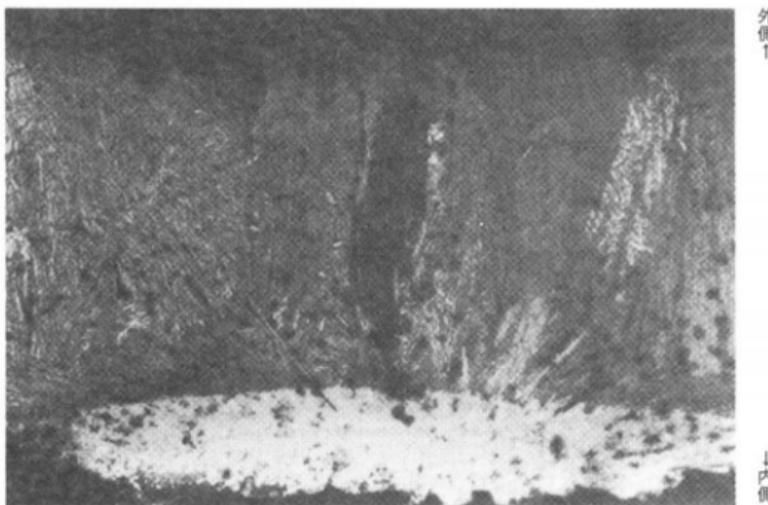


図-125 資料1の断面組織分布（下部の白い部分が脱炭層）

×25

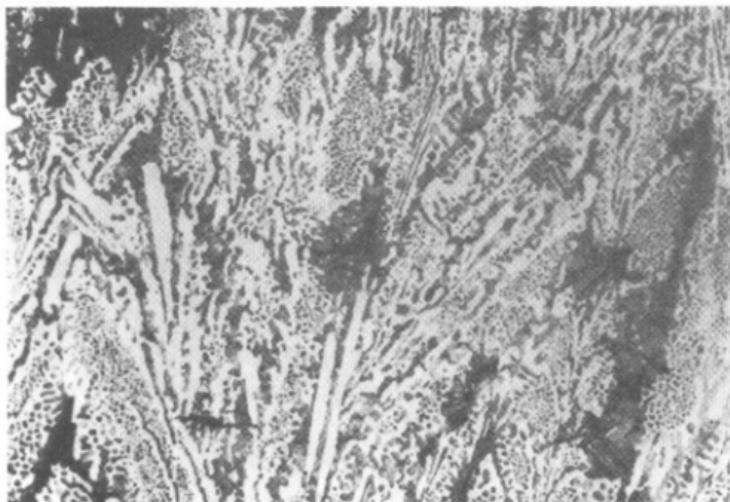


図-126 図-125の脱炭層に接するレーデブライト組織

×200

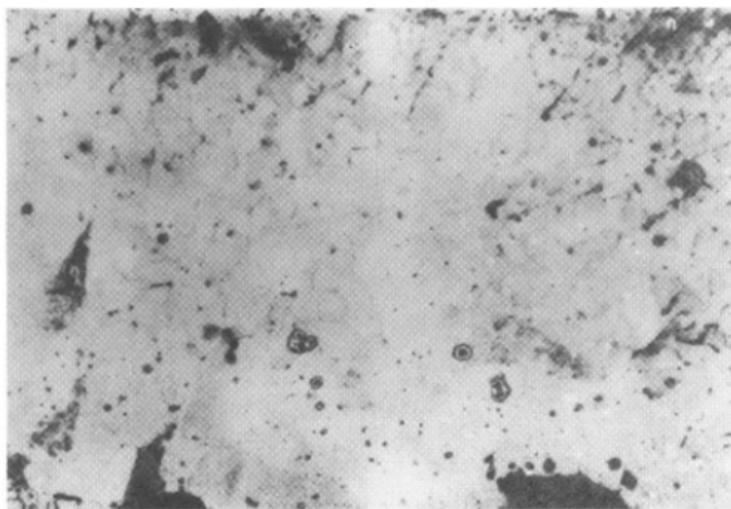


図-127 図-125の脱炭層部組織

×200

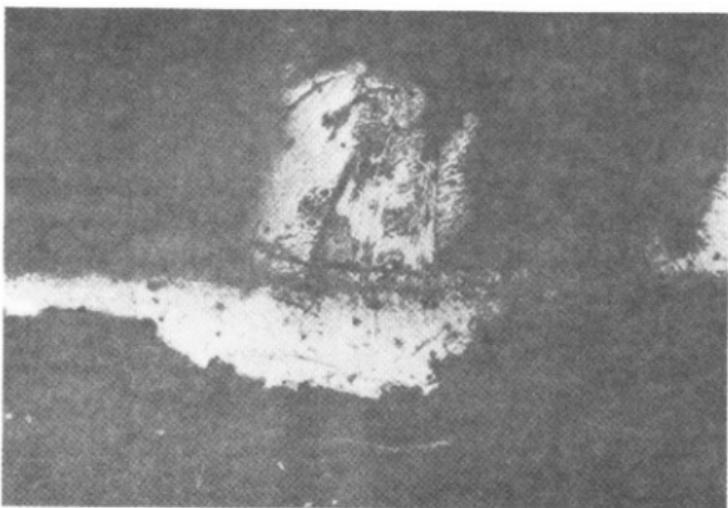


図-128 資料1の断面組織分布（図-125の反対側）

×25

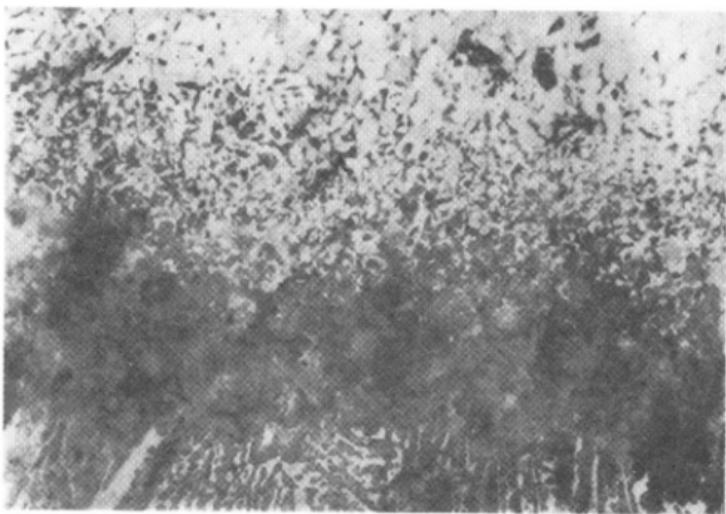


図-129 図-128の脱炭層部組織

-157-

第7章 祝谷六丁場遺跡調査の成果と課題

宮崎泰好

祝谷六丁場遺跡は、松山平野の北側丘陵部の斜面に立地する遺跡である。

調査の結果、弥生時代中期中葉を主体とし、中期後葉にかけての土器他の廃棄場である谷間3ヶ所。石鐵工房跡を含む生産空間。弥生時代後期段階の平形銅劍埋納壙を1基を検出した。

今まで、遺跡分布の空白地域として見られ、軽視されていた本遺跡周辺において、今回の祝谷六丁場遺跡の調査及び愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した一般県道「普済一松山線」工事に伴う調査で、遺跡として調査された意義は大きい。

しかしながら、調査区の西・南側の丘陵上に推測される、土器等の廃棄場である谷間に伴う住居跡を含む居住空間など遺跡範囲の確認、今回未報告分の整理・報告など課題が多い。

1 祝谷六丁場遺跡出土の弥生時代中期の土器相

祝谷六丁場遺跡調査の成果の一つとして、従来、松山平野や瀬戸内海地方に於ても出土量が少なかった弥生時代中期中葉段階の土器が出土した事である。

土器編年作成資料としては、遺構内一括資料とは違い、谷間の遺物包含層からの出土であるが、層の分層ができ堆積層も安定していた事から、弥生時代中期中葉の土器を知る上での2次の資料である。

ここでは、第5章で分類した様に、調査区の遺物包含層を堆積層から大きく3層に分けた。

包含層下層出土を祝谷六丁場一式、中層出土を祝谷六丁場二式、上層出土を祝谷六丁場三式とした。当然、斜面部の堆積層が主体のため、遺物の流失や一部下層へのもぐりこみが認められる。以下、3層に分層したごとに述べる事とする。

祝谷六丁場一式は、畿内併行で見れば第Ⅰ様式の第2型式にあたるが、ここでは、弥生時代中期中葉古段階と考えている。この層からは、甕、壺、鉢、高杯が出土している。又、中期前葉段階の5条の沈線文を持つ甕と11頭部が断面「く」字状を呈する中型壺が出土している。

甕の口縁部形態は多様の段階で、甕に突帯を持ちだす段階と言える。

壺の口縁部押張の内、まだ下方に大きく肥厚され下垂する段階ではない。

松山平野部では、この段階から高杯の出現期である。まだ定型化していない段階である。

祝谷六丁場二式は、畿内併行で見れば第Ⅱ様式の第2型式から第Ⅲ様式の第2型式にあたる段階にあたるが、ここでは、弥生時代中期中葉新段階と考えている。この層からは、甕、壺、鉢、高杯、ジョッキ形土器、分削形土製品などが出土し、器種構成が多様になる段階である。

甕は、1条の突帯を持つものが多くなるが、甕の出土量から見れば4割弱である。主体は突帯を持たないものである。この突帯には、一部断面「三角形」の突帯のものと突帯に刻み目を施すもの

があるが、7割近くは、突帯に指頭圧痕を施している。

壺AⅡ類に凹線文を持つものが出現している。

突帯を持たない壺の口唇部にまだ刻み目を持つ段階である。

壺は、口縁部拡張が、下方に大きく肥厚された垂下口縁が出現し盛行する段階である。

壺の内、壺AⅢ類は、垂下口縁の代表とされる形態で、頸部に1条の突帯を持つものが多い。

又、大型の垂下口縁の壺の口縁部には、「ハ」の字状文の刻み目を持つものが出現する。

壺AⅢ類は文様構成が多様で、凹線文を持つものが出土している。他に凹線文を持つものとして、壺BⅡ類、壺CⅡ類、壺F類がある。この内壺F類は、口縁が複合口縁状で、凹線文を2条持つ小型壺である。

鉢の内、突帯を1条持ち、口唇部と突帯には刻み目を施している。

高杯が定着する段階である。杯部は、口縁部が屈曲するもの、肥厚するものがある。口唇部に刻み目を持つものは口縁部が肥厚する杯部B類に限られる。一部に口縁に穿孔を持つものが出現する。脚部は、高脚のものと低脚のものがある。この段階は、脚部に透かしを持つ出現期と言える。いずれも、低脚のⅡ類である。透かしの形状は、丸みを持つ「三角形」状と「長方形」状である。又、次の段階につながる脚部に沈線文を持つものが出現する。

祝谷六丁場三式は、畿内併行で見れば第Ⅲ様式の第2型式から第Ⅳ様式の第1型式にあたるが、ここでは、弥生時代中期前葉新段階から後葉段階と考えている。この層からは、壺、壺、鉢、高杯、ジョッキ形土器、分銅形土製品が出土している。

壺は、やや突帯を持つものが多くなる。突帯を持つものは、ほとんど指頭圧痕が施されている。突帯を持たない壺は、口唇部に刻み目を持たなくなる。

壺は、壺AⅡ類の垂下口縁のものが主体を占める。この内、頸部に突帯をもつものが多い。

なかには、口縁内面に突帯文や円形浮文を持つものがある。二式段階と同様に凹線文を持つものもある。他に凹線文を持つものとして壺AⅢ類、壺CⅡ類がある。

高杯は、杯部に穿孔を持つものが消え、口縁部に凹線文を持つものが出現する。又、刻み日を持つものは残っている。脚部は、高脚と低脚があり、脚部に透かしを持つものが両方にある。透かしの形状は、丸みを持つ「三角形」状が二式からつづき、「円孔」のものと脚部に沈線文を持ち、「矢羽根」透かしのものが出現する段階である。

以下、式別に概観してみる。

祝谷六丁場一式段階は、まだ中期前葉段階の系統が残る段階で、壺の垂下口縁が出現する前段階であり高杯の出現段階と言える。

祝谷六丁場二式は、壺のバリエーションが多様な段階で、凹線文が出現する段階でもある。

壺は、下垂口縁が出現し盛行する段階である。又、壺に凹線文を持つものが出現する段階で、一部凹線文が施された複合II線の小型壺も出土している。又、壺の文様構成が多様な段階でもある。

高杯は、定着する段階で、杯部が屈曲するものと肥厚するものがある。杯部に穿孔を持っている段

階である。又、脚部に透かしが出現する段階もある。

祝谷六丁場三式は、甕は、やや突帯を持つものが多くなり、突帯を持たない甕の口唇部に刻み目を持つなくなる段階である。壺に凹線文を持つものが増える段階である。高杯は、杯部に凹線文を持つものが出現し、脚部「矢羽根」透かしが出現する段階である。

2 祝谷六丁場遺跡出土の石器

祝谷六丁場遺跡からは、石戈、石包丁、石斧、石鎌、石錘、石皿、作業台、凹石、叩石、紡錘車、砥石、石槍、フレーク、チップなど多種、多量の石器類が出土している。今回の報告書1には、石包丁と石斧を中心に収録した。

石包丁は、六丁場一及び二式からは、直線刃長方形態で両端抉りのものと外湾刃杏仁形態が出土している。六丁場三式からは、直線刃長方形態と直線刃半月形態が出土している。式別の形態差は、祝谷六丁場遺跡の石包丁の使用の時間差を示唆するものと思われる。

石斧は、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧が出土している。このうち、大型蛤刃石斧は六丁場三式には出土しておらず、鉄斧が六丁場三式段階に出現している事から、祝谷六丁場遺跡では、鉄斧導入段階に鉄斧が大型蛤刃石斧にとって変わる段階と考えられる。

3 祝谷六丁場遺跡の遺跡としての変遷と性格

祝谷六丁場遺跡は、弥生時代中期中葉の六丁場一式段階に始まる。この段階は、調査区西・南側の丘陵上に小規模な集落を営んだ段階であろう。

集落として盛行するのは、次の六丁場二式段階である。これは、遺物の出土量の多さと、調査区内の遺構廃絶時期がこの段階である事から言える。この段階には、調査区北東の緩斜面に石鎌工房跡を含む生産空間を持ち、居住空間は、遺物の出土状況から調査区西・南側の丘陵上と考えられる。この段階は、分銅形土製品を持ち、石戈が施棄されている。

六丁場三式段階になると、調査区内遺構を持たない段階で、集落規模は、小さくなる。

次の弥生時代中期後葉の凹線文盛行期には、集落としては、消滅する。これは、松山平野における弥生時代中期中葉から後葉にかけての集落動向と同じくする。

この集落消滅後、弥生時代後期段階に、平形銅劍を埋納している。

これ以降遺跡としては、調査区外の丘陵上の古墳の造営以外、調査区東端の中世段階以降の耕作經營を待たねばならない。

以上、概略を述べた。今回の報告は調査成果の内一部である。遺跡の評価は、当然周辺の遺跡との関連性や遺跡としての広がりや、調査成果の詳細な分析から導かれるものである。今回の未整理分を含め、周辺部の調査・整理・報告に期待するとともに、本来、行政調査が遺跡保護の一手段であり、詳細な調査及び報告を求められるものである。筆者も念頭において今後取り組むべきものである。

表6 土器・石器観察表

1 区

番号	器種 部 位	口 径 武 径 器 高	手 法			色 調 上 下 外 内	胎 土 燒 成	その他の
			口 線 部	休 部	底 部			
1	壺形品	14.5 27.4	ナデ ナデ	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	茶褐 淡茶褐	石・長良	
		8.1 15.0						
2	壺形品	18.0 11.6				黃褐	石・長良	
4	台付壺 脚 部					灰	石・長良	

2 区

27	壺 口 線	(30.0)	マメツ ナデ	マメツ ミガキ		淡明褐 暗褐	長良	
28	壺 口 線	22.9	マメツ マメツ	マメツ マメツ		淡黃褐 淡黃褐	石・長良	
29	壺 底	7.3			ナデ マメツ	淡茶褐 淡褐	石・長良	
30	壺 口 線	(26.5)	ナデ ハケナデ			淡褐 褐	石・長良	
31	壺 口 線	(23.8)	ナデ マメツ	ハケナデ マメツ		淡茶褐 淡褐	石・長・金良	
32	壺 口 線	(15.5)	ヨコナデ ヨコナデ			茶褐 淡褐	石・長良	黒斑
33	壺 口 線	(9.7)	ヨコナデ ヨコナデ			茶褐 淡茶褐	石・長・金良	黒斑
34	壺 底	(4.8)			マメツ ナデ	淡黃褐 淡灰褐	長良	
35	高坏 口 線	(35.2)	ミガキ ヨコナデ			淡褐 褐	石・長良	
36	壺 口 線	(31.8)		タテミガキ ナデ		淡黃褐 淡黃褐	長良	
37	壺 口 線	(22.9)	ハケ・ミガキ ナデ			明茶褐 淡明褐	石・長良	
38	壺 口 線	(31.3)	マメツ マメツ			明茶褐 暗褐	石・長良	
39	壺 口 線	(29.9)	ヨコナデ ヨコナデ			淡褐 褐	長良	
40	壺 底	(7.2)			ナデ ミガキ	淡茶褐 淡茶褐	石・長良	
41	壺 口 線	(23.0)	ナデ ナデ			明茶褐 明茶褐	石・長良	
42	壺 口 線	(19.7)	ハケ→ナデ ナデ			淡褐 淡黃褐	石良	
43	壺 口 線	(21.6)	ナデ ナデ	ミガキ ナデ		淡褐 黑	石良	
44	壺 口 線	(24.1)	ハケ→ナデ ナデ			淡黃褐 淡黃褐	長良	

番号	器種	口径底径	手 法			色調	胎土	その他の成
			口部	体部	底部			
45	壺 口縁	(15.9)	マメツ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
46	高坏 环	(22.8)	マメツ マメツ			明黄褐色 淡褐色	石・長良	
47	高坏 柱			マメツ シボリ		淡黄褐色 淡黄褐色	長良	
48	壺 口縁	(27.7)		ナデ マメツ		赤褐色 明茶褐色	石・長良	
49	壺 口縁	(30.0)	ヨコナデ マメツ			明茶褐色 淡褐色	石・長良	
50	壺 口縁	(19.8)	マメツ マメツ			淡褐色 淡黄褐色	石・長良	
51	壺 口縁	(24.2)	マメツ マメツ	マメツ マメツ		黒灰 淡茶褐色	石・長良	
52	壺 口縁	(24.0)	マメツ マメツ			灰褐色 暗褐色	長良	
53	鉢 口縁	(31.7)	ナデ ナデ	ミガキ ミガキ		黃褐色 黃褐色	石・長良	黒斑
54	鉢 口縁	(19.1)	マメツ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
55	壺 底	6.2			マメツ マメツ	赤褐色 暗褐色	石・長良	
56	壺 底	5.5			マメツ マメツ	灰褐色 黑褐色	石・長良	
57	壺 底	6.2	タテミガキ マメツ			赤褐色 暗褐色	石・長良	
58	壺 口縁	(25.2)	ナデ マメツ			明褐色 明褐色	石・長良	
59	壺 底	8.1			タテミガキ マメツ	褐色 淡褐色	石・長良	
60	高坏 环	(19.7)	マメツ マメツ			灰 淡褐色	石・長良	
61	高坏 脚	9.1			マメツ マメツ	淡褐色 淡褐色	長他良	
62	高坏 脚	9.2			ハケ マメツ	灰褐色	長良	
63	壺 口縁	(30.0)	ヨコナデ ヨコナデ			淡褐色 淡褐色	長良	
64	壺 口縁	(29.2)	ナデ ナデ			淡黄褐色 淡黄褐色	石・長良	
65	壺 口縁	(31.1)	ナデ マメツ	ハケ マメツ		黃 黃	石・長良	
66	壺 口縁	(32.5)	ナデ ナデ			褐色 明褐色	石・長・金良	
67	鉢 口縁	(22.8)	ナデ ナデ			灰褐色 暗褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 外 内	胎 上 燒成	その他の 性質
			口部	体部	底部			
68	甕 口縁	(24.0)	ヨコナデ ヨコナテ			淡黃褐 淡黃褐	石・長良	
69	甕 底	6.4			ナデ ハケ	灰茶褐色	石・長良	
70	甕 口縁	(10.2)	ナデ ナデ			黄褐色	石・長良	
71	甕 口縁	(15.6)	マメツ マメツ			淡褐色	石・長良	
72	甕 口縁	(12.8)	マメツ マメツ			黄褐色	灰・金良	
73	甕 口縁	(16.5)	ハケミガキ ミガキ			暗灰褐色	石・長・金良	
74	甕 口縁	(17.4)	ナデ ミガキ→ナデ			淡褐色	石・長良	
75	甕 口縁	(15.5)	ヨコナデ ヨコナデ			褐色	石・良	
76	甕 口縁	(11.5)	ナデ・タテハケ ナデ	ナデ		褐色	石・長良	
77	甕 口縁	(27.1)	ナデ ナデ			明褐色	石・長・金良	
78	甕 口縁	(14.0)	マメツ マメツ			淡褐色	石・長良	
79	甕 底	9.2			タテミガキ ナデ	灰茶褐色 淡褐色	石・長良	
80	高环 环	(17.6)	ミガキ ミガキ			黑色 灰褐色	石・長良	
81	甕 底	(10.8)			タテミガキ マメツ	淡茶褐色	石・長良	
82	甕 口縁	(34.1)	ナデ ナデ			灰茶褐色 灰褐色	石・長良	
83	甕 口縁	(30.8)	ナデ ナデ			淡褐色	石・長良	
84	甕 口縁	(25.9)	ナデ マメツ			淡褐色	石・長良	
85	甕 口縁	(29.6)	ナデ ナデ			灰褐色	石・長良	
86	甕 口縁	(32.8)	ナデ ナデ	ハケ ミガキ		黄褐色 黄褐色	石・長良	
87	甕 口縁	(27.4)	ナデ ナデ			暗褐色 暗褐色	石・長・金良	
88	甕 口縁	(26.8)	ナデ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
89	甕 口縁		ナデ ヨコミガキ			淡褐色 淡黄褐色	石・長・金良	
90	甕 底	(14.1)			タテミガキ ナデ	黑褐色 黑	石・長良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上下 外内	胎 燒	上 成	その他
			口縁部	体 部	底 部				
9 1	壺底	(8.3)			タテミガキ タテミガキ	黄褐 暗灰	石 良		
9 2	壺底	(16.8)			ナデ ミガキ	明燈褐 褐	石 良		
9 3	壺 口 縁	(24.0)	ナデ ナデ			淡褐	石・長 良		
9 4	壺 口 縁	(31.2)	ハケ→ナデ ナデ			暗褐 淡暗褐	長 良		
9 5	壺 口 縁	(12.4)				灰褐 灰褐	長 良		
9 6	高杯 脚		ハケ・ナデ ナデ			淡黄褐 淡黄褐	石・長 良		
9 7	壺 口 縁	(8.0)	ナデ マメツ			灰褐 灰褐	石・長 良		
9 8	壺 口 縁	(32.8)	ナデ ナデ	ハケ ミガキ		淡黄褐 淡黄褐	石・良 良		煤
9 9	壺 口 縁	(34.7)	ナデ ナデ	ミガキ ミガキ		灰茶褐 黑灰褐	石・長・金 良		煤
10 0	壺 口 縁	(26.6)	ナデ ナデ			淡褐 淡黄褐	石 良		
10 1	壺 口 縁	(12.7)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長 良		
10 2	壺 口 縁	(15.9)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ハケ		褐 褐	石・長 良		煤
10 3	壺 口 縁	(26.6)	ナデ ナデ	ハケ ナデ		灰茶褐 灰茶褐	石・長 良		煤
10 4	壺 口 縁	(25.8)	ハケ ミガキ			暗褐 暗褐	長 良		
10 5	壺 口 縁	(22.3)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ミガキ		黑褐 淡黄褐	長 良		煤
10 6	壺 口 縁	(26.6)	ミガキ→ナデ ナデ			暗褐 暗褐	石・金 良		
10 7	壺 口 縁	(23.6)	タテハケ ナデ			褐 褐	長 良		
10 8	壺 口 縁	(26.6)	タケハケ ナデ			暗褐 淡褐	石・長 良		
10 9	壺 口 縁	(11.6)	ナデ ナデ	ハケ ハケ		灰褐 灰褐	石・長 良		
11 0	壺底	(5.8)			タテミガキ ナデ	灰褐 黑茶褐	石 良		
11 1	壺 脚			ナデ ナデ		淡黄褐 淡黄褐	石・長 良		
11 2	壺 口 縁	22.0	ハケ・ミガキ ナデ・ハケ			明赤褐 明燈茶	石・長 良		
11 3	壺 口 縁	(21.4)	ナデ ナデ			暗褐 暗褐	長 良		

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上下 外内	胎 十 燒成	その他の 成
			口部	体部	武部			
114	壺 口縫	16.0				淡灰褐	石・長・金 良	
115	壺 口縫	(20.1)	ナデ ヨコミガキ			赤褐 赤褐	石・長 良	
116	壺 口縫	(17.1)	ナデ ヨコミガキ			暗褐 暗褐	石・長 良	
117	壺 口縫	(18.3)	ハケ・ナデ ミガキ			黒灰 黒灰	石・長 良	
118	壺 口縫	(16.3)	マメツ ナデ			淡褐 淡褐	長良	
119	壺 口縫	(16.1)	ヨコナデ ヨコナデ			暗褐 暗褐	石・長 良	
120	壺 口縫	(9.8)	マメツ マメツ			淡褐 明赤褐	石・長 良	
121	壺 口縫	(10.4)	タテハケ ナデ			暗褐 淡褐	石・長 良	
122	壺 口縫	(8.7)	マメツ ナデ			赤褐 暗褐	石・長 良	
123	壺 底	8.4			ナナメミガキ ナデ・ミガキ	淡褐 淡褐	石・長 良	黒斑
124	壺 底	(8.5)			マメツ マメツ	褐 褐	石・長・紫 良	黒斑
125	高杯 脚	11.2			ハケ・ミガキ ナデ	淡褐 淡褐	長良	
126	高杯 脚			ハケ・ミガキ シボリ		淡褐 淡褐	石・長 良	
127	高杯 柱			タテミガキ ナデ		褐 褐	石・長 良	
128	壺 底	5.2			ナデ ナデ	淡赤褐 暗灰	石・長 良	
129	鉢か高杯 脚			ハケ・ミガキ ナデ		淡褐 淡褐	石・長・金 良	
130	壺 口縫	(30.6)	ナデ マメツ	ハケ マメツ		明梗赤灰 明梗茶	石・長 良	
131	壺 口縫	(23.0)	ナデ マメツ			明梗褐 灰褐	石・長 良	
132	壺 口縫	(28.0)	ナデ ナデ	ハケ ミガキ		浮灰褐 灰茶褐	石・長 良	
133	壺 口縫	(31.5)	マツ ナデ			褐 褐	石・長 良	
134	壺 口縫	(27.4)	ナデ マメツ			赤褐 黑灰	長良	
135	壺 口縫	(18.0)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長・金 良	
136	壺 口縫	(16.0)	マメツ マメツ			淡茶褐 淡茶褐	石・長 良	

番号	器種	口径底径 器高	手法			色調 上下 外内	胎土 焼成	その他
			口縁部	体部	底部			
137	壺 口縁	(10.3)	ナデ ナデ			暗褐色 褐	石・長良	
138	壺 底	(6.5)	ナデ ナデ			暗赤褐色 暗褐色	石良	
139	壺 底	6.8	ヨコナデ ナデ			明褐色 黒	石・長良	
140	壺 底	(5.3)	マメツ マメツ			乳灰褐色 淡褐色	石・長良	
141	壺 体			マメツ マメツ		褐	石・長良	
142	壺 口縁	(19.7)	ハケ ナデ	ミガキ ナデ		明褐色 明褐色	石・長良	
143	壺 口縁	(13.1)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ハケ・ミガキ		灰黃褐色 灰黃褐色	石・長・金良	
144	壺 口縁	(25.8)	ナデ ナデ			明褐色 淡明褐色	石・長良	
145	壺 口縁	(25.1)	マメツ マメツ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
146	壺 口縁	(19.1)	タテハケ→ナデ ミガキ			暗褐色 褐	長良	模
147	壺 口縁	(33.7)	ナデ ナデ			明赤褐色 淡褐色	石・長良	
148	壺 口縁	(20.4)	マメツ マメツ	ミガキ マメツ		乳茶褐色 乳白透赤	石・長良	模
149	壺 口縁	(20.4)	ナデ ナデ	ミガキ ミガキ		黑灰 黑灰	石・長良	模
150	鉢 口縁	(12.2)	ナデ マメツ			淡明褐色 淡明褐色	石・長・金良	
151	壺 底	7.2		ナデ マメツ		淡赤褐色 黒	石・長良	
152	壺 底	5.8		マメツ マメツ		淡明褐色 淡褐色	石・長良	
153	壺 底	(4.4)		マメツ マメツ		赤褐色 赤褐色	長良	
154	鉢 口縁	(12.2)	ヨコナデ ミガキ			赤褐色 淡赤褐色	石・長良	
155								欠番
156	壺 口縁	(14.5)				明赤燈 明灰燈	石・長良	
157	壺 口縁	(23.4)	ナデ ナデ			淡赤褐色 赤褐色	石・長良	
158	壺 口縁	(20.5)	ナデ ハケ			淡明褐色 淡褐色	石・長良	
159	壺 口縁	(10.3)	ナデ ナデ			赤茶褐色 赤茶褐色	石良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手法			色調 上 下 外 内	胎土 焼成	その他
			口縁部	体部	底部			
160	壺 底	(3.8)			マメツ マメツ	褐 褐	石・長 良	
161	高杯 环	30.2	ナデ ナデ			明茶褐 明茶褐	石・長 良	
162	鉢 底	1.7	マメツ ナデ	マメツ マメツ	マメツ ナデ	淡明茶褐 暗灰褐	石・長 良	ミニチュア
163	壺 口縁	(4.8)						ミニチュア
164	壺 口縁	(19.0)	ナデ マメツ			褐 淡灰褐	石・長 良	
165	壺 口縁	(24.7)	マメツ マメツ			淡褐 褐	石・長 良	
166	壺 口縁	(18.3)	ナデ ミガキ			明茶褐 明茶褐	石・長・金 良	
167	壺 口縁	(18.4)	マメツ ナデ			淡茶褐 茶褐	石・長 良	
168	壺 口縁	(12.2)	ハケ・ナデ ハケ・ナデ		ミガキ・ナデ ミガキ	乳白茶褐 乳白茶褐	石 良	
169	壺 底	(7.1)			ミガキ ミガキ	明褐 明褐	石・長 良	
170	高杯 脚	(8.4)			ナデ ナデ	淡褐 淡褐	石・長 良	
171	ジョッキ 底	(13.3)			ヘラ ヘラ	淡明褐 黄褐	石・長 良	
172	壺 口縁	(33.8)	ナデ ナデ	ハケ ナデ		赤茶褐 明神茶	石・長 良	
173	壺 口縁	(26.7)	ナデ マメツ			灰茶褐 灰茶褐	石・長 良	
174	壺 口縁	(22.2)	マメツ マメツ	マメツ ミガキ		淡褐 淡褐	石・長 良	
175	壺 口縁	(28.8)	マメツ マメツ		マメツ ナデ	淡灰褐 淡灰褐	石・長 良	
176	壺 底	(6.7)			マメツ マメツ	淡赤褐 淡暗褐	石・長 良	
177	壺 口・脚	(9.2)	マメツ マメツ			灰褐	長 良	
178	壺 頭					黑褐 褐	石・長 良	
179	壺 口縁	(27.4)	ミガキ ナデ			黑褐 黑褐	石・長 良	
180	壺 口縁	(15.5)	ナデ ナデ			淡褐 淡黄褐	石・長 良	煤
181	壺 口縁	(18.4)				黑 灰茶褐	石・長 良	
182	壺 口縁	(25.1)	ナデ ミガキ→ナデ			暗褐 褐	石 良	煤

番号	器種	口径底径	手法			色調 上下	胎土 外内	成焼	その他
			口部	体部	底部				
183	壺 口部	(16.8)	ハケ→ミガキ ミガキ			淡褐色	石・長良		
184	壺 口部	(12.0)	マメツ マメツ	マメツ ナデ		赤褐色	石・長良		
185	壺 口部	(21.0)		マメツ マメツ		墨褐色	石・長・雲良		
186	壺 口部	(22.3)	タテ・ハケ ナデ・ミガキ			黒褐色	長良		僅
187	亞 胸			マメツ マメツ		淡赤褐色 淡黃褐色	石・長良		
188	壺 口部	(19.7)	ハケ・ナデ ミガキ			黒褐色	石・長良		
189	壺 底	(5.6)			ミガキ マメツ	明次褐色 淡茶褐色	良		
190	壺 底	(6.5)			ミガキ ハケ	明灰褐色 黒灰褐色	石・長良		
191	壺 底	(8.5)			ナデ ナデ	淡茶褐色 乳灰茶	石・長・金良		
192	壺 口部	(27.0)	ナデ・ミガキ ナデ			淡褐色	石良		
193	壺 口部	(23.6)		ミガキ		明褐色	石・長良		
194	壺 口部	(15.4)	ミガキ ミガキ			褐色	石・長良		
195	壺 底	4.1			マメツ ナデ	褐色	石・長良		
196	壺 口部	11.3	ミガキ ミガキ			灰褐色	石・長良		
197	壺 口部	26.6	ミガキ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長良		
198	壺 口部	29.4	ナデ・ミガキ ナデ			褐色	長良		
199	壺 口部	15.0	ナデ			淡灰褐色	石・長良		
200	壺 底	7.4		タテミガキ ミガキ		墨褐色	石・長良		
201	高坏 脚	12.3		ミガキ ナデ		褐色	石・長良		
202	壺 口部	(22.4)	ミガキ ミガキ			明茶褐色 明茶褐色	長・金良		
203	壺 口部	(19.6)	ハケ・ミガキ ミガキ			暗褐色	石・長・金良		
204	壺 口部	(15.8)	ナデ ミガキ			褐色 暗褐色	石・長・金良		
205	壺 底	(9.8)		マメツ ナデ		茶褐色 黑色	石・長・金不良		

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上下 外内	筋 燒成	その他の 成
			口輪添	体部	底部			
206	鉢 口縁	(19.4)	ナデ ナデ			淡褐色	石良	
207	高杯 杯	(28.4)	ミガキ ミガキ			灰褐色	良	
208	甌 口縁	(21.6)	ナデ ナデ・ミガキ			淡褐色	石・長・金良	
209	甌 口縁	(16.4)	マメツ ナデ・ミガキ			淡褐色 明茶褐色	石・長良	
210	甌 底	6.2			マメツ マメツ	明茶褐色	石・長良	
211	壺 口縁	(13.5)	ナデ・ミガキ ナデ・ミガキ			褐色	石・長良	
212	甌 口縁			ナデ・タテハケ マメツ		暗褐色 明褐色	石・長良	
213	甌 底	(11.2)			ミガキ ナデ	褐色	石・長良	
214	甌 底	6.5			マメツ マメツ	灰褐色	石・長良	
215	甌 底	(6.8)			ナデ・ミガキ ハケ・ナデ	明茶褐色 灰褐色	石・長良	
216	甌 底	6.0			マメツ マメツ	灰褐色	石・長良	
217	甌 底	6.4			ミガキ マメツ	明茶褐色	石・長・金良	
218	甌 底	(5.5)			タテハケ ナデ	淡褐色 褐色	石・長・金良	
219	甌 底	(5.8)			マメツ マメツ	明茶褐色 淡褐色	長良	
220	鉢 底	(4.5)			マメツ マメツ	淡褐色 黑色	石・長良	
221	甌 底	4.2			マメツ マメツ	淡黃褐色	石・長良	
222	甌 底	(5.7)			マメツ ナデ	明茶褐色 晴茶褐色	石・長良	
223	甌 底	4.5			マメツ マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長良	
224	甌 底	(6.6)			タテミガキ ナデ	赤褐色 褐色	石・長良	
225	壺 口縁	(23.3)	ナデ ナデ・ミガキ			褐色 明褐色	石良	
226	壺 口縁	(18.9)	ナデ ナデ			淡黃褐色	石・長・金良	
227	甌 口縁	(20.1)	ハケ・ナデ ナデ			淡灰褐色 淡灰褐色	石・長良	
228	壺 口縁	(15.3)	タテハケ ナデ			褐色 褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口徑底径 器高	手法			色調 上 下 外 内	繪 上 焼 成	その他
			口縫部	体部	底部			
229	寺 口縫	(13.9)	ナデ ナデ			淡明茶褐色 淡明茶褐色	長 良	
230	寺 口縫	(29.3)	ナデ ナデ			黒 黒 灰	石・長・金 良	
231	鉢 口頭	(14.5)	ナデ ナデ			茶 茶褐色	石・長 良	
232	壺 口頭	9.2	マメツ マメツ			明茶褐色	石・長 良	媒
233	壺 口縫	(16.2)	マメツ マメツ			淡灰褐色 淡灰褐色	石・長 良	
234	壺 口頭	(22.2)	マメツ マメツ			淡明茶褐色 淡明茶褐色	石・長 良	
235	壺 口頭体	(20.0)	ナデ ナデ	ミガキ ハケ		淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 良	
236	壺 口頭	(25.6)	マメツ マメツ			淡白褐色 淡白褐色	右・長 良	
237	壺 口頭	(24.7)	ナデ ナデ			淡茶褐色 茶 毛	石・長 良	
238	壺 口頭体	22.0	マメツ マメツ			明 毛	石・長 良	
239	壺 口頭	(25.9)	タテハケ ナデ・ミガキ			赤 褐 褐色	石・長 良	
240	壺 口頭	(19.5)	マメツ ナデ			暗褐色 褐	石・長 良	
241	壺 口頭	(21.0)	ナデ ナデ			淡黄褐色 淡褐色	石・長 良	
242	壺 口頭	(17.3)	ナデ ナデ	ハケ ナデ		淡灰褐色 淡灰褐色	右・長 良	
243	壺 口頭	(25.0)	ナデ マメツ			淡赤褐色 暗褐色	石・長 良	
244	壺 口頭	(27.0)	ナデ ナデ			淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 良	
245	壺 口頭	(20.3)	タテハケ ナデ			黑褐色 黑褐色	右・長 良	媒
246	壺 口頭体	(17.9)	マメツ マメツ			茶 暗灰褐色	石・長 良	
247	鉢 口縫	(16.3)	マメツ ナデ			暗灰褐色 暗灰褐色	石・長 良	
248	鉢 口頭体	(10.8)	マメツ マメツ			褐 褐	右・長 良	
249	壺 頭		ナデ ミガキ			褐 褐	石・長・雲 良	
250	壺 頭体			マメツ ナデ		褐 淡灰褐色	石・金 良	
251	壺 底	(7.9)			ミガキ ハケ	淡黃褐色 灰褐色	右・長 良	

番号	器種 部位	口徑底径 器高	手 法			色調 上下	胎土 外内 燒成	その他の 成
			口縁部	体 部	底 部			
252	壺底	(5.6)			ミガキ マメツ	黒褐 乳茶灰	石・長良	
253	壺底	(4.7)			ナデ ナデ	灰褐 灰褐	長良	
254	壺底	(4.1)			ハケ ハケ・ナデ	褐 暗褐	良	
255	壺底	(9.8)			ミガキ ナデ・ミガキ	茶褐 茶褐	石・長良	
256	壺底	5.2			マメツ 指添	褐 黑褐	長良	
257	壺底	4.6			ミガキ マメツ	灰褐 褐	石・長良	
258	壺底	(6.4)			ナデ ナデ	淡茶褐 褐	石・長良	
259	壺底	(6.6)			マメツ マメツ	灰褐 淡灰褐	石・長良	
260	高环 坏	(32.7)	マメツ マメツ			灰褐 淡赤茶	石・長良	
261	高环 口 縫	22.4			マメツ マメツ	灰茶褐	石・長良	
262	高环 脚				ミガキ ナデ	褐	石・長・金良	
263	高环 脚	9.8			マメツ ナデ	明赤澄 明赤灰	石・長良	
264	高环 脚	(7.9)		ハケ・ミガキ ナデ		淡褐 淡褐	長・金良	
265	高环 口 縫	(17.8)	ナデ マメツ			黄褐 黄褐	石・長・蜜良	
266	高环 脚	(7.2)			ナデ ナデ	淡灰褐 淡灰褐	石・長良	
267	鉢 口 縫	(8.7)	ナデ ナデ			褐 暗褐	石・長良	
268	口 頬	(23.4)	ナデ タテハケ			暗褐 淡暗褐	石・長良	
269	口 頬	(21.1)	ナデ ナデ			褐 暗灰	石・長・金良	
270	口 頬	(33.8)	ナデ ナデ			淡暗茶褐 淡暗茶褐	石・長良	
271	口 頬体	(11.4)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長良	
272	口 頬	(26.2)	ナデ ミガキ			暗褐 暗褐	石・長良	
273	口 頬	(17.9)	ナデ ナデ			黑 暗灰褐	長良	
274	裏底	6.5			マメツ ナデ	褐 灰褐	石・長良	

番号	器種 部位	口径 底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎土 焼成	その他
			口部	体部	底部			
275	壺底	6.0			ナデ ナデ	褐 暗茶褐色	石良	
276	壺底	6.7			ミガキ→ナデ ナデ	淡暗褐色 黑褐色	石・長・金良	
277	壺口最	(17.9)	ナデ ナデ			淡明褐色 淡明褐色	石良	
278	壺底		ナデ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
279	壺張体			ハケ ナデ		灰褐色 灰褐色	石・長良	
280	壺口縫	(11.3)	ハケ ナデ			淡黄褐色 淡黄褐色	石良	
281	壺口縫	(15.2)	マメツ ナデ			明黄褐色 明黄褐色	石・長良	
282	壺底				タテミガキ ナデ	淡暗褐色 淡暗褐色	石良	
283	壺底	7.5			ミガキ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長良	
284	鉢口縫休	(14.7)	ナデ ナデ			黒 黒	長良	
285	高坏脚		マメツ マメツ			淡灰褐色 淡灰褐色	石・長・金良	
286	鉢口縫	(15.8)	マデ ハケ			褐 褐	石・長・金良	
287	壺口縫	(19.9)	ハケ・ナデ ハケ・ミガキ			暗茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
288								欠番
289	壺口縫	(25.7)	ナデ ナデ	ハケ ミガキ		黒 淡褐色	石・長良	
290	壺口縫	(23.3)	ナデ ナデ	ハケ ハケ・ナデ		暗褐色 暗褐色	石・長良	
291	壺口縫	(14.8)	ハケ ミガキ			褐 淡褐色	石・長良	
292	高坏脚	(7.5)			ミガキ ナデ	明茶褐色 淡茶褐色	石・長良	
293	壺底	(6.5)			ナデ ナデ	褐 淡褐色	石・長・金良	
294	壺底	6.8			マメツ マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長良	
295	高坏脚			ミガキ マメツ		褐 褐	石・長・金良	
296	壺底	8.6			ナデ ナデ	暗茶褐色 暗褐色	石・長良	
297	壺口縫休	21.0	マメツ マメツ			灰褐色 灰褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手法			色調 上下 外内	胎土 燒成	その他
			口部	体部	底部			
298	壺 口縁	(16.3)	ナデ マメツ			褐 褐	石・長 良	
299	壺 口縁	(24.8)						
300	壺 底	(8.0)		ミガキ ナデ		黒 淡黄褐	石・長・金 良	
301	壺 底	9.0		マメツ マメツ		淡灰黄褐	石・長 良	
302	壺 底	(19.1)			ナデ・ミガキ ナデ	赤褐 褐	石・長・金 良	
303	高杯 杯	(19.8)	ナデ マメツ			淡黄褐 淡黄褐	石・長 良	
304	高杯 杯	(17.0)	マメツ ミガキ			褐 褐	石 良	
305	高杯 杯	(20.0)	マメツ マメツ			淡赤褐 暗灰	石・長 良	
306	口縁	(23.9)	ナデ マメツ			淡褐 淡褐	石・長 良	
307	壺 口縁	(22.4)	ナデ マメツ			淡褐 淡褐	石・長 良	
308	壺 口縁	(24.4)	マメツ ナデ	ハケ・ミガキ マメツ		淡明茶褐 淡明茶褐	石・長 良	
309	壺 口縁	(22.3)	マメツ ナデ			明茶褐 黑灰	石・長 良	
310	壺 口縁	(31.5)	マメツ マメツ			淡茶褐 淡茶褐	石・長 良	
311	壺 口縁	(20.5)	ナデ ナデ			淡褐 茶褐	石・長 良	
312	壺 口縁	(19.8)	ナデ ナデ・ミガキ			明茶褐 明茶褐	石・長 良	
313	壺 口縁	(20.7)	ナデ・ミガキ ナデ			褐 褐	石・長 良	
314	壺 底	8.8		ミガキ・ナデ ナデ		明茶褐 明茶褐	石・長 良	
315	壺 底	6.2		ナデ ナデ		明茶褐 暗茶褐	石・長 良	
316	壺 底	6.0		タテハケ ナデ		茶褐 灰褐	石・長 良	
317	壺 底	(4.8)		マメツ マメツ			石・長 良	
318	壺 底	(5.4)		マメツ マメツ		淡褐 暗灰	石・長 良	
319	壺 底	(5.8)		マメツ マメツ		明茶褐 暗褐	石 良	
320	壺 底	4.9		ナデ ナデ		黑褐 灰褐	石・長 良	

番号	器種	口径底径	手 法			色調 上下 外内	胎上 施成	その他
			口縁部	体部	底部			
321	壺底	(8.7)			マメツ	淡黄褐色	石・長良	
322	壺口縁	(20.8)	マメツ マメツ			暗褐色	石・長良	
323	壺口縁	(18.5)	ナデ マメツ			暗褐色	石・長良	
324	壺口縁	(20.7)	ナデ ナデ			茶褐色	石・長良	
325	壺口縁	(29.2)				明灰褐色	石・長良	
326	壺口縁	(26.1)	マメツ ナデ			淡褐色 暗灰褐色	石・長良	
327	壺口縁	(22.1)	マメツ マメツ			明茶褐色	石・長良	
328	壺口縁	(13.7)	マメツ マメツ			淡褐色	石・長良	
329	壺口縁	(15.2)	ナデ ナデ			淡茶褐色 淡茶褐色	石・長良	
330	壺頸		ナデ ナデ			暗褐色	石・長良	
331	壺頸		ナデ マメツ			明赤褐色	石・長良	
332	壺底	(6.3)	ナデ マメツ			暗灰褐色 淡黃褐色	石・長良	
333	壺底	(7.5)	マメツ マメツ			淡明茶褐色 淡明茶褐色	石・長良	
334	高杯坏	(19.3)	マメツ マメツ			淡褐色 淡灰褐色	石・長良	
335	高杯坏	(19.0)	マメツ ナデ			淡暗茶褐色 淡暗茶褐色	石・金良	
336	高杯坏	(11.6)	ナデ・ミガキ マメツ			淡茶褐色 淡茶褐色	石・金良	
337	高杯坏	(12.1)	ミガキ ミガキ			淡茶褐色 淡茶褐色	石・良	
338	筋縫車	3.0 厚0.4				淡褐色	上器片を 利用	
339	ジョッキ 体		マメツ マメツ		タテミガキ ミガキ	明茶褐色 明茶褐色	石・良	
340	ジョッキ 底	10.5			ミガキ ミガキ	明茶褐色 黑	石・長・金良	
341	壺口縁	(22.0)	マメツ マメツ	ナデ マメツ		明茶褐色 淡褐色	石・長良	
342	壺口縁	(25.6)	マメツ ナデ	ハケ マメツ		明茶褐色 淡褐色	石・長良	
343	壺口縁	26.4	ハケ・ナデ	ハケ			石・長良	

番号	器種 部 位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎土 燒成	その他の 性質
			口 線 部	体 部	底 部			
344	甕底	7.0			マメツ	明茶褐 黒褐	石・長・金 良	
345	甕底	6.3			ナデ マメツ	赤褐 茶褐	石・長 良	
346	甕 口 線	(28.8)	ナデ マメツ	マメツ マメツ		淡褐 墨	石・長 良	
347	甕 口 線	(26.5)	マメツ マメツ			暗褐 暗褐	石・長・金 良	
348	甕 口 線	20.3	マメツ マメツ	マメツ マメツ		灰	石・長 良	
349	甕 口頭体	(21.9)	マメツ マメツ	マメツ マメツ		乳灰 乳灰	石・長・金 良	
350	甕底	(6.9)			ナデ ナデ	明茶褐 暗茶褐	石・長・金 良	
351	甕底	6.2			ミガキ・ナデ ナデ	茶褐 暗茶褐	石・長 良	
352	甕底	5.8			ミガキ・ナデ ナデ	茶褐 茶褐	石・長・金 良	
353	甕底	(7.1)			ミガキ マメツ	赤茶褐 暗灰	石・長 良	
354	甕底	(7.6)			ミガキ マメツ	明茶褐 淡暗茶褐	石・長 良	
355	甕底	6.0			ミガキ・ナデ ナデ	茶褐 褐	石・長 良	
356	甕底	5.8			マメツ マメツ	淡明褐 淡褐	石・長 良	
357	甕 口 線	(12.2)	マメツ マメツ			淡明茶褐 淡茶褐	石・長 良	
358	甕 口 線	(21.8)	ナデ マメツ			淡明茶褐 淡褐	石・長 良	
359	甕 口頭	(30.5)	ハケ・ミガキ ミガキ			淡明茶褐 黄褐	石・長 良	
360	甕 口 線	(25.7)	ナデ ナデ			褐	石・長 良	
361	甕 口 線	(24.8)	ハケ ナデ			明茶褐 明茶褐	石・長 良	
362	甕 肩		マメツ マメツ			淡明褐 褐	石・長 良	
363	甕 肩			マメツ マメツ		明茶褐 暗灰	石・長 良	
364	甕 底	9.9			マメツ マメツ	淡灰黄褐	良	
365	甕 底	(11.0)			ミガキ ミガキ・ナデ	明褐 淡明褐	長 良	
366	甕 底	5.5			マメツ マメツ	淡褐 淡明褐	石・長・金 良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎上 焼成	その他の
			口部	体部	底部			
367	壺底	(8.5)			ミガキ マメツ	淡赤褐色 淡褐色	石・長良	
368	壺底	(10.0)			マメツ マメツ	淡褐色 淡灰褐色	石・長良	
369	壺底	(11.4)			ミガキ マメツ マメツ	黒褐色 灰褐色	石・長良	
370	壺底	(8.1)			マメツ マメツ	淡黄褐色 淡褐色	石・長良	
371	高杯 杯	(24.0)	マメツ マメツ			暗茶褐色 暗茶褐色	良	
372	高杯 杯	(24.1)	ミガキ ナデ			淡茶褐色 茶褐色	石・長良	
373	高杯 杯	(22.0)	マメツ マメツ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
374	高杯 杯	(19.2)	ナデ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
375	高杯 杯	(24.9)	マメツ マメツ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
376	高杯 杯	(14.2)	マメツ マメツ			淡褐色 淡褐色	右・長良	
377	高杯 杯	(18.3)	マメツ マメツ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
378	高杯 杯	20.2	ナデ ナデ	ミガキ ミガキ		黑色 灰茶褐色	良	
379	高杯 杯	(7.1)	マメツ ナデ			淡褐色 明茶褐色	右・長良	
380	高杯 脚	(12.0)			マメツ マメツ	淡黄褐色 黃褐色	石・長良	
381	鉢 口縁	(11.3)		ミガキ ミガキ		暗茶褐色 暗茶褐色	長良	

3 区

388	壺 口縁	(32.7)	ナデ ナデ・ミガキ			明茶褐色 黃褐色	石・長良	
389	鉢 口縁	25.2				淡灰黃褐色	長良	
390	壺底	7.3		ミガキ・ナデ ナデ	茶褐色 暗灰褐色	石・長良		
391	壺底	(5.1)		ミガキ・ナデ ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長良		
392	壺底	6.0		ナデ マメツ	明茶褐色 淡明茶褐色	石・長良		
393	壺底	5.2		マメツ マメツ	明茶褐色 茶褐色	右・長良		
394	亞口縁	(31.8)	ナデ ナデ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 外 下 内	胎 燒	土 成	その他
			口縁部	休 部	底 部				
395	壺 口 縫	(30.4)	ナデ マメツ			明茶褐色 明茶褐色		石・長良	
396	高 环 脚				ミガキ ミガキ	淡茶褐色 淡茶褐色		石・長良	
397	壺 口 縫	(23.3)	ナデ ナデ	ミガキ ナデ・ミガキ		淡茶褐色 淡茶褐色	石・長良		
398	壺 口 縫	(21.0)	マメツ マメツ			灰黃褐色 明黃褐色	石・長良		
399	壺 口 縫	(18.5)	ミガキ・ナデ マメツ			暗茶褐色 暗茶褐色	石・長良		
400	壺 口 縫	(30.8)	ナデ ナデ			褐 明褐色	石・長良		
401	鉢 口 縫	(21.3)	ナデ ナデ			茶褐色 褐色	長良		
402	鉢 口 縫	(23.3)	ミガキ・ナデ ナデ			明茶褐色 明茶褐色	石 良		
403	壺底	6.8			ナデ マメツ	明褐色 墨	石・長・金 良		
404	壺底	5.7			ミガキ・ナデ マメツ	淡茶褐色 淡黃褐色	石・長・金 良		
405	壺底	8.4	マメツ マメツ		ナデ ナデ	淡茶褐色 茶褐色	石・長良		
406	壺底	8.3			ミガキ・ナデ マメツ	明茶褐色 暗茶褐色	石・長良		
407	壺底	4.8			マメツ マメツ	明黃褐色 明黃褐色	石・長良		
408	壺底	4.0			ミガキ ナデ	暗茶褐色 明茶褐色	石・長良		
409	壺底	6.3			ナデ マメツ	明茶褐色 灰黃褐色	石・長良		
410	壺 口 縫	(23.0)	ナデ ナデ			茶褐色 灰褐色	石・長・金 良		
411	壺 口 縫	(26.6)	ナデ マメツ			黃褐色 黃褐色	長良		
412	壺 口 縫	(41.2)	マメツ マメツ			明茶褐色 黃褐色	石・長良		
413	壺底	(14.0)			マメツ マメツ	明黃褐色 明黃褐色	石・長良		
414	壺底	(8.6)			ミガキ マメツ	明茶褐色 暗茶褐色	石・長良		
415	壺底	(6.0)	ナデ マメツ			暗茶褐色 暗褐色	石・長良		
416	高 环 环	(25.2)	マメツ マメツ			褐色 褐色	石・長良		
417	壺 口 縫	(36.0)		ハケ ミガキ		淡黃褐色 明茶褐色	石・長・金 良		

番号	器種	口径底径	手 法			色調 上下	胎土 外焼	その他 成
			口縁部	体部	底部			
418	壺 口縁	(27.4)	ナデ ナデ	マメツ マメツ		明黄褐 灰褐	石・長良	
419	壺 口縁	(25.8)	マメツ ナデ			淡褐 褐	石・長良	
420	鉢 胴		ナデ ナデ	ミガキ ナデ		明茶褐 淡茶褐	石・長良	
421	壺 底	(6.6)			マメツ マメツ	明茶褐 暗灰黄褐	石・長良	
422	壺 底	7.2			ミガキ ナデ	褐 暗灰	石・長良	
423	壺 底	6.2			ナデ ナデ	暗褐 黑	石・長良	
424	壺 底	4.8			マメツ ナデ	明茶褐 茶褐	石・長金良	
425	壺 底	6.8			ミガキ・ナデ ナデ	明茶褐 暗茶褐	石・長良	
426	高杯 脚	7.8			マメツ マメツ	茶褐 茶褐	石・長金良	
427	壺 底	6.2			ミガキ・ナデ ナデ	明茶褐 暗茶褐	石・長良	
428	壺 底	(7.1)			ミガキ・ナデ ナデ	茶褐 淡灰褐	石・長良	
429	壺 底	6.8			ナデ ナデ	淡茶褐 淡茶褐	石・長良	
430	壺 口縁	(35.6)	マメツ ナデ			黄褐 淡明褐	石・長金良	
431	壺 口縁	(27.2)	ミガキ ミガキ・ナデ			茶褐 茶褐	石・長金良	
432	壺 口縁	(24.8)	マメツ ミガキ			暗黄褐 暗黄褐	石・長良	
433	壺 底		ナデ マメツ			明茶褐 黄褐	石 良	
434	壺 口縁	(20.4)	ナデ・ミガキ ナデ			褐	石・長金良	
435	壺 底	9.8			ナデ ミガキ	赤茶 赤茶	石・長良	
436	壺 底	12.2			ハケ マメツ	灰褐 灰褐	石・長良	
437	壺 底	14.0			マメツ マメツ	黄褐 明茶褐	石・長良	
438	高杯 杯	(20.8)	マメツ ミガキ			茶褐 淡明茶褐	石・長良	
439	高杯 杯	(15.1)	ナデ ミガキ			淡明茶褐 淡明茶褐	石・長金良	
440	高杯 脚	10.0			ミガキ・ナデ マメツ	明茶褐 明茶褐	石・長良	

番号	器種 部位	口径 底径 器高	手法			色調 上 外 下 内	胎 燒成	その他
			口唇部	体部	底部			
441	壺 口縁	(25.2)	ナデ ミガキ			暗褐色 暗褐色	石・長良	煤
442	壺 口縁	(14.9)	マメツ ミガキ			黄褐色 淡茶褐色	石・長良	
443	壺底	6.9			ナデ ナデ	褐色 暗茶褐色	石・長良	
444	壺底	5.1			ナデ ナデ	明茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
445	壺底	5.5			マメツ マメツ	明茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
446	壺底	(6.9)			ナデ マメツ	淡黃茶褐色 明黃褐色	石・長・金良	
447	壺底	(6.4)			マメツ マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長良	
448	壺底	4.4			ナデ ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	長良	
449	壺底	7.1			ミガキ ナデ	淡茶褐色 褐色	石・長良	
450	壺底	5.2			マメツ マメツ	淡茶褐色 淡暗褐色	石・長良	
451	壺 口縁	(38.0)	マメツ マメツ			淡黃褐色 淡暗黃褐色	石・金良	
452	壺 口縁	(31.2)	マメツ ナデ			黃褐色 褐色	石・長・金良	
453	壺 口縁	(19.3)	ナメツ ナデ			淡暗褐色 茶褐色	石・長良	
454	壺 口縁	(13.0)	ナデ ミガキ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
455	壺 口縁	(20.4)	ナデ ナデ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
456	壺 口縁	(23.4)	ナデ ナデ			暗灰黃褐色 暗灰黃褐色	石・長良	
457	壺 口縁	(20.2)	ナデ・ミガキ ミガキ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
458	壺 口縁	(14.8)	ナデ ミガキ			明茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
459	壺 口縁	(32.0)	マメツ マメツ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
460	壺底	(8.3)			ミガキ マメツ	淡褐色 暗灰褐色	石・長良	
461	壺底	(9.0)			ミガキ マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
462	壺底	(7.3)			ナデ マメツ	淡明褐色 淡褐色	石・長良	
463	高杯 杯	(30.0)	ミガキ ミガキ			茶褐色 茶褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口径真径 器高	手 法			色調 上下 外内	胎土 燒成	その他
			口縁部	体部	底部			
464	高杯 杯	(18.4)	ミガキ マツ			暗褐色 黃褐色	石・長良	
465	鉢 完形	7.8 4.0			ナデ ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長良	
466	高杯 脚	(12.9)			マツ マツ	赤褐色 赤褐色	石・長・金良	
467	壺 口縁	(33.8)	マツ ナデ			淡明茶褐色 淡明茶褐色	石・長良	
468	壺 口縁	(16.8)	ハケ マツ			茶褐色 褐色	石・長良	
469	壺 口縁	(29.0)	ミガキ・ナデ マツ			黃褐色 淡明茶褐色	石・長良	
470	壺 口縁	(25.8)	マツ ナデ・ミガキ			暗茶褐色 褐色	石・長良	
471	壺 口縁	(17.4)	ミガキ ミガキ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
472	壺 口縁	(20.0)	マツ ミガキ			明黄褐色 明茶褐色	石・長良	
473	壺 口縁	(28.7)	ハケ・ナデ ミガキ			淡明茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
474	壺 口縁	(22.8)	マツ マツ			淡明茶褐色 明黄褐色	石・長良	
475	壺 口縁	(22.8)	ナデ マツ			黃褐色 黃褐色	石・長・金良	
476	壺 口縁	(21.1)	マツ マツ			淡暗褐色 黃褐色	石・長・金良	
477								欠番
478	壺底	(6.9)			ミガキ・ナデ ミガキ・ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長良	
479	壺底	(5.2)			マツ マツ	明茶褐色 暗灰褐色	石・長良	
480	壺底	(6.1)			ミガキ・ナデ マツ	茶褐色 淡褐色	石・長良	
481	壺底	(4.0)			マツ ナデ	淡明茶褐色 暗褐色	石・長良	
482	壺底	5.5			ミガキ・ナデ マツ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長・金良	
483	壺底	4.2			ナデ ナデ	茶褐色 暗灰褐色	石・長良	
484	壺底	(4.2)			ミガキ・ナデ ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
485	壺 口縁	(12.4)	マツ マツ			黃褐色 暗灰褐色	石・長良	
486	壺 口縁	(34.4)	ナデ マツ			黃褐色 黃褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口徑底径 器高	手 法			色調 上外 下内	胎土 燒成	その他の
			口部	体部	底部			
487	壺 口縁	(36.2)	マメツ マメツ			淡黃褐 淡褐	石・長・金良	
488	壺 口縁	(26.0)	ナデ マメツ			黃褐 褐	石・長良	
489	壺 口縁	(24.7)	ナデ マメツ			淡明茶褐 淡明褐	石・長良	
490	壺 口縁	(30.3)	ナデ マメツ			褐 褐	石・長良	
491	壺 口縁	(19.3)	マメツ ナデ			淡茶褐 淡茶褐	石・長・金良	
492	壺 口縁	(28.0)	ナデ マメツ			褐 黃褐	石・長良	
493	壺 口縁	(19.8)	マメツ マメツ			淡褐 淡褐	石・長良	
494	壺 口縁	(15.4)	ナデ ナデ			茶褐 黃褐	石・長・金良	
495	壺 口縁	(16.4)	ナデ・ミガキ ハケ・ナデ			暗褐 暗茶褐	石・長良	
496	壺 口縁	20.7				淡茶褐	石・長良	
497	壺 口縁	(12.4)	ナデ マメツ			明茶褐 明茶褐	石・長良	
498	壺 口縁	(14.2)	ミガキ ナデ			淡褐 淡褐	石・長良	
499	壺 口縁	(12.9)	ナデ マメツ			暗黃褐 黃褐	石・長良	
500	甕 口縁	(11.0)	マメツ マメツ			淡黃褐 淡黃褐	石・長良	
501	壺 口縁	(10.9)	マメツ マメツ			淡明茶褐 淡茶褐色	石・長良	
502	壺 底	(17.7)			ナデ ナデ	黃褐 明茶褐	石・長良	
503	壺 底	(11.1)			マメツ ナデ	茶褐 茶褐	石・長良	
504	壺 底	5.8			ミガキ・ナデ ナデ	淡褐 淡褐	石・長良	
505	壺 底	(8.4)			ナデ ミガキ・ナデ	暗赤茶褐 明茶褐	石・長良	
506	高环 脚	(12.3)			マメツ ナデ	淡茶褐 淡茶褐	石・長良	
507	高环 脚			ミガキ マメツ		淡黃褐 淡黃褐	石・長・金良	
508	高环 脚			ミガキ マメツ		暗茶褐 暗茶褐	石・長良	
509	鉢 (完形)	11.4 9.7	マメツ マメツ	ナデ・ミガキ ナデ	ナデ ナデ	淡茶褐 淡茶褐	石・長良	

番号	器種 部 位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎土 燒成	その他
			口縁部	体 部	底 部			
510	鉢 口縁	(10.9)	マメツ マメツ			明黄褐色 明黄褐色	石・長良	
511	ショッキ 底	(11.0)			ナデ ミガキ	淡黄褐色 淡褐色	石・長良	
512	壺 口縁	(23.6)	ナデ ミガキ			明茶褐色 淡明褐色	石・長良	
513	壺 口縁	(20.7)	ミガキ・ナデ ミガキ			茶褐色 茶褐色	石・長良	
514	壺 口縁	(30.0)	マメツ ミガキ			褐色 淡暗茶褐色	石・長良	
515	壺 口縁	(30.4)	ハケ ミガキ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
516	壺 口縁	(39.8)	ナデ マメツ	ミガキ ミガキ		褐色 淡褐色	石・長良	
517	壺 口縁	(29.4)	ナデ ナデ	ハケ・ナデ ミガキ		淡明褐色 淡明褐色	石・長・命良	
518	壺 口縁	(22.8)	ミガキ ミガキ			茶褐色 茶褐色	石・長・金良	
519	壺 口縁	(16.9)	マメツ マメツ			暗茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
520	壺 口縁	(27.9)	マメツ ナデ	マメツ マメツ		黃褐色 茶褐色	石・長良	
521	壺 口縁	(22.4)	マメツ マメツ			淡明茶褐色 淡暗茶褐色	石・長良	
522	壺 口縁	(29.0)	ハケ ナデ			黃褐色 黃褐色	石・長良	
523	壺 口縁	(24.8)	ナデ ナデ	マメツ マメツ		淡明褐色 淡明褐色	石・長良	
524	壺 口縁	(30.4)	ナデ マメツ	ハケ マメツ		暗褐色 淡褐色	石・長良	
525	壺 口縁	(20.4)	ナデ マメツ			明茶褐色 淡茶褐色	石・長・金良	
526	壺 口縁	(19.9)	ナデ ナデ	ハケ ナデ		暗赤茶褐色 暗灰褐色	石・長良	
527	壺 底	(6.9)			ナデ ナデ	淡茶褐色 淡褐色	石・長良	
528	壺 底	6.6			マメツ マメツ	淡明茶褐色 淡褐色	石・長良	
529	壺 底	6.8			ナデ ナデ	明茶褐色 黑色	石・長良	
530	壺 底	6.8			ミガキ ナデ	淡明茶褐色 淡褐色	石・長良	
531	壺 底	7.8			ナデ ナデ	明茶褐色 黃褐色	石・長良	
532	壺 底	6.0			ナデ ナデ	明茶褐色 暗褐色	石・長良	

番号	器種 部 位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎土 石 燐	その他の 成
			口縁部	体 部	底 部			
533	甕底	(5.6)			マメツ マメツ	淡明黄褐 淡明黄褐	石・長良	
534	甕底	6.0			ミガキ ミガキ	明茶褐 暗茶褐	石・長良	
535	甕底	(7.0)			ミガキ ミガキ・ナデ	茶褐 茶褐	石・長良	
536	甕底	5.4			マメツ マメツ	明黄褐 明黄褐	石・長良	
537	甕底	5.9			ミガキ マメツ	明茶褐 褐	石・長良	
538	甕底	6.7			ミガキ・ナデ ナデ	明茶褐 暗褐	石・長良	
539	甕底 甕武	(4.2)			マメツ マメツ	明茶褐 黄褐	石・長良	
540	甕底	(6.7)			マメツ ナデ	明茶褐 暗茶褐	石・長良	
541	甕底	5.4				灰褐	石・長良	
542	甕底	(4.4)			マメツ マメツ	暗褐 淡明褐	石・長良	
543	壺 口縁	32.0	ナデ・ミガキ マメツ			淡黄褐 黄褐	石・長良	
544	壺 口縁	(27.8)	ナデ マメツ			茶褐 灰褐	石・長・金良	
545	壺 口縁	(23.0)	ナデ ナデ			淡茶褐 黄褐	石・長良	
546	壺 口縁	(16.7)	ナデ ナデ・ミガキ			淡明茶褐 明茶褐	石・長良	
547	壺 口縁	(21.4)	ナデ ナデ			褐 明茶褐	石・長良	
548	壺 口縁	(26.2)	ナデ ナデ			淡暗褐 黄褐	石・長良	
549	壺 口縁	(22.3)	ナデ マメツ			褐 明茶褐	石・長良	
550	壺 口縁	5.4	ナデ マメツ			淡黄褐 淡黄褐	石・長良	
551	壺 口縁	(17.7)	マメツ マメツ			暗茶褐 灰褐	石・長良	
552	壺 口縁	(22.4)	マメツ マメツ			明黄褐 明黄褐	石・長良	
553	壺 口縁	(23.8)	ハケ ナデ			明茶褐 明茶褐	石・長良	
554	壺 口縁	(20.9)	ナデ ナデ			淡明茶褐 黄褐	石・長良	
555	壺 口縁	(21.0)	ナデ マメツ			明褐 黄褐	石・長良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎 上 焼	その他 成
			口縁部	体 部	底 部			
556	壺 口縁	(20.5)	ナデ・ミガキ ナデ			暗茶褐色 茶褐色	右・長 良	
557	壺 口縁	17.8	ナデ ナデ			茶褐色 茶褐色	右・長 良	
558	壺 口縁	(9.8)	マメツ マメツ			暗茶褐色 暗茶褐色	右・長 良	
559	壺 口縁	(11.9)	ミガキ ミガキ・ナデ			暗褐色 暗褐色	右・長 良	
560	壺 口縁	(13.3)	ナデ ミガキ・ナデ			暗茶褐色 暗茶褐色	右・長 良	
561	壺 口縁	(23.0)	マメツ マメツ			褐色 淡褐色	右・長 良	
562	壺 口縁	(20.7)	ナデ・ミガキ ナデ			明茶褐色 明茶褐色	右・長 良	
563	壺 口縁	19.7	マメツ マメツ			淡黄褐色 淡黄褐色	右・長 良	
564	壺 底	9.4			マメツ ナデ	明茶褐色 茶褐色	右・長 良	
565	壺 底	(9.7)			ミガキ マメツ	茶褐色 褐色	右・長 良	
566	壺 底	(10.2)			ナデ マメツ	明茶褐色 明茶褐色	右・長 良	
567	壺 底	(9.6)			ナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	右・長 良	
568	壺 底	8.0				淡黄灰	右・長 良	
569	高环 完形	19.9 12.7 22.7				灰褐色	右・長 良	
570	高环 口縁	(25.9)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ナデ		淡褐色 淡褐色	右・長 良	
571	高环 口縁	(15.8)	ナデ ナデ	ミガキ ナデ		黑褐色 茶褐色	右・長 良	
572	高环 环	(12.8)	ミガキ ミガキ			暗褐色 黑色	右・長 良	
573	高环 环	(24.8)	マメツ マメツ			褐色 淡黄褐色	右・長 良	
574	高环 环	(15.2)	マメツ マメツ			明黄褐色 明黄褐色	右・長 良	
575	高环 脚			ヘラ ナデ		明茶褐色 明茶褐色	右・長 良	
576	高环 脚	(11.2)			ミガキ ナデ	淡明茶褐色 暗茶褐色	右・長 良	
577	高环 脚	(15.4)			ミガキ ナデ	褐色 褐色	良・金 良	
578	高环 脚	8.9			マメツ ナデ	茶褐色 淡褐色	右・長 良	

番号	基種	口経底経	手法			色調 上 下	胎土 外 内	焼成	その他
			口部	体部	武部				
579	高杯 脚	(13.9)			マメツ マメツ	明茶褐 明茶褐	石・長 良		
580	壺 (完形)	4.8 10.2		ミガキ ナデ		淡黄褐 黒褐	長 良		
581	鉢 (光形)	12.1 9.5	マメツ マメツ	ミガキ ナデ	マメツ ナデ	明茶褐 淡明茶褐	石・長 良		
582	ショッキ 底	(10.6)			ミガキ ミガキ・ナデ	黄褐 黄褐	石・長 良		
583	壺 口縁	(20.4)	ハケ→ナデ マメツ			暗褐 暗黄褐	石・長 良		
584	高杯 柱			マメツ マメツ		明黄褐 明黄褐	石・長 良		
585	壺 底	7.5			ナデ マメツ	茶褐 淡茶褐	石・長・金 良		
586	壺 口縁	(33.2)	ナデ ナデ・ミガキ			暗褐 淡黄褐	石・長 良		
587	壺 底	6.4			マメツ マメツ	明茶褐 淡明茶褐	石・長 良		

4 区

634	壺 完形	(21.2) 24.7	6.3				茶褐		
635	壺 口縁	(28.8)	マメツ ナデ				褐 褐	石・長 良	
636	壺 口縁	(25.4)	ナデ ナデ				褐 黒灰	石・長・金 良	
637	壺 口縁	(15.5)	タテ・ハケ・ナデ ミガキ・ナデ				褐 褐	石・長 良	深
638	壺 口縁	(27.4)	ナデ ハケ→ナデ				灰褐 黑灰	石・長 良	
639	壺 口縁	(21.0)	ナデ ナデ	ハケ ナデ			茶褐 茶褐	石・長・金 良	
640	壺 口縁	6.4			ミガキ マメツ		乳灰 黑灰	石・長 良	
641	壺 口縁	(22.3)	ナデ マメツ				褐 褐	石・長 良	
642	壺 口縁	(7.7)	マメツ マメツ				淡黄褐 淡黄褐	石・長 良	
643	壺 口縁	(29.3)	ナデ マメツ				黑褐 黑褐	石・長 良	
644	壺 口縁	27.2	マメツ マメツ						
645	壺 口縁	22.4	ミガキ マメツ				明茶褐	石・長・金 良	
646	壺 口縫	14.1					黑褐	石・長 良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎 上 成 成	その他
			口輪部	体部	底部			
647	堀 底	(5.5)			ナデ ナデ	褐 茶褐	石・長 良	
648	口 線	(21.6)	マメツ マメツ			茶褐	石・長 良	
649	壺 頸			ハケ マメツ		淡明灰褐	石・長 良	
650	壺 頸			タテ・ハケ ヨコ・ハケ		明灰褐	石・長・金 良	
651	ジョッキ 完形		ナデ ミガキ	タテ・ミガキ ミガキ	ハケ・ナデ ナデ	茶褐	良	
652	堀 底	(10.0)			マメツ マメツ	淡灰褐	石・長・金 良	
653	堀 線	(19.5)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長 良	
654	鉢 口 線	(19.3)	ナデ・ミガキ ナデ			淡褐 黑灰	石・長・金 良	
655	堀 口 線	(14.3)	ハケ ハケ			黑・茶褐 茶褐	石・長・金 良	黒斑
656	鉢 口 線	(24.8)						
657	堀 底	6.4		マメツ マメツ		暗茶褐		
658	堀 底	(4.9)		ナデ ナデ		褐 黑灰	石・長 良	
659	堀 底	4.3		ナデ ナデ		黑灰・茶褐 褐	石・長・金 良	
660	堀 底	8.0		マメツ マメツ		黑褐		
661	壺 口 頸		マメツ ミガキ・ナデ			褐 褐	石・長・金 良	
662	壺 口 頸	(24.5)	マメツ マメツ			明茶褐 淡褐	石・長・金 良	
663	壺 頸		ナデ・ハケ ハケ・ナデ			淡褐 淡褐	石・長・金 良	
664	壺 口 線	(16.8)	ナデ ナデ			淡灰褐 黑灰	石・長・金 良	
665	壺 底	(12.0)		ミガキ ナデ		黑 暗褐	石・長 良	黒斑
666	壺 口 線	(19.1)	ナデ ナデ			淡明褐 淡明褐	石・長 良	
667	高 壱 坏 壱	(19.8)	ナデ ナデ			赤褐 茶褐	石・長 良	
668	高 壱 坏 壱	10.8	ナデ ナデ	マメツ ナデ・ハケ	マメツ ナデ・ハケ	明淡茶褐 茶褐	石・長 良	
669	鉢 (完形)	7.7 2.9 9.4	ナデ ナデ	マメツ ナデ・ハケ	マメツ ナデ・ハケ	赤褐 茶褐	石・長 良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上下	胎土 外内	その他の 焼成
			口部	体部	底部			
670	甕 口縁	(28.5)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長 良	
671	甕 口縁	(22.4)		マメツ マメツ		黒灰・淡褐 淡褐	石・長 良	
672	甕 口縁	(31.0)	マメツ ナデ			黒 褐	石・長・金 良	黒底
673	甕 口縁	(18.5)	ナデ ミガキ			明褐 明褐	石・長 良	
674	甕 口縁	(22.9)	マメツ マメツ			黄褐 黄褐	石・長 良	
675	甕 口縁		ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ハケ・ミガキ		黑 淡黄褐	石・長 良	
676	鉢 口縁	19.6	ナデ ナデ	ヘラミガキ ミガキ		灰黄褐	石・長 良	
677	甕 口縁	(24.8)	ナデ ナデ	ハケ ハケ→ナデ		褐 褐	石・長 良	
678	甕 口縁	(22.5)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ハケ・ミガキ		灰茶褐 茶褐	石・長 良	様
679	甕 口縁	(22.5)	マメツ マメツ			明褐 明褐	石・長 良	
680	甕 口縁	(20.4)	ナデ ナデ	ナデ・ミガキ ハケ		茶褐 茶褐	石・長・金 良	
681	甕 口縁	(25.2)	マメツ マメツ			灰黄褐 灰黄褐	石・長 良	
682	甕 底	(6.0)			ミガキ マメツ	淡黄褐 淡黄褐	石・長 良	
683	壺 口縁	22.0	ナデ マメツ			淡褐	石 良	
684	壺 口縁	(21.5)	ハケ・ナデ ハケ・ナデ	ハケ・ナデ ハケ・ミガキ		明茶褐 明茶褐	石・長 良	
685	壺 口縁		ハケ ミガキ			明茶褐 明茶褐	石・長 良	
686	壺 口縁	(25.5)	マメツ ナデ			明褐 淡褐	石・長 良	
687	壺 口縁	(29.7)	マメツ マメツ			褐 褐	石・長 良	
688	壺 口縁	(20.3)	ナデ マメツ			褐 黑灰	石・長 良	
689	壺 口縁	(16.0)	マメツ マメツ			褐 灰黄褐	石・長 良	
690	壺 口縁	(20.5)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長・金 良	
691	高环 脚	(11.0)	ナデ マメツ			淡黄褐 淡黄褐	石・長 良	
692	壺 口縁	18.8	ナデ ナデ			明褐	長 良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上下 外内	胎上 燒成	その他
			口縁部	体部	底部			
693	壺 腹		ナデ ハケ			褐 灰褐	石・長・金 良	
694	壺 底	4.9			ナデ マメツ	赤褐 灰黄褐	石・長 良	
695	壺 口縁	(27.9)	ナデ ナデ			茶褐 茶褐	石・長・金 良	
696	壺 口縁	(30.1)	ナデ ナデ			茶褐 茶褐	石・長・金 良	
697	壺 口縁	28.0	マメツ マメツ			茶褐	石・長 良	
698	壺 口縁	(20.7)	ナデ ナデ			明褐 明褐	石・長 良	
699	壺 口縁	(19.6)	ナデ ナデ			茶褐 茶褐	長・金 良	
700	壺 底	8.0			ナデ ナデ	黄褐 黑褐	石・長・金 良	
701	壺 口縁	(13.7)	マメツ ナデ			褐 褐	石・長 良	
702	壺 口縁	(12.7)	ハケ+ナデ ナデ			茶褐 茶褐	石・長 良	
703	壺 口縁	17.5	ナデ ナデ			明茶褐	石・長 良	
704	壺 底	5.0			タテミガキ ナデ	茶褐	良	
705	壺 底	(10.0)			マメツ マメツ	茶褐	良	
706	壺 口縁	(6.8)			マメツ マメツ	茶褐 黄褐	石・長 良	
707	壺 底	7.0			マメツ マメツ	灰質	石・長・金 良	
708	壺 底	8.0			マメツ マメツ	赤褐 赤褐	石・長 良	
709	壺 口縁	(23.1)	ナデ ハケ+ナデ			褐	石・長 良	
710	壺 口縁	(21.2)	ナデ ナデ			茶褐 茶褐	石・長 良	
711	壺 口縁	(30.8)	ナデ マメツ	マメツ		灰黃	石・長 良	
712	壺 口縁	(32.1)	マメツ マメツ			黑灰 黑灰	石・長 良	
713	壺 口縁	(19.7)	マメツ ミガキ			褐 褐	石・長・金 良	
714	壺 口縁	(22.5)	ナデ ナデ			黑茶褐 茶褐	石・長 良	
715	壺 口縁	(21.4)	マメツ ナデ			茶褐	石・長 良	

番号	器種 部位	口徑 器高	手 法			色調 上 下	胎土 外内	その他の 焼成
			口縁部	体部	底部			
716	壺 口縁	(15.4)	ナデ ナデ			灰黒 茶褐色	長・金 良	
717	壺 口縁	(19.1)	マメフ			淡黒褐色	石・長・金 良	
718	壺 口縁	21.6	マメフ マメフ			黄褐色	石・長 良	
719	壺 口縁	(17.2)	ナデ ナデ・ミガキ			黄褐色	長 良	
720	高杯 口縁	(15.6)	マメフ ナデ			茶褐色	石・長 良	
721	高杯 (光形)	17.4 9.6	ミガキ マメフ			明褐色	石・長 良	
722	高杯 杯	16.2	ハケ・ナデ マメフ			乳褐色	石・長 良	
723	高杯 柱			マメフ マメフ		淡褐色	石・長 良	
724	高杯 脚	7.6			ミガキ シボリ・ナデ	胎茶褐色 胎茶褐色	石・長 良	
725	壺 口縁	(26.8)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ マメフ		茶褐色 暗灰	石・長・金 良	
726	壺 口縁	(22.5)	マメフ マメフ	マメフ マメフ		暗茶褐色 暗茶褐色	石・長 良	
727	壺 口縁	(27.4)	ナデ ナデ・ミガキ			明茶褐色 暗茶褐色	石・長 良	
728	壺 口縫	(20.7)	マメフ マメフ			茶褐色 茶褐色	石・長 良	
729	壺 口縫	(27.2)	ナデ ナデ	ナデ ハケ・ナデ		明褐色 明褐色	石・長 良	
730	壺 口縫	(24.8)	マメフ マメフ			暗茶褐色 暗茶褐色	石・長 良	黒斑
731	壺 口縫	(24.4)	タテハケ→ ミガキ・ナデ ヨコハケ→ナデ			明褐色 暗褐色	石・長 良	
732	壺 口縫	(21.6)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ナデ		褐色 褐色	石・長 良	
733	壺 口縫	33.8	ナデ ナデ			明褐色	石・長 良	
734	壺 口縫	(27.4)	マメフ マメフ			明褐色 明褐色	石・長・金 良	
735	壺 口縫	(32.6)	マメフ マメフ			褐色 褐色	石・長 良	
736	壺 口縫	(29.1)	ナデ ナデ			明茶褐色	石・長・金 良	
737	壺 口縫	(22.7)	ナデ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長 良	
738	壺 口縫	(31.1)	マメフ マメフ	ハケ・ナデ マメフ		褐色 黑褐色	石・長・金 良	

番号	器種 部位	口絶底絶 器高	手 法			色調 上下	胎土 焼成	その他
			口絶部	体部	底部			
739	壺 口縁	20.1	マメツ マメツ			黒茶	石・長良	
740	口縁	(24.6)	タテハケ→ナデ ナデ			褐 褐	石・長良	
741	壺 口縁	(24.1)	マメツ マメツ	ナデ ナデ		褐 茶褐	石・長・金良	
742	壺 口縁	(19.0)	ハケ ナデ					
743	壺 口縁	(24.2)	ナデ マメツ			茶褐 茶褐	石・長・金良	
744	壺 口縁	(18.3)	ナデ マメツ			明茶 明茶	石・長良	
745	壺 口縁	(27.1)	ハケ→ミガキ マメツ			褐 褐	石・長良	
746	壺 口縁	(18.9)	ナデ ナデ			褐 褐	石・長良	
747	壺 底	6.4			マメツ マメツ	黄灰	石・長良	
748	壺 底	(4.4)			マメツ マメツ	暗茶褐 暗茶褐	石・長良	
749	壺 底	5.4			マメツ マメツ	淡明灰褐	石・長良	
750	壺 底	4.6			ナデ ハケ	茶褐 暗茶褐	石・長・金良	
751	壺 底	(4.6)			ナデ ナデ	暗茶褐 暗茶褐	石・長良	
752	壺 口縁	5.2			タテ・ハケ マメツ	黒褐 黒褐	石・長・金良	
753	壺 口縁	(24.8)	タテハケ→ナデ ナデ			淡褐 淡褐	石・長良	
754	壺 口縁	(21.4)	ナデ ナデ			明茶褐 明茶褐	石・長良	
755	壺 口縁	(20.2)	ナデ ナデ			黄褐 黄褐	石・長・金良	
756	壺 口縁	(26.5)	ナデ ナデ			淡黄褐 淡黄褐	石・長良	
757	壺 口縁	(17.7)	マメツ マメツ			褐 褐	石・長良	
758	壺 口縁	(31.9)	マメツ マメツ			淡黄褐 淡黄褐	石・長良	
759	壺 口縁	(17.8)	マメツ マメツ			褐 褐	石・長良	
760	壺 口縁	(20.4)	ハケ ナデ			茶褐 茶褐	石・長良	
761	壺 口縁	(15.6)	ハケ ナデ			明灰茶褐 明灰茶褐	石・長・金良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 外 下 内	胎土 焼成	その他の
			口部	体部	底部			
762	壺底	(4.8)		ミガキ ハケ		暗褐色 暗褐色	石・長良	
763	壺底	6.6		ハケ→ナデ マメツ	ハケ→ナデ ナデツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長良	
764	壺底	(8.8)			ナデ ミガキ・ナデ	灰黄色 灰黑色	石・長良	
765	高杯 杯	(27.0)	マメツ マメツ			淡黄褐色 灰黑色	石・長・金良	
766	高杯 杯	(23.0)	マメツ ナデ	マメツ ミガキ		暗茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
767	高杯 杯	(34.0)	マメツ マメツ	マメツ ナデ		暗茶褐色 暗茶褐色	石・長・金良	
768	高杯 杯	(23.5)	ナデ ナデ			褐 褐色	石・長良	
769	高杯 杯	(25.4)	ハケ・ミガキ ミガキ			暗茶褐色 暗茶褐色	石・長・金良	
770	高杯 杯	(32.7)	ミガキ ミガキ			褐 褐色	長・金良	
771	高杯 杯	(15.9)	ミガキ ミガキ			淡茶褐色 淡茶褐色	石・長・金良	
772	高杯 杯	(26.1)	ミガキ ミガキ			茶褐色 茶褐色	石・長・金良	
773	高杯 杯	(15.3)	ナデ ナデ			明茶褐色 明茶褐色	石・長良	
774	高杯 脚	(14.4)			ミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長良	
775	高杯 脚	(14.8)			マメツ マメツ	褐 褐色	石・長良	
776	壺 口縁	(34.6)	ナデ ナデ	ハケ ナデ		黒 茶褐色	石・長・金良	
777	壺 口縁	(27.7)	ナデ ナデ	ハケ・ナデ ハケ・ナデ		灰褐色 暗茶褐色	石・長良	
778	壺 完形	10.9 6.7 24.0				淡褐色	石・長良	
779	壺底	(6.4)			マメツ マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長・金良	
780	壺底	(6.5)			ナデ ハケ	赤褐色 黑褐色	石・長・金良	
781	高杯 杯	(18.8)	マメツ マメツ			黃褐色 黃褐色	石・長良	
782	壺 口縁	30.2			マメツ マメツ	淡茶褐色	石・長良	
783	壺底	6.6			マメツ マメツ	茶褐色	良	
784	壺底	6.6			マメツ マメツ	茶褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口径 底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎土 燒成	その他
			口部	体部	底部			
785	壺底	6.8			マメツ マメツ	暗茶褐色	石・長良	
786	壺底	5.0			マメツ マメツ	灰黃茶褐色	石・長良	
787	壺底	4.9			マメツ マメツ	茶褐色	石・長良	
788	高杯柱			ミガキ ナデ		淡赤褐色	石・長良	
789	口縁	29.0	マメツ マメツ			茶褐色	石・長良	
790	口縁	(11.7)	マメツ マメツ			淡白褐色	石・長不良	
791	外口縁	(13.7)	マメツ マメツ			黒褐色	石・長良	
792	口縁	21.6	ナデ ナデ	ミガキ ナデ		暗灰褐色	石・長・企良	
793	口縁	(22.6)	ハケ・ナデ ナデ・ミガキ			褐色	石・長・企良	
794	口縁	(20.2)	ハケ→ナデ ミガキ・ナデ			暗茶褐色	石・長良	
795	口縁	(25.0)	ナデ マメツ			茶褐色	石・長・企良	
796	口縁	(18.3)	ナデ マメツ			褐色	石・長良	
797	口縫			ハケ ハケ・ミガキ		暗茶褐色 暗茶褐色	石・長良	
798	壺底	(7.4)			マメツ ナデ	茶褐色 黒褐色	石・長良	
799	高杯 杯	(33.7)	マメツ マメツ			淡黄褐色 淡黄褐色	石・長良	
800	高杯 杯	(24.9)	マメツ マメツ			褐色	石・長・企良	
801	口縁	(22.3)	ナデ ナデ	ハケ・ミガキ ミガキ		灰褐色	石・長・企良	
802	口縁	(25.6)	ナデ ナデ			茶褐色	石・長良	
803	口縁	(21.3)	ナデ ミガキ			灰茶褐色 灰茶褐色	石・長良	
804	口縁	(35.8)	ハケ・ナデ ミガキ			黑茶褐色	石・長・企良	
805	壺底	(6.7)			ナデ ナデ	明茶褐色 茶褐色	石・長良	
806	壺底	(6.4)			ナデ マメツ	明燈籠	石・長良	
807	壺底	(6.2)			マメツ マメツ	暗褐色 淡褐色	石・長・企良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上下	胎土 外内 燒成	その他
			口唇部	体部	底部			
808	甌底	(5.9)			ナデ マメツ	茶褐色	石・長・金 良	
809	甌底	(5.5)			ナデ ナデ	赤褐色 黒褐色	石・長 良	
810	甌 口縁	(14.0)	ハケ・ナデ ナデ			明茶褐色	石・長 良	
811	甌 口縁	(20.0)	ナデ ナデ			茶褐色 茶褐色	石・長 良	
812	甌 口縁	(23.8)	ナデ マメツ			黄茶褐色	石・長 良	
813	甌 口縁	(22.1)	マメツ マメツ			灰茶褐色	石・長 良	
814	甌 口縁	(24.0)	マメツ マメツ	ハケ・ナデ マメツ		淡茶褐色 淡茶褐色	石・長 良	
815	甌 口縁	24.1	ナデ マメツ	ナデ マメツ		燈褐色	石・長 良	
816	甌 口縁	(21.0)	マメツ マメツ	マメツ ミガキ		明褐色 明褐色	石・長 良	
817	甌 口縁	(35.1)	ナデ ナデ	ハケ ミガキ		明褐色 淡灰褐色	石・長 良	
818	甌 口縁	(27.8)	ナデ マメツ	ミガキ マメツ		褐色 黄褐色	石・長 良	
819	甌 口縁	21.2	ナデ ナデ			明帶褐色	石・長 良	
820	甌 口縁	(19.9)	マメツ マメツ			淡褐色 褐	石・長 良	
821	甌 口縁	(20.8)	ナデ ナデ			黑褐色	石・長 良	
822	甌 口縁	(21.2)	マメツ マメツ			淡黃褐色 淡黃褐色	石・長 良	
823	甌 口縁	(16.2)	ハケ→ミガキ ナデ			灰褐色 褐色	石・長・金 良	
824	甌 口縁	(11.8)	マメツ マメツ			灰褐色 灰褐色	石・長 良	
825	甌底	6.4			マメツ マメツ	明灰黃褐色 明灰黃褐色	石・長 良	
826	甌底	6.1			マメツ マメツ	褐色 黃褐色	石・長 良	
827	甌底	7.4			ナデ ナデ	黃褐色 茶褐色	石・長 良	
828	甌底	(5.3)			ナデ ナデ	黃褐色 茶褐色	石・長 良	
829	甌底	(5.4)			ナデ マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長 良	
830	甌 口縫	(25.3)	マメツ マメツ	マメツ マメツ		暗茶褐色 淡褐色	石・長・金 良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手法			色調 上下 外内	胎上 焼成	その他
			口部	体部	底部			
831	壺 口縁	(27.1)	マメツ マメツ			淡褐色 黒・淡褐色	石・長良	
832	壺 口縁	(27.2)	マメツ マメツ			淡褐色 黒・淡褐色	石・長良	
833	壺 口縁	(20.6)	マメツ マメツ			淡褐色 黒・淡褐色	石・長良	
834	壺 口縁	(29.0)	マメツ マメツ			褐色 淡褐色	石・長良	
835	鉢 口縁	(20.4)	マメツ マメツ			灰黃褐色 灰黃褐色	長良	
836	高杯 脚	14.0			ミガキ・ナデ ナデ	黃褐色 黃褐色	石・長良	
837	壺底	9.0			ミガキ・ナデ ナデ	灰黃褐色 淡褐色	石・長良	
838	壺底	9.6			マメツ マメツ	明灰黃褐色	石・長良	
839	壺底	(8.2)			マメツ マメツ	淡褐色 灰褐色	石・長良	

5 区

843	壺 口頭	(31.6)	マメツ マメツ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
844	壺 口頭	(28.9)	ナデ マメツ			茶褐色 茶褐色	石・長良	
845	壺 口頭	(25.6)	ナデ ナデ	ハケ ナデ		灰黃褐色 茶褐色	石・長良	
846	壺 口頭	(16.9)	ナデ ナデ			褐色 褐色	石・長良	
847	壺 口頭体	(20.8)	マメツ ハケ	マメツ ハケ		淡褐色 淡褐色	石・長良	
848	壺 口縁	(26.4)	マメツ マメツ			灰 乳灰	石・長良	
849	壺 口頭体		ナデ ナデ	ミガキ ミガキ		淡褐色 淡褐色	石・長良	黒斑
850	壺底	(7.9)			ナデ・ミガキ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長良	
851	壺底	7.2			ナデ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長良	
852	壺底	(6.0)			マメツ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長良	
853	壺底	7.7			ナデ ナデ	燈 黑褐色	石・長良	
854	壺底	(7.0)			ナデ ナデ	黑灰 黑灰	石・長良	
855	壺底	7.2			マメツ マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長良	

番号	器種 部位	口径底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎土 石焼 成	その他
			口盤部	体 部	底 部			
856	壺底	(5.8)			ナデ マメツ	黒茶褐 茶褐	石・長良	
857	壺底	6.0			マメツ ナデ	乳褐 乳褐	石・長良	
858	壺底	5.0			ミガキ マメツ	明茶灰 乳茶褐	石・長良	
859	壺底	7.4			マメツ マメツ	灰茶褐 茶褐	石・長良	
860	壺底	(6.4)			ナデ ナデ	褐 褐	石・長良	
861	壺底	2.4			マメツ ナデ	澄 乳白	石・長良	
862	壺底	6.2			ナデ・ミガキ ナデ	淡黄褐 淡黄褐	石・長良	
863	壺底	6.2			マメツ ナデ	黑褐 淡黄褐	石・長・雲良	
864	壺底	5.6			ナデ ナデ	赤茶褐 灰褐	石・長良	
865	壺口頭	(26.4)	ハケ・ナデ ハケ・ミガキ		ミガキ・ナデ ナデ	晴茶褐 黑		
866	壺底	6.1			ミガキ・ハケ ナデ	淡褐 淡褐	石・長良	
867	壺真	(4.6)			ナデ ナデ	淡灰褐 淡灰褐	石・長良	
868	壺口頭	(21.8)	ナデ ナデ			淡褐 淡褐	石・長良	
869	壺口頭	(27.6)	マメツ ミガキ			褐 褐	石・長・金良	
870	壺口頭		ナデ ミガキ			灰茶褐 灰茶褐	石・長・金良	
871	壺口頭	(20.0)	ナデ ナデ・ミガキ			黄褐 黄褐	石・長良	
872	壺底	(12.8)			ミガキ ナデ	淡褐 黑	石・長・金良	
873	壺底	9.6			マメツ マメツ	淡褐 淡褐	石・長良	
874	壺底	6.6			ナデ ナデ	褐 褐	石・長良	
875	壺底	(6.3)			ナデ ミガキ・ナデ	淡灰褐 淡灰褐	石・長良	
876	壺底	(3.4)			ナデ ナデ	淡黄 晴灰	石・長良	
877	高环口縁	(21.2)	マメツ マメツ			乳灰 乳灰	石・長・金良	
878	壺口頭体	(4.0)	ミガキ ナデ			淡茶褐 黑	石・長良	

番号	器種	口径底径	手法			色調 上下	胎土 焼成	その他
			口縁部	体部	底部			
879	高环脚			ミガキ シボリ		淡茶褐色 淡茶褐色	石・長良	
880	高环脚	(10.0)			マメツ マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長良	
881	高环脚	(8.4)			マメツ マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長良	
882	壺口縁	(24.6)	マメツ ナデ			淡褐色 淡褐色	石・長良	
883	高杯环	(12.0)	ナデ・ミガキ ナデ			淡灰褐色 淡灰褐色	石・長良	
884	高环脚			ミガキ		赤褐色 赤褐色	石・長良	
885	壺底	(9.6)		ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長良	
886	壺底	(5.6)		マメツ ナデ		赤褐色 黑茶褐色	石・長良	
887	壺底	7.6		ナデ	ナデ	褐色 淡茶褐色	石・長良	
888	壺底	3.8		マメツ ナデ		暗灰褐色 暗灰褐色	石・長良	
889	壺底	(6.6)		マメツ マメツ		淡灰褐色 淡灰褐色	石・長良	
890	壺底	(7.2)		ミガキ ハケ→ナデ		黑灰褐色 茶灰褐色	石・長良	

ジョッキ形土器

892	ジョッキ底	(15.0) (7.8) 17.1	ナデ マメツ	ミガキ マメツ	マメツ マメツ	乳灰黃 乳灰黃	石・長良	
893	ジョッキ(完形)	(12.8) 6.8 15.8	ナデ ナデ	ナデ ナデ	ハケ→ナデ ナデ	黒・褐 灰褐色、淡褐色	石・長良	黒斑
894	ジョッキ(完形)	(17.4)			マメツ マメツ	黑・淡黃褐色 淡黃褐色	石・長良	黒斑
895	ジョッキ底	(6.6)			マメツ マメツ	黑・淡黃褐色 黑・淡黃褐色	石・長良	黒斑
896	ジョッキ底	(18.9)			マメツ マメツ	淡赤褐色 淡赤褐色	長・金良	黒斑
897	ジョッキ胴底	9.8		ミガキ ナデ	マメツ ナデ	淡黃褐色 茶褐色	石・長良	黒斑
898	ジョッキ底	9.2			マメツ ナデ	暗茶褐色 黑褐色	石・長良	黒斑
899	ジョッキ底	8.1			ナデ ナデ	黑・淡灰黃 淡灰褐色	石・長・金良	黒斑
900	ジョッキ底	9.6			ミガキ マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長良	
901	ジョッキ底	(18.0)			マメツ マメツ	淡灰茶褐色 淡灰茶褐色	石・長・金良	

番号	器種 部位	口径 底径 器高	手 法			色調 上 下 外 内	胎 上 燒 成	その他の
			口縁部	体 部	底 部			
902	ショッキ 底	(17.6)			マメツ マメツ	暗灰黄褐色 暗灰黄褐色	石・長・金 良	
903	ショッキ 胴 底	(23.6)		マメツ マメツ	マメツ マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長 良	黒斑
904	ショッキ 底	24.4			マメツ ミガキ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長 良	黒斑
905	ショッキ 底	(24.8)			マメツ マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長・金 良	黒斑
906	ショッキ 底	(19.8)		ミガキ ミガキ		赤褐色 赤褐色	石・長 良	
907	ショッキ 底	(18.6)			ナデ マメツ	暗灰褐色・黒 淡黄褐色	石・長・金 良	
908	ショッキ 底	10.2			マメツ マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長・金 良	
909	ショッキ 胴				マメツ マメツ	暗灰黄褐色 暗灰黄褐色	石・長・金 良	

1区 石 器

番号	器種	分類	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	残存状況
5	石砲丁	結晶片岩	結晶片岩	5.50 (9.00)	0.69	44.0	1 / 3欠	
6	石砲丁	結晶片岩	結晶片岩	5.71 (7.08)	0.48	28.7	1 / 3片	
7	石砲丁	結晶片岩	結晶片岩	4.36 (5.23)	0.65	28.7	1 / 3片	
8	石砲丁	結晶片岩	結晶片岩	(2.75) (3.15)	0.58	8.8	刃部片	
9	石砲丁	結晶片岩	結晶片岩	(4.80) (4.02)	0.61	21.1	刃部片	
10	石 斧	柱状片刃	結晶片岩	(9.40)	4.11	2.62	227.8	下部欠
11	石 斧	柱状片刃	結晶片岩	17.32	3.55 (3.05)	353.3	片側欠	
12	石 斧	扁平片刃	結晶片岩	(13.12)	6.35 (3.75)	526.2	下部欠	
13	石 斧	扁平片刃	結晶片岩	(14.31)	6.28 (2.62)	376.1	片側表面欠	
14	石 斧	扁平片刃	結晶片岩	(6.40)	5.01 (1.33)	62.8	刃部片	
15	石 斧	大型蛤刃	結晶片岩	(4.92) (1.48)	3.26	39.3	刃部片	
16	石 斧	柱状片刃	結晶片岩	(12.38)	4.15	3.46	364.0	下部欠
17	刀 刀	不明石製品	結晶片岩	(6.61)	2.81	0.45	9.8	
19	石 斧	扁平片刃	結晶片岩	(9.93)	5.12	1.62	166.2	下部欠
20	石 斧	扁平片刃	結晶片岩	(12.00)	5.00	2.22	251.7	下部欠
21	石 斧	大型蛤刃	結晶片岩	(14.02)	5.18	3.45	328.8	片側表面・側面欠
22	石 斧	柱状片刃(抉人)	結晶片岩	(6.60) (3.05)	(1.78)	69.5	上部欠	
23	石 斧	大型蛤刃	結晶片岩	(8.35) (0.77)	4.25	40.2	刃部剥片	
24	石 斧	ノミ型柱状片刃	結晶片岩	10.70 (0.99)	1.55	31.6	ほぼ完形	
25	石 斧	柱状片刃(抉人)	結晶片岩	(9.98) (2.45)	3.45	139.9	下部欠	
26	石 斧	柱状片刃	結晶片岩	(8.62)	2.90	1.58	69.7	ほぼ完形

2 区

382	石砲丁	()	4.78	(8.00)	0.90			
383	石砲丁	結晶片岩	4.75	(4.28)	0.69	26.5	1 / 2欠	
384	石砲丁	結晶片岩	(4.88)	(4.50)	(0.39)	14.3	刃部剥片	
385	石 斧	大型蛤刃	結晶片岩	(9.41)	6.52	4.55	421.9	下部欠
386	石 斧	扁平片刃	結晶片岩	(6.45) (3.71)	5.28 (2.56)	(1.42) (0.57)	83.9 9.5	上部欠 刃部片
387	石 斧	扁平片刃	結晶片岩					

3 区

番号	器種	分類	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	残存状況
5 8 8	石庖丁		結晶片岩	(1.68)	(5.55)	0.56	8.7	背部片
5 8 9	石庖丁		結晶片岩	(4.01)	(6.52)	(0.52)	18.6	刃部片
5 9 0	石庖丁		結晶片岩	(3.65)	(3.90)	0.55		1/3片
5 9 1	石庖丁		結晶片岩	4.61	(8.08)	0.66	40.5	1/2片
5 9 2	石庖丁		結晶片岩	(2.13)	(4.81)	0.46	6.3	刃部片
5 9 3	石庖丁		結晶片岩	5.28	(8.95)	0.67	53.2	1/2片
5 9 4	石庖丁		結晶片岩	(5.48)	(8.19)	(0.82)	50.9	
5 9 5	石庖丁		結晶片岩	(5.74)	(10.51)	0.42	49.7	1/3欠
5 9 6	石庖丁		結晶片岩	(3.38)	(6.52)	0.56	18.2	背部片
5 9 7	石庖丁			4.67	13.78	0.59		完形
5 9 8	石庖丁			6.23	(8.35)	0.59		1/3片
5 9 9	石庖丁			(4.95)	(9.42)	0.60		
6 0 0	石庖丁		結晶片岩	4.38	(5.05)	0.65	25.6	1/3片
6 0 1	石庖丁	未製品	結晶片岩	(4.05)	(8.41)	0.98	50.4	
6 0 2	石庖丁			4.61	8.43	0.79		完形
6 0 3	石斧	扁平片刃	蛇紋岩	5.60	3.31	1.03	43.0	完形
6 0 4	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(6.77)	(3.84)	(0.92)	41.2	刃部片
6 0 5	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(7.60)	(5.63)	(1.09)	87.3	刃部片
6 0 6	石斧	扁平片刃	結晶片岩	2.45	2.10	0.30	4.0	ほぼ完形
6 0 7	石斧	太型蛤刃		(8.10)	6.32	3.10	221.0	上部・刃部欠
6 0 8	石斧	扁平片刃	結晶片岩	5.56	(2.81)	0.49	17.1	片側側面欠
6 0 9	石斧	太型蛤刃	結晶片岩	11.87	5.45	(2.65)	271.0	片側表面欠
6 1 0	石斧	柱状片刃	結晶片岩	11.10	3.70	2.70	170.0	ほぼ完形
6 1 1	石斧	太型蛤刃	結晶片岩	(10.13)	6.05	3.91	367.1	上部欠
6 1 2	石斧	柱状片刃	結晶片岩	(18.20)	4.35	2.77	448.2	刃部欠
6 1 3	石斧	太型蛤刃	結晶片岩	(10.90)	6.40	(4.30)	493.9	上部欠
6 1 4	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(6.87)	(3.84)	(1.27)	42.0	刃部欠
6 1 5	石斧	柱状片刃	結晶片岩	(9.50)	(2.72)	4.25	178.4	上部欠
6 1 6	石斧	太型蛤刃	結晶片岩	(10.75)	5.40	3.30	310.0	
6 1 7	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(14.51)	5.63	1.88	264.3	ほぼ完形
6 1 8	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(5.13)	4.68	0.59	36.7	上部欠
6 1 9	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(4.50)	4.53	0.80	35.8	上部欠
6 2 0	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(10.90)	5.16	0.67	81.7	ほぼ完形
6 2 1	石斧	太型蛤刃		(9.05)	6.90	(2.05)	188.3	下部欠
6 2 2	石斧	扁平片刃	結晶片岩	10.48	3.71	1.27	81.3	下部欠
6 2 3	石斧	扁平片刃	結晶片岩	6.65	(3.68)	(1.29)	51.6	ほぼ完形
6 2 4	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(5.20)	(2.68)	(0.69)	16.8	刃部片
6 2 5	石斧	扁平片刃		9.18	(4.74)	2.09	164.6	ほぼ完形
6 2 6	石斧	扁平片刃	結晶片岩	(5.20)	4.60	(0.85)	42.7	下部欠
6 2 7	石斧	柱状片刃	結晶片岩	(7.60)	(1.43)	2.37	52.4	上部欠
6 2 8	石斧	柱状片刃	結晶片岩	(8.50)	(1.50)	4.00	52.9	刃部片
6 2 9	石斧	人型蛤刃	結晶片岩	(8.68)	(4.36)	(2.21)	91.0	刃部片
6 3 0	石斧	柱状片刃		(4.75)	1.12	1.23	9.8	上部欠
6 3 1	石斧	柱状片刃(抉入)	結晶片岩	(13.15)	3.25	3.68	219.6	下部欠
6 3 2	不明石製品			(8.48)	3.15	1.13	40.0	ほぼ完形
6 3 3	劫録車	(石庖丁の転用?)	結晶片岩	長 3.42	短 3.30	0.69	14.4	完形

番号	器種	分類	石 材	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	残存状況
840	石斧	大型始刃		(8.12)	6.28	4.59	409.5	下部欠
841	石斧	ノミ型柄狀片刃		8.95	1.65	1.41	38.7	完形
842	石斧	ノミ型柱狀片刃	粘晶片岩	3.05	1.00	1.51	8.0	上部欠